
コナンと哀、その後。

kamo(ra)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンと哀、その後。

【Nコード】

N56260

【作者名】

kamora(

【あらすじ】

江戸川コナンと灰原哀が元に戻れないまま成長した…という設定の二次創作です。コ哀です。

第1話 「その後、おかわりは。」

俺は高校生探偵、工藤新：いや、小学生探偵、江戸川コナン。

毛利探偵事務所に居候している小学4年生だ。

3年前、高校生探偵として名を馳せていた俺は、黒ずくめの奴らの怪しい取引現場を目撃、口封じのために飲まされた毒薬の特殊な効果で小学生に戻ってしまったのだ。

幼馴染である毛利蘭と、その父親で探偵の毛利小五郎が暮らす探偵事務所に厄介になっていた俺だが、2年前、FBIや大阪の高校生探偵である服部平次、そして元組織の一員であり、同じく薬の効果で小さくなってしまった灰原哀との協力作戦によって、組織との死闘を繰り広げた末、遂に奴らを壊滅に追い込んだのだ。しかし・・・。

奴らの手によつて、俺の体を小さくした薬、アポトキシン4869を含む組織に関わりのある全てのデータは消し去られてしまい、俺も灰原も完全に元の姿に戻ることは二度と出来なくなってしまった。仕方なく、俺は毛利探偵事務所に居座り続け、灰原もまた、事情を知る俺のよき理解者、阿笠博士の家に住み続けている。

高校生に戻りたかった俺は、灰原が作った試作品の薬を何度も服用したことで体に耐性が出来てしまい、今ではそういう薬を使っても全く元の姿には戻れなくなってしまった。

「はあ…あの頃に戻りたいぜ…。」

「あの頃って…僕らまだ小4ですよ？何言ってるんですか？」

ため息をつく俺に突っ込みを入れたのは、今じゃ「すっかり同級生」の円谷光彦。1年生の頃はそばかすが目立ち、幼い顔つきの彼だったが、この3年で同級生の中ではかなり大人っぽい顔立ちに成長し、育ちのよさと頭のよさも相まって、女の子に人気があるようだ。

「そうだぞ、コナン。それより今日は、お前んちでクリスマスパーティーーだろ？なあ、蘭さん、うな重作ってくれっかな？」

「もあー、相変わらずだね、元太君。クリスマスにうな重はないと思うよ。ね、コナン君。」

うな重、と言ったのは同じく同級生の小嶋元太、その元太に返したのは吉田歩美だ。元太は相変わらず大柄で、同級生の中でも1番背が高く、1番体重も多い。歩美は：俺が言うのもどうかと思うがすごく可愛らしく成長し、同級生だけでなく先輩や後輩からも非常にモテる、それでいて性格も真っ直ぐな、まさに理想的な少女だ。

「相変わらずね。」

4人で歩いていた俺達の後ろから、眠そうな声がかかる。思わずドキツとしてしまい：たかが声にそんな反応をってしまった事が恥ずかしくて、横に居る光彦に気づかれたんじゃないかとチラツと見てみると、光彦も同じような反応をしていたが：すぐには振り返れない。

「あ、哀ちゃん。お早う。」

結局先に返事をしたのは歩美。やっと振り返ると、眼も眠たそうにしている灰原哀が俺の視界に入る。

可愛い、というより綺麗、な方向に成長した灰原は、歩美同様多くの男の子に人気だ。話しかけてもつまらなそうにあしらう、そんな様子がたまらない：らしい。光彦が言うには。

「ごめんな、蘭。今まで黙ってて：。」

「コナン君：新一：。いいの、そうなんじゃないかなあって、考えることもあったし：。」

1年前、組織の脅威もなくなり、二度と戻れなくなったこともあって、俺は蘭に、蘭にだけ、全てを打ち明けた。自分が工藤新一だということ。

蘭は話を聞き、全てを受け入れてくれた。だが：

俺達が元の関係に戻ることはなかった。

俺達の年代にとつて、2年、3年の歳月はあまりに長かった。

蘭は俺：「工藤新一」のことをただの幼馴染と感じるようになっていき、いつの間にか新しい恋人も出来ていた。

「ま、あんな推理馬鹿、あんたにはもつたいなかったのよ。」とは蘭の親友の鈴木園子。

「えーっ？私にはわからんわー。こんなに待つてて、心変わりなんて…。」とはもう一人の親友、遠山和葉。

和葉は同じように幼馴染で推理馬鹿の服部平次のことが好きだから、そういう感想を持っているのだろう。が、納得は出来ずとも理解はしているとのこと。

そして俺も…。

組織の薬の力によって、小学生に戻ってしまった俺にとつて、この数年間何の気兼ねもなしに会話が出来たのは、同じように薬を飲んで小学生になってしまった灰原哀だけだった。

いつからだろうか。俺は灰原を特別な存在として見るようになっていた。

「どうしたの？江戸川君。心ここにあらずって顔してるわよ。」

ぼーっと考えていた俺に呆れたような表情の灰原が話しかける。

「な…なんでもねえよ。」

あわてて取り繕う俺。まさかお前のことを考えてた、なんて言えるわけもない。

「そ。ならいいけど。学校遅れるわよ。」

どんだけぼーっとしてたんだ、俺は。見ると、歩美、元太、光彦はもうかなり先の方を歩いている。あれ？じゃあ灰原…。

「なんだ、灰原。俺が歩き出すのを待つててくれたのか？」

ちよっとからかい口調で、内心ドキドキして聞いてみる。

「馬鹿ね。」

…いつもの口調。表情もかわらず呆れたようなジト目。うん。わか
つてたさ。自分で自分を納得させて、俺は学校へ向かって歩き出
した。

放課後…。

今年は何笠博士が博士仲間とクリスマスパーティーということで、
俺達少年探偵団は毛利探偵事務所が集まって、パーティーをするこ
とになっていた。発案は蘭。それに歩美と元太がのっかって、結局
小五郎のおっちゃんの反対を無視して開催が決定した。

「だって、新しい…コナン君が友達と遊んでるところを見たかったん
だもーん。」

何度も見てたと思うのだが、蘭が面白がって言う。

「それより蘭のほうこそ、彼氏と出かけたりしねーのか？子供のお
守りなんてしてねーで。」

パーティーに向けて料理やケーキの準備をしている蘭にたずねる。
こんなことを聞いても、もうなんとも思わなくなるなんて、人間っ
て不思議だ。

「今日は大学の研究発表で大阪なのよ。だから明日会おうってこと
になってね。」

彼氏のことを話す蘭は、ほんのり頬を赤らめる。どうやらうまく行
っているようだなあ。

ピンポン。チャイムが鳴る。

「おい、誰か来たぞー。」

昼間っからビールを飲んで、かなり酔っ払ったおっちゃんが叫ぶ。

「はい、…あら、歩美ちゃん。いらっしやい。早かったね？」

蘭がドアを開けると、歩美が一人で来ていた。

「おい歩美、光彦たちは一緒じゃないのか？」

「うん。蘭おねーさんのお手伝いをしようと思って。灰原さんも誘
ったんだけど…。」

「はは、あいつがそんな理由で早く来るわけねー…。」
「悪かったわね。」

鼻で笑った俺を、凍てつく視線が貫く。歩美に若干遅れて、灰原が到着したようだ。

「は、は、は、灰原！？」

俺は驚いた。基本的に協調性に欠け、料理なんて殆どやりそうもない、っていうか蘭のお手伝い、なんて面倒なこと、わざわざやるに
くるとは思えない灰原が現れるとは。

「誰が面倒くさがりよ。」

！！

心が読まれた。

キッチンに3人が入って数十分。俺はすることも無く、おっちゃん
の横でテレビを見ている。

「コナンくん。今蘭おねーさんとケーキ作ってるんだ！。出来た
ら一番に食べてねー。」

歩美の声が聞こえる。

「あら、コナン君、よかったねー。」

蘭の声も聞こえる。…若干からかわれている様な気もするが。

「ま、もつたいないから、私が作った分もあげるわよ。」

…ちょっと嬉しい。

「モテモテですなーコナン君。」

酔っ払ったおっちゃんが絡んできた。

「だが、幼馴染には気をつけたほうがいいぞ。可愛げが無いと思っ
てはいたが、やっぱり鬼だった。」

何の話だ。

ピンポン

誰か来たようだ。

「はい。」

蘭がキッチンから出てきてドアを開ける。元太と光彦が着いたかな、
と思つて見てみると…

「毛利小五郎はいるか。」

30代後半くらいのも、痩せ型の男が立っていた。

「俺は富樫伸一という者だが、毛利小五郎と話がしたい。」

「なに、富樫？」

おっちゃんが急に真面目な顔つきになる。富樫と云えば、この間お
っちゃんに夫の浮気調査をたのんだ女性の名前だ。そうか、浮気し
ていたつていう夫本人か。

「…下の喫茶店で良いか。ここには子供達も居る。」

そう言つと、おっちゃんは富樫を連れて出て行つてしまった。

おっちゃんも居なくなつた部屋で、俺はキッチンからの楽しげな声
を聞きながら、ますます手持ち無沙汰になっていた。早く元太と光
彦、こねーかな…

ヴー、ヴー。蘭の携帯が振動する。電話かな？

「蘭ねーちゃん、電話ー。」

「えー？ごめーん、今ちよつと手が離せないの。誰から？」

キッチンから顔だけ覗かせて蘭が聞く。

「えつと…、大西？知らない人だな…。」

「大西君？…困つたな…。でも、出ないわけには…。」

本当に困つたような表情の蘭。手をぬぐつて電話を取る顔も険しい。

「もしもし、毛利です。…うん。…でも、ごめんなさい、迷惑なの。」

電話の奥から取り乱したような男の声が聞こえる。「君が居ないと
とか「死んでやる」とか、物騒な叫び声だ。

「怖い…。ストーリーカーかな？」

心配で様子を見に来た歩美が呟く。

「モテるのね。ま、この場合、まったく羨ましくないけど。」

灰原も、毒づいてはいるが、心配そうだ。

「…いいから。来られても困るの。もう電話しないでください！」
そう言つて蘭は電話を切つた。

「ごめんね。なんでもないの。心配しないで。」

歩美と灰原をみつめ、蘭が言う。

「なにかあつたら、相談しろ…じゃない、相談してよ、蘭ねーちゃん。力になるから。」

「ありがとう、コナン君。」

「ねえ哀ちゃん。2人のこと、どう思う？」

「何のこと？」

「蘭おねーさんと、コナン君。さっきの何気ない会話だけど…。」

「そうね、小学生と大学生の会話にしては…、ってここはあるけど？」

「やっぱり、コナン君は蘭おねーさんが好きなんだね…。」

「ちよつと落胆したような、困惑したような様子の歩美ちゃん。解らなくはない。歩美ちゃんにとって、江戸川コナンという少年は初恋の相手であり、毛利蘭という女性は心から憧れる存在だ。」

「私、宮野志保…、いえ、灰原哀にとつても、ほとんど同じである。初恋？いえ、そんな甘いものではないけれど。」

「認めたくは無いが、私も工藤新一…江戸川コナンという少年には友達としての感情以上のものを抱いてしまっている。しつこいが、認めたくは無い。」

「そんな少年と、憧れの女性が交わす大人な会話。胸がチクチクしないわけではない。」

「もつとも、歩美ちゃんと違って、私はこの2人が大人同士であることを知っている。」

「…知っているから、余計に腹立たしいのかしら？」

「…？なにか言つた？」

「いえ、独り言よ。」

「おーっす、コナン、来たぞー！」

「コナン君、お邪魔しまーす。」

元太と光彦が現れる。ようやく退屈から解放されそうだ。

「おお、来たな。歩美と灰原はもう来てるぞ。キッチンで蘭ねーちやんと料理作ってる。」

「え！灰原もいるのか？」

元太が驚く。俺とほとんど同じ反応だ。

「ま、まあ、灰原さんも女の子ですし…そんなに驚いたら失礼ですよ。」

そういう光彦も若干動揺しているようだが。

とにかく俺達は、3人で居間を飾りつけ始めることにした。

「っていうか、コナン君、先に始めてくれてもよかったんじゃないですか？」

…そういわれりゃそうだ。

「じゃあ、歩美ちゃんと元太君と光彦君は、商店街に行ってメモに書いてある野菜とお肉を買ってきてね。」

「…はい！」

買い忘れた食材があり、蘭を残して俺達は買出しに出かけることになった。

蘭に指示を出され、3人は笑顔で駆け出した。ま、もう小学4年生。俺や灰原がついてなくても、お使いくらい行けるだろ。

「じゃ、新一と哀ちゃんはスーパーで飲み物をお願いね。」

3人だけになると、何の気兼ねもなしに俺のことを新一と呼ぶ蘭。

「別に俺1人でも行けるけどな。」

「あら、私とデートじゃ不満？」

「！！いや、滅相もない。嬉しいくらいだ。しかし、灰原がそんな冗談を言うとは。」

「バ、バーロー。お前みたいな欠伸娘じゃ、デート、なんて空気にまるでならねーよ。」

嬉しい感じを悟られないように、必死にごまかす俺。

「あ、そ。悪かったわね。…とにかく行くわよ。」

つまんなそーに流す灰原。…ごまかせたかな？

「新一、新一。」

歩き出す俺達の後ろから、蘭が俺だけをこっそり呼ぶ。

「なんだよ。」

「せっかく2人なんだから、もうちょっと優しくしてあげないと。」

あんた見た目は子供だけど、もう立派な大人なんだからね。」

…ごまかせてねーのか！？

…。
なにはともあれ、俺は灰原と2人で、毛利探偵事務所をあとにした…。

第1話 「その後、おかわりは。」（後書き）

勢いだけで描いています。

まずは世界設定中心ですね。

この物語はコ哀なので、蘭ねーちゃんには早めに恋愛舞台からは退場していただきました。蘭ねーちゃん好き、あるいはドロドロの三角関係好きの方にはお勧めできないものになるかもですね。

第2話 「イマドキの小学生は公園でサッカーをするの？」

「デート、なんて空気にまるでならない。」

か。
ま、そう言われても仕方がないわね。

私は、彼の高校生探偵という名誉や、優しい幼馴染との恋、なんてものを奪った張本人。

いつか「相棒」と呼んでくれたこともあったけど、それ以上を望むなんて、おこがましいわ。

でも、もし…。

「おい、灰原、どこまで行く気だ？」

気がつくと、私はスーパーを通り過ぎてしまっていた。考え事をしていたとはいえ、ばつが悪い。

「なんか難しい顔してたけど、悩み事か？」

正解。

あなたのことよ、なんて、口が裂けてもいえないけれど。

「ちよつとね。」

できるだけクールに。いつも通りに。変に勘のいい名探偵さんに疑われないように。私は答えた。

…。難しい顔をしたまま歩く灰原。

やべーな、俺の気持ち、バレバレなんだろうか。

いつも周りがちゃんと見えていて、何故か俺の支えになってくれる、そんな灰原を思う俺の気持ち。

クールぶってるくせに根は優しく、実は友達思い、そんな灰原を想う俺の気持ち。

もし本当にバレバレだったら…。

恥ずかしい。

それに、灰原は俺のことなんかどうとも思っていないだろう。

蘭に会いたい。蘭と一緒に歩みたい。かつてはそう思っていたのは事実だ。そんな俺の気持ちを知っても、知っていたにも関わらず、灰原は俺を元に戻す薬を研究し続けてくれた。

「すげーありがたいことだけど…。」

「それって、俺が蘭と元鞘に戻ることに反対してねーってことで…。俺のことは研究対象か、よくて友達、程度にしか思ってたねーってことだよな…。」

…。

「ま、今はこうして、一緒に買い物なんかしてる。一緒に歩いている。それだけでも十分か。」

「そうこうしてるうちに目的のスーパーの前に着く。」

「どうする、灰原、俺とお前と蘭はコーヒーでいいとして…っておい。」

「なんの反応も無いのでよく見ると、難しい顔のまま、灰原はずんずん歩いて行ってしまっている。」

「おい、灰原、どこまで行く気だ？」

「ちよつと声を上げて呼び止める。はつとした表情を見せた後、こちらに戻ってきた。」

「なんか難しい顔してたけど、悩み事か？」

「あなたの事よ、なんて言われたらどうしよう…。良い意味で？悪い意味で？って聞いてみようか？」

「俺の気持ちバレバレなら、悪い意味で…だよな？」

「ちよつとね。」

「いつも通りのクールな口調。よくは分からないが、とりあえず安心する俺。」

「お、コナン君。哀ちゃん。」

「スーパーで買い物をしていると、高木刑事が声をかけてきた。私服

だし、非番のようだ。

「あ、高木刑事。」

「…どうも。」

「あれ？少年探偵団のみんなは一緒じゃないんだね。珍しいなあ。」

「はは…。高木刑事は今日は非番？」

「ああ、そうだよ。滅多に一緒に休みなんてないから、どこか出かけようか？って言ったんだけど…。」

そう言っただけで後ろを見やる高木刑事。視線の先にはお腹が大きくなつた佐藤刑事。

「もう妊娠7ヶ月になるつてのに、デスクワークでもいいから、つて休職しないんだよ。」

「それで、せつかくの休みくらい、どこか連れて行ってあげよう、と高木刑事は思った訳ね。だけど、彼女に断られた。」

「そうなんだ…。休みの日くらい、手料理でも食べさせてあげるわよ！つて。」

「佐藤刑事がそんな女らしい台詞？」

「コ、コナン君！聞こえたら怒られるよ！…でも僕もちよつとそう思った。で、皆に話を聞いたりして調べてみたら、どうも由美さんにノセラれたらしいつてわかつたんだ。」

「あ…。そういうことが。」

「はあ…。2人とも…失礼よ。佐藤刑事は年頃の女性。好きな人、手料理を食べさせてあげたいつて気持ち、元々あるに決まつてるじゃない？」

灰原の言葉に、一瞬きよんとする高木刑事と俺。

「はは…佐藤さんが？哀ちゃん、あの男勝りな方に限つては、その判例は適用されないよ…。」

「それに佐藤刑事は『年頃』つてより『妙齡』つて感じじゃねー？」
苦笑いの高木刑事と、軽口をたたく俺は、後ろからただならぬ殺気が近づいているのに気づかなかつた…。

「妊娠しても、佐藤刑事は佐藤刑事ね。」

帰り道、灰原が呟いた。結局高木刑事はスーパーの店内で佐藤刑事に首を絞められおとされかけた。まあその後仲良く手をつないで帰って行ったから、2人にとってはただのじゃれあいになかったのだらうけれど。

「結婚してずいぶん経つのに、相変わらず尻に敷かれてるんだな、高木刑事。」

「あら、その方が高木刑事らしいんじゃない？むしろ亭主関白な高木刑事は想像もできないわ。」

「けどスーパーであんな風にされたら、流石に恥ずかしいだろ。男が女に攻められて。」

「男が、とか女が、なんて、意外と古風ね。そんな分類で物事を語るのは子供っぽいわよ。」

「子供だろ。俺達。」

「ま、小学4年生は、子供ね。」

他愛も無い会話。俺達はすぐ後ろからの視線に気づくことなく、毛利探偵事務所への帰路についていた。

「…どう思います？元太君。」

「腹減った。」

「！そうじゃなくって…。いえ、もういいです。」

「なんだよ、光彦。言いたいことがあるんなら、はっきり言ったほうがいいって、母ちゃんが言ってたぞ。」

「いいですってば。」

僕は灰原さんとコナン君が仲良く会話しながら歩いているのを後ろからこっそり覗いていました。

歩美ちゃんも面白い物が終わると真っ直ぐ探偵事務所に向かっていたのですが、元太君がちょっとだけ公園でサッカーがしたいと言い

出したので、僕はしぶしぶ付き合っ…まあ、結局遠回りして
います。

そうするとスーパーで買い物をして二人の帰り道にぶつかった
わけですね。

しかし、5人で居る時もそうですが、こうやって2人きりになると、
灰原さんとコナン君の仲の良さ、というか…いうなれば『ピッタリ
感』があふれ出ているように思えます。

灰原さんが好きな僕にとっては、歯がゆい事柄なのですが、コナン
君が相手だと思つと不思議とやっかみのような気持ちは起きない
です。ただ…。

「元太君、歩美ちゃんには、あの二人の様子、教えないほうがいい
ですね。」

「?なんでだ?」

「…いえ、わからなくてもいいですから、僕の言つとおりにして
ください。」

「なんだよ、それ。…まあいいけどよ。」

歩美ちゃんは、コナン君のことが大好きです。その歩美ちゃんが二
人の間のあの空気を知つたら…。

もちろん、灰原さんのことも大好きな歩美ちゃんです。きっと喜ん
で応援(?)するでしょう。

でも、どこか、僕達からは見えないところで、ちよつとだけ悲しむ
のではないのでしょうか?

僕はまだ子供です。女の子の気持ちは分かりません。でも、僕の直
感は、そう呟いているのです。

今はまだ、歩美ちゃんはコナン君が好きなのは蘭さんだと思ってい
るようです。

でも、僕が見る限り、コナン君は灰原さんのことが…。

そして、あんまり信じたくは無いのですが、灰原さんも…。

「コナン君…。灰原さん…。もし二人が友達以上の関係になったら、
僕は、歩美ちゃんは、少年探偵団は…どうなるんでしょう?」

「どーもなんねーよ。だつて俺達は、友達だろ？」

人の独り言に突っ込みを入れないで欲しいものです。

でも、元太君の言葉は、非常に子供っぽい発想であると同時に、非常に愛すべき発想であると、僕は思います。

「元太君は、やっぱりすごいですね。」

「何が？」

「いえ、いいんです。それじゃ、僕達も二人に追いつきますか。」

「なんだ、お前ら。商店街に行ったんじゃねーのかよ。」

俺達の後ろから、商店街とは逆の方角なのだが、元太と光彦がやってきた。

「それが、元太君ったら、突然サッカーがしたいとか言い出して…。」

「しゃーねーだろ？商店街のテレビで、ヒデのシュート見てたら、すっげーやりたくなつたんだから。」

「これですよー。だいたい買い物の間も何にもしないで電気屋さんの前から動かなかつたんですよ？」

「良いじゃねーかよ！」

「で、歩美ちゃんに荷物を押し付けて、男二人は遊びに行つてたつてわけね。」

「そ、そーい言い方されつと…。なあ光彦、歩美にはあとで謝つとこつぜ。」

「はい、そうですね。」

「あーそっか、しまった！今日はサッカースーパーシュートって特番の再放送だったんだっけ！前の時もおっちゃんが沖野ヨーコの出てる歌番組見てたから見逃したんだよな。」

「あら、なら私のDVDを貸してあげるわよ。たしか残つてたはずだから…。」

「灰原さんがサッカーの特番の録画ですか？珍しいですね。」

「ええ。比護さんも出てたから…。他の人はともかく、彼が得点するシーンだけは見たかったのよね。」
比護選手に嫉妬する俺。

そうこうしているうちに、俺たちは毛利探偵事務所に到着した。

第2話 「イマドキの小学生は公園でサッカーをするの？」 (後書き)

コナンの思い、灰原さんの思い、そして光彦の直感。

そのあたりをちよつと詰めてみたかっただけです。

高木刑事は大好きですよ？

この物語は、本編とはまるで別の、「もしも」のストーリーです。かなりの鬱展開で、元ネタどころか本編のイメージともかけ離れております。

暗い展開、鬱展開が苦手な方、嫌いな方にはお勧めできません。っ
ていうか、しません。

それでもOKな方のみお読みください。

繰り返しますが、本編と繋がりこそあれ、まるで別の、パラレルな物語です。

「キヤー！！！！！」

探偵事務所の入り口に着いた俺たちは、階段の上から歩美の叫び声を聞いた。

「どうした歩美！」

階段を駆け上がる俺。事務所のドアが開いていて、そこから歩美が驚愕の表情で中を見ている。

「コ、コナン君…蘭お姉さんが…。」

歩美の横から俺も事務所の中を覗き込む。そこには…。

血塗れの蘭が倒れていた。

「らん！！！！！」

慌てて駆け寄る俺。しかし…。

「ど、どう？コナン君…。」

「歩美！入るな！」

びくつとする歩美。なんだなんだと元太達も事務所の前に来て、次々悲鳴を上げる。

「ど、どうなの…？」

「駄目だ…。灰原、警察を呼んでくれ…。」

「救急車も呼ぼうぜ！光彦！救急車は110番だっけか？」

「元太君！それをいうなら…。」

「いや…救急車はいらねーよ…。」

信じがたい現実を前に、俺は俯いたまま皆のいる玄関前に戻った。

「蘭！蘭！らん！！！！！」

間もなくおっちゃんや目暮警部達が到着する。錯乱状態のおっちゃん

んを警部が押さえつける。

「毛利君！しっかりしろ！…いや、無理もないか…。白鳥君、ここは任せた。ワシは毛利君を落ち着かせる。下の喫茶店におるから、なにかあつたら連絡をくれ。」

「了解しました。」

そう言つておつちゃんと警部は階段を下りていく。俺たちは玄関に立ち竦んだままだ。

「さて…。状況はどうだ？千葉君。」

「はい…。凶器はこの包丁です。何度も何度も刺した痕がありますね。死亡推定時刻は午後4時半から5時半の間です。」

「ふむ…歩美ちゃんが第1発見者だったね。つらいだろうけど、発見したときの様子を聞かせてくれるかい？まだ現場検証中だから、ここでいいかな？」

「う、うん…。」

表情はこわばつたままだったが、歩美は話をはじめた。

「元太君と光彦君と別れたのが4時半頃で…、その後お使いで忘れてた砂糖を買いに戻つて…だからここに着いたのは5時半くらい…。チャイムを鳴らしても誰も出なくて…、蘭さんが居るはずなのにおかしいな？つて思いながらドアを開けようとしたら鍵がかかってなくて…。開けたら…蘭さんが…。」

そこまで言つて、歩美は泣き出してしまった。白鳥警部はあわてて、「ご、ごめんごめん。わかつたよ。君達、下の喫茶店で待機してなさい。」

と、話を切り上げた。

元太、光彦は歩美を連れて降りていったが、俺と灰原は現場に残る。「しかし、いったい誰が…。窓やドアに無理やりこじ開けた形跡がないから、顔見知りの犯行ではないかと思うのだけど…。」

「そういえば、怪しい人、思い当たるわよ。」

灰原が思い出したように言った。

「蘭さんの携帯電話に電話してきたストーカーみたいな男。たしか

…大西君、とか言ってたかしら。」

「大西…。高木君！蘭さんの携帯電話を調べろ！」

「は、はい！」

高木刑事が、蘭が握っていた携帯電話を開く。

「おや？画面に数字が表示されているな…。0504？まさか…ダイニングメッサージじゃ！」

「本当かい？高木君…。」

白鳥警部も覗き込む。俺も覗き込む。

「「うーん…？」」

二人で首をひねるが…。

「分からないな。とりあえず置いて、履歴を見てみよう。」

携帯電話の着信履歴には大西という名が相当数残っていた。

「ストーカーだったんなら、蘭さんも着信拒否すればいいのに…。」

アドレス帳に登録までして…。」

高木刑事がぶつぶつ言っている。

「いいから、電話番号から当人を割り出し、ここに連れてきたまえ。」

「

白鳥警部の喝が飛び、高木刑事はあわてて動き出した。

数分後、大西祐樹という男が事務所に連れてこられた。どうやらこの近くをうろつろしていたところを不審に思った千葉刑事が声をかけたら、ビンゴだったようだ。

「大西祐樹、蘭さんの大学の研究室の同期ですね…。今日は何故この辺りに？」

「ら、蘭さんに電話したけど、会ってくれないって…。でも諦めきれなくて…。5時前くらいにここに…。」

「えっ？探偵事務所に来たのですか？」

「は、はい…。でもチャイムを鳴らしても返事がなくて…。ドアノブをまわしても鍵がかかっていて…。仕方がないから1、2時間し

たらまた来てみようかと…。」

「ふむ、その時は鍵がかかっていた…。」

「しかし、警部。」

高木刑事が口を挟む。

「玄関のドアノブには指紋が残っていません。内も外も全く。」

「う、嘘じゃないよ！僕は蘭さんを殺してなんか…。」

大西という男は声を荒げる。

「ねえ高木刑事。指紋は全く残っていなかったの？」

「いや、部屋の中には君達や毛利さん、蘭さんの指紋は残ってたよ。ただ一部、拭き取ったような跡が残っていた。もしかしたら犯人は、自分が触ったところだけ拭いて逃げたのかもね。」

だとすると…大西と言う男は犯人だろうか？わざわざ指紋を拭き取ったのであれば、ここに来たことも隠すのではないだろうか？

大西が犯人ではないならば、犯人は大西がドアノブを触った後、指紋を拭き取ったことになる。しかし、大西が事務所に来たときに蘭が生きてたとすれば、大学の同期だ、蘭の性格からして邪険にも出ずにドアを開けていたに違いない。

となると、大西がたずねて来たときには犯人は蘭を殺害して部屋の中に居たのではないだろうか。

つまり、犯行時間は4時半から5時前までの限られた時間に絞られる。

「そうか…。確かにそう考えることも出来るね。」

俺は白鳥警部に考えを伝えることに成功した。

「蘭さんの性格を考えれば間違いないですよ。大学の同期だから、携帯のアドレス帳からも削除できなかったんですよ。」

高木刑事が白鳥警部に進言する。

「まだ大西の容疑が晴れたわけではない。だが…。千葉君、その時間帯に絞って、重点的に付近の聞き込みを始めてくれ。」

「わかりました！」

「しかし、コナン君…。」

高木刑事が俺の顔を覗き込む。

「君は冷静だね。毛利さんはあんなだったのに…。無理してないかい？大丈夫かい？」

「う、うん…。」

冷静かどうか…と聞かれれば、冷静など居られない。俺は探偵だ。極力感情を抑え、事件の解決に全力を注ぐべきだ。そう思うからこそ、踏ん張っていられるのだ。

しかし…改めて聞かれると、ふと自分の感情に疑問を抱く。以前の…蘭のことが好きだった頃の俺ならば、今のように努めて冷静でいることすら出来なかったのではないだろうか？

「そうね。昔の貴方なら、推理どころではなかったでしょうね。」
心を読んだかのように灰原が声をかける。

「でも、人の感情は移ろい行くもの。恥じることではないわ。むしろ蘭さんの為に犯人を追い詰めることが出来るのだから、よかったんじゃない？」

「だがな、灰原…。そう簡単に割り切れねーよ…。」

「確かに、激昂して我を忘れる貴方の姿も興味深いけど…。私は探偵として常に冷静を心がけて、物事を理屈で考えている貴方の姿、わりと好きよ。」

好き…？俺の顔がカーツと紅くなる。言った灰原も同様だ。

「と、とにかく！」

ごまかされた。

「千葉刑事の報告を待ちましょう。」

1時間ほどして、千葉刑事が男を一人連れてきた。

「あれ、その人…？」

俺はその男に見覚えがあった。たしか富樫と言う、おっちゃんの浮

気調査の対象になっていた男だ。

「そういえば、今日の3時半頃彼が訪ねてきたときに、コナン君が最初に会ったんだよね。」

そう、おっちゃんを訪ねてこの事務所にやってきたのだ。

「その彼が、どうしたんだい？」

白鳥警部もやってくる。

「はい、毛利さんと、下の喫茶店のマスターや梓さんに確認したのですが…。」

千葉刑事の話では、今日の3時半頃、富樫とおっちゃんは喫茶店ポアロに来店し、一方的に富樫がおっちゃんに文句を言っていたという。おっちゃんの調査のせいで妻と離婚し、多額の慰謝料を請求されたとのことで、おっちゃんものりくらりとかわしていたらしい。その後4時20分頃、「いつかお前に復讐してやる！覚悟しとけ！」という捨て台詞を残して富樫は去り、おっちゃんは「気分が悪いから飲みなおす！」と言って出て行ったらしい。

「ですが、あの時はカーツとして…。自分のマンションに歩いて帰っている途中に冷静さを取り戻しましたよ。」

「管理人さんの話では、富樫さんがマンションに戻ったのは5時10分頃だということですよ。」

「確かにここから真っ直ぐ歩いて向かえば彼のマンションまではそのくらいかかる…。しかし、車なら10分ほどで戻れるな…。」

犯行時間が5時前だとすると、アリバイとしては微妙、ということになるか。

富樫が白鳥警部に攻められている間、俺は他に手がかりがないか部屋の中を探し始めた。今のままでは犯人を特定できそうな要素は何もない。

「そついえば、蘭さんは何故キッチンでなくて入り口から見える位置で倒れていたのかしら？」

灰原が呟いた。そう言われればそうだ。キッチンにも刺された跡…、血痕などが残っている。

「もし、あの富樫って男が犯人なら、訪ねてきた彼を蘭さんが招き入れたのならキッチンで刺されるのはおかしいわよね。」

「だな…。となると、鍵は開いていたわけだからこつそり忍び込んだ犯人が、犯行時に姿を見られないように侵入した後いつたん鍵を掛け、キッチンに居た蘭を刺し、大西さんが訪れ、チャイムを鳴らしたことに気をとられ…蘭が移動したとすればその時だな。」

一回目に刺された時点で蘭は重症。となれば、なぜわざわざ移動したのか…。キッチンと蘭が倒れていた地点の間にある本棚を見て、俺は異変に気がついた。何冊かの本に蘭の血のついた指紋が残っている。

「本に指紋？」

忙しそうな白鳥警部を避け、俺は高木刑事を連れてきた。

「本当だ！血がついているのはホームズの小説に…これはサッカーの本…。帝丹高校の卒業アルバム…。蘭さんのもう一つのダイイング・メッセージかも！」

もう一つ…そういえば蘭の携帯にも数字が残っていた。確か0504と。

「0504…なんの数字だろうね…。…お、ご、お、し？いや、れ、ご、れ、よ…？」

高木刑事が元太や光彦のようなことを言い出す。

「5時4分…504号室…。ロッカーの鍵番号？」

俺も考え出す。

「5月4日。」

灰原が呟いた。

「…工藤新一の誕生日…。」

「工藤君の！？」

高木刑事が驚いた顔をする。

「そういえば、ホームズ、サッカー、帝丹高校…。すべて工藤君に

つながるものだ…！まさか、まさか犯人は…。し、白鳥警部…！！
高木刑事は慌てて駆け出した。

犯人は工藤新一か？そういえば彼は行方不明だ…。彼なら訪ねてきても、蘭さんがキッチンにたっただけだ…。

「大変ね…。」

警察が工藤新一犯人説で盛り上がる中、灰原が俺に声をかけてきた。「貴方はずっと私と一緒にだったんだから、犯行は絶対に不可能。でもこの証言でアリバイが証明できるのは江戸川コナンであって、工藤新一ではないわ。」
その通りだ。

しかし、工藤新一は犯人ではない。それは蘭も解っていたはずだ。キッチンから移動し、ダイニング・メッセージを残すくらいは時間があったのなら、蘭が犯人の顔も確認しないのはおかしい。

だがもし、犯人がわざと工藤新一を犯人に仕立てようとしたのなら、携帯電話のアドレス帳画面を開き、それを工藤新一のところにする、などもっと直接的な方法がいくらでもある。

つまりあのメッセージは真正銘欄が残したものに違いない。

「くそっ！蘭の奴、いったい何を言いたかったんだ！俺に何を…！」
そう、蘭の残したメッセージが工藤新一を示しており、なおかつ工藤新一が犯人ではないと確信できるのは俺（と灰原）だけだ。つまり蘭は、俺に向けてなんらかのメッセージを送っているに違いないのだ。

「でも、もし大西さんか富樫さんが犯人でないとしたら、このままいくと事件は完全に迷宮入りね…。だって、そうなら容疑者は工藤新一ただ一人。でも、工藤新一という人間はもうこの世に存在しない…。死んですらいないから、永久に犯人はみつからない…。」
灰原の言葉に俺はハツとした。

…そして。

大西、富樫の両名は疑わしい点は多々あるものの、犯人だと言う決定的な証拠はなく、結局帰された。白鳥、高木両名は工藤新一を第一の容疑者とし、その行方を追っている。毛利のおっちゃんはまだ立ち直れず、妃弁護士がやってきて下のポアロで話し合っている。もっとも妃弁護士も相当に辛そうだが…。目暮警部は工藤新一が犯人とは信じられないと、別の角度からの捜査を行うため千葉刑事を連れて行った。

真っ暗になった探偵事務所で、俺は俯いたまま動かなかった。

灰原もまた、同じように一言も喋らない。

そこへ…

「おい、コナン！事件はどうなった!？」

「犯人が工藤新一って本当ですか？」

「コナン君、大丈夫？」

少年探偵団がぞくぞく入ってきた。事件の事を聞きたくて、うずうずしているようだ。

「そこで白鳥警部からおおよその事は聞きましたよ。コナン君、どうなんですか？」

光彦が詰め寄る。俺は…。

「犯人は…わかった。」

そう言つて顔を上げ、真っ直ぐにその瞳を見つめた。

「歩美…。自首してくれねーか？」

「え…?」

歩美が驚いた顔を…、いや、驚いたような顔をする。

「ちょ、ちよっと待ってくださいよコナン君。」

光彦が口を挟む。

「何を言ってるんですか。歩美ちゃんが犯人な訳無いじゃないですか。僕達まだ小学4年生ですよ？」

「そこが第一の盲点だったのよ。」

灰原が俺の代わりに喋りだした。

「第一発見者をまず疑う。警察の捜査の鉄則よ。ところが、第一発見者は自分達がよく知っている、しかも子供。白鳥警部も私達も、その時点で既に第一発見者を容疑者からはずしてしまったのよ。」

「だけだよ」。歩美はその時間買い忘れた砂糖を買いに戻ってたんだぜ？

「本当に買い忘れてたの？」

「え…？いや、俺はデパートのテレビをずっと見てたから…。光彦、どうなんだよ？」

「それが、僕もよく覚えていないんです。ずっと一緒にいた訳ではありませんし…。」

「実際買ってなかったとしても、砂糖だけなら事務所の近くのコンビニでも買えるわ。」

灰原が2人の会話を遮る。そして俺の方を向いた。次は貴方が喋りなさい、と言うように。

「…。つまり歩美は、わざと砂糖を買い忘れ、デパートに戻ったことにした。そうすれば俺達が帰宅するのとはほぼ同時に帰ってきたという事に出来るからな。そうやって俺達と一緒に第一発見者になったんだ。」

「でも…でも！蘭さんのダイニング・メッセージはどうなるんですか！あれは工藤新一が犯人だと示して…。」

「そう、それが問題だった。何故蘭は犯人ではない工藤新一を示すダイニング・メッセージを残したのか…。」

「あんだよコナン！なんで犯人ではないなんて言い切れるんだよ！…ここで俺は言葉に詰まった。まさか俺が工藤新一だと説明するわけには行かない。」

「工藤さんは、外国にいるのよ。江戸川君と阿笠博士、それに蘭さ

んにだけは連絡が来ていたの。極秘の捜査中だから誰にも教えなくてくれってね。」

灰原が助け舟を出す。

「それが本当なら、蘭さんはどうして…?」

「それはな…。」

俺は歩美を見つめたまま言葉を続けた。

「歩美を守りたかったんだと思うぜ…。」

「…。どうということ?」

「工藤新一はほぼ行方不明状態。警察が容疑者と認定しても、逮捕することはできない。事件は工藤新一が重要参考人のまま迷宮入り…。そうなれば犯人には永久にたどり着けない。そう、蘭はそうなることを願ったんだ。」

「わかんねーよコナン!」

「明らかに疑わしい者がいる場合、捜査の目はいやでも一方通行になり、その他の細かい証拠は見過ごされることがある。あつてはならねーけどな。」

「つまり、そんな細かい証拠から歩美ちゃんが犯人であると言う事実を解明されるのを恐れた蘭さんが、工藤新一を『永久に捕まらない犯人』に仕立て上げようとしたのよ。歩美ちゃんを逮捕させないために。」

「でも…。」

歩美が口を開いた。

「そんなことで、私が犯人なんて、おかしいよ哀ちゃん…。…コナン君。」

「そうですね!そんなの、こじ付けじゃないですか!」

「蘭さんがかばう可能性がある奴なんて、他にも沢山いるじゃねーか!なんとか言えよコナン!」

光彦と元太も声を荒げる。

「指紋。」

俺は呟いた。

「探偵事務所のドアノブの指紋。内も外も何も残っていなかった。」

「そんなの、犯人が拭いたから……！」

光彦が何かに気づいた顔をする。

「おい、どうした、光彦。」

「……。そうです……。歩美ちゃんは蘭さんがチャイムを鳴らしても出てこなかったからドアを開けて……。」

「だからなんだっつーんだよ！」

「それが本当なら、歩美ちゃんは犯人が指紋を拭き取った後、ドアノブに触れたことになります……。でも、ドアノブには歩美ちゃんの指紋はなかった……。」

元太の表情が青ざめていく。

「つまり、歩美ちゃんは蘭さんを殺害した後、『事務所に指紋が残っていたら困る犯人』像を作り上げるために、外部犯なら触りそうなどころの指紋を全て拭き取ったのよ。」

「そう。そして俺達と一緒に第一発見者になるために、ドアを開けたままその場で俺達が戻ってくるのを待っていたんだ。ドアノブを拭いた後、そのままな。そして話し声なんかでタイミングを見計らって悲鳴を上げた。さもたった今帰ってきてドアを開けたかのように。」

歩美は俯いた。光彦は神妙な面持ちで歩美をみつめる。元太はおろおろと動き回っている。

「いまのは単なる状況証拠だ。だが、このことを元に詳しい捜査が始まれば、いずれ警察は歩美にたどり着く。その前に、自首しろ、歩美。」

「コナン君、でもそれは、蘭さんの遺志に反しませんか？」

「バーロー！ 真実を隠して、それで何が解決するってんだ！ 事件でおきた多くの『痛み』を癒せるのは真実だけだ！ 歩美だって……歩美だっていつか解るはずだ……。」

真実を隠し続けている俺が言えた台詞ではないが。灰原はあさっての方角を向いている。

すると、歩美が顔をあげた。その表情は…。

いつもの表情で。屈託のない笑顔で、歩美は話し始めた。

「さっすがコナン君！よくわかったね！」

「あ、歩美…。」

元太が心配そうに話しかけるが、無視して言葉を続ける。

「でも、後悔なんかしてないよ？」

「歩美ちゃん…。どうして…。」

光彦もとぎれとぎれ言葉を紡ぐ。

「だって、あの女、コナン君のことを好きっていう瞳で見つめるんだもの。」

「え…？」

あの女。歩美はいままで蘭のことをそんな風に呼んだことはない。

俺たちはまるで一度も出会ったことのない人間の前にいるような錯覚に陥っていた。

「それにコナン君も。駄目だよ、あんな女。コナン君には似合わないよ。」

表情は変わらない。ずっと笑顔のままだ。それがかえって不気味さを増す。

「だからあの女、コナン君の前から消してあげたの。キッチンで後ろから刺して…。」

笑顔。しかし、目には黒い炎が宿っているようだ。狂気の炎。

「ちょっと気を取られてるうちに移動していたみただけだね。

しかもこっちを見ているから、何か言いたいことあるの？って聞いたの。そしたらなんていったと思う？」

そこまで言うと、歩美は声を上げて高らかに笑い出した。

「あははは！コナン君をよろしく、ですって！あははは！よろしく！何様のつもりかしら！」

高らかに笑い続ける歩美。しかし、急にぴたりと笑うのを止めた。

「…ん。」

出かける彼を見送りに玄関に出た私は、ほぼ無言でk i s sをねだる。困ったような顔をする彼。それでもわたしの要望は聞き入れられた。

「じゃ、じゃあ、行ってくる。」

結婚して3年目になるのに、顔を紅くして出かける彼。私は鍵をかけ、掃除機をかけに部屋に戻ろうとする。すると、玄関のチャイムがなる。

「なに、忘れ物？」

なにげなくドアを開けるとそこには…。

「哀ちゃん…。久しぶりね…。」

15年ぶり。でも見間違えるはずがない。

「ふーん…。ここがコナン君と貴方の…。」

吉田歩美。かつての私の親友であり、ある倒錯的な愛に陥り、ある女性を殺害した女。

痩せて、頬はこけ、髪の毛も乱れているが、それでも美しい容貌は隠し切れない。

そのアンバランスが妖艶な魅力を醸し出している。

「あ、歩美ちゃん…。どうしてここが…。」

「調べたの…。ずっと、ずっと、ずっと、コナン君に会いたくて…。」

「そ、そう、でも彼は今ここには…。」

「知ってるよ。今、出かけていったものね。でも、今日は貴方に用があるの。」

「え…?」

歩美ちゃんの手には包丁が握り締められていた。

「コナン君を誘惑した雌豚を、料理しに来たの。」

歩美ちゃんは太陽のような笑顔で私を見つめている。それは全てを焼き尽くすような視線。私は思わず後ずさりしたが、玄関の敷居に躓き、尻餅をついてしまった。その様子を見ながらクスクス嗤う彼

女。その眼だけは笑ってはいなかったが。

そして私は、彼女の最後の言葉を聞いた。

「大丈夫。2匹目だから。…前よりも残酷に、…前よりも苦しめて
…逝かせてあげるわ。」

a n o t h e r s t o r y

「ある、一つの可能性の、殺人事件

…繰り返しますが、本編と繋がりこそあれ、まるで別の、パラレルな物語です。

第3話 「青色未来型機械猫は、テクノカットでピンクベストの夢をみるか？」

「遅いよー、皆ー。」

歩美は大分早く帰っていたようだ。元太と光彦は所在無さげにそわそわしている。

「もう料理は大体出来上がったから、みんなはそっちに座ってて。歩美ちゃんも、みんなと待ってて？」

蘭が促す。

「えー。でも、ケーキの飾り付けがまだだよ。お願い、私にやらせて？」

「…そうね。せっかくだから、さっき私が作っていた分は、私が飾り付けしたいわね。」

歩美ちゃんと灰原がキッチンへ向かう。

「じゃあ男の子は、そっちで待っててね。あ、コナン君、お父さん見なかった？」

「おじさん？いや…そういうえば下のポアロには居なかったけど…。」

「たらいまあゝ。」

後ろから酔っ払った状態のおっちゃんが帰ってきた。いや、誰か一緒だ。ふらふらなおっちゃんは肩を組まれ、支えられていた。

「蘭！おじさまったら、今にも道の真ん中で眠っちゃいそうになつてたわよ！危ないから連れてきちゃった。」

「園子！どうしたの？今日は鈴木財閥主催のクリスマスパーティーだつて。」

「あんまり堅苦しいから、抜けてきちゃったわよ。京極さんも今日は大きな試合があるって、連絡もつかないし…。」

「それでウチに？でも助かったわ。お父さんったら出てったつきり、全然連絡も無いんだもの。で、お父さん？富樫さんはどうしたの？」

「あいつとは、20分くらいで話がつきましたぞ、蘭ねーちゅわーん。その後酔いがさめたから、つつい公園で缶ビールを…」

完全に酔っ払ってやがる。

「あー…、お酒臭くなっちゃった。蘭、おじさまどこに運ぶ？」

「ごめん、いいよ、私が…。」

「いいっていいって。ここまでできたら一緒だよ。寝室かな？それより、キッチンで呼んでるよ。」

「ら…蘭おねーさん。クリームが暴発した…。」

「歩美ちゃん！大丈夫？」

行ったりきたり、蘭は大変そうだ。寝室におっちゃんを寝かせ、園子が戻ってきた。

「まーったく、しょうのないおじさまね。クリスマスなんだから、

おばさまと出かけたりしないのかしら。」

「おめーだって、彼氏いねーんだろ？」

元太が園子に突っかかる。

「おめー、じゃなくて園子おねーさまと呼びなさい！それに彼氏は居ます！」

「じゃーなんでデートじゃねーんだよ。」

「こっちにはこっちの都合があんのよ。生意気なのは変わらないわね。」

「…コナン君。元太君と園子さんが同レベルに見えてしまうのは、僕だけでしょうか？」

「…いや、俺もだ。」

「さあ、料理ができたわよ。」

蘭と歩美、灰原が居間に入ってきて、クリスマスパーティーが始まった。

おいしそうに料理をほうばる…いや、貪る元太。呆れ顔の園子。談笑する光彦と灰原。

「あれあれ？新一、あの二人、仲がいいね。」
耳元でからかう蘭。

「う、うつせー、バーロー。」

カラオケセットにスイッチが入り、蘭と園子がデュエットすると、歩美と光彦がもてはやす。

「哀ちゃん、私たちも一緒に歌おうよ。」

「…私は…。」

「いいからいいから。」

歩美に半ば強引に引つ張られる形で歌う灰原。実際かなり上手い。

「う、上手いわね…。アンタにはわかんないでしょうけど。音痴だから。」

「音痴でも上手いか下手かはわかるよ（園子のヤロー…）。」

そしてケーキも切り分けられる。

「コナンくん、これ、私を作ったの。食べてー。」

「あ、歩美！コナンの分だけ大きくねーか？おれももっと食いてーぞ。」

「元太君、まだ入るんですか…。」

「ブラックホールね。」

「じゃあ、元太君には私を作った分を大きく切ってあげるわね。」

「蘭だったら、甘やかしてどーすんのよ！このガキ、ほっといたら将来はメタボよ。メタボ。」

「メタボって…なんだ？」

そして、目が覚めたおっちゃんが乱入。

「らーんちゅわーん、お水ちょうだい。」

「ま、まだ酔ってやがる…。」

「江戸っ子なら、酒は飲んでも飲まれるなって父ちゃん言ってたぞ。」

「…とことん反面教師な親父殿ね…。」

そのあとも、光彦が隠し芸と称して手品を披露したり、園子がこっそり買って持ってきていたクリスマスプレゼントを子供達に配ったり、おっちゃんが元太に酒を勧めて蘭に蹴られたりと、盛り上がったまま時間は過ぎていった。

「皆は？」

寝室から戻った俺に灰原が話しかける。

「ああ、少年探偵団はすっかり眠っちまったよ。ま、蘭が皆の家に電話してたから、明日の朝帰れば大丈夫だろ。光彦と元太は、おっちゃんも一緒だから寝で起きちまうかもしれないけどな。」

「園子さんは？」

「蘭と二人でまだしゃべってるよ。お前も混ざってきてもいいんだぜ？」

「私は…合わないわよ。」

たしかに、園子や蘭に混じって女の子らしい会話をしている灰原は全く想像できない。

…。

横に座ってくれないかしら。

哀のここ、空いてますよ。…なんてね。私にギャグは似合わないけど。

この家の食卓は小学生には大きくて、向かいじゃ…届かない。

…。

横に…座ってもいいかな…？

今この部屋には俺と灰原だけ。誰が見ているわけでもねーし…。向かい合わせでもいいけど…食卓がでかいから、距離感があるし…。

「…なんで隣に座るのよ。」

「べ、別にいいだろ。」

「…ま、そうね。」

け、結局隣に座ってしまった…。わざわざ隣に、なんて、灰原からしたらいい迷惑かもしれないけど、少しでも近づきたいという気持ちを抑え切れなかった。

聖夜なんだし、これくらいは許されても…。

「はい、これ。」

「…？ケーキ？さつき歩美ちゃんに沢山貰ったけど…。」

「あら、私のは迷惑だった？」

「そ、そーゆー訳じゃねーよ。」

「じゃ、もつたいないから食べちゃってよ。」

「お、おう。わりーな。」

「…あ、待つて。」

差し出した皿を再び引っ込める灰原。なんなんだ？

灰原はフォークを取り出し、ケーキを一口大に切り分けた。

「はい、あーん。」

「！？」

「あら、私からのプレゼント、恥ずかしくって受け取れない？」

…か、からかってやがる…。

しかし、相手はからかっているだけだと分かっているけども、胸がドキドキする。

「なによ…。早くしなさいよ。」

ちよつと口を尖らせる灰原。昔なら小生意気で可愛くねー…とか思っていた仕事だが、今の俺には可愛らしく思えてしまう。

俺がそんな風に思っているなんて、灰原は想定していないだろう。

からかわれて拗ねてる、とでも感じているのでは。

「い…いただきまーす。」

ドキドキしながら、灰原がさしだしたフォークの先のケーキを食べる。正直ドキドキしすぎて味なんてよくわかんねー。

彼が隣に座る。…私の念が通じたのかしら。

「…なんで隣に座るのよ。」

「べ、別にいいだろ。」

「…ま、そうね。」

なるべくクールに、平静を装って。私が彼の隣にいるなんて、本当は許されることではないのだから。

それでも、今夜は聖夜。もし許されるのなら…。

「はい、これ。」

「…？ケーキ？さつき歩美ちゃんに沢山貰ったけど…。」

「あら、私のは迷惑だった？」

「そ、そーゆー訳じゃねーよ。」

「じゃ、もったいないから食べちゃってよ。」

「お、おう。わりーな。」

「…あ、待って。」

せ、せつかくだから…。

「はい、あーん。」

「！？」

「あら、私からのプレゼント、恥ずかしくって受け取れない？」

これなら、からかっている風にしか聞こえないわよね。本当はこうやって食べてもらいたいからやってるんだけど…。

でも、困ったような彼の顔。失敗だったかしら？私の本心に気づいてる様子はないけれど、からかわれてると思って拗ねちゃったかしら。

「なによ…。早くしなさいよ。」

…。我ながら、可愛くないわね。

蘭さんや歩美ちゃんなら、こういう時に可愛らしい台詞を言えるの
だろうけど。

「い…いただきまーす。」

彼が私の差し出したフォークから、ケーキを食べてくれた。

私がかかっているだけだと思っ
ているでしょうけど。「私のおふ

「だけに付き合ってくれてる」だけでしょうけど。
…でも、嬉しい。」

「でも、まあ、結構うめーじゃねーか。灰原がケーキ作りなんて、似合わねーと思ったけどな。」

「普段誰が博士に料理出してると思ってんのよ。」

「そっか。」

「ま、ケーキ作りは初めてだったけどね。博士にこんな高カロリーーのものは出せないもの。」

「確かに。でもよく今までケーキが残ってたな。元太が全部食っちゃったと思ってたが。」

「お肉やうな重も沢山食べてたから、入らなかったんじゃない？（つていうか、よくあったわね、うな重…。）」

「おめーのケーキじゃ味が心配で、流石の元太も手をつけなかったんじゃないか？」

「あんだねえ…。嘘でもいいから『俺の為に残しておいてくれたのか？』とか言えない訳？」

「えーと…、ゴホン、俺の為に、残しておいてくれたのか？」

「馬鹿ね。」

「ねえ、蘭。」

「なに？園子。聞こえちゃうよ。」

私と園子はドアの間隙からこっそり2人の様子を伺っていた。はじめはトイレに行く、と言って私だけ覗いていたのだが、園子があとから来ちゃったのだ。

園子はコナン君が実は新一だってこと知らないから、そんな会話になつたらどうしようと心配だったけど、どうやらそれは大丈夫そう
だ。

「あの眼鏡ボウズは、哀ちゃんのことを好きなのかしら？」

…新一、やっぱりバレバレだよ。

「で、哀ちゃんも眼鏡ボウズが好き？」

…哀ちゃん、周りから見たらそういう風にしか見えないよ。

「でもお互い何故か相手の気持ちに気づいていない。そういうこと？」

…。さすが園子。

「だめだよ園子。2人は小学生…なんだから。暖かい目で見守ってあげるのよ。」

「でも、小学生だからこそ、なんで自分の気持ちに遠慮しているのかしらね。そんな風にしか見えないけど。特に哀ちゃんは。」

…鋭いな、園子。

私はなんとなく分かる。2人の事情を知っているから。

哀ちゃんは新一を子供にした薬を作ってしまった張本人。誰が気にしないと云っても、きっと新一から多くのものを、それに私から新一を奪った、と責任を感じてしまっている。

でも、哀ちゃんがそのことで長い間悩んでいたことも、苦しんでいたことも…そして新一が、意図せずともその支えになっていたことも、事実。

だからこそ、私は哀ちゃんには幸せになって欲しい。そして幼馴染の新一がその役目を担えるのなら、私は2人を応援したい。

だから、暖かい目で…。

「蘭、なに、その眼。なんだか気持ち悪いわよ。」

「あたたか〜い目、のつもり。」

第3話 「青色未来型機械猫は、テクノカットでピンクベストの夢をみるか？」

いろいろやりたかっただけです…。

すみません、すみません。元ネタが微妙ですみません。

第4話 「仕事が無いから昼から酒を飲むのではない。酒を飲みたくなったのが

「オリエンテーリングって…なんだ？」

小学5年生になった俺達は、4月の学校行事ということで、来週の月曜にオリエンテーリングを行う予定になっている。

（そういえば、工藤新一のときもやったなあ。）

「元太君、先生の話聞いてなかったんですか？オリエンテーリングっていうのは、決められたいくつかのポイントを自由にまわってゴールをめざす…ま、遠足の一種…ですかね？コナン君？」

「お、おう。ただ、帝丹小学校のオリエンテーリングは2人1組で、各組の順位を競う形になってるぜ。たしか1位から5位までに入れば、2週間給食にデザートがつくとかなんとか…。」

「な、な、な、何！本当かコナン！それなら、足が速い奴と組んだほうがいいな！」

「いや、相手が足が速くても、オメーが遅けりや意味が…。」

「こうしちゃいらねえ！うちのクラスで一番速いのは、たくまだな！」

「おい、ペアは今日の学活でくじで決めるって小林先生が言って…って、もう行つちまつてるし…。」

「元太君の食に対する姿勢は相変わらずですねえ…。」

「それでは、ペアをくじ引きで決めまーす。」

小林先生の号令と共に、俺達は教卓の前に並んで番号の書いた紙の入った箱に次々と手を入れる。

「3番…か。」

「あ、コナン君3番ですか？じゃあ僕とペアですね。」

光彦が3番と書かれた紙をみせる。どうやら歩美ちゃんはクラスの男の子と、元太は女の子とペアになったようだ。…灰原は？

「先生、私の紙だけ何も書いてないんですけど…。」

「あ、哀ちゃんが無地を引いたのね？それは当たり？くじよ。うちのクラスって人数が奇数だから、どうしても1人余っちゃうの。だから無地のくじを引いた人は、好きなペアのところに混じって3人組みになっていいの。」

明るくウィンクする小林先生。…ってかそういうことはくじを引く前に言えよ。

「で、哀ちゃん、どのペアに入る？」

「そうね…。」

くるりとあたりを見渡す灰原。教室になにやら不穏な空気が走る。

「灰原さんは一部男子には人気ですからねえ…。逆に女子の中には…。」

光彦が言いかけたとき、灰原がこつちを向いた。

「円谷君、江戸川君。一緒にいいかしら？」

教室の張り詰めた空気が一瞬にして得体の知れないものにかわる。

それは羨望か、嫉妬か、嘲笑か。

「も、もちろん構いませんよ。ねえ、コナン君。」

「お、おう。」

「はい、それじゃあペアも決まったし、来週を楽しみに待ちましよう。では今日の学活は終わり！」

「あーあ。アイツとペアじゃ、トップは望めないな。」

帰り道、元太がぼやく。元太が組んだ女の子は運動があまり得意な子ではない。

「いいじゃない。中田さんって、結構可愛いし。」

歩美が元太を励ます。しかし、女の子が女の子を可愛いと言う、その言葉こそあてにならない…ゴホン。

「でも哀ちゃんいいな」。コナン君と光彦君と3人なんて。」

「…私は、クラスにあんまり馴染めてないから…。」

そんな風に思っていたのか。

「灰原なら、どのペアに入っても歓迎されたと思うぜ?」

何の気なしに、フオローのつもりで軽く言う。…? 光彦と歩美がこつちを見たような…。

「あら、ありがと。でもそれって、わざわざ自分達と組むなよって、遠まわしに言ってるつもり?」

「ば、バーロー。そんなんじゃないよ。」

「じゃーなー。」

途中で皆の帰る方向がバラバラになり、俺も一人で探偵事務所のある方向へ歩き出す。と、ややあつて後ろから光彦と歩美が追いかけてきた。

「どうした?」

「コナン君、駄目だよ。あんなこと言っちゃ。」

「あんなこと?」

「灰原さんがどのペアに入っても…ってことですよ。」

「あ? だつておめえ前に言ってたじゃないか。アイツはクラスの男子に結構人気があるって…。」

「確かに、一部の男子には人気があると言いました。でもそれは一部です。灰原さんって少々…いや、かなり? キツイじゃないですか。だから中には本当に鬱陶しがってる男子もいるんです。」

「女子もそう。憧れてる子も多いけど。それに、コナン君や光彦君って女子に人気があるでしょ?」

「バーロー、んなことねえよ。」

「そ、そんなこと無いですよ。」

「そんなことあるの! だからいつつも2人と一緒にいる哀ちゃんに嫉妬している子も多いの。それに、私と比較すると哀ちゃんって1年生の頃から少年探偵団以外の子と遊んだり喋ったりすることってほとんど無いじゃない? そうすると、『いつもコナン君や光彦君と

ばかり一緒にいて…』とか、『男にしか興味ないんじゃない？』とか言う子も結構いるのよ。』

…5年生にもなるとそんな子もいるのか…。俺がガキの頃は…今も色々あつてガキだが…そんな複雑なこと、事件以外では考えてなかつたがなあ…。

「で？」

「だーかーらー！あんな風に言うと、哀ちゃんには嫌味に聞こえちゃうよ！」

「灰原さんも、クラスの空気には気づいてますからね。」

「『またコナン君と光彦君と…』って思われるのを承知でも、2人と組むしかなかったの！そこを考えてあげてよ…。」

「コナン君は推理力は素晴らしいですけど、こういう人間関係には若干疎いし、鈍いですからね…。」

俺ってそんな風に思われていたのか。…しかし、まあ俺のことは置いておいて、あらためてそう言われると、思い当たる節がないわけではない。灰原はいつも俺達と一緒にいる。しかし、俺達以外の子と仲良くしているところはほとんど見ない。灰原が本当は俺と同じ年頃、つまり高校生くらいだと知っている俺にとっては、小学生と同じ目線に立って仲良くするのが（特にあの性格では）難しいと分かっているから、それが当たり前だと思っていた。当たり前だと思ふことで、俺の目は鈍っていたのは事実かもしれない。だとしたら、俺は灰原にきついことを言ってしまった。気にしてなきやいいけど…。

「…分かった。すまねえ。」

「うん。それじゃあね、コナン君。」

「ま、僕達はいつも通りいることです。変に気をつかうのもおかしいですから。ただ、発言には少し気をつけましょう。では、また明日。」

…ガキだガキだと思っていたが、歩美も光彦も、こういうところは大人顔負けだな。もしかするとその辺の大人以上かも知れない。

「ただいまー。」

探偵事務所のドアを開けると、異様に酒臭い。

「おおーコナン。しゃけ買ってきてくりえ〜。」

仕事がないのか、昼間から飲んだくれてるおっちゃん。そういえば今日は蘭は大学のサークルの合宿で帰ってこないんだっただな…。

「コナンくん。おにえがーい。すこしなら飲んでもいいぞー。」
小学生に酒を勧めてはいけません。

…少なくともこの大人よりは…。

阿笠博士の家。

ここが私が居候している家。

もう4年になるので、すっかり自分の家のようだ。博士も私のことをまるで娘のように扱ってくれるので、居心地がいいのも事実。なにせ「家族が居る」という生活が、かつての私には縁遠いものであったから。

「そうか、新一と光彦君とチームになったのか。よかったの。」

「ええ。他の子とじゃ、会話すらうまく出来ないもの。」

「そんなことはなかるう…。できれば哀くんにはもつと沢山の友達をつくって欲しいものじゃ。」

「…。」

無理、ね。今のクラスでは難しい。私のことを疎ましく思っている子が多いもの。ま、別に気にならないけど。

「まあ新一と一緒になら安心じゃ。のう?」

ちよつとにやにやしながら問いかける博士。…。何よ。

「別に。彼もちよつと迷惑そうだったし。」

「そんなことはなかるう。」

「でも、他の子と組んでもよかつたんじゃないか、みたいなこと言つてたし。」

「そりゃ他意はなかるう。…そうじゃ、きつとわしと一緒にじゃよ。」

哀くんは友達を増やしてもらいたいんじゃないよ。」

「よけいなおせっかいね。」

でも、そうなのかしら？友達の少ない私を心配して？

…そうなら嬉しいけど、それはないわね。

ま、博士が最初に言った「他意が無い」が多分正解、でしょうね。

「しかし、すまんわ。オリエンテーリングはお弁当が必要じゃろうが、ワシはその日は朝から用事があったのう。」

「いいわよ。自分の分は自分で作るわ。っていうか博士、お弁当なんか作れるの…？」

「何を言う。哀くんが我が家に来てくれるまでは、自炊しとったんじゃないぞ。」

「それで、そんなにメタボった訳ね。」

「いや、その、ハハハ…、かなわんの。どうにも多く作りすぎてしまつて。」

「で、もつたいないから…ってこと？」

…。そこまで言つて、少し思うところが…。

た、例えばよ、例えば。私が多めにお弁当を作つていたら…。

食べ切れなくて、もつたいないから食べてとでも言えば…。

か、彼は少し食べてくれるかしら…？私の手数料…。

「博士、私も多く作りすぎてみるわ。」

「????？」

第4話 「仕事が無いから昼から酒を飲むのではない。酒を飲みたくなったのが

後先考えてません。

とにかく思いついたままに書いてます。

…私の中のコナン（新一）は本当にニブすぎです。

あんなに推理力がある男がここまでニブいとは思えません…。

ファンフィクションということで、許してください。

第5話 「だってそいつは今時新聞で顔を隠して一歩踏み出して、ごみバケツハ

そして、オリエンテーリング当日。

「普通に…普通にしてりゃ、大丈夫だよな？」

光彦や歩美に忠告されてから、どうにも灰原への接し方がうまくいかない。

今日は光彦と3人だし…。

「あ、コナン君。」

小林先生が俺を見つけるなり駆け寄ってくる。何かあったのか？

「で？円谷くんが急病で、私と2人ってわけね。」

「お、おう。」

「ただの風邪ならいいけど…心配ね。」

「…。」

「ちょっと、聞いているの？名探偵さん。」

「お、おう。」

…どうしよう。

光彦が居るんだからまあ大丈夫、と思っていたが…。

2人きり。すげードキドキする。いままでこんなシチュエーションが無かったわけではないが、それでも俺が灰原を意識するようになってからは回数激減していた。

その上、今はクラスメイトの一部から灰原が疎ましく思われているつてのを聞いたばかりで…。

最初は俺が何の気なしに言った言葉が嫌味になって、それで傷ついてたら…っても思った。

けど、そんなんじゃないよな。

だって、クラスの何人かから疎ましく思われているなんて、それを知ってるなんて、どんな気持ちだろう。

そんな灰原のことを思うと、正直……。心配？だ。

そんな感情が渦巻いているせいか、灰原に対してどう接していいか分からなくなってしまうっている自分がいる。

「で？地図を見ると、ルートは色々あるけど、どついう風にまわる？」

「お、おう。」

「……あなた、さっきからそれしか言わないわね……。何かあったの？おかしいわよ。」

「お、おう。……い、いや、なんでもねえよ。まずは米花図書館を指してみっか。」

……。なにかおかしい。

彼の態度。どことなく、ぎこちない。

私のことを避けてる、とまでは言わないけれど、距離感がいつもより離れている。

……。なにかあったわね。

……。やっぱり。

コナン君の態度。どうみてもこの間のことを気にしているみたいで

す。

ここ何日かコナン君の様子を見てて、心配ではあったのですが……。

仮病を使ってもこっさりついてきて正解でした。

僕と一緒に居ては、コナン君は灰原さんへの接し方を見失う一方です。

ここは荒療治ですが、強制的に2人きりにさせて様子を見るべきだと思つた次第です。

……2人きり。できれば僕が灰原さんと2人きりになりたいものです。でも、灰原さんが好きなのはおそらく（ほぼ間違いなく）コナン君

です。

ならば、僕はコナン君と灰原さんの微妙な距離感を埋めてあげる方が、灰原さんが喜ぶと思っただけです。

「歩美ちゃんには申し訳ないかも…ですが。」
クルッ。

まずい！さつと物陰に隠れる僕。独り言を呟いただけなのに、コナン君が反応しました。

あの鋭さをもうちよつと人間関係に應用できればいいのですが…。しかし、僕の尾行は完璧なはずです！この2日間、皆には内緒で毛利探偵に尾行のコツを伝授してもらったのですから！

「あ、あのよ、灰原。」

「何？」

…。俺はついにどうしようもなくなって、居た堪れなくなって。

「お、お前、その…なんだ、悩み事とかねーか？例えば…うん、例えば人間関係…とか。」

聞いてしまった。

まずいとは思ったが。

どうにもこうにも居た堪れなかった。

驚いたような一瞬の表情。無限のように感じる長い間。しかし灰原はいつものあきれたような顔で

「はあ？」

聞き返してきた。

やっちまいましたー！！！！

コナン君…。なんとなく拳動が不審ではありましたが、まさかそんなド直球に核心をつくとは夢にも思いませんでした。

このままではいけません！

なんとか場を取り持つには、もう僕が飛び出すしかないでしょう。そう思つて一歩踏み出したとき…。

「はあ？」

何か不自然だったのは、そんなことを気にしていたからなのね。数日前に「他の奴と組めば」と言っていた彼には確かに他意はなかった（と思う）。

それがその後おかしな態度をとっていたということは、大方歩美ちゃんか円谷くんあたりに教えられたわけね。

…。クラスで私がどんな風に思われているのか。

（小嶋君は…ありえないわね。工藤くん以上に鈍感だから。でも。）

それを聞いて態度がおかしくなるっていうことは、少なくとも私のことを心配してくれていたのは確かかなわけで。

そう考えると、ちょっと嬉しいかも。

「…心配してくれるなんて、らしくないんじゃない？」

できるだけクールに。いつも通りの私で。彼に答えた。

「…心配してくれるなんて、らしくないんじゃない？」

口調はいつものクールな灰原さんですが…微笑んでいます。

思わず僕は見惚れてしまいました。

あの灰原さんが、いつもクールな灰原さんが、あんなに柔らかい表情をするなんて。

「バ、バーロー、心配とかなんとか、じゃなくてだな…。」

「どーせ、誰かさんに色々吹き込まれたんでしょ。クラスの何人かは、私のことをよく思つてないって。」

「いや、あのな…。」

「そして、お優しい探偵さんは、クラスで浮いてる可愛そうな女の子が気になって、しかもそんな女の子に考え無しに『どのペアでも歓迎される』なんて言ってしまったのを気にして、挙動がおかしくなっていた。」

「…おかしかったか？俺…。」

「別に気にしてなんかいないわよ。あなたが鈍感なのは昔からだし。」

「昔からって…おいおい。」

「あなたの考え無しの言葉に傷ついてなんていないから、安心していいわよ。」

「そんなんじゃないよーよ！そんなんじゃないよ。いや、そんなんも少しはあったけど…。でもな」

「まったく…何が言いたいのかさっぱりよ。私が嫌われてるってことなら心配しなくていいわよ。そんなことで悩むタイプにみえる？」「見えるとか見えないじゃないだろ。」

「人間ただ歩いてたって、嫌われるときは嫌われるものよ。それでも私には…今の私には、ありがたいことに友達もいるわ。あなたや、歩美ちゃんや、小嶋君、それに…。」

灰原が突然俺の背後へ歩いていく。そして物陰に向かってささやいた。

「円谷くんもね。」

「!？」

「ば、ばれてましたか…。」

なんと！物陰から光彦が現れた！

…さっきなんかの気配を感じたが、光彦だったのか…。

「江戸川君に私のことを話したものの、そのせいで彼の挙動がおかしくなってしまうたのを気にして、あえて私と2人にさせるように仮病を使って、しかも心配だからこっそり後をつけてたってところかしら…。」

「ば、バレバレでしたか…。」

「本当に、ありがたい友達をたくさん持ったものだわ。」
「そういうと、ふと灰原の表情が物憂げになる。」

「昔の私では、本当に、想像も出来ないくらい…。」
「そのまま少し前に歩く灰原。そのまま行ってしまおうかと思って、俺と光彦が足を前に進めようとした時。」

「ありがとう。」

聞こえるか、聞こえないか位の声で、そう呟いた。

「…。さ、行くわよ。せつかくだから上位に入りましょう。円谷くんも、一緒にね。」

「は、はい！」

「おう。」

「いやー。やっぱり灰原さんは大人ですねえ。」

光彦がこっそり俺に囁く。

「少なくとも、僕やコナン君よりははるかに大人ですよ。」

…俺と光彦は同レベル…か。

「でもせつかく毛利探偵に尾行の仕方を教わったのに、灰原さんにはあっさり見破られてしまいました。僕もまだまだ探偵として未熟です。」

…それは教わった相手が悪い。

「でも、やっぱりあの柔らかい微笑みは…。」

「ん？なんだ？」

「い、いえ、なんでもありません。」

あれは、心配していたのがほかならぬコナン君だったから、思わずでてしまった表情なのでしょう。

やはり灰原さんにとってコナン君は特別なようです。

「でも、僕にだって、可能性が消えたわけじゃありません！」

「お、おい光彦、突然どうしたんだよ？」

「い、いえ、なんでもありませんよ。ハハハハ……。」

僕は灰原さんがコナン君のことが好きなら、それを応援してあげる方がいいと思っていました。

でも、灰原さんのあの微笑を見て、やっぱり気持ちが変わりました。いつか、いつかあの微笑を僕に向けて欲しい。

……たとえ叶わない夢でも、あきらめなければならぬ訳ではないはずです。

「コナン君。お互い、がんばりましょうね。」

「？何をだよ……。」

「いえ、こつちの話です。」

「コナンくん！」

ゴール地点である高台の展望公園にたどり着くと、既に到着していた歩美ちゃんが走りよってきた。

どうやら私たちはちょうど真ん中くらいの順位だったようだ。

「お疲れ様。じゃあ2時半までは自由時間だから、お弁当食べて、遊んでいいわよ。ただし、公園の外には出ないこと。帰りはみんなで学校まで歩いていくから……って！光彦くん!？」

小林先生がびっくりしている。それはそうでしょうけど。

「それじゃあ江戸川君、まずは昼食にしましょう。」

「哀ちゃん、コナン君、一緒に食べようと待ってたんだよ。あつちに元太君もいるから、行こう。」

歩美ちゃんが工藤くんの腕を引いて進んでいってしまふ。

……やっぱり彼と2人で、は無理みたいね。

「円谷君、私たちもいきましようか。」

「は、はい……。」

「おおー！灰原！おめえ弁当でっけーな！」

小嶋君が目を大きく開く。確かに『ちよつと』作りすぎるつもりが、勢いあまってかなり作りすぎてしまっていた。

「な、ちよつと貰ってもいいか？どうせそんなには入らないだろ？」

…。ま、そうなるわよね。

「いいわよ。残してももったいないし。」

「おおー！サンキュー！」

そう言つて小嶋君は猛烈な勢いでお弁当を食べ始めた。ま、そんなるわよね。

「ふーん、灰原、結構料理上手なんだな。おいしいよ。」

その声にハツと振り向くと、工藤くんが私の作った卵焼きを頬張っていた。

「…なに勝手に食べてるのよ。」

「な、なんだよ。元太はいいのに俺は駄目なのか？」

「駄目じゃないわよ。でも一言くらいは断りなさいよね。」

…。どうしても憎まれ口になってしまふ私。素直じゃないなあ…。

でも、彼がおいしいって…。

…。灰原さんがまた微笑んでいます…。

いいんです。いつか、いつかきつと…。

第5話 「だってそいつは今時新聞で顔を隠して一歩踏み出して、ごみバケツハ

光彦の立ち位置を示したくなつた次第です。

コナンと哀はともかく、光彦は相当大人だと思いますが、どうでしょう？

第6話 「フィルムやデータに記録したら厳しく罰せられるが、脳裏に焼き付け

俺の名前は毛利小五郎。言わずと知れた名探偵だ。数年前から推理の才能に目覚めた俺は、自分でも気づかないうちに事件を次々と解決し、世間からは「眠りの小五郎」などと持て囃されるほどになった。

そんな俺が何故こんなことに…。

事の起こりは2日前だ。

「なに？子供達の付き添いで海に？俺が？」

「いいじゃない、おととい大きな依頼を解決して、今はヒマなんでしょ？」

娘の蘭が俺に、うちで預かっているコナンとその友達在海へ行く為の保護者になれと言ってきたのだ。

「阿笠博士はどうした。いつも、ガキどもを遊びに連れて行ってくれてるだろう？」

「博士は学会。私も彼と遊びに行く約束があるから、お願いね？」

「あいつらもう5年生だろう？海にくらい、勝手に行かせればいいじゃねーか。」

「だめよ。歩美ちゃんたちはまだ子供なんだから。」

「駄目だ駄目だ！俺は明後日は録りためていたヨーコちゃんが出ているドラマを一気に見るといふ大事な用事がある！」

「へー、そう。じゃ、いいわよ。そのかわり、明日からビール抜きだからね！」

「な！お、お、お前、親に向かってその言い草は…。」

「じゃあお願いね。」

…こうして俺はガキ連中を引き連れ、海にやってきたというわけだ。が、それだけならいくら俺でもそこまで悲観することではない。さらにツイていないことに…。

「よーし、お前ら。あんまり遠くへ行くんじゃないぞ。」

「……はい！」

海についてすぐ、俺はビーチパラソルをたて、ガキどもを追い払い、サングラスで視線を隠してビーチのおねーちゃん達を眺め始めた。おおっと、けしてやましい意味合いは無いぞ。名探偵たるもの、いかなるときでも人間観察を怠ってはいかんだ。

「視線を隠しても、口元がにやけているから、何を考えているのかすぐ分かるわよ。」

！！

見ると、灰原哀とかいう阿笠博士の家に居候しているガキがジト目で俺を見ていた。

「なんだ、皆と行ったんじゃないのか。」

「海で泳ぐのはそんなに好きじゃないのよ。紫外線を浴びすぎるのも、肌によくないしね。」

…なんともひねたガキだ。

「まあ、ここに居るのは勝手だが、俺の邪魔するんじゃないぞ。」

「なんの邪魔？覗き？」

「ばか言つな！人間観察の修行だ。」

「あつぞ。」

…可愛くないガキだ。

しばらくビーチを眺めていたが、今日が日曜日な事もあいまってか、この海岸には家族連れはやたら多いが、若いおねーちゃんはあまりいないことがわかった。

がっかりしてふと横のガキを見ると、座ったままじつとある方角を

向いている。視線を追うとそこにいるのは…。

「なんだ。コナンが気になるのか。」

「！そんなじゃないわ。」

「ほほー…さては…。やれやれ、最近の子供はませていますなー。」

「まったく…。違っつて言ってるでしょ。」

口では否定しているが、この名探偵毛利小五郎をごまかせるものではない。にやにやしていると、海からコナンが上がってきた。

「灰原、少しくらい皆と泳がねーか？ここでじっとしていても退屈だろ。」

「余計なお世話。」

「それにおっちゃんのそばに居ると、どんな目で見られるか分かったもんじゃねーぞ。」

「親子みたいってこと？それとも、知らないおじさんに連れられてきた少女、みたい？」

「バーロー。周りから、じゃなくて、おっちゃんに、だよ。」

「こらコナン！俺をなんだと思ってるんだ！」

「ああ、ごめんなさい。」

「全く…。よし、コナン。さっさとその子を連れて行け。俺もコブつきと思われたら迷惑だ。」

「はいはい。じゃ…、い、行くうぜ。」

コナンは少し口ごもると、灰原哀の手を掴んだ。海の方を向いてはいるが、顔が赤い。

「なに掴んでるのよ。一人で行けるわ。」

ずいぶんクールな口調だが、灰原哀も顔を赤くし、普段は見せないような柔らかい表情になっている。

ははーん、この名探偵の灰色の脳細胞にピピーン！とひらめきが走る。

こりゃ、こいつらお互いに…。しかもどうやら上手くごまかしている気になっているようだ。

まったく、最近のガキどもときたら…。何が「歩美ちゃん達はまだ

子供なのよ！」だ。

そして二人は海に戻っていった。

「…。ませたガキどもだ。コナンもあの子も年齢ごまかしてるんじゃないか？」

昔から思っていたが、あの2人はどうも子供っぽいところが無い。子供らしい仕草や喋り方をするにはあるが、どうにも嘘くさいのだ。

「…。ばかばかしい。どっからどうみても小学生にしか見えん。」
俺は独り言を言い、また人間観察に戻った。

それから15分位しただろうか。今度は吉田歩美が俺のいるパラソルの下にやってきた。

「なんだ、疲れたのか？」

今日はいい天気だ。日差しも強い。こうやって自分から休みに来るような子はかえって心配ない。だが、表情が若干暗い。

「どうした、調子でも、悪いのか？」

「ううん、おじさんに聞きたいことがあって…。」

「聞きたいこと？」

「うん…。さつき、コナン君が哀ちゃんを迎えに来たでしょ？その時の2人の様子、どうだった？」

「どうって…。いやあ、なかなかのいい感じーだったぞ。2人ともクールぶってはいいるがな、この名探偵の目はごまかせん。ありやどうみても両思…。」

そこまで言って、俺は言葉をとめた。吉田歩美の顔がますます暗くなり…。

「そ、そう、だよね…。うっ。」

遂には瞳から涙をこぼし始めた。少女はそれを隠そうとしゃがみこんだが、傍からみれば泣いているのは一目瞭然だ。

「お、おい、どうした。泣くことねーじゃねーか。」

慌てる俺。すると異変に気づいた周りの海水客達が怪訝そうな顔で俺達を見始めた。歩美はまだ落ち着きそうに無い。そこへ…。

「こら！何をやっている！」

ビーチの監視員が人だかりに気づいて様子を見に来たのだ。

「な、なんでもない、この子がちょっと…。」

「そういえば、この子さっきこいつの事をおじさんってよんでたわよ！」

「ああ、俺も聞いた。」

「この親父が泣かせたんだ！」

「まさか誘拐？」

「まさか！ただの変態じゃねーか？」

まわりの客達がざわめきだす。

「あんな！俺は…。」

「よーし！お前！ちよつと来い！」

監視員はむんずと俺の腕を掴み、彼らの待機する小屋へと引っ張り出した。

「お、おい！ちよつと待て！お前らこの俺を誰だと…。」

「誘拐か、変態か、話は後だ！まず来い！」

…。こうして俺は監視員達に囲まれて、尋問を受けるハメになってしまったのだ。

「あれ？毛利探偵がいませんよ？」

「あら、さっきまであそこでにやにやしてたのに。」

「おい、歩美もいねーぞ。まさか二人でおいしい物でも食べに行ったんじゃ…。」

「ま、歩美も疲れた顔してたし、ジュースでも買いに行ったんじゃねーのか？」

「ほう、あんたがああの有名な毛利小五郎…。」

「そうだ、やっとわかったか。じゃ、俺は行くぞ！」

「待て待て。あんたが毛利小五郎だとは分かったが、あんたの疑いが晴れたわけじゃないぞ。」

「だーかーらー！俺はあの子や他のガキどもの保護者なんだよ！」
じとー。監視員全員が俺を疑いの目で見ていやがる。くっそー、いたいどうすりゃ…。

「で？目的はなんだ。誘拐か？それとも淫行…。」

「ば、馬鹿いうな！俺がそんな奴に見えるか！」

「サングラスに、髭…。どっからみても怪しい。」

「バカヤロウ！髭は自前だ！」

「とにかく！あんな小学生の子に何をしようとしていたんだ！」

「だから俺は何もしてねーし、何もしよーとしてねーよ…。」

もう1時間近くも押し問答が続いている。と、そこへ…。

「ごめんなさい、おじさんの言ってることは本当です！」

ようやく落ち着いた歩美が部屋に入ってきた。元をたどれば突然泣き出したこいつのせいでこんな目に合っているわけだが、今の俺には救いの女神に見える…。

「失礼しました！」

監視員全員が頭を下げる中、ようやく俺は無罪放免となり、歩美と一緒に俺達のパラソルのところへ帰れることになった。

しかしコナンが灰原のことを好きなように見えると聞いて泣き出すとは…。おモテになりますなー、コナン君。

「ねえおじさん。」

「なんだ？」

「おじさんって、好きな人が出来たらどうしてたの？」

「そりゃあ、1も2もなく猛烈にアタックだ。とにかく手数で勝負…。」

「じゃあ、その相手に好きね人がいたら？」

「そんなことは俺には関係ねー。攻めて攻めて、それで振られるなら、後悔はしないからな！はっはっは！」

まったく、こんなことを聞いてくるとは、本当に今のガキどもときたら…。

「そつか…。そうだよな。ありがとう、おじさん！」

そういつて歩美が笑う。笑顔になれば可愛らしい。蘭の幼い頃にごことなく似ているかもしれない。こりゃコナンは苦勞するかもな。

「あ、ようやく戻ってきました。」

「どこ行ってたの？1時間も姿が見えないから、心配したのよ。」

「まさか、毛利探偵、歩美ちゃんに変なことしてないでしょうね？」

「ありうるわね…。」

「おまえらなあ…。んな訳ねーだろ。なんつーガキどもだ。」

俺が子供の頃はそんな発想ひっくり返っても出てこなかったと思うが。まったくこいつらときたら…。

「じゃ、じゃあやっぱり、2人でうな重でも食べてきたんじゃねーのか？」

…。

「元太、だったな。」

「な、なんだよ、おっちゃん。」

「お前を見ると、ほっとする。」

「????？」

第6話 「フィルムやデータに記録したら厳しく罰せられるが、脳裏に焼き付け

歩美ちゃんのスタンスの確定です。というか、おっちゃんに色々しゃべらせたかっただけです。…？よくみると同じことしか言っていない？ところでサブタイトルはセーフなんでしょうか？

第7話 「そもそも貴様が任三郎を名乗るな！名乗るんならせめてもつちよっ

「死亡推定時刻は昨夜の午後9時半頃、鈍器のようなもので後ろから一撃ですね。」

「よしわかった。高木くんは第一発見者の澤井さんから詳しい事情を聞いてくれ。他の者はこの公園の周辺を聞き込みだ。」

「はい！！！！」

オレの名前は高木涉。警視庁捜査一課で働く警部補だ。…。そう、この春からオレは警部補に昇格した。さまざまな難事件を解決に導いたことで、階級だけは上がったのだが結局目暮警部の下で働いている状況に変化は無い。それに…。

「解決した難事件のほとんどは少年探偵団の手助けがあっただよなあ…。」

そう、書類上はオレが解決したことになっている事件の多くは小学生にしてはとて頭がきれ江戸川コナン君をはじめとした少年探偵団が協力してくれたものなのだ。

「…。でも弱音を吐いてもしょうがない。子供のためにもがんばろう。」

生まれたばかりの我が子と愛する妻が写っている写真を眺め、気合を入れる。

「へー、佐藤刑事に似た可愛い子だね、高木刑事。」

「あら、職務中に奥さんの写真を見てにやにやしているなんて、刑事失格なんじゃない？」

ぎょっとして振り返ると、そこには少年探偵団のメンバーであるコナン君と哀ちゃんが立っていた。

「こ、コナン君！それに、哀ちゃんも。…って事は他の皆や阿笠さんも？」

「いや、今日はたまたま2人で博士の家に向かったら…。」

「パトカーが公園の入り口に止まってたので、この推理フェチさんが興味本位で覗きに行ったのよ。ま、私もついてきちゃったけどね。」

「まったく…。事件にすぐ首を突っ込みたがるなんて、毛利さんの教育がよくない！たとえいつも助けられてるとはいえ、子供を事件現場に入れるのはやっぱりよくない。」

「駄目だよ、子供が事件に首を突っ込んだじゃ。さ、ここは警察に任せて…。」

「多分、顔見知りの犯行だね。」

「えっ？」

「だって、事件があったのはゆうべの9時ごろなんでしょ？だったらの公園は真っ暗だったはずなのに、被害者の浅野さんは公園の灯りの下で倒れてたんだよ？もしぼくが強盗だったら、万が一にも顔を見られないように灯りのないところで殴ると思うけど…。」

「そうね。それに強盗目的だったら、財布のお金だけじゃなく、指輪や時計も盗むんじゃない？」

「な、なんでそんなことを知ってるんだい？」

「鑑識のおじさん達に聞いたんだよ。」

「私達の顔を知っているから、すぐに教えてくれたわよ。」

「…。大丈夫なんだろうか、警視庁は…。」

「それはそうと、今の話だけじゃまだ強盗か、怨恨か、断定は出来ないよ。財布のお金を抜いているときに、誰かが通りかかったのかも知れないだろ？」

「あら、通報があったのは今朝になってからなんでしょ？灯りの下で人が倒れていて、その近くを通りかかった人がいるなら、通報は夕べのはずよ？」

「まあ決め手には欠けるけど…浅野さんはあんまりお金を持っていないように見えないうし、若い男の人だから抵抗されたら逆にあぶない。強盗が狙うような相手じゃないよ。」

「ま、そう考えると、怪しいのはあの澤井っていう発見者の女性ね。」

「え？何でだい？彼女は被害者を知らない人だって…。」

「浅野って名前を聞いて、一瞬表情を変えたのよ。彼の遺留品の中の名刺は織田になってたから、きつとその偽名の方を聞いていたのね。」

「彼が何故偽名を名乗っていたかは分からないけど、知っている人をわざわざ知らない人って言うなんて、怪しいよね？」

「う、うん…。」

彼らの言葉に従って捜査を進めると、やはり彼らの推理どおり、犯人は澤井さんだった。浅野さんはホストクラブで働いていて、澤井さんはその客だったそうだ。浅野さんは源氏名はあるのだが、どうしても名前を名乗るときは織田と言い、独身で売っていたそうだ。

浅野さんにそうとう入れ込んで貢いでいた澤井さんだったが、偶然彼に奥さんがいることを知り、憎しみが芽生えた末の犯行だったらしい。早期解決に目暮警部も大喜びだ。

「また助けられたな、高木くん。そうだ。たまにはお礼にご飯でもご馳走してあげなさい。」

「そうですね。」

…。今月厳しいンだけどな…。

「じゃあ、どこがいい？」

「いや、気をつかわなくていいよ、高木刑事。」

「そうね。子供も生まれて、佐藤刑事は育児休暇。厳しいんじゃない？」

…逆に子供に気をつかわれてしまった…。

「いやーしかしコナン君はすごいな。ワシは工藤君や毛利くんの推理もよく聞くが、君の推理も負けず劣らずだ。」

その言葉を聞いたコナン君はやや複雑な表情をし、哀ちゃんはちょ

つと小ばかにしたような表情でコナン君のほうを向いた。

「それに哀君もなかなかの推理力。2人の息もピッタリだしなあ。まるでベテラン探偵事務所の所長とその右腕のようだ。」

その言葉は嬉しかったのか、哀ちゃんが珍しく照れたような表情をした。

「それはそうと、高木、ちゃあんと食事に連れて行ってやれよ。金なら、ほれ。ワシが出してやるからな。」

「し、しかし、事情聴取が…。」

「心配いらん。ワシと千葉でやっておく。」

と、言う訳で、オレは2人を連れて近くのファミリーストランに向かった。

「せっかくだから、好きなものを頼んでいいよ。時間は大丈夫かい？」

「うん、平気だよ。ありがとう高木刑事。」

「ま、せっかくだからご馳走になるわね。」

「ところで、今日はどうして2人で一緒だったんだい？探偵団で皆一緒ってところはよくみるけど…」

「あ…それは…」

「別にいいじゃない。友達…幼馴染、ですもの。」

コナン君が何か言い出しにくそうにもごもごしているのを遮って哀ちゃんがぴしゃりと閉じた。確かに1年生の頃から仲がいい彼らは幼馴染という分類に入るだろう。言い出しにくいのであれば無理に聞くことはない。

しばらくして話題はさっきの事件のことになった。

「しかし、さっきの被害者の浅野さん、どうして偽名まで使っていたのかな？ホストで働くんだから奥さんがいるのを隠す気持ちは分かるけど…。ホストなんだから、普段は源氏名があるだろうに。」

「同じ理由だよ。名前がどこから漏れたとき、それが本名だった

ら身元がばれる確立があがるでしょ？ 実際澤井さんも偽名の「織田」までは知っていた訳だし。」

「そうか…。澤井さんみたいに入れ込んでいる人に本名を知られたら、あつという間に奥さんがいることも知られちゃいそうだもんね。」

料理が運ばれてきて、2人はそれを食べ始めた。オレもコーヒーを飲んで一息つく。

「本名まで隠して、全然違う自分になりきる…。か。僕にはできないなあ。周りみんなを騙してるみたいで気が引け…。」

「ゲホ！ゴホ！」

！！突然コナン君が咳き込む。…。？のどに詰まった？見るとそんな様子でもない。その横の哀ちゃんはおかしそうな顔でコナン君を見ている。

「どうしたんだい、大丈夫？」

「う…。うん、平気平気。」

「大丈夫よ。高木刑事の言葉にちょっと動揺したただだから。」

哀ちゃんがクスクス笑う。…。？今の言葉のどこに動揺する要素があったんだらう？

「ほら、口元にソースがついてるわよ。」

そう言うと、哀ちゃんがナプキンでコナン君の口元を拭いてあげる。真っ赤になるコナン君。

「バ、バーロー！恥ずかしいことするなよ！」

「横で顔にソースつけたままでいられたら気になるわよ。まったく時々本当に子供みたいなんだから…。」

「本当に…。って、コナン君はまだまだ子供だよ、哀ちゃん。」

「あら、そうね。」

そう言つて、またクスクス笑う哀ちゃん。…。哀ちゃんがこんな表情をしているところを見るようになったのは本当に最近だなあ。ちよっと前まではクールな表情しか見せたことが無かったのに。何か心境の変化でもあったんだらうか？

「でも、いいね、幼馴染って。僕にも小学校の時に女の子の友達はいたけど、君達みたいに仲がいいのは珍しいんじゃないかい？」

「そ、そんな、普通だよ。普通。」

「そうかい？あ、そういえば毛利さんと妃さんも幼馴染なんだっけ。それに服部ちゃんと和葉ちゃん…。そう考えれば結構幼馴染同士で仲がいい、ってよくあるね。蘭さんと工藤君もたしか…。」

「ゲホ！ゴホ！」

なぜかまたむせるコナン君。

「それじゃあ、今日は本当に助かったよ。またね、2人とも。」

2人を見送って、オレも警視庁に戻る。歩き出す2人の後ろ姿を見ると、やはり仲が良さそうに見える。

「…。前はもうちょっと2人の間にクールな雰囲気があったけど…。最近より仲良くなったのかな？そんな風に見える…。」

「ですよ…。夏休みの終わり頃から少し雰囲気がかわったんですよ…。」

「そうか…。2人の間に何かあったのかな…？」

「そうとしか考えられません…。」

「…。？…！！」

驚いて横を見るとそこには…。

「み、み、み、光彦くん！何故君がここに！？」

「ああ、すみません。レストランの中で高木刑事とコナン君たちが食事しているのが見えました…。つい、こっそり覗いちゃってました。」

こっそりって…。

「2人の関係がどうなったのか…。気になりますね…。」

「それでこっそり見ていたのかい？」

「はい。」

「はいって…。」

「しかし、あの様子ではまだその関係が決定的な何かになった訳ではないようです。それなら僕にもまだチャンスは…。」

あれ？なんかこの感じ…。

「では高木刑事、僕はもうちょっと調査してみますので、これで失礼します！」

「あ、ああ…。程ほどにね…。」

そつと走り出す光彦くん。彼のこの感じ…。なんか前にも…。デジヤヴユ？

「は、は、は…ハックション！」

「おや？白鳥くん。風邪かね？」

第7話 「そもそも貴様が任三郎を名乗るな！名乗るんならせめてもつちよっ

話が發展していませんが…。高木刑事に語りをさせたかっただけです。そして光彦のキャラがどんどん怪しげになっています…。こんなはずでは…。

第8話 「そっか…。自称「新一の彼女」の家に押しかけ、彼女にかかってきた

私は工藤君が好き。

自分の気持ちに正直になろうと決めたのは、夏休みも終わろうという、まだうだるほど暑かったあの日…。

「あら、哀ちゃん。」

天気の良い日くらい、少しは外に出たほうがいいという博士の言葉に促され、公園をぶらぶらしていた私に声をかけてきたのは蘭さんだった。

「…こんにちは。」

軽く会釈し、そのまま立ち去ろうとする私。

「あ、待って哀ちゃん。せっかくだから、ちょっとお茶しない？」

…。断る理由が思いつかない…。

「…。そうね。」

公園の近くの喫茶店。私は夏休みとはいえ、平日の昼過ぎ。客はまばらにしか居ない。

「今日は少年探偵団と一緒にじゃないんだね？新一も出かけたって聞いてたからてつきり一緒かと…。」

蘭さんは事情を知っているため、私や工藤君の前では彼を新一と呼ぶ。

「歩美ちゃんは家族旅行、小嶋君と円谷君はクラスの男の子何人かと誰かの田舎にお泊り、工藤君は…大阪の探偵さんに会いに行くっていったかしら？」

「あ、そういえば、服部君がどうの、って言ってたっけ…。」

「あら、聞いてなかったの？」

「3日前から彼と旅行に行っていて…。今日の朝帰ってきたときには

居なかったから…。」
彼と。

その言葉にズキリと胸が痛む。
もしも私が作った薬で工藤君が小さくなっていなかったら、その「彼」は工藤君だったのかもしれないから。

「…ちゃん、哀ちゃん。」
ハツと顔をあげる。沈み込んでしまった私の顔を心配そうな顔で覗き込む蘭さん。

「あ…ごめんなさい、ちょっと考え事を…。」

「あら、新一のこと？」

「そ、そんなんじゃない…。」

赤くなつて、反論する私。面白そうににやにやしている蘭さん。…。
「蘭さん、もしかして、私の気持ち…。」

「？ああ、哀ちゃんが、新一のこと、大好き、ってこと？」

…！ばれてる…。一番ばれてはいけない人に…。隠してきたつもりだったのに…。

「ごめんなさい。」

「え？ちよ、どうして謝るの？」

「…だって…。」

私が蘭さんから彼を、「彼との未来」という可能性を奪ったのだから。

彼女の選択肢を無理やり奪ったのだから。

そんな私が「彼との未来」を「選択」しようとするなんて…「選択」したいと思っっているなんて…。

いままで心の奥底にしまいこんでいた感情が溢れだした。
瞳からは涙があふれてくる。

「あ、哀ちゃん、どうしたの？」

「べ…別に…なんでも…。」

あくまで冷静さを取り戻そうと装う私に、蘭さんは少し顔をしかめ、ちよっただけきつい口調で、

「駄目よ、哀ちゃん。涙を流すほどの思いがあるなら、打ち明けてくれなくちゃ。私達、友達なのよ？」

友達。そんな風に思っているなんて。そんな資格、私にはないのに…。

「そりゃあ、友達だからって、なんでもかんでも話さなきゃ駄目ってことはないかもしれないけど、私はそんなの寂しいな。ほら、おねーさんに話してごらん？」

お姉さん…？

私はハツとした。

私は彼女が、工藤君の幼馴染で、明るくて前向きな性格だから、タイプが違いすぎて苦手なんだと思っていた。

でも、芯が強いわりに泣き虫で、でもいつも優しいところはお姉ちゃんに似ている。似ているからこそ、無意識に苦手意識を作って避けていたのかもしれない。

彼女に近づぐことで、死んだお姉ちゃんを重ねてしまうから。

お姉ちゃん…。

気がついたら、私は感情のままに色々なことを話してしまっていた。組織のこと、薬のこと、姉のこと、工藤君との出会い、組織との戦い、工藤君への思い、蘭さんへの思い…。

いつの間にか空が紅く染まり、かなりの時間が経ってしまったころ、私の話は終わった。

「そっか…。」

彼女は優しい瞳で、言葉少なに私を見つめていた。しばらく無言が続いたが、彼女はまた口を開いた。

「ちよつと歩こっか。」

蘭さんに手を引かれ、公園を歩き出す。

「哀ちゃんは色んな思いを抱えてたんだね。でも溜めすぎはよくないよっ。」

優しい顔で私を見る蘭さん。

「…でも、分かったでしょう？私には工藤君を想う資格なんて、ないの。」

「…ねえ哀ちゃん。新一のこと、好き？」

「だから、私には、そんな資格…？」

「好き？」

好きかどうか。それだけなら。純粹にその二択なら…。

「…好き、です…。」

蘭さんはぱあっと笑顔になる。

「だったら、好きでいいの。人を好きになるのに、資格なんて要らないのよ？」

「で、でも…。」

「じゃあ、新一と一緒に居たい？新一と一緒に居られたら、幸せ？」

「…それは…。」

ためらう私。その通りだ。私は彼と一緒に居たい。でも…。

突然蘭さんが私を抱き上げた。小学5年生の私は決して軽くはないが、空手をやっている蘭さんには苦になる重さでもないようだ。でも恥ずかしくてもぞもぞする私の頬に頬をくっつけて、優しい声で蘭さんが語りかける。

「いいのよ。哀ちゃんは、幸せになっていいの。」

私はずもずもするのを止めた。

「新一と一緒に居て幸せなんだったら、ずっと一緒に居たいって思っているの。ずっと一緒に居ていいの。」

優しい声。私を非難する響きは微塵もない。私は無意識に、彼女に抱きつくように腕をまわしていた。

「哀ちゃんは、皆に優しいね。私にも。でも、もっと、自分に優しくしたっていいの。」

あったかい…。

空に星が散りばめられる頃、私は蘭さんに手を引かれ、家路につい

ていた。

思いをぶちまけたうえ、優しく抱きかかえられた私は恥ずかしくて耳まで紅くなっているだろう。

「じゃあね、哀ちゃん。」

博士の家の前で、蘭さんが去ろうとする。

「私…。」

呟いた私を振り返る蘭さん。その眼をまっすぐみつめ、私は言った。

「私、工藤君が好き。」

「…うん。」

「工藤君が私をどう思うか…。許してくれるかどうかわからない。

でも、私は彼が好き。」

「…うん。」

蘭さんはその優しい笑顔で、私を見つめ返してくれていた。

決意を言葉にすることで、私は一歩前に進めた気がする。それを後押ししてくれたのが、私を許してくれたのが、蘭さん。

ううん、許してくれた、のではない。

蘭さんは、元々、私を憎んだり、恨んだりなんてしていなかった。

そんな負の思いを抱くような人ではなかった。

それは私が自分自身の罪悪感から逃げ出すための理由として、心の中で作ってしまった思い込み。

でも、その思いに逃げていてはいつまでも私は前に進めない。

蘭さんは私を許してくれたんじゃない。私を優しく包み込んでくれたのだ。

いつか誰かが言っていた。蘭さんはangelだと。（…誰だったかしら。思い出したいくないような…）

その通りね。本当に。

「ありがとう、蘭さん。」

「…うん…？」

首をかしげる蘭さん。そして、何かに気づいたように…。

「そだ！ねえ哀ちゃん。哀ちゃんも新一みたいに、『蘭ねーちゃん』

って呼んでみない？」

「???!?!」

「あ…ごめんね。お姉さんのことがあったのに、『ねーちゃん』なんて…。」

「ら…『蘭ねーちゃん』はハードル高すぎよ。でも…ありがとう、蘭さ…。」

私は戸惑い、顔を紅くしながら、言ってみた。

「…ありがとう、お姉ちゃん。」

「あ…哀ちゃん…。可愛い！」

蘭さんがしゃがんで私をぎゅっと抱きしめた。む…胸が…。

自分の気持ちに嘘をついても、自分の気持ちを封じ込めようとしても、本当に自分を偽ることは出来ない。

自分で自分を騙すなんて、できっこない。

わかっていた。わかっていたはずなのに。

私は…私は「資格が無い」とか「蘭さんに申し訳ない」と言っ、そう言い訳をして、自分自身から逃げていた。

でも、もう、それはやめにしよう。

たとえつらくても、大きな傷を抱えることになっても。

私は工藤君が…いえ、私は、江戸川君が好き。

もう、嘘はつかない。

第8話 「そっか」。自称「新一の彼女」の家に押しかけ、彼女にかかってきた

ほら、たまに真面目な話を、と思うと脈絡なくて読みづらい文章になる…。

哀と蘭を絡ませて、今後の動きをとりやすくしたかったです。時間軸的には前話、高木刑事の回よりもやや前、ということになっています。

第9話「交通ルールは守りましょう。そしてお巡りさん、私がスピード違反な

それは夏休みが終わるほんの数日前のことだった…。

「探偵団の諸君、夏休みの宿題は終わったかの？」

「……はい……！」

俺は博士や少年探偵団の面々と一緒に、今年の夏休み最後のキャン
プとして、博士の車で山に向かうことになっていた。

「全く…毎年行ってるのに、よく飽きねーな。」

「あら、そう言うあなたも、毎年参加しているじゃない？私は去年
は行かなかったけどね。」

眠そうな灰原：まあいつも眠そうではあるけど。

「さて、じゃあ皆、車に乗りなさい。」

博士が言う。と、ここでちょっとした問題が起きた。

一昨年までは後部座席に歩美、元太、光彦が乗り、助手席に俺と灰
原が無理やり並んで乗っていたのだが…。

「い、いい加減助手席に二人、は無理があるわね…。」

「お、おう。去年はおめーが不参加だったから気づかなかったが…。

二人とも体も大きくなり、並んでは乗れそうにないのだ。

「困ったの…。じゃあ本当はまずいんじゃないが、コナン君のひざの上
に、哀君が座って行くしかないの。」

！！博士の提案に、俺は顔を紅くし、灰原もあきれたような表情を
し…。

「えー！じゃあ私がコナン君のひざの上に座るー！」

「いえ、今回はコナン君が後ろに座ってください！僕が前の座席に
行きます！」

歩美と光彦の反論が始まった。

10分ほどあーだこーだもめた後、結局

「いつも通りコナンと灰原が前でいーじゃねーか。早く行こうぜ。」
という元太の一声で、俺のひざの上に灰原が座って行くことになった。

「仕方ありませんね…。コナン君。帰りは代わってくださいよ？」
光彦の奴…。

「じゃあ、失礼するわね。」

そう言つて灰原が俺の膝の上に座る。遠慮がちな負荷が体にかかり、顔に栗色の柔らかな髪の毛がかかる。

「重くない？」

「バーロー、んなこたねーよ。」

「…そう。」

やはり少し恥ずかしいのかいつも以上に言葉少なな灰原。そして、ここ最近では全くなかったほどの接近にどきまぎする俺。

「それじゃあ、出発じゃ！」

「…おー!!!」「」

車は近くの山のキャンプ場に向かって発進した。

後部座席では歩美達が今日の予定についてわいわい相談している。

「まずはテントを張って、その後川で釣りしようぜ！」

「そうですね。今年は負けませんよ、元太君！」

「私だつて！」

一方俺は、自分の膝から腿にかけてかかるやわらかい重みに四苦八苦ししていた。

決して重いつか、痺れるとかいう訳ではないのだが、山道はでこぼこで、その振動による刺激と鼻孔をくすぐる香りは、標準的に健康的な男子にはある意味耐えられない。

「…工藤君。」

灰原が他の皆には聞こえないような声で話しかけてくる。

「な、なんだよ。」
「…。まあ貴方も年頃なんですから、仕方ないとは思っけど、なんとか自重してくれないかしら？」
若干顔を紅くして、自分が座っている「部分」をチラ見しながら囁く灰原。

「！！！！やっぱ気づかれてた…。恥ずい…。」

「さーて到着じゃ。ほれ、みんな、早速テントを張るのじゃ。ワシは…運転が疲れたから一休み…。」

「博士、すっかりじじいだな。」

「ほっとけ！」

今日は日差しがあまり強くなり、絶好のキャンプ日和だ。

「あれ、コナン君。もう汗ばんでるよ？」

「い、いや、歩美、なんでもねーよ。」

車内での出来事ですっかり変な汗をかいてしまった俺は、テント張りをこっそり抜け出して、博士の横で一息ついた。

「新一、どうした、大丈夫か？」

「大丈夫だよ…。俺も健康ってことさ。」

「????？」

鳩が豆鉄砲食らったような顔をする博士。

少ししてテントは完成した。といっても実際には元太1人で張ったようなものだ。

「全く、歩美と灰原は休んでていいぞって言ったけどよー、なんでコナンと光彦も手伝わないんだよ。」

「わりーわりー。」

「いやー、やっぱり力仕事は元太君が最適ですよ。」

プリプリしている元太を持ち上げ、楽しいキャンプが始まったのだ。

『 8月29日 天気 晴れ。』

今日は少年探偵団の皆でキャンプに行きました。皆で並んで川で釣りをしましたが、私は1匹もつれず、残念でした。

その後バーベキューをしました。

近くのテントの人たちも、皆楽しそうです。

特に、隣にカップルでキャンプに来ていた大学生くらいのお兄さんとお姉さんがいて、とても仲が良さそうでした。

私も将来コナン君と、ああいうカップルになりたいなーと思いました。

5年B組 吉田歩美』

『8月29日水曜日 天候晴れのちやや曇り。 最高気温29度。最低気温22度。

今日は、知り合いの博士に連れられてクラスメイトの江戸川君、小嶋君、吉田さん、灰原さんと、高井山のキャンプ場に行きました。高井山は標高870mで、その気候は…（以下数行高井山の説明。省略）

今回のメンバーでキャンプに来るのは久しぶりです。最近塾や習い事などで、全員が揃うことは若干難しくなっていました。

今回のキャンプ場の利用者は…（以下数行キャンプ場の利用者や様子の説明。省略）

近くの川で釣りをしました。今回の釣りは…（以下数行釣りの方法やテクニクの説明。省略）

さて、私達のテントの傍には他にも多くの利用客がおり、隣には大学生くらいと思われる男女2人組が楽しそうにバーベキューをしていました。その2人は…（以下数行いかにそのカップルが仲良さそうかの描写。省略）

大きくなったら、私もまたこのキャンプ場に、彼女を連れてやって来たいと感じました。それがもし…。いえ、ここでは伏せておき

ます。

(以下数行就寝までの細かい描写。省略)
5年B組 出席番号22番 円谷光彦

『8月29日 晴れ

今日はコナン達とキャンプに行った。

釣りをしてすげー沢山釣った。

バーベキュー美味かった。

また来たいと思った。

元太

「おいコナン！おめーは日記書かねーのかよ。」

夜、男4人が入る大きなテントの中で元太の檄がとぶ。

「っていうか、おめーらこそ、なんでキャンプ先にまで日記帳持ってきてんだよ。書きにくいだろーが。」

確かに夏休みの宿題に日記はあるが、俺は帰ってから書くこと、探偵事務所に置いたままだ。

「駄目ですよ、コナン君。先生が『日記は毎日必ずつけましょ』って言ってたじゃないですか。」

八八…真面目だな、こいつら…」

「まあ、持って来てないものは仕方ないじゃろう。ほれ、明日も早いし、そろそろ寝なさい。」

そう言っって博士がテントの明かりを消した。

隣の女子2人のテントの明かりもまもなく消え、辺りは暗闇に包まれた。

夜中2時。

俺は物音に気づき、目が覚めた。

横で博士はぐっすり眠っており、反対隣では光彦が元太の下敷きになっっている。

(光彦圧死するんじゃないか?)

ならば物音は外だろうか。俺はこっそり、静かにテントを抜け出した。

当たりは真っ暗で、他のキャンプ客もテントや近くのロッジで眠っているようで、星明り以外はまたたくものは何もない。

しかし目が慣れてくると、少し離れた高台に誰かが居るのが見えた。俺はそちらへ歩き出す。

「灰原、どうした、こんな時間に。」

「あら、あなたも目が覚めてしまったのかしら?」

「バーロー。お前がテントから抜け出た音に気づいたんだよ。」

「あら、私のせいにする気?」

辺りに木も少なく、星や月がよく見える柔らかい草の丘の上で、灰原は1人座っていた。

俺はその傍まで歩き、立ち止まる。

「…。」

「どうしたの?」

「あ、いや…。」

星と月の淡い光に照らされた灰原の横顔はいつも以上に綺麗で、思わず見惚れてしまっていた。

「そっいえば、この間、蘭さんとお茶したわ。」

蘭とお茶?灰原が?俺は目を丸くする。

「…。信じられない?ま、そうでしょうね…。」

灰原が俺の表情を読む。

「『蘭ねーちゃんって呼んでみない?』とか言ってたわよ。面白い人ね。」

「お前、蘭みたいタイプ、苦手じゃなかったか?」

「…そうね。あんな優しくして、気配りが出来て、芯が強い人、苦手

だわ。」

ほめてるんだかなんだか微妙なことを言う。

「…。あんな良い人から引き離してしまった私を、恨んでる…。でしようね。」

少し寂しげな表情をする。

「バーロー。お前のせいじゃねーよ。それに…。」

俺と蘭は、結局幼馴染以上になれなかった。例え蘭が俺の正体をもっと早く知っていても、結果は変わらなかったような気がする。なぜなら、俺は、灰原に出会ってしまったから。

「…。いや、やっぱりお前のせいかな。」

「…。」

俺は聞こえないように呟いた。灰原もまた、聞こえなかったように無言を貫く。

しばし無言が続く。

「そういえば、あなた、今日の日記って書いた？」

灰原が突然話を変えた。

「いや、キャンプ先にまでわざわざ持ってこねーだろ。と思ってたら、元太と光彦は持ってきてたけどな…。」

「歩美ちゃんもよ。私も持ってきてなかったから、怒られちゃったわ。」

「普通持ってこねーだろ。」

「と言うか、私、一日も書いてないわよ。」

「いや、宿題なんだから、そこはちゃんとやれよ…。」

すまし顔の灰原。そういえばこいつ、普段授業は殆ど聞いてないよな…。

「もし、私が今日の日記を書くとしたら…」

『8月29日 晴れ』

今日少年探偵団の皆でキャンプに向かう車の中で、名探偵さんにセクハラされました。』

「お、おい…。」

カーツと顔が紅くなる。それを面白そうに見ている灰原。

「『彼を信用して膝の上に座ったのに、ああそれなのに、それなのに…』」

「あのな…。」

「『私のお尻に当たるのは、当たっているのは何かしら…？』」

「おま、ちよ、待てよ、んなもん小林先生に伝わるネタか？」

（つてーかこの物語的にありな表現か？）

「馬鹿ね。本当の日記じゃあるまいし。冗談よ。焦る工藤君が見たかっただけ。」

無邪気な表情で面白がる灰原。

「ま、帰りは歩美ちゃんと交代するから、せいぜい気をつけるのね。」

「あのなー！」

遠くを見る灰原。俺はどう抗議してやろうかと考える。だが、口を開いたのは灰原が先だった。

「…。駄目ね。やっぱり、歩美ちゃんを危険な目に合わせる訳にはいかないし、帰りも私があなたの膝の上に座るわ。」

クールな口ぶり。しかし、月明かりではよく分らないが、灰原の頬はちよつと赤みがかっているようだ。

「ま、あなたがどうしても歩美ちゃんが良ければ…。」

「ば、バーロー！お前が…。」

お前が良いに決まってる、と言いかけて、恥ずかしくなって止め、少し心を落ち着かせる。

「お前で良いよ。ま、お前こそ光彦の膝の上がよければ、いつでもあいつに譲るがな。あいつなら喜んで座席代わりを引き受けてくれそうだぜ？おっちゃん風に言つと…おモテになりますなー。」

なんとか茶化してごまかす。

「あら、私もあなたで…。」

灰原が少し言葉に詰まる。そして、少し深呼吸し、その台詞を訂正した。

「わたしはあなたが良いわ。」
ドキッ。

俺の心臓が早鐘のようだ。灰原はかつてないほど大人びた、大人の女びた表情をしている。

その表情と台詞が、俺に淡い期待を抱かせる。もしかして…。もしかすると…。だが、

「あなたなら、全体重かけてもちっとも申し訳なくないもの。」
と言われ、少しガクツとする。

ずっと立ち上がる灰原。そして、

「そろそろ寝ましようか。」

と言って、テントへ戻りだした。ま、いつか。俺もテントに戻ろう。

帰りの車内…

「いやー今日も楽しかったな！歩美！」

「そうだね、缶蹴りなんて久しぶりにやったよ。ね、光彦君。」

「そうですね。それにしても博士の足の遅さといったら…。弱すぎ

ですよ、博士。」

「おいおい、君ら若いもんと、ワシを一緒にするでない。のう、哀君。」

「スー…スー…。」

「おや、眠っておるのか？のう、しん…コナン君。」

「ZZZ…。」

「あー！2人とも寝てるー！」

「あ、ちよっと、コナン君、起きてください！2人の顔が近すぎますよー！」

「哀ちゃん。起きてー。ずるいよーコナン君とそんなにくっついてー。」

「なんですか！その仲良さそうぶりは！羨ましいですよ、コナン君！」

「哀ちゃん。ねえ、代わってー。」

「あ、そうだ、博士、帰りにうな重食いたい。」

「…。元太君は、オチ要員じゃのう…。」

第9話「交通ルールは守りましょう。そしてお巡りさん、私がスピード違反な

15禁要素を出してみました。(15禁か?)。

蘭お姉さんに背中を押されても、今はまだ、これが彼女の精一杯。

第10話 「なによー、じゃああなたはあれな訳？私に」「じゃあ蘭、真さん、

「…と、言う訳で、1日よろしくお願いするわ。」

普段どおりの表情で探偵事務所に入ってくる灰原。

「おう、お前1人くらいなら構わんぞ。蘭、ちゃんと面倒見てやれよ。」

「分かってるわよ。大丈夫、哀ちゃんはお父さんよりも手がからないから。」

「…父親に向かつて…。」

今日は博士が研究発表会で一日家を空けており、年頃の女の子が1人で留守番は危険、と主張した蘭が、探偵事務所に1日お泊りを灰原に提案したのだ。

灰原のことだ、俺はてっきり断ると思っていたのだが、なんと二つ返事でOKし、やってきたのだった。

「おめーどうい風吹き回した？」

「あら、いいじゃない？それとも、私が傍にいたら興奮して眠れないとか？」

「ばっ…ちげーよ！」

「安心なさい。別にあなたの横で眠るつもりは無いから。」
そりゃそうだ。さすがに蘭の部屋で寝るだろう。

しかし、最近の灰原はどうにもこついう意味ありげな言い回しをすることが多い。俺としたことが、もしかして…という淡い期待を抱いてしまいそうになる。

落ち着け落ち着け。灰原の奴は、俺をからかっているに過ぎないはず。

ここで俺がマジな発言をしたら、例のジト目で

「馬鹿ね」

とか言われるのがオチだ。

「じゃ、あとはお前らで仲良くやれよ。あと、その、ミヨーに大人びた女子1人なら大丈夫と思うが、あんまり散らかすなよ。俺は明日の昼まで麻雀だ。」

そう言つて、おつちゃんも出て行つてしまった。

「あんまり散らかすな、つて…。一番散らかすのはお父さんなのに。」

蘭がぼやく。

「そつだ！お父さんもいないことだし、園子や歩美ちゃんも呼んで、一晚ガールズトーク会でもしようか。」

灰原のほうを向いてやけに嬉しそうに話す蘭。

「おい、俺はどうするんだよ。」

「新一も横で聞いてていいんじゃない？」

「バーロー。んなことできつか。つてーか、灰原もそついうの苦手じゃねーか？」

「あら、たまには良いんじゃない？ねえ、…お姉ちゃん。」

ブーツ！つい噴出してしまふ俺。お、お、お、お姉ちゃん！？

「あら、なにかおかしい？あなただつて、普段は『蘭ねーちゃん』じゃない。」

「そりゃそつだけどなあ！」

そついや、この間キャンプに行つたときにそんなこと言つてたよーな…。

「園子と和葉ちゃんが来るつてさー。」

いつの間に！

「あら、歩美ちゃんは？」

「お友達と出かけたんだつてさ。」

1時間ほどして、園子と和葉が揃つて探偵事務所にやつてきた。

「蘭ちゃん。久しぶりー。元気にしとつた？」

「偶然つてあるものねー。たまたま東京に来てた和葉ちゃんにたま

たま会ってお茶してたら、たまたま蘭から誘いの電話があったんだもの。」

「久しぶりに3人でお泊りつてのも、ええね。」

「あ、今日は3人じゃないわよ。」

「あー。眼鏡のガキンチョね。でも、ガールズトークには入ってこないって感じじゃない？」

「いや、コナン君じゃなくて、哀ちゃんよ。」

「…。よろしく。」

園子、和葉とは何度も面識があるはずの灰原だが、あらたまって対面するとやはり照れているようだ。しかし、若干蘭に隠れて、顔を紅くして話している様子は普段の灰原からは想像できないほど可愛らしい仕草だ。俺も思わず見惚れてしまう。

「な…この子…。」

「へー。なんや、可愛いやーん。」

和葉が灰原をぎゅっと抱きしめる。照れてさらに顔を紅くする灰原。

「…で、和葉の奴、今日は帰らんっちゅーとる訳やな。」

「ああ。すまねーな、服部。なんかおめーと約束があったんだろ？自分で断るのは言い出しにくいから、俺に電話して欲しいって。」

「かまへん。どーせ大した用も無いのに、アイツが勝手に約束して勝手に別の用を作ってしまっただけや。振り回される方の気持ちもちったー考えろっちゅー話やけどな。」

「でも、うまく行ってるみてーだな。」

「？なんのこっちゃ。」

「…！こいつ、いまだに無自覚なのか！

「ほんなら、またお前も遊びに来いよ。大学の近くのおいしい焼き屋や、お好み焼き屋、紹介したるからな。」

「ああ。じゃあまたな。」

服部としばらく電話をした後、俺は自分の部屋をうろろし始めた。

蘭の部屋では女4人集まって、わいわいきゃあきゃあ盛り上がった
いる。

その輪に入りたいとは思わない。が、どんな話をしているのか、興
味はある。

ああー！なんかやきもきするー！

「…と、いう訳で、この間、真さんをパパに紹介したらすっごく気
に入ってもらえたのよ。」

「そういえば、この前の国際試合で優勝したとき、堂々と『この勝
利を私の大切な人、鈴木園子さんに捧げます』って言ってたよね。」

「わあ、愛されてるやん。えーなーえーなー。」

「へえ…。物好きな人も居るわね…。」

「ちよつとー。どーゆー意味よー。」

哀ちゃんの軽口に、不平を言いながらも顔が笑っている園子。内心
遠慮して哀ちゃんは話に入ってこないかとも思ったけど、こうして
いると普通の女の子。

「それにしても、哀ちゃんほんまに小学生？なんか同じくらいの歳
の子と話してるみたいや。」

「そうね。ま、この子とコナン君は精神年齢がやったら高いからね
ー。」

精神年齢じゃなく、実年齢が私達とそう大差ないんだけど。

「せや、コナン君ゆうたら、平次とめっちゃ仲良いし。平次は頭の
回転が早い分、同級生でもなかなか話についてけへんところがあって、
友達が多いわりに、親友と呼べるほどの人はずっとおらんかったん
や。コナン君と、工藤君と出会うまでは。」

「それは新一にも言えるかも。アイツにも親友なんて服部君くらい
しかないわね。」

そう言っつて私は哀ちゃんの方を向く。

「…相棒ならいるけどね。」

私の言葉に顔を若干赤くし、ジト目でこっちをみる哀ちゃん。可愛い。

「そついやあの推理オタク、今どうしてるのよ。蘭と別れたのは知ってるけど、その時だって私は会ってないし。」

「平次とはよく電話しとるよ。たまに『おう工藤』とかって言うてるから。」

そこまで話すと、和葉ちゃんが急に険しい顔つきになって私を覗き込む。

「せや、蘭ちゃん。私未だに納得でけへん。なんで工藤君と別れてしもうたん？」

「あ、いや、だからそれは…。」

「いーのいーの。アヤツに蘭はもつたいなかったのよ。まあ…。」
園子が意地悪そうな表情をしてこっちを見る。

「今の彼にも、蘭はもつたいたいと思っけどね。」

「今の彼…？まさか蘭ちゃん！他に好きな人が出来て…。」

「ち、違うよ。彼と付き合いだしたのは、新一と別れて…。っていうか！そもそも私と新一はただの幼馴染！もともと付き合いってなんかいません！」

「でも…好きだったんでしょ…？新一さんのこと。」
哀ちゃんまで私の顔を覗き込んでいる。

「…好き…だったわよ。えーそうよ！私は新一が好きだった！」

私は半ば開き直った。園子は可笑しそうな、和葉ちゃんは不思議そうな、哀ちゃんは不安そうな顔で私を見ている。

「でもね、私は新一に恋をしていただけなの。新一以外の男の人を、ちゃんと見たことがなかったの。で、周りの男子も『毛利蘭は工藤新一の彼女』みたいな目で私を見るから、お互いに恋愛対象にはならなかったのね。でも、新一が傍にいらなくなって、大学に入って色んな男の人と話をして…るうちに、いろいろ思うところがあったね。それで、新一とは別れたの。」

「せやったら、工藤君がずっと傍におったら、今頃は彼とゴールイ

ンやったかもしれない？」

「それも…ないかも。」

そう言つて、私は哀ちゃんを見つめた。他の誰でなく…哀ちゃんを。「私は新一に恋してた。でも、きつと愛には変わらなかつた。私の恋は、新一に対する憧れに近いものだったと、今では思うの。」

私は。

…

蘭さんは。

蘭さんは私の顔をみているのか、もっと違う何かを見ているのかわからない表情をしている。

その表情は、私に気をつかっているのではなく、本心を語っているのだと伝えているようだ。

私もまた、自問自答を始める。…私は彼を愛しているの？それとも、彼に恋しているの？

「蘭は難しく考えすぎよ。」

園子さんが呆れたように突っ込みをいれる。

「高校までは好きだったけど、大学行ったらそうでもなくなつた。

でいいのよ。そーゆーもんよ。」

単純明快。でも彼女の思考にも一理ある。人が人を好きになつたり、嫌いになつたり、そこに明確な理由なんて要らないのかもしれない。

「うーん…。そう言われると、身も蓋もないけど、実際そうかもしれへんね。」

和葉さんも納得したようだ。

「…お姉ちゃん。」

私は蘭さんを見つめる。…ごめんね？…いや、違うわね。

「ありがとう。」

蘭さんは笑顔になる。私も…きつと笑顔になつている。

「な…この子…。」

「お姉ちゃんやってー！むっちゃん可愛いやーん！」

深夜2時半。

何を話しているのか気になっていたことと、時折聞こえる女性特有の笑い声のおかげで、全く眠れずにいた俺が羊を10264匹まで数えた頃。

8735匹目くらいですでに静かにはなっていたのだが、結局眠れずにいた俺が、明日は休みだし、もういいから夜通し起きてようかと思いついて、電気をつけてボーっとしていた頃。

静かな物音がして、部屋に誰かが入ってきた。

「よう、灰原。」

「あら、灯りがついてるからどうしたのかと思ったら…。小学生はもうとつくに寝る時間よ。」

「うるせー。おめーだって起きてるじゃねーか。」

「私は夜行性なもの。」

そう言って、灰原は俺の隣に座った。

若い男女が、夜中に、部屋の中で2人きり。俺の心臓が早鐘のように…。

「今日じっくり話したけど、園子さんって、やっぱりおもしろいわね。とても財閥のお嬢様には見えないわ。」

「ああ。蘭のおかげ…。だらうな。あれでもガキの頃は、どっか常識離れたところがあったぜ。」

「そういえば、あなたと彼女も、幼馴染だったわね。」

「幼馴染といえ…。和葉の奴、服部についてなんか言ってたか？」

「ええ。最近はかなり直接的なアピールをしているのに、全然気づいてくれないって嘆いてたわ。」

「やっぱり…。アイツ、自分の色恋沙汰には鈍すぎるぜ。」

「そうね。私も彼には何度か会ってるけど、そういう方面はてんで駄目みたいね。」

…ここつて、笑うところかしら。
哀ちゃんがこつそり部屋を抜け出して（トイレだった）、しばらく戻ってこないで様子を見にきたら、新一の部屋の灯りがついていて。

若い男女が、夜中に、部屋の中で2人きりなんて！

これは見逃せな…じゃなくて、『コナン君の保護者』として、じっくり見守ってあげなくちゃ。

それにしても…。2人とも服部君のこと言えないくらい激ニブじゃない…。

「…ねえ、工藤君。あなた…。」

哀ちゃんがおずおずと口を開く。

「いまでも、蘭さんのこと、好き？」

哀ちゃんが核心に触れた！っていうか、私も若干気になるわ。でも、ここで普通に『好き』なんて言えないわよね？新一。

「ん？ああ、好きか嫌いか、なら、好きだな。」

アイツ…。好きな女の子に対して、「昔の女を今も好き」なんて…。

「じゃあ、もし組織と出会わなかったら、蘭さんと…。」

「いや、それはわかんねーな。」

「え…？」

「そうなつてたらそうなつたで、新しい出会いや別れを経験するだろ？人と人の縁なんて、どうなるかわかったもんじゃねーよ。」

「でも、そんなこと言ったら…。」

「…あの頃の俺も、多分蘭も、自分達しか見えてなかったと思うんだ。狭い世界で、狭い視野しかなかったと。でも、いろんな人と出会えば、視野も広くなる。そんな大事な『出会い』を、それはそれで経験していただろうしな。」

…私とおんなじことを言う…。

「あら、じゃあ、今のあなたは？」

ん？哀ちゃん？

「今の人生で…大事な『出会い』はあったのかしら？」

おお！哀ちゃんが一步攻めに！どう答えるの新一！そして、今の私、
なんだか園子みたいよ！

「ああ、FBIにも知り合いが出来たし、あいつらの前ではぜって
一口にしねーけど、少年探偵団との出会いは俺にとってかけがえの
ないもんだと思ってるよ。それに…。」

それに？それに？いけ、言っちゃえ新一！

「…おめーとの出会いもな。」

ギター！！って、私のテンションがおかしなことに…。
顔を真っ赤にしている新一。哀ちゃんも真っ赤だ。

「…馬鹿ね。私となんか、出会わないほうが幸せだったんじゃない
？」

「…バーロー。んなわけねーだろ。むしろ…。」

そこで新一は黙ってしまった。しばらく無言が続く。

「じゃ、じゃあ、私はもう寝るわ。」

そういつて哀ちゃんが立ち上がった。

「…ねえ、明日、博士が帰ってくるまえに、ご飯でも用意して待っ
ててあげようと思うんだけど…。」

哀ちゃんが新一のほうに向きなます。

「…あなたも、一緒にどう？」

「え…？」

「いや、その、博士よ？せっかく研究発表会から帰ってきて、どん
な発表をしたか、評価をされたか、話したいことはいっぱいあると
思うの。私みたいな反応が薄いのが1人…より、2人で聞いてあげ
た方が博士も喜ぶんじゃないかな…って。」

「あ、ああ、うん、そうだな。わかった。」

「じゃ、じゃあ、おやすみ。」

そう言つと、哀ちゃんが部屋をとびだした。顔を真っ赤にしたまま、
どうやら私にも気づかなかつたようだ。

これは一步前進…でいいのかしら。

なんとも微笑ましい二人を、私はずっと見守つててあげようと心に

決めたのだった。

次の日の昼前。

「じゃあ、蘭。俺は博士の家で食べてくるから、夜はいらねーよ。」

「あーら、偉そうに。ま、いいわ。ちゃんと哀ちゃんを家まで送ってあげるのよ。」

「こんな真昼間、あいつ一人でも大丈夫だけどな。」

「そういえば、昼ごはんはどうするの?」

「その辺でできとーに食うよ。」

彼ははそう蘭さんに告げ、事務所をでてきた。

一歩先に出ていた私に、じゃあ行こうかという表情をする彼。

「『蘭ねーちゃん』との話は終わり?」

「話ってなあ…。今日は博士んちで飯食うってことだけだろ。おめ

ーこそ『お姉ちゃん』に挨拶したのか?」

「もちろんよ。」

そうして私たちは歩き出した。

「しかし暑いな…。」

「残暑ね…。もう『夏』休みが終わってるなんて、信じられないくらい…。」

「公園のほうをまわって行くか…。あっちならまだ木陰もあって、マシだろ?」

「そうね…。」

しかし、公園の入り口にはパトカーが数台止まっていた。目を輝かせ始める探偵さん。

「あらあら。私のライバルは、歩美ちゃんでも、蘭さんでもなく、『事件』なのかしら?」

第10話 「なによー、じゃああなたはあれな訳？私に」「じゃあ蘭、真さん、
で、第7話に続きます。

ところで筆者は関西圏の人間ではないので、平次や和葉の台詞は正直できとーです。おかしいところも多いと思いますが、どうか適当に流してやってくださいな。

第11話 「光彦に『歩美と灰原、どっちが好き?』って聞いたら相当悩みそ

「いちよう…か。」

博士が健康のため、夕方から2時間の散歩を始めたのは1ヶ月前。

私は三日坊主で終わると思っていたのだけれど、やってみると気持ちが良いとかで、今日まで続いている。

しまいには休みの日に家でごろごろしている私を連れ出す始末。

ま、親孝行(?)とあって、一緒に歩いているけどな。

「親孝行、したいときには親は無し…。私の場合、本当の親はいないけど、思い出の少ない両親よりも、博士の方がお父さんみたいなもの。」

「お、おお…。嬉しい事言ってくれるのお。」

そうして、秋深くいちようが舞い落ちる公園の並木道にさしかかった時。

「いちようを見ると、あの人を思い出すのお。」

博士は小学生時代の初恋の人を思い出しているようだ。

初恋。

私にとってそれはいつだったかしら。

そう思いながら歩いていた私と博士は、突如重大な現場に遭遇したの…。

「コナン君。好きです。付き合ってください!」

秋が深まった休日、午後4時に公園に来てくれと歩美に言われ、このこやってきた俺に衝撃が走る。

頬を赤くし、若干興奮した様子の歩美は、目を閉じ、深呼吸をしてからそう言った。

「え…。」

絶句する俺。歩美が俺に好意を抱いていることは気づいてい

た。

しかし、それは小学生の淡い思いだと思っていた。いや、思い込んでいた。

心のどこかで、こいつらはまだガキだから…と思っていた。少年探偵団がガキではないことは、俺が一番良く知っていたはずなのに。

勇気を振り絞ったのだろう、歩美は微動だにしない。そして俺も、すっかりかたまってしまったまま。

「あ、哀君。あれは…。」

「しっ！博士、出て行っちゃ駄目よ！」

思いも掛けない場面に出くわしてしまった。

私と博士は慌てて二人から見えない位置に身を隠す。

歩美ちゃんの表情。本気。それを見て、私の心も大きく揺れていた。私が踏み出せなかった、勇気が足りなかった領域に、あの幼い歩美ちゃんが…。

そう、幼い。

今はつきりと感じた。私は彼女をそう思っていた。

彼女が工藤君のことを好きなのは解っていたけど、それは小学生特有の淡い憧れに過ぎないと、思い込んでいた。

はつきりと口に出して告白するなんて。

何故だろう、涙がこぼれた。心配そうに見ている博士の手前、慌ててぬぐったけれど。

きつと、これは、勇気の出なかった自分が途方もなく悔しいから。彼女を幼いと思っていて自分が情けないから。

それでも私は一步も踏み出せないまま。

この場面の登場人物になることを避けて、観客でいるままだった。

「う、ごめん…突然こんなこと…。でも、今言わなきゃって思っ
て…」

歩美が少し落ち着いた声で話すのを、俺はただ呆然と聞いていた。

「返事は、また今度でいいから…。それじゃ！」

そういつて立ち去る歩美に、俺は一声もかけることができなかつた。
どうしたらいいんだ…。

悩んでいると、背後に気配を感じる。慌てて振り向くと、そこには
にやにやした博士と、なんともいえない表情の灰原が立っていた。

「もてるわね、名探偵さん？」

「バーロー…。まあ、意外では、あつたけど…。」

「新一、どうするんじゃない？歩美君はあれで本気じゃぞ。」

「ああ…。」

俺のあいまいな返事に、灰原が小ばかにしたような口調で言った。

「ま、せつかくだから、付き合ってみたら？あなたも歩美ちゃんのこと、嫌いじゃないでしょ？」

「…付き合ってみたら？」

「ええ。そうしないと歩美ちゃん悲しむわよ。」

「お前、本気で言ってるのか？」

ハツとする私。

彼の口調には怒りの感情が見え隠れしている。

「歩美は本気だったんだぜ。それに対して…付き合ってあげたら？」

「あ…それは…。」

「見損なつたぜ、灰原。お前はもうちょっと気遣いが出来る奴だと思
ってた。」

本気の表情。私は軽く口に出した言葉を後悔し始めていた。しかし、
可愛くない私の口から出た言葉は。

「何よ。歩美ちゃんを泣かせる気？どうせ蘭さんとも別れたんだし、
いいんじゃないの？」

「蘭は関係ないだろ。俺は、そんな態度は、本気でぶつかってきた歩美に対する侮辱じゃねーかって言ってるんだ。」

「じゃあ何？今付き合ってる奴もいないし、嫌いじゃないけど、でも付き合えないって言う気？」

売り言葉に買い言葉。私達の口論は激しくなっていく。

「ったく！おめーには関係ないだろ！じゃあな！」

そして、彼はついに怒鳴り声で私を一喝し、踵を返してしまった。

あとには私と博士だけが残る。

「…のお哀くん。君の気持ちはわかるが、今のはちと言い方が悪かったのでは…。」

「…わかってる。わかってるわよ…。」

私はまた涙を流していた。そして、彼に怒鳴られてしまった、きつと嫌われてしまった、そんな悲しさからか、博士の前だというのにそれを拭うことすら忘れて、ただ立ちすくんでいた…。

その夜、私は部屋にこもって一人で悩んでいた。

博士が心配そうに時々ドアの前に立っているのには気づいていたが、あえて気づかないフリをして、一歩も部屋から出ていなかった。

どうしてあんなことを言ってしまったのだろう。

「付き合ってみたら？」

…今考えたら、私、最低だわ。

歩美ちゃんの本気に、適当に合わせてあげたら？そう言っていた。

ううん、あれは、きつと、嫉妬。

歩美ちゃんの勇気や素直さ、そして何より可愛らしさに対する、醜い私の嫉妬。

でも、どうしたらいいの？

私は、彼に、それとも彼女に、いったいどうしたらいいの？
わからない、ただ涙だけが止まらない。

こんなに苦しい感情は、いままで経験したことがなかった。

次の日。

俺はいつも通り登校した。歩美にきちんと返事をするつもりで。

その日、灰原は学校を休んでいた。博士は風邪だと言っていたが、俺には信じることは出来なかった。

気になっていたのは昨日の灰原の態度。

たしかに人を小ばかにしたようなところ、クールなところ、感情の機微に疎いところはあると思う。

だが、歩美や友達の思いを蔑ろにするようなことは言わないやつだ。じゃあなんであんなことを…。

(くそっ！歩美に告白されたってーのに、ずっと別の女のことを考えてるなんて、俺も相当失礼じゃねーか？)

「どうしました？コナン君。」

険しい表情をしている俺を心配そうに見つめる光彦。

「いや…なんでもねーよ。」

そういつて、俺はひとまず考えるのを止めた。

放課後。

校舎の裏で、俺は歩美に断りの返事をした。

「…。わりーな、歩美。俺には好きなやつがいるんだ…。」

「…。」

歩美は今にも泣き出しそうな表情をしていた。2分、いや3分ほどだろう。俺も歩美も微動だにしなかったが…。

「わかったよ、コナン君。ごめんね、悩ませちゃったみたいで。」
どうやら朝の俺の様子を歩美も心配していたようだ。

歩美の告白のことで深く悩んでいた、というよりは…。と思ったが、あえて口には出さなかった。

「ねえ、コナン君が好きな人って、やっぱり蘭お姉さん？」

いつもの調子。いや、いつも通りを装って、歩美が明るく問いかける。

「いや…。」

俺は口ごもった。

「そいつは…。クールで、普段は何考えてつかわかんねーんだけど…。何でも一人で抱えちまって、弱味を人にみせねー…。でも、だからこそ、守ってやりてーって思うんだ…。」

小学生相手に何言ってるんだ。一昨日までの俺ならそう思っていただろう。

しかし、俺は歩美をそんな風には思えなかった。

だから、真面目に、そんなことを言えたんだ。

「そっか、哀ちゃんか。」

！！

一発ではれた…。

「哀ちゃんなら…しかたないな。」

歩美が遠い目をして言う。

「私ね、蘭お姉さんに憧れてるの。それに、蘭お姉さんみたいになりたいと思ってる。なれるように努力してるつもり。だから、コナン君が蘭お姉さんのことが好きなんだとしたら、まだ私にも…って自信があつたの。」

確かに。歩美は蘭に似ているところが多い。蘭の子供の頃に。

「でも、灰原さんは私とは全然違う。なんていうのかな…纏っている雰囲気は別種のものだと思うの。」

確かに。色で言うなら赤と青ってくらいに違うと思う。

「そっか…灰原さんか…。」

寂しそうな、でもどこか嬉しそうな、相反した感情を同時に持ちあわしているような声で、歩美は呟いた。

そのまま、俺たちは、また黙り込んでしまった。

枯葉が校庭を舞い、低学年の子供達がはしゃぐ声が遠くに聞こえる。

「灰原さん、風邪、大丈夫ですか？」

「ええ…。ほとんどなんでもないので。でも博士が大事をとって休め
つて…。」

午後。円谷君がお見舞いに来てくれた。

自分から休むといったわけじゃないけど、博士が既に休みの電話を
小林先生にしまったので、それに甘えることにした手前、
一応マスクなんかしている私。別に体調が悪いわけではないのだけ
れど。

と、いうわけで、お見舞いに来られたりすると、胸が痛む。

「…、で、円谷君1人？珍しいわね。」

「ええ。コナン君と歩美ちゃんは大事な話があるとかで、2人で先
に帰っちゃいました。元太君も他の友達と。」

大事な話。彼はおそらく昨日の告白の返事をするつもり。

なんて返事をするのかしら…？

ピンポン。

しばらくすると、また誰か来た。

「誰でしょう…？あ、灰原さんは寝てください。」

円谷君がそう言って立ち上がる。

やってきたのは歩美ちゃんだった。

びくつとして、表情がこわばる私。いったいどんな顔をして彼女に
会えば良いか悩んでいたから。

「哀ちゃん、大丈夫？」

「え、ええ…。」

いつも通りの彼女。いつも通りの会話。彼にどんな返事を貰ったか、
その表情からはまったく読み取れない。

「あ、すいません。僕、塾の時間なので、これで失礼します。」
そういつて円谷君が帰ってしまった。

どうしよう。2人きりになると、ますます私は緊張してしまった。

「ねえ、哀ちゃん。私、昨日コナン君に告白したの。」

…！

「へえ、告白。で？彼はなんだって？」

「うん、ごめんなさい、だって。」

「あら。歩美ちゃんを振っちゃうなんて、明日学校であつたらとっちめてあげなくちゃ。」

…うん。いつも通りに振舞えた。

内心では、彼と彼女が付き合うことにならなくて、喜んでいくせに。

…最低ね。

「…。哀ちゃん。哀ちゃんも、コナン君が好きなんだよね？」

！…！

あれ？ばれてる…。

「何言ってるの。彼はそういう対象にはならないって、前にも言わなかった？」

「それって何年前の話？もう、哀ちゃん、素直にならなきゃ。」

「え、えーと…。」

「でもね。」

歩美ちゃんが小悪魔のような表情を浮かべる。

「コナン君、好きな人がいるんだってさ。」

「え…？」

「誰だか聞かなかつたけど、きっと蘭お姉さんだよね。」

「…。」

「蘭お姉さんは優しいし、強いし、綺麗だし、私も絶対かなわないもん。そう思ったら、仕方ないかなあって。」

…そうね。私には色々言ってくれたけど、きっとそれは彼の優しさ。本当は、本当は蘭さんのこと…。

「そんなことないわ。歩美ちゃんも優しいし、それに、勇気があるわ。」

「じゃあ哀ちゃん。」

歩美ちゃんが私の両手を握り、おでこを私のおでこにあてる。

「私の勇気、分けてあげる。」

「え…？」

「勇気が出たら、今すぐコナン君に告白しちゃいなさい！」

「で、でも、私…。」

「いいの？いいの？このままじゃ、何もしないまま、いつかコナン君は蘭お姉さんに…。」

何もしないまま。

その言葉が深く突き刺さった。

何もしないままでいいの？

私は、勇気を出せないの？

「歩美ちゃん…。」

「さ、行ってらっしゃい。」

言われるまま、私は一步踏み出した。

言われるまま？いいえ、違うわ。

私はもう一步踏み出した。

私も…私だって、ずっと前から彼のことが、工藤君のことが好きだった。

次の一步は歩幅が大きくなっていた。

先を越されたから、背中を押されたから、このまま彼を失うのが怖いから。

それはきつかけに過ぎない。

私は、私の、私自身の思いを、彼に伝える…！

哀ちゃんは走って行ってしまった。

「おや、哀君は…？」

博士が部屋に入ってくる。

「大丈夫。コナン君のところだよ。」

「お、おお、そうか。」

「じゃあ、私も帰るね。」

そう言つて、私も博士の家を出た。夕焼けが綺麗な空を見る。不思議と涙はこぼれてこなかった。

「…これで、よかつたんですか？歩美ちゃん。」

路地から光彦君が出てきた。塾に行くつて言うのは嘘だったみたい。

「…うん。」

「そうですか。」

「だって、2人には幸せになつてもらわなきゃ、上手く行つてもらわなきゃ、悲しいもん。」

あれ、目頭が熱い。

「じゃなきゃ、私、わたし…。」

なにかが吹っ切れたような感じがして、気がつくくと涙が止まらなくなつていた。

私は光彦君の胸にすがり、空も割れよとばかりに、大声で泣いた。

光彦君は、何も言わず、私が泣き止むまで、ずっとそこに居てくれた…。

第11話 「光彦に『歩美と灰原、どっちが好き?』って聞いたら相当悩みそ

話の展開が突飛で脈絡もないのは私の文章力不足です。平にご容赦を。

先日最新映画も見てきました！映画は毎度毎度コ哀要素が通常アニメより強いと思いますが、今回はコ哀好きとしてまさに最高！見てよかった！

黄昏時。

そんな言葉がピッタリ当てはまるような少し暗い夕焼け。

俺はまだ校庭でボーっとしていた。

大事な友達を一人、傷つけてしまった。

しかし、思いのほか罪悪感が湧いてこない。むしろ、自分をほめてやりたい。

自分の感情を素直に受け入れ、他人に打ち明けることが出来たことを。

他人に、言葉に出したのは初めてだった。

そして、言葉に出すことで、ますます自分の気持ちに確信を持つ。

俺は灰原が好きだ。だけど。

「はあ…。昨日…あんなこと言っちゃったんだよな…。」

そう、俺は昨日、灰原と喧嘩していた。

他愛無いといえばそれまでの口喧嘩。しかし、俺の口調はかなりきつかった。

絶対嫌われた。

「はあ…。」

自分が間違っていたとは思わない。

しかし、それはあくまで一個人として。

一男としては間違っていたのかもしれない。

「はあ…。」

さっきから、でるのは溜め息ばかり。

落ち込んでいても仕方ない。暗くなる前に帰ろう。

そう思っただけ歩き出そうとし、顔をあげたとき、俺の前には。

俺の前に、息を切らして、頬を赤く染めた灰原が立っていた。

「よ、よう、灰原。えーと……。風邪はもういいのかよ。」

「……わかってる……クセに……。」

息も絶え絶え、私は答えた。

駄目ね、運動不足。

博士の家からここまで走っただけで、こんなにも息が上がるなんて、情けないにも程がある。

いえ、それだけではないわね。

興奮と緊張で胸がドキドキする、そのせい。

「昨日は……ごめんなさい……。」

「お、おう。」

「確かに私、歩美ちゃんの思いを軽んじた発言……してたわね。」

「……わかつたんなら、いいよ。俺じゃなくて歩美に……ま、誤っても仕方ねーけどな。」

「ねえ工藤君。」

「なんだよ。」

「私が、なんであんな発言したか、わかる？」

「あ？」

「私の真意、名探偵ならお見通しなんじゃない？」

「……いや、その……。」

わざとクールぶった発言。

自分自身を落ち着かせようとする最後の手段。

もう一度、深く、息を吸って。

栗色の髪が夕暮れになびく。

小学生にしては大人びた雰囲気その少女は、もう一度深く呼吸をし、落ち着きを取り戻そうとした。

眼鏡の少年は微動だにしない。

ただ、少女のその所作を黙って眺めている。

いや、眺めているというよりは、見惚れているようだ。

挑発的な発言をする彼女に一瞬むっとした表情を浮かべた彼女だったが、すぐに何かに気づいたような顔になり、そのまま頬を赤く染めた。

夕日のためか、目の前の少女はそれに気づかなかったようだが。

そして少女は彼の瞳を真っ直ぐにみつめ、言葉を紡ぐ。

「工藤君……。いえ、江戸川……コナン君。私は、あなたが、好きです。

」

見る見るうちに顔が赤くなる少女。やりきった満足感と、言ってしまった不安で、いまにも泣き出しそうな顔をする。

一方、少年はその言葉に完全に固まってしまう。

普段は何事にもすぐ反応し、高速回転する彼の脳細胞も、この時は完全に停止してしまったようだ。

しかし、瞳だけはまっすぐ彼女を捉えている。

彼女の勇気に真摯に向き合うために、そして自分の気持ちと素直に向き合うために、彼の脳細胞は動き始める。

数秒の無言があり、彼は口を開いた。

「……バーロー。俺より先に言ってんじゃねーよ。」

少女は一瞬、戸惑ったような表情を浮かべる。

彼の言葉の真意を受け止めようと、必死になっている。

そして、彼女がそれを理解し、笑顔を浮かべそうになるのとはほぼ同時に、少年は彼女を抱き寄せた。

驚き、ますます顔を赤くする彼女。

しかし、それもほんの短い間。

すぐに和らいだ顔になり、目を閉じ、彼女自身もまた彼に腕をまわす。

「後出しみてーでカツコつかねーじゃねーか…。」

そっぴいなながらも、彼もまた緊張をほぐすように彼女を抱く腕に優しく力をこめる。

それに委ねるように、彼女もまた彼をきつく、そして優しく抱きしめる。

「好きだ。灰原。」

沈みかけの夕日は物悲しい光を放ち、抱き合う二人をセピア色に染める。

そして遠目ではその様子が見えづらくなったころ、2人の唇が重なり合った。

…。

日は沈み、校庭や通学路を照らす街灯が点きはじめる。

私と工藤君…、いえ、江戸川君は、手をつないで、その通学路を博士の家に向かって歩いていった。

「なあ、灰原、本当に歩美がそんなことを言ったのか？」

「ええ。貴方が好きなのは蘭さんだって。」

「おかしいな…。歩美には『俺が好きなのは灰原だ』って言ったのに…。」

「あら、私本人に言う前に、歩美ちゃんには言ったのね。」

「ば、バーロー。直接言ったわけじゃねーよ。ただ、その、俺の好きなやつはどーのこーのって言ったら歩美が見抜いたんだよ。」

「私としては、そのどーのこーのも気になるけど…。」

歩美ちゃん、きつと私を焚きつけるために嘘までついたのね。

本当に、親友ね。それこそ、私にとっては初めてのの、かけがえのな

い、親友。

「そういえば、昔貴方に『吉田さんを泣かせたら許さない』って言ったことがあったわね。」

「あのなー。いつの話だよ。それに泣かせたとしたら、俺とお前もだろ。」

「ま、彼女は強かったわよ。まさか貴方に振られてすぐに私を応援しに来てくれるなんて。」

「だな…。小学生なんだよな、アイツ。」

「私達の知らないところで、泣いてるかもしれないけどね。」

「…。なあ、俺達、ひでー大人だよな。」

「小学生の純真を弄んだ名探偵さんは、ひでー大人、なんじゃない？」

「だれが弄んだんだよ。誰が。」

「…。貴方の幼馴染が言ってたわよ。人を好きになつたり、嫌いになつたりするのに理由はないって。だから、私が貴方を好きになつたのも、貴方が私を好きだと言ってくれたのも、そこにひどいとか、冷たいとか、そういうものは介入しないのよ。きつとね。」

「幼馴染？蘭か？」

「いーえ。もつとうるさい方の幼馴染よ。」

いつもと同じような会話。同じような雰囲気。

でも、それでもなんだか幸せな感じがする。表情が自然と和らぐ。そう、これが、幸せ。あらためて実感する。

ゆっくり歩いてきたせいとか、もう7時を過ぎていた。

博士の家の前。俺は灰原を送り届け、家に戻ろうとする。

「あら、せっかく両思いになれたのに、貴方はまた彼女の元に戻るのね…。」

「バーロー！家に帰るんだよ！」

「…冗談よ。むきになって。可愛いわね。」

ぼっ！可愛いなんて言われ、おもいつきり顔が赤くなる俺。
そんな俺を見てクスクス笑う灰原。

そして、急に頬を染め、俺の方を真っ直ぐ見て、目を閉じる。

…。俺もまた、赤くなつたまま、顔を近づける。

…！

「じゃあ、また明日ね。」

「一日で風邪が治つたみてーだな。」

「馬鹿ね。…おやすみ。」

灰原が家に入るまで見つめていた俺も、家に帰ろうと歩き出す。

明日、学校で、どんな顔してりや良いんだろう？

灰原に、歩美に、光彦に。

元太は…まあ、なんにも気づかないだろうからどうでもいいか。

そして探偵事務所の前について気づく。それ以前に、蘭にどんな顔して会えばいい？

おっちゃんは…まあ、なんにも気づかないだろうからどうでもいいが。

「ただいまー。」

意を決して家に入る俺。

「おかえり、新一。遅かつたね。なにかあつた？」

「いや、なんにもねーよ。…おっちゃんは？」

「仕事だつて。なんでも帝丹小学校の近くで置き引き事件が多発していて、町内会長さんに依頼されたのよ。」

…小学校の近く？なにか引つかかる俺。

「今帰つたぞー！蘭、飯だ飯！腹減つたー。」

そこにおっちゃんも帰ってきた。

「お父さん、事件は？」

「おう、この名探偵の見事な推理で犯人を逮捕したぞ。」

…最近のおっちゃんは以前に比べると探偵としての能力がアップしたようだ。

昔は眠らされていたので推理なんかほとんど聞いていなかったが、

俺が前に出て事件を解決するようになってからは俺の推理をしょっちゅう聞いていたからな。学習したんだろう。

と、失礼極まりないことを考えていた俺を、おっちゃんもまたニヤニヤしながら見つめている。

「いやーしかし、コナン君、なかなか大人ですなー。」

！！！！

小学校の近く、というのでなにか引っかけかかっていたが、どこかの場面を見られていたのか！

「コナン君がどうしたの？」

「イヤーさつきちよつと衝撃的な場面を目撃してな。」

さつき…？さつきっていつだ！どの場面を目撃した！歩美と…？それとも…？

「さつきって、何時くらい？」

「そうだな、暗くなる少し前くらいだ。日が沈むちよつと前だったから…。」

その場面かー！！！！！！

慌てふためく俺。そして見たシーンを一部始終話し出すおっちゃん。顔がほころぶ蘭。

今日は眠れそうにない…。

第12話 「高木」そういえば、最近毛利さんの、はにゃ、とか、ふにゃ、っ

はい、真面目なシーンは上手く描けません。(真面目なシーンも…
か。)

まあ一区切りついたのでほっとしています。

これで終わりではなく、だらだらとばかばかしい話を続けて行く
かと思っております。

第13話 「小さくなったりしたけれど、僕は元気です。」 「がんばれ工藤……」

「よっしゃ、少年探偵団のみんな、準備はええか？」

「「「おー!!!」」」

「ほんなら、大阪見物の開始や！まずは通天閣からやな。」

今俺は少年探偵団一行と大阪に来ている。

服部が少年探偵団を大阪見物に招待したいと提案し、博士が車を出してくれたためだ。

「すまんのお服部君。子供達の世話までしてもらって。」

「ええつて。俺もこいつらに大阪のええところぎよーさん知ってもらいたいしな。」

「ありがとう、平次お兄さん。」

「じゃあさ、大阪のおいしいいうな重屋さん教えてくれよ。」

「あほう、大阪っちゅーたらお好み焼きやたこ焼きやろ。」

「まったく元太君は……。」

元太、光彦、歩美が服部と博士につれられてわいわいやっているその少し後ろで、俺と灰原はもう一人の案内人と一緒に歩いていた。

「なんや、今日は平次のそばにいかへんの？コナン君。」
和葉だ。

「名探偵さんは、可愛い和葉お姉さんと一緒に居たいんですつて。」

「ば、バーロー。」

からかう灰原。赤くなる俺。おもしろそうにそれをみている和葉。

「なーんや。蘭ちゃんに聞いてた通り、ラブラブやね、自分ら。」

「え、あ、いや、その、つていうかなんてこと言っつてんだ蘭！……ねーちゃん。」

「照れんでもええつて。あー、羨ましいなー。私も早くええ人見つけたいわー。」

「あら、色黒の探偵さんは？」

「平次？…あんなやつ、どーでもえーねん!!!」

…どうやら、今日の出掛けにちょっと喧嘩したらしい。

「ストーカー？」

「せや。」

大阪見学に行く前日、俺は服部から電話をもらった。

「和葉のやつ、誰かからストーキングされてるらしいんや。」

「ほー。もてるんだな。」

「ほんま、あんなじゃじゃ馬のどこがええんや…。ま、それはともかく、和葉のやつが無視しとつたら、そいつ、どんどん危なくなつてつてな、最近じゃ『もし君が僕のものにならないなら、どうなるかわからんよ』とかいう内容の手紙を郵便受けに入れられたりするらしいんや。」

「おいおい、そりやマジであぶねーんじゃ…。」

「せやけど、それが誰だかわからへんのだ。和葉のやつ、昨日の夜に突然打ち明けよつてのう。調査する時間が足らんかった。」

「でも、そんな危ないやつ、いつ実力行使に出るかわかんねーな。」

「だから大阪見物の案内にはついてくんない！つちゅーたのに、なにがなんでもついてくつてきかへん。せやから、お前に頼みたいのは…。」

そう、服部に頼まれ、俺（と灰原）はなるべく和葉の傍から離れなように、ボディガードをしているのだ。

もちろん、和葉本人はそんなことを知らず、出掛けに服部ともう一度「ついてくんない！」「絶対行く！」と喧嘩したらしいのだが…。

「で？2人はどこまでいつてんの？A？B？それとも…。」

「ちよ、和葉ねーちゃん！」

「ははは、冗談や、冗談。」

小学生に言う冗談じゃないだろ。

服部が俺や灰原の正体を知っており、そのせいか子ども扱いしないため、それに影響されて和葉もなんとなしに俺たちを自分達に近い感じで扱う。少なくとも園子よりは。

大阪見物もあらかた終わり、そろそろ服部の家で夕食をご馳走になるうと、俺たちは商店街をぶらぶら歩いていた。

「なあ服部のにーちゃん、晩飯は何だ？」

「お前は食うことばっかやのう。おかんがてつちり用意して待つてるゆーてたで。」

「おお！じゃあ早く行こうぜ！」

「元太君、そんなに慌てると、転びますよ。」

少し後方を歩いていた俺たちだが、ふと灰原が足を止める。

「どうした？」

どうやら宝石店のショーウィンドウの前で中に魅入っているようだ。

「お前が宝石を欲しがるなんて、珍しいじゃねーか。」

「あら、悪い？」

「いや、なんか気に入ったのがあったのか？」

「いえ、そういうわけじゃなく…。」

そういって、灰原は一つのネックレスを指差した。

「あれ、お姉ちゃんがしていたのと同じだなんて。」

「お姉ちゃん…実の？」

「ええ。確か亡くなる前に見せてもらったの。もうすぐこれをくれた人と再会できるかもって…。」

赤井秀一のことか。なら、それは彼からのプレゼントだったって訳だ。

「…ま、可愛らしかった姉とは違って、私には似合わないわよね。」

「おめーだって、十分…その…可愛いよ。」

「ちよ…、何を…。」

二人して顔を赤くした、そのとき。

「キヤー！！！！！！」

和葉の叫び声！

ハツとして振り返ると、小太りの男が和葉を車に無理矢理乗せようとしていた。

「和葉ねーちゃん！」

「和葉さん！」

俺と灰原は駆け寄ろうとしたが、男のほうが少し早く和葉を車に乗せ、走り出してしまった！

「か、和葉！」

服部が駆け戻ってくる。

「工藤！お前がついていながら…どーゆーこっちゃ！」

「すまねえ、服部…。」

「とにかく、大滝警部に連絡して、非常線を張ってもらいましょう。ナンバーは覚えているわ。」

「車種は…白のスバルだったな。」

「よっしゃ、阿笠博士、悪いけど子供達を先に俺んちまで連れてったつてくれ。俺と、工藤…じゃなかったコナン君と、このちっこいねーちゃんは和葉を捜す！」

「わ、わかった。」

「えー！歩美も和葉さんを捜す！」

「おお！少年探偵団の出番だぜ！」

「そうと決まれば、まずはあの男の人のことを聞き込みして…。」

「ええから！お前らは家に戻れ！博士、頼んだで！」

そう言つて服部は駆け出した。

「江戸川君、どうする？」

「俺は大滝警部と合流する。灰原、お前も博士と一緒に行って…。」

「冗談じゃないわ、私だつて和葉さんの護衛を頼まれていたのに、目を離してしまつたんだもの。だから…。」

俺と服部の方を見て、灰原は呟いた。

「負けてらんないのよ。あなた達に。」

呆気にとられる俺。灰原がこんなことを言うのは珍しい。

「頼もしいやないか。ほんなら、俺はバイクとって来る！頼んだで！」

数十分後…。

私はとある廃工場の中に忍び込んでいた。

工藤君からの連絡では、例の車は大阪府警の検問にかかっていないとのこと。

ならば、案外すぐ近くに逃げ込んだのではないかと、人が隠れられそうなところをいくつか捜し、この工場の入り口に差し掛かったとき、お守りを見つけたのだ。

和葉さんがいつも身につけている、手錠の鎖のかけらが入ったお守りが。

「あぶねーから、俺達が行くまで待ってる！」

工藤君は言ってたけど、どうしても気になった私は単身乗り込んだのだ。

犯人に見つからないよう天井のダクトを通っていると、先の方の部屋から明かりがもれ出ているのを発見した。

こっそり覗いてみると犯人がごそごそ何かをしているのが見えた。

そして、ドアを挟んだ隣の部屋に…。

「和葉さん。」

小声で呼びかける私。天井を見上げ、私を発見する和葉さん。

私は音を立てないように格子をはずし、その部屋に降りた。

「哀ちゃん！なんでこんなところに！」

「静かに！助けに来たわ。まずそのロープをはずすわね。」

私は和葉さんを縛っているロープに手をかけた。かなりきつく、しかもめちゃくちゃな縛り方をしており、はずすのには時間がかかり

そっだ。

「…、そっだ。工場の入り口で、お守りを拾ったわ。」

「え、ありがとう！大事なお守りなの！」

「江戸川君に聞いたことあるわ。たしか、服部君との思い出の…。」

「せやせや。小さい頃の…。」

そうこうしているうちになんとかロープをはずし終わる。和葉さんは立ち上がり、お守りを受け取ってぎゅっと握りこんだ。

「…絆だから。」

その時、急に扉が開いた。小太りの、長髪の、お風呂に入っていないような臭いのする男が…犯人が入ってきた。

「か、か、か、和葉ちゃん。どこに行こうって言うんだ。君はここで僕と一生暮らすんだよ。」

奇妙な抑揚のある喋り方。虚ろな瞳。私は思わず身を引いてしまう。和葉さんはキッと睨み付け、

「うっさいわ！私は帰る！油断してへんかったら、あんたになんて負けへんから！」

啖呵をきった。

しかし、男はニヤニヤしたままだ。

「み、み、み、見てよ、このフィギュア。和葉ちゃんだよ。」
そう言うと、男はおそらく手作りと思われる人形を見せてきた。

精巧に作られている。全て和葉さんの顔にそっくりだ。そのどれも、微笑をたたえた女神のような和葉さん。

ナース服の和葉さん、警察官の和葉さん、水着姿の和葉さん、高校の制服の和葉さん、客室乗務員の和葉さん、何も着ていない和葉さん…。

無数のフィギュアはその男の偏愛っぷりを示していた。

「…気持ち悪い。」

思わず呟いてしまう私。

しかし、男は私のことは全く見ていない。その視線の先には和葉さんだけ。

「ど、ど、どの衣装が良いかな。このフィギュア達が着ている服なら、どれでも用意があるよ。」

そういうと、男は後ろのタンスを開ける。そこにはいくつもの衣装がしまわれていた。

「か、か、か、和葉さんと一緒になれたら、この衣装を着てもらって遊ぼうと、買い集めたんだ。」

この男、和葉さんを着せ替え人形か何かと混同しているのかしら…？

「…私はあなたの人形じゃない。」

冷たい目で、和葉さんは言い放った。

「お、お、お、おかしな。和葉ちゃんはそんな事言う娘じゃないよね。女神様だもんね。そっか、この子に言わされてるのかな。」

そう言つて、その男は初めて私の方を見た。…我慢できない。

「あなた、馬鹿あ？」

私は男を睨みつけ、言った。

「あなたの言う和葉さんつて、誰？あなたの頭の中にいる存在じゃない。あなたが好きなのは和葉さんじゃないわ。あなたの妄想の中にしかない和葉さんの姿をした女の子よ。」

好きって言うのは、人を好きになるって言うのは…。工藤君の、いえ、江戸川君の少し照れた笑顔が臉に浮かぶ。

男は私の言葉にかなり気分を害したようだ。

「き、き、き、君はなんなのさ。そっかあ、僕と和葉ちゃんの仲を邪魔する悪魔だな。和葉ちゃん、待っててね。今悪魔は退治するから。」

そういつて、ナイフを持ち出してきた。ピンチね…。

そこへ。

「悪魔は…お前じゃ！」

服部平次が勢いよく飛び込んできて、犯人を蹴り飛ばした。犯人は

吹っ飛び、ナイフを落とす。

「く、く、く、くそ〜。服部平次、和葉ちゃんの周りにいる最大の悪魔〜。」

犯人はナイフを拾い上げ…その右手がどこからともなく飛んできたサッカーボールに弾き飛ばされる。

「江戸川君！」

「灰原！大丈夫か？」

そして犯人はやってきた探偵2人にはさまれ、ボコボコにされてしまった。

「この！この！今度和葉に手えだしたらこんなもんじゃすまさへんぞ！わかったか！」

「大体！な！和葉が女神で灰原が悪魔ってどーゆーことだ！」

…工藤君の怒りが若干的外れのような気もするが、これはこれで嬉しかったりする。

工藤君に和葉と呼び捨てにされたことは気づかず、和葉さんは服部探偵に駆け寄った。

「平次！ありがとう。それと…今朝はごめん。」

「ええつて。無事でよかった。お前になんかあったら俺…。」

そこまで言って、服部探偵は顔を赤くする。どうやら全くの無自覚さんではなかったようね。

「平次：あ、あかん、こんな時、どんな顔したらええのかわからへん…。」

和葉さんも真っ赤になって照れてしまっている。

「まったく、お前も無茶しやがって。もう少しで殺されてたかもしれねーんだぞ。」

工藤君が私に声をかける。

「はいはい。ありがとうございませす。凄、すばらしい、強い、強すぎる、あゝ無敵の名探偵さん？」

「おまえなあ…。」

廃工場を出ると、大阪府警の刑事さんに混じって、どこからか事件を聞きつけた新聞記者が駆け寄ってきた。

「服部君！またお手柄やな、今度は誘拐犯やつて？」

「被害者の女の子は君の幼馴染やゆうことなんやろ？」

「あ、その子やな！ちよつと、話聞いてもええか？」

居心地悪そうにする和葉さん。服部探偵はそんな彼女の顔を隠すように着ていた上着をかぶせる。

「それ羽織つとけ。あんまし注目されたくないやろ。」

「…うん。ありがとう。…平次の匂いがする。」

「あ？臭かったか？お前探し回って結構汗だくになったからのお。嫌なら…。」

「そうやない…。ただ…平次の匂いがする…。」

私と工藤君は少し離れて、大滝警部に話をしていたが。

2人の様子を見ていた大滝警部が呟く。

「平ちゃん、なかなかやるなあ。部長の息子と、遠山のおやつさんの娘…。ええ組み合わせやと、坊主らも思っやろ？」

「うん、そうだね。」

工藤君も賛同した。

そして私も。

大滝警部の話が終わり、私達は記者達に捕まらないように少し離れたところで2人、彼らが解放されるのを待っていた。

「服部のやつ、あれで和葉が好きなのかどうかも自覚が無いってんだから…ガキだよな。」

「あら、ガキには言われたくないんじゃない？」

「まあな。」

少しの沈黙。

「ねえ、工藤君、キスしようか。」

「え？」

突然の私の呼びかけに、驚いてこっちを向く彼。その隙を突いて、私は唇を奪ってやった。

「…助けに来てくれて、ありがとう。」

「…お、おう。」

「?どないした? 2人して顔真っ赤にして。なんかあったんか?」

「平次…この子ら付き合ってるんや、こんな事件があって、無事解決して、仲良うしてたに決まってるやーん。」

和葉の言葉にさらに顔を赤くする俺たち。そんな俺を見て、服部が呟いた。

「なんや、くど…コナン君? 大人やのう。」

「お前はガキだけどな。」

「なんやと!」

第13話 「小さくなったりしたけれど、僕は元気です。」 「がんばれ工藤……」

毎度ばかばかしい話を…真面目なストーリーが1段落したので、突拍子もなくネタ話。

そう、灰原と和葉、といえば声優ネタです。一ひねりして互いの役が逆になっていますが。

解る方にしか解らないのですが…まあ下手な関西弁ともども、許してください。

一ひねりしないとするならば…

あやな…灰原「博士、今日は特別にラーメンよ。ニンニクラーメン、チャーシュー抜きだけ。」

「灰原、ちよつといいか？」

今にも雪が舞い降りてきそうな学校の帰り道、少年探偵団の3人と別れた後、工藤君が私を呼び止めた。

「何？」

「明日の土曜なんだけどよ…。」

そういつてもじもじしだす工藤君。これってまさか…。

「あら、デートのお誘いかしら？」

「ば、バーロー！違…違…いや、違わねーけど…。」

お互いに告白して、俗に言えば付き合い始めて3週間。2人で出かけよう、というのはこれが初めて。

「構わないわよ、私は。で？どうする？」

「お、おう。トロピカルランドの入り口で10時に待ち合わせってのはどうだ？」

「トロピカルランド…？あら、お姉ちゃんの時と同じじゃない？レパートリー少ないわね。」

「…悪い。嫌…だったか？」

「いいえ。じゃ、明日ね。」

努めて冷静に。浮かれてる、なんて、やっぱり私のイメージには合わないもの。

トロピカルランドでデート。ずっと考えていたがこれしか思い浮かばねー。

灰原には蘭とそこでデート(?)してて事件に巻き込まれてって話はしてたから、2番煎じ…って思われるんじゃないか…。

とにかく、俺は少年探偵団と別れた後、灰原を呼び止めた。

「灰原、ちよつといいか？」

「何？」

「明日の土曜なんだけどよ…。」

緊張してなかなかうまく言い出せない。すると灰原のほうから、

「あら、デートのお誘いかしら？」

「ば、バーロー！違…違…いや、違わねーけど…。」

パニックで自分でも何が言いたいのかわからない。

「構わないわよ、私は。で？どうする？」

「お、おう。トロピカルランドの入り口で10時に待ち合わせってのはどうだ？」

「トロピカルランド…？あら、お姉ちゃんの時と同じじゃない？レパートリー少ないわね。」

「！！！！やっぱしそう思われたか…。（しかし、蘭のことをお姉ちゃんって呼ぶのが自然になってきてんな…）」

「…悪い。嫌…だったか？」

「いいえ。じゃ、明日ね。」

そういつて灰原は博士の家のほうへ方向転換した。

よ、よかった。ほっとする俺。

どうやら灰原も口ではああだが、喜んでくれているようだ。

…喜んでるよな…。なんか珍しく鼻歌歌ってるし…。

あ、スキップでした…。

私の名前は小林澄子。帝丹小学校5年B組の担任だ。

今日は大学の同窓生で、仲の良かった女友達5人とトロピカルランドに遊びに来ている。

ジェットコースターの順番待ちをしていると、友達同士の話に花が咲く。

「この歳になって、トロピカルランドとはね〜。」

「あら、いいんじゃない？ここってほら、例の思い出の場所でしょう？」

そう、ここは私の同窓生の中田友美ちゃんが、私達と一緒に遊びに来ていて今の旦那と出会った場所なのだ。

「そういえば、澄ちゃん、刑事の彼氏とは結婚しないの？」

「け、結婚は、まだ……。」

「お！顔が赤くなった！こりゃ関係は良好ですなー。」

からかわれて、私は堪らずあさつての方角を向いた。その瞬間、私の目に飛び込んできたのは……。

（こ、コナン君と哀ちゃん！）

私達より少し前に、私が受け持つクラスの中なかでも特に優秀な2人の生徒が仲良さそうに並んでいたのだ。

多少離れてはいるが、声が聞こえてくる……。

「でさ、そんなときホームズは言った訳だよ。」

「『もしあなたを確実に破滅させることが出来るのなら、僕は公共の利益のために喜んでこの身を捧げよう』でしょ？ま、公共の利益の為に身を捧げるなんて、私には理解できないわ。」

「バーロー！それが探偵としてあるべき姿じゃねーか！」

「ま、名探偵と呼ばれる者になるには、そんな子供じみた正義感、理想がないと駄目よね。でなければ、ただ人の粗を探す卑しい存在になってしまうもの。」

「卑しいって、お前なあ……。」

「あら、あなたは違うでしょ？名探偵さん？」

「……。ってーかお前も自己犠牲の精神の固まりみてーなモンじゃねーか。いつだったか皆に危害が及ぶのを恐れて、自分ひとりだけ犠牲になるうとしなかったか？」

「あら、そうだったかしら？」

そういうと、クスクス笑いだす2人。まるで長年連れ添った夫婦のよう。からかわれて赤くなっている私の方が、よっぽど子供に見える。

「あれ？どうしたの？澄ちゃん。」

「あ、ううん、なんでもなし。なんでも。」

そういうしているうちに、2人はジェットコースターに乗り込んでいってしまった。私達は次の次くらいだろうか。

「はー…この歳になって、お化け屋敷でびっくりするなんて思わなかったわ。」

そう言っただけの顔をしているのは優子ちゃん。私達の中では最も早く結婚し（学生結婚！）もう私のクラスの子と同じ歳の男の子の母親だ。

2人ずつペアになり、お化け屋敷を体験した私達。私と友美ちゃんは1番はじめに入り、あとの4人が出てくるのをアイスを食べながら待っていたのだ。

「優子ちゃんは相変わらず怖がりだね。」

「普段はがまんしてんのよ、子供の前で弱味は見せられないから。」

「そうそう。子供と言えば…。」
優子ちゃんとペアで歩いていた美穂ちゃんが思い出したかのようにしゃべりだした。

「中でえらくませた子供カップルを見たわね。」

「そうそう！眼鏡で可愛い顔した男の子と、茶色いウェーブの髪型の大人っぽい女の子！」

…私はピン！ときた。

「私達の後ろを歩いてただけどき、男の子の方が『この仕掛けはここにセンサーがあつて…』とか、『仕掛けのあるマジックミラーが…』とか、お化けの種明かししてるの。」

「それでさ、女の子って、そういうの嫌がりそうじゃない？でもそうじゃないの。『あの火の玉、化学反応で色をつけてるわね。電気を使わないあたりなかなか凝ってるじゃない？』って、負けにくいらい種明かししてんのよ。」

「で、黒っぽい服を着た吸血鬼が突然現れる仕掛け！そこで女の子がびっくりして立ち止まっちゃったのよ。そしたら男の子がどうしたと思う？女の子の肩を抱き寄せて、『まったく…アレから大分立つのに、こういう出で立ちのモンにはまだ弱いみたいだな』って言ったの。」

「そしたらそしたら、女の子が『だって…』って急に可愛い声で言うのよ。んで、男の子！男の子が凄いのよ。『守ってやるって言つたる？俺がずっと守ってやつから、怖がるんじゃないよ。』って…！」

「ね！ね！なんなのあのカップル！小学生とは思えないわ！」

「ほんと。家の子と同じくらいだと思っけど…うちのはまだ全っ然ガキよ？」

…普段の2人を知っている私でも、驚きのカップルっぷりだ。

まああの2人が小学生とは思えないのは1年生の頃からだけ…。

いい歳した女性6人がわいわい言いながら観覧車に乗る、幡から見たらちよつと恥ずかしい光景かもしれない。そんなことを思いながらふと窓の外を見ると…。

「あ、ねえねえ、あれよ！あの2人！さっき言ってた小学生カップル！」

優子ちゃんがコナン君と哀ちゃんを指差して言う。

「へー。ほんとに小学生だね。」

りさちゃんが咳くと、静香ちゃんも続く。

「本当にさっきみたいなこと言ってたの？」

「本当よ。ここからじゃ何話してるかは聞こえないわね。」

「男の子がなんか言ってるわよ？『高いとこ怖い』とか？」

「まさか。『いい眺めだね。』とかじゃない？」

「『僕の家、どこかな？』とか？」

…『この観覧車の秒速は…』とか、『この観覧車を1周させるの

に必要な電力は…』とかじゃ…ないわよね…。

「つつー訳で、集客力は1周辺り約600人になるな。」

「あなた、大分前に私がそんな話をしたときは、呆れてなかったかしら?」

「そうだったか?」

「そういえば、観覧車って遊園地の中でも1番のスポットらしいわね。」

「?」

私はおもむろに工藤君に近づく。顔と顔が接近し、唇が…。

「あー!!!あのカップル、キスしてるよ!」

「ほんと?す、凄いわね、今時の小学生は…。」

「うちの子を見る限りはあんなの特別だと思うけど…。」

「ね、どうなの?澄ちゃん。澄ちゃんのクラスにも、あんなませた子達、居る?」

あんな子達、じゃなく、あの子達、が居るのだが…。なんか恥ずかしいから知らないフリをしよう…。

「は〜。なんか疲れたわね…。」

私はベンチに座って休んでいた。優子ちゃんはトイレ、美穂ちゃんは売店で買い物、友美ちゃんは旦那に電話をしに行くってちょっと離れてしまい、静香ちゃんはお化け屋敷の中に落とし物をして取りに戻っている。

「あれ?りさちゃん?」

さっきまで横に居たはずのりさちゃんがない。

その時！

「きゃー！！！」

後ろのほうで悲鳴が。何事かと近寄ってみると…。

「り、りさちゃん！」

なんと、りさちゃんが刺されていた！

「どうしたの？」

と静香ちゃん。

「ねえ、澄ちゃん…。」

と優子ちゃん。

ぞくぞくと皆も集まってくる。そして言葉を失う。

私は迷わず救急車を呼び、彼氏に電話をした。

「任三郎さん！」

「澄子さん、大丈夫ですか？被害者はあなたの知り合いだとか…。」

「ええ。」

私は状況を説明した。

「なるほど。皆さんアリバイは無し、ですか…。」

「でも怪しいのは静香さんじゃない？本当にお化け屋敷に落とし物を取りに行ったのなら、あの中は真っ暗。こんな短時間で見つけてここに現れるのは難しいんじゃない？」

「いや、俺はもっと別の…。」

「コナン君！哀ちゃん！」

驚く任三郎さん。私も驚く。

近くに居るとは知っていたけど、事件を聞きつけ調べにくるなんて…。デート中じゃなかったの？

トロピカルランドを十分堪能し、どこかで飯でも…と相談し始めた

俺たちの耳に、パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「…事件か？」

「あら、そうみたいね…。」

ま、せっかくのデート中だ。何の事件かわからないうちからそっちに首突っ込むのは…。

だが、気になってそわそわし始める俺を見て、灰原が言った。

「気になるんなら、行って来たら？」

「で、でもよ、せっかくのデート…。」

「探偵さん？お・仕・事・よ。」

小悪魔っぽい表情で、灰原が俺の鼻の頭をつついた。

「…わかった。すぐ戻る！待っていてくれ！」

「何言ってるの。私も行くわよ。…相棒、でしょ？」

た、頼もしい…。そうして、俺たちは現場に向かった。

「あら？あれ、小林先生じゃない？」

「おう、それに白鳥警部…捜査一課が来てるってことは…殺人か？」

「…と、言うわけで、犯人は貴方です！」

工藤君の推理が見事的中し、犯人は早期逮捕。事件は無事解決した。友達が友達に殺されてしまい、涙を流す小林先生を、白鳥警部はぎゅっと抱きしめ、何も言わずただ優しく見つめていた。

…。

日も沈み、すっかり遅くなってしまった帰り道。

「悪かったな、灰原。せっかくのデートだったのに。」

「流石、事件を呼び込む体質よね。」

「まったく…。自分でも事件に対する好奇心が抑えられなくてな…。すまん。」

「何を謝るの？」

「だってよ、デートの途中で事件にかまけて…退屈だったろ？」

「何言ってるの。小林先生には悪いけど、私は満足よ。」
「でも…。」

「だって、推理に集中している探偵の顔の工藤君、犯人を追い詰める凜々しい工藤君を間近でじっくり堪能できたもの。」
「本当のことだ。自分でもびっくりしているけれど。」

工藤君の探偵の顔を見ているだけで、なんだか幸せな気持ちになれるとは思っていなかった。

「は、灰原…ありがとう。」

そういって、工藤君は私の手を握った。

「あら、手だけ？」

そう言っ、私は腕を絡めて、べったり工藤君にくっついた。
自分でやっといて顔がほてるけど。

そのままゆっくり歩いて帰路につく私達。

こうして初デートは幕を閉じた。

第14話 「ジェットコースターで首ちょんば事件があったり、医者が拳銃乱射

事件をちゃんとやろうと思ったけど…挫折しました。

一応「初デート」です。なんの進展ありませんが、こつこつという話を1回くらい入れたかったんです。

しかし…名前で呼ばせたら「任三郎さん」「澄子さん」。

…口に出してみるとよりはっきりしますが、とても現代劇とは思えない。

「あ、岡部先輩、今日は蘭とデートですか？」

「ああ、園子ちゃんか…。聞いてないのかい？僕と蘭ちゃんは、もう一年以上前に別れたんだけど…。」

「え…？」

その日、俺は探偵事務所のソファに寝転がって新発売された推理小説を読んでいた。

傍らには灰原。灰原もまた、ソファに座って夢中で医学書を読みふけている。

今日は蘭は大学（今は大学院だったか？）の先輩とデート、おつちやんは競馬で、俺が留守番をしているところに、灰原が訪ねてきたのだ。

ここ最近、休みの日は探偵事務所か博士の家と一緒に居ることが多い俺達。別に何をしているわけでもないのだが、なんとなく一緒に居る、それが嬉しい。

と、そこへ階段をどたどたとあがってくる音がして、勢いよくドアが開いた…！

「ガキンチョヨ！居る！？」

私の名前は鈴木園子。今は大学生だ。その日、親友の蘭のことでシヨッキングな出来事があった私は、その蘭に近い江戸川コナン君に話を聞きに毛利探偵事務所を訪れたのだ。

その日、蘭はデート、おじさまは競馬と聞いていたため、居るとしたらガキンチョだけだと思い、勢いよく探偵事務所のドアを開けた私の視界に飛び込んだのは…。

「あら、哀ちゃんも一緒？つてか、その体勢は…。」
ソファにきちんと座って難しそうな本を読んでいる哀ちゃん、そしてソファにうつ伏せで小説を読んでいるガキンチョ。

ソファにうつ伏せ。その言い方だけでは二人の位置関係を正確には示していない。

正確には、哀ちゃんに覆いかぶさるようにガキンチョがうつ伏せになっているのだ。ガキンチョの胸が哀ちゃんのふとももに重なっている。もうべったり。

「あんた達…。聞きしに勝るラブラブっぷりね…。」
そう言うと、ガキンチョは顔を赤くして体を起こした。

「ど、どうしたの…？園子ねーちゃん。」

「そ、そう！ちょっと聞きたいことがあるんだけど、今日、蘭ってどうしてる？」

「蘭ねーちゃん？なら今日はデートだつて出かけたよ？」

「そうね。なんだかウキウキしてたわね。」

「誰とデートつて？」

「え…？彼氏つていつてたけど…？」

「アンタ、蘭の彼氏つて知ってる？」

「あ、うん。確か大学の研究室の先輩で、今は大学院生の…。あれ？なんていったっけ？」

「確か岡部シンジさん。一昨年お姉ちゃんに紹介してもらったことがあったわ。」

「それが…。」

私は2人に説明した。

今日は休日なのだが、大学に用があった私がそれを済ました後キャンパスをぶらぶらしていると、その岡部先輩に出会ったこと、そして2人はもう1年前前に別れていたことを。

「1年前？つてことは…。」

「クリスマスの前ね。そういえばお姉ちゃん、クリスマスだっていうのに私達と一緒に居たわね…。」

「でもよ、彼氏のことを顔を赤くして話したり…。それにしょっちゅうデートだつて出かけてるぜ?」

「そうなのよ! 今日だつてデートなんでしょ?」

散々あーでもない、こーでもないと3人で話していると、既に時間は午後9時をまわっていた。
がちゃ。

「あれ? 園子、来てたの?」

蘭が帰ってきてしまった。私達3人は顔を見合わせ…。

「ら、蘭。今日つてデートだったのよね?」

「え? そうだよ? あ、9時じゃ早いつて言いたいの?」

「そういつわけじゃ…。」

「お姉ちゃんの彼氏つて、岡部さんつていう、前に紹介してくれた人よね?」

哀ちゃんが何気ない口調を装って聞く。

「そうよ。そういえば、哀ちゃんと歩美ちゃんは前に会ってるわね。」

何気ない返し。しかし、付き合いの長い私にはピンと感じるものがあった。

蘭は嘘をついている…!

次の土曜日。

「で? なんで蘭ねーちゃんに直接聞かないの?」

俺と灰原は園子に連れ出され、今日もデートと言つて出かけた蘭の尾行をしていた。

「ばっかねー。あの嘘をつくのが嫌いな蘭が、アンタや私にまで隠してる彼氏、そう簡単に教えてくれるわけないじゃない。」

園子は電柱の陰に隠れながら返す。

「そうね… 私も興味あるわね。」

こういうことには普段あまり関心がない灰原だが、それでも蘭が隠し事、というキーワードに誘われてついて来ている。

「しかし、蘭にはまだ彼氏は早いんじゃないのか？」

…。

「おっちゃん！」

「おじさま!？」

「あら、ちよび髭探偵さんもお出ましね。」

なんと、小五郎のおっちゃんも仲間に加わった!

俺と園子の声を感じ取ったのか振り返る蘭、慌てて隠れる俺たち。

「な、なんでおじさままで？」

「娘が変な男にたぶらかされてねーか心配するのは当然だろ！」

「…ヒマなのね。」

かくして俺たち4人の尾行は始まった。

東都環状線、空宿駅改札前。

蘭は時計を一度確認し、近くの喫茶店に入った。

「蘭ったら、喫茶店で待ち合わせかしら？」

「いや、今は12時35分…待ち合わせには中途半端すぎる。」

「そうだね、おそらく1時待ち合わせだけど早く到着しちゃったんで、喫茶店で時間を潰す気なんだ。」

「どうでもいいけど…少しバラけない？」

灰原がジト目で言う。たしかに4人が1本の柱の陰にいるのは不自然すぎる。

と、そこへ…。

「ま、真さん！」

園子の彼氏、京極真が現れ、蘭と親しそうに会話しだした!

「京極さんが?まさか…。」

「いえ、だとしたら皆に内緒にしていたのも納得できるわ。」

驚く俺、妙に納得する灰原。

「そんなあ、真さん…。」

園子はショックで呆然としている。

しかし、5分ほど話し込んだ後、京極真は喫茶店から出てきた。蘭に見つからないように、しかし素早く京極さんを連行する園子。

「あれ？園子さん、奇遇ですね、さつきあちらで蘭さんにも…。」

「真さん！どういことなの！？」

詰め寄りながらも園子の目に涙が浮かぶ。

「そりゃ、そりゃさ、私は蘭みたいに綺麗でも、家庭的でもないけどさ、真さんは、真さんは…。」

「ちよ、待つてください園子さん、いったい何が…？」

「なんで正直に言ってくれなかったのよー！」

混乱しているのか支離滅裂な園子。しかしおっちゃんが助け舟を出す。

「おい、しつかりしろ、こいつが蘭の彼氏な訳ねーだろ。もしそうなら、たった5分で1人で喫茶店から出てきたりしねーよ。」

「…あ、そっか。」

急に素に戻り、あっさり納得する園子。おかげで京極さんは状況をつかめていない。

「…なるほど、そういうわけでしたか。」

説明を終え、再び蘭を張り込む体勢に戻った俺たち。

「…だから、バラけないと…。」

1本の柱に5人で隠れるのは無理がある。灰原は園子とおっちゃんに挟まれ窮屈そうだ。

「あ！誰か来たわよ！」

その時、喫茶店の蘭に近寄る人影が。

「ん？ありゃあ…新出先生！」

「うっそー！先生って確か北海道に転勤になってなかったっけ？」

「まさか…お姉ちゃんに会いにわざわざ…？」

盛り上がる俺たち。

「しかし、蘭さんはよくデートをしていたのでは？北海道からいくらなんでもそうちよくちよくは…。」

「愛の力よ、愛の。それに、なんだかんだ言っつて、クリスマスとかは会ってなかったし…。」

「だがなあ、新出先生は結婚してなかったか？2年前に。」

「まさかお姉ちゃん…不倫!？」

「バーロー…ンなわけあるかよ!」

「…どうしたんですか？皆さん…。」

「……」

一瞬の沈黙、そしてすぐに振り返る俺たち。

「……」

結局新出先生はたまたま近くの病院に研究会でやって来ていて、偶然蘭を発見して少し話をしただけだったようだ。

「しかし、蘭さんが皆さんに隠してまで付きあってる彼氏…ですか。確かに興味深いですね。」

「でつしよー？先生も気になるでしょでしょ？」

「だから…この柱にこの人数はもうとつくに限界…。」

確かに、6人が1本の柱に隠れて…いや、隠れきれてない気もする。灰原の不満もなんのその、1時10分前、再び蘭に近寄る人影が…。

「あ！あいつ！メガネのドジっ子じゃねーか!」

「うっそ！瑛祐くんじゃない!」

「あいつ、アメリカから帰ってたのか…。」

「誰ですか?」

「本堂瑛祐っていつてな、蘭と同級生で転校生だったんだが、少ししたらアメリカだかに行っちまったすげードジなガキだよ。」

「そつえば蘭のこと好きだって言ってたわね、アヤツ…。」

「え？園子ねーちゃんも知ってたの?」

「男友達に話してんのを聞いてたのよ。」
「じゃあ彼が、蘭さんの彼氏なんですね。」
「いえ…違うみたいよ。ほら…。」
灰原の指差す先には、喫茶店から出てくる瑛祐の姿が…。
すかさずおっちゃんと言葉が拉致してきた。

「蘭さんの恋人？工藤さんじゃないんですか？」

「それが、もうかなり前に別れたのよ。」

「へー…そうなんですか…。」

じつと俺を見る瑛祐。

「おい、そろそろ1時になるぜ？」

「毛利探偵とコナン君の推理通りなら、待ち合わせの時間ですね。」

「あ、蘭さんが携帯をとりましたよ！」

「なんか喋ってるわね。蘭の表情からして…彼氏かしら？」

「ここからじゃ何を話してるのかは聞こえないですね…。」

「自分に任せてください。」

そう言つと、京極真は目を細め、じつと蘭を見つめた。

「と・な・り・の・喫・茶・店・に・い・る・わ。」

「す、凄いですね…口の動きだけで…。」

「さっすが真さん！」

「じゃあ、待っ・て・る・わ…どうやら、その彼がここに間もなく現れるようですね。」

「どーでもいいけど…。」

灰原が呟いた。

「いい加減に、この柱に隠れるのは無理よ…。」

そう、既に俺たちは7人体制。どう考えても蘭の座っている位置から確認できてしまう。

しかし、彼のことを考えているのか、蘭は周りが見えていないようで、こっちには気づいていないようだ。

そこへ…。

「き、来た!」

「ど、どいつだ!」

「毛利さん、ちよつと前に出すぎですよ!」

「意外と力ありますね。今度一回手合わせ願えますか?」

「…かわった方ですね、園子さんの彼氏…。」

「しっ!気づかれちゃうじゃないの!」

なんだかんだ言いながら俺たちは一斉に蘭の方を向く。そこにいたのは…。

「あれ?あの人は確か蘭さんの幼馴染の…。」

「園子さんのアルバムで見せてもらったことがありますよね?」

「おいおい、あいつとは別れたんじゃなかったのか?」

「私もそう聞いてたんだけど…。」

「ま、ま、ま、待つてください!?!だつて彼ならここに…。」

「黙ってる!…でも…確かに俺はここに…。」

「あなた、双子の兄弟でも居るの?」

蘭の微笑みに笑顔で応えているのは…。

なんと、工藤新一だった。

「工藤さん…あの顔は工藤さんですよ?」

瑛祐がこつそり俺に耳打ちをする。

「ああ…。もしかして、単にそっくりさんなんじゃねーか?」

「だつたらいいけど、もしあなたのフリをして近づく怪しいやつだつたら…。」

灰原が険しい顔で俺を覗き込む。

「でも、そんな風には見えませんが…って!うわあ!」

もっと顔をよく見ようと乗り出した瑛祐は、おっちゃんの靴に躓き、その反動で京極さんの背中を押し、さらに倒れまいと新出先生の服の袖を掴んでしまった。が、全員突然のことで対応できず…。

ドザア!!!!!!

全員がもみくちやになって地面に倒れこんでしまった。

流石に気づいた蘭と工藤新一らしき男が驚いた顔でこっちを見てい
る…。

一方、博士の家では…。

「なんだよ、つまんねーな。コナンも灰原も留守かよ。」

「まったく！いくら付き合うことになったからって、少年探偵団の
集まりに参加しないのは、良くありません！」

「まあまあ、光彦君。コナン君も哀ちゃんも今が幸せなんだよ。」

「歩美くんは人間ができとるのお…。おお、もう昼じゃ。せっかく
だから、なにか食べに行くかの。」

「おお！博士のおごりか？」

「もちろんじゃ！そのかわり…。」

「ええ。博士が何を食べても、灰原さんには内緒にしておいてあげ
ますよ。」

「ねえ元太君、何が食べたい？やっぱり、うな重？」

「うーん…なんか今日は天井の気分だな…。」

「珍しいのお。」

第15話 「コ哀推奨派の皆様にも一度は聞いてみたい、毛利蘭の彼氏にもっとま

まあ賢明な皆様には、彼が誰なのかすぐに解ったとおもいますが…。
次回に続きます。

コ哀成分を補充しに、もう一回映画を見てきました。平日の昼間で、
公開されて大分経つせいか、客は自分1人…。ある意味得した気分。

第16話 「え？工藤君が蘭に勢い余って告白しちゃった？知りませんよそんな

私の名前は毛利蘭。毛利小五郎という名探偵の娘。

今日は彼氏とデートで、待ち合わせの場所の近くの喫茶店で時間を潰していたの。

すると、彼から電話でこっちに来るといっているので、喫茶店で待っていて、彼が現れた直後…。

ずざああ！！！！

大きな音がしたかと思うと、私の知り合いが柱の陰から倒れこんできた！

親友、その彼氏、父、幼馴染の小学生、その彼女で私の妹的小学生、高校時代のドジっ子男友達、お世話になった病院の先生…。

「…皆…なにしてんのよ…。」
ちよつと怒った私の顔を見て、あわてて親友が立ち上がる。

「だ、だって、蘭が悪いのよ？なんでその彼氏のこと、隠すのよ！」
幼馴染も立ち上がる。

「そうだよ、蘭ねーちゃん。僕らには岡部先輩と別れたなんて言わなかったじゃないか。」

「そ、それは…。」
「それにな。」

父もゆっくり起き上がり、おそらく全員が倒れこんだ原因を作ったと思われる眼鏡の男友達に拳骨を張って、私を見る。

「そいつ…工藤新一じゃねーのか？工藤とは別れたと聞いてたんだが…。」

「そうね…。お姉ちゃん、誰なの？本当に、工藤く…さんなの？」
どうしよう。彼のこと、知られちゃった…。

もしこのまま彼の正体も知られたら…。

私は一瞬たじろぐ。しかし、後ろから彼が近づいてきて、皆に挨拶した。

「はじめまして。俺、黒羽快斗っていいます。工藤さんとは顔が似てるって、よく間違えられるんですよね、ハハハ…。」

「黒羽…。」

「快斗…?」

全員の頭の上に？が点灯したのが見えた気がした…。

「マジシャン?」

「ええ。親父が結構有名なマジシャンで、俺もそうなりたいたいと思って、今修行中なんです。」

確かに全うな職種とはいえない彼の言葉に、ますます眉をひそめるお父さん。

「あ、ちよつと待って、黒羽ってどっかで聞いたことある。」

「あ、僕も…。」

園子と新一が同時に首をひねる。

「多分、聞いたことがあるのは彼のお父さん、黒羽盗一の名前よ。」

園子は、前に奇術愛好家のオフ会に参加したときに、コナン君は十九さんの事件の時に名前を聞いたのよ。」

「ああ〜。」

園子と新一が同時に頷く。なんだかんだ言って幼馴染よね…。

「でも、その黒羽さんと、工藤さんとそっくりな黒羽さんと、どうして付き合うことに?」

瑛祐君が興味津々な顔つきで質問する。

「そうね…まず出会いは…って！何言わせるの!? 瑛祐君!」

「まあ良いじゃないですか。僕も興味ありますよ。」

新出先生まで…。

「絶対秘密です!」

その日、私は岡部先輩と大喧嘩して、一人でぶらぶら街を歩いてい

た。

その時、横断歩道の向こう側で新一らしき人が立っているのを見つけた。

『新一!?!』

私は驚いた。それもそのはず、新一は今やコナン君。もう元に戻る薬は作れないと聞いていたからだ。

もう、新一は居ない。居るけど、居ない。そこはかたない寂しさがある。

どうやら、呆然としている私に向こうも気づいたようだ。横断歩道を渡って…まっすぐ私に近づいてくる。

「どうしました?お嬢さん。僕が誰か知り合いにでも似ているんですか?」

何故そのような核心めいたことを言えるのか、その時は私にはわからなかったが、その言葉にただ頷いた。

「そうですか…。その彼と、何があつたかはわかりませんが…。」
そう言うと、彼は右手を私の目の前に出し、ポンツと薔薇の花を出して見せた。

「…僕にできることは、今はこれが精一杯。」
マジシャンだ。その時、私はそう思った。そして、おそらく表情が和らいだ。

「よかった。あなたにあんな寂しそうな顔は似合いませんよ。」
そう言つて、花を私に渡し、彼は歩き出した。

「ねえ、ちよつと待って!どこかで私たち会つたことあるの?」
彼の言動からそう感じた私は呼び止めようとした。しかし、彼は歩きながら

「数年前から、何度か。世紀末の鐘の音と共に。あるいは、天空に浮かぶ遭難船のなかで。」

そう言つて、立ち去ってしまった。

次に彼に会つたのはその2週間後。

鈴木次郎吉さんがまたしてもどこかから見つけ出してきたビッグジユエルを、怪盗キッドが盗み出すと予告してきた日。

例によってコナン君が彼を追い詰め、宝石は取り返したが逃げられ、彼を追ってみんなが飛び出していった。その後。

一人屋敷に取り残された私は、ふと屋根の方から物音がするのを聞いた。

上つてみると…案の定、怪盗キッドがそこに隠れていた。

どうやら逃げたように見せかけて潜伏し、ほとぼりが冷めた頃悠々逃げ出そうと考えていたようだ。

「観念なさい、怪盗キッド！」

私の呼びかけに、彼はびくっとして振り返る。

間近で顔を見たのは久しぶりだった。

「…やっぱり。前に会ったときも、新一と間違えたけど、そっくりね。怪盗キッドさん？」

「前つて…この間のことですか？」

「この間…？やっぱり、あの去り際の台詞は、挑発だったのね！いいえ、違うわ。ベル・ツリー一世号のときよ。あの時は、新一のフリをしてたのよね、怪盗さん？」

「ははは…。」

「それに、この間はちょっとびっくりしただけよ。だって…新一はもう、帰ってこないもの。」

「彼、もう元に戻らないんですか？」

「戻らないんですか？その言葉尻に私は違和感があった。」

「貴方まさか、新一が、今、どこにいるか知って…？コナン君とは何度か対決してるみたいだけど…。」

「ええ。名探偵には何度もやられてますよ。元高校生の、名探偵にね。」

「やっぱり！新一ったらお前にだけは俺の正体を話す、とかいっておきながら、怪盗キッドにまで知られているんじゃない！」

「なにか方向性の違う私の怒りに彼も気づいたのか、立ち上がり、そ

っと近づいてきた。

あわてて身構える私。

しかし、彼はいとも簡単に私の間合いに入り込み、耳元で囁いた。

「僕の名前は黒羽快斗。…またいずれ、お会いしましょう。」

そういうと、ぽんつという音と共に、彼は消え去った。また、一輪の薔薇の花を残して。

その後、わたしは『黒羽快斗』の居場所を突き止め、彼に会うことに成功した。

「僕の正体、警察には言わなかったようですね。」

「言えるわけないでしょ。私のせいで貴方が捕まったら、新一のことも…。」

「僕はそんなことしませんよ。」

「…その敬語、やめない？歳も一緒だし。そんな丁寧なのはキッドの時でしょ？」

「…確かに。」

「なんで私に正体をばらしたの？それに、なんで怪盗キッドなんかやってるの？」

「それは…。」

彼は色々話してくれた。

父親は有名なマジシャンで、初代怪盗キッドだったこと。その父親がとある力を持ったビッグジュエルを狙う謎の組織に消されたこと。その組織よりも先にその宝石を盗み出し、父親の敵を討つために怪盗キッドを続けていること。そして…。

好きだった幼馴染に正体がばれたこと。その娘は怪盗キッドが大嫌いで、どうしても彼を受け入れることが出来なかったこと。その幼馴染が私に似ていること…。

「な〜んだ。じゃあ私達、似たもの同士なんだね。元想い人に似ているから興味を持った、なんてね。」

「ええ。すみません、嫌ですよ。好きだった女の子に似ている、

なんて言われて。でも、なんだか…。」

「敬語。」

「？」

「もー。直らないね、敬語。」

「す、すみません…。あ、いや、ごめん。」

「じゃあ、次、いつ会えるかな？」

「え？」

「その敬語が直るまでは、付き纏うわよ、私。」

こうして、その後も私達は何度も会い、それがそのうちデートになった。

彼は予想以上に無邪気で、可愛い面が多く、それが格好つけたときのあの気障な一面とのギャップで、新一とは違う。私はそんな魅力にどんどん惹かれていった。

そして、いつしか付き合うようになり、現在に至る…。

探偵やら警察やらが知り合いに多いので、みんなには知られないようにと思っていたのに、こんなにいつぺんにはれてしまうとは…。

「なかなかカッコいい彼氏じゃない。どうして内緒にしたの？」
園子が何気なく聞いてくる。

「それは、その…。ほら、新一にそっくりだから、アイツの代わり、みたいに思われたら嫌だったし、マジシャンなんていったら、お父さんが反対するのが目に見えてるし…。」

なんとか取り繕おうとする私。

「へー。新一君の代わりじゃないんだね。」

わざと意地悪そうな喋り方をする園子。

「もちろんよ。新一とはぜんぜん違う。まあ、似ているところもあるけど…。でも、新一とは違うよ。それで、そんな彼が好きっていうか…その…ね、はっきり言わせないでよ園子。」

照れ隠しにバシツと園子の背中をはたく私。加減を間違えてしまい
思いっきりむせる園子。

そこへ、突然知り合いの警部が飛び込んできた。

「毛利小五郎！江戸川コナン君！悪いが、至急鈴木次郎吉氏の邸宅
に来てくれないか？」

中森警部だ。怪盗キッドを追いかけ続けているベテラン警部。

「中森警部。つてことは…。」

「怪盗キッド!？」

「そうだ。予告状の内容からして明日の夜8時頃、鈴木次郎吉氏が
新たに手に入れたビッグジュエル、『アプロディーテの瞳』を盗み
に来ることが判ったのだ。悪いが今回も手を貸してくれないか？」

「俺は構わんが…ガキも連れて行くのか？」

「ああ。このコナンってガキは俺の知る限り最も奴との勝率が高い
からな。」

「じゃあ、これから打ち合わせ？」

「そうだ。これるか？」

「うん、僕は大丈夫。灰原、おめーどうする？」

「そうね。ついていくわ。相棒なんでしょ？」

「そのお嬢ちゃんもか…。そういえば、この子もけっこうキッドの
やつとは対戦経験があるんだっただ…。よし、頼む！」

そう言つて、警部たちは出て行つてしまった。園子は…。

「怪盗キッド様が来るの？こうしちゃいられないわ！真さん！今日
は帰つて、明日の準備よ！」

「そ、園子さん、準備つて…。」

園子と京極さんも出て行つてしまう。

「じゃあ、僕達もおいとましましょう。」

「そうだね。これ以上2人の邪魔をしちゃいけないし。」

「じゃあ、蘭さん。またみんなで遊びに行きましょうね。」

瑛祐くんも新出先生も去つた後…。

「ちょっと、快斗。明日つてどういうこと？」

「言っでなかつたか？今度のビッグジュエルこそ当たりかもしれないし…。」

「もう！新一やお父さんに捕まらないでよ？」

「分かつてるつて。俺を誰だと思つてるんだ？月下の奇術師、怪盗キッド様だぜ？」

「はいはい。分かりました。気をつけてね。」

私も変わったものだ。怪盗に対して捕まらないでね、なんて彼の事情を知っていればの台詞だけだ。

私も彼の助けになりたい。たとえその行為自体が許されないものだとしても。

彼のマジックには人を魅了する何かがある。

私もそのマジックにまんまとはまってしまっているのかも。だからその夜。

「ねえ、お父さん。」

「なんだ？」

「明日、私も次郎吉さんのところについて行ってもいい？」

第16話 「え？工藤君が蘭に勢い余って告白しちゃった？知りませんよそんな

今日（7月2日放映回）の哀ちゃん可愛い。来週も期待。

第17話 「泥棒はまだできないけど、きっと覚えます、なんて。当時、本当に

「おお、きたな、中森警部に毛利名探偵。それに…。」

鈴木次郎吉氏は俺の顔を見てにんまりと笑った。

「こわつぱよ。今日も期待しておるぞ。今日こそきやつをひっ捕らえ、わしが新聞の一面を飾るのじゃ！わっはっは！」

この数年、次郎吉氏は何度もビッグジュエルを手に入れては公開し、キッドをおびき寄せていた。しかし、結局奴を捕らえることはできず仕舞い。

なぜか宝石をうまく盗んでも後日送り返してくるため、そういった意味での損失は無いが、それでも毎度毎度キッドを捕まえるための仕掛けをするのは大変だろう。

「で？今回はどんな仕掛けがあるんだ？じーさんよ。」

「なに、大したことはしておらんよ。一般公開もしておるからの。みるがいい。」

『アップディーテの瞳』は鈴木近代美術館の中央の展示室のどまんなかのガラスケースの中だった。

「おいおい、こんなんじやすぐに盗られてしまっんじやねーか？」
おっちゃんが心配そうに言う。

「おっと、展示室に入らんように。今までワシらは奴の狙いの物を囲むように警備をしてきた。しかし奴は変装の名人。警官に化けられて盗られてしまうことが多い。じゃから今回は…」

そういつて次郎吉氏が手に持っていたスイッチを押すと、ガシャッと金属音が響き、展示室を覆うように鉄格子が全ての壁、窓、入り口をふさいだ。

「なるほど…。」

中森警部が納得する。

「でも、大分前に、キッドに盗られた！と思ってみんなで持ち場を

離れたら、それが罫で、そのあと悠々盗まれたってこと、あったよね？」

俺が言うと、次郎吉氏は

「ふっふっふ。じゃから、今回はこの入り口を囲む警備員達に、キッドの姿を確認できた場合を除き…つまり声だけ、とか情報だけしか分かっていない状況の時は、決して持ち場を離れるなど命じておる。」

そういつて、警備員の一人に近づき、ほほをつねって見せた。

「さらに、このように警備員がキッドの変装でないことは調査済みじゃ！」

自信満々の次郎吉氏。

「分かった分かった。今回もじーさんの作戦で行こう。」

反対しても意味が無いと知っている中森警部はなかばあきらめているような喋り方でそういつた。

「どう？今回は怪盗キッドを捕まえられそう？」

灰原がたずねる。

「わかんねーよ。次郎吉さんもいつもながら色々考えてはいるけど…な。」

「そうね。まあ、せいぜい頑張るのね。」

「お前も頑張れよ…。あ、そうだ、探偵バッジの通話機能、俺のとないだままにしといてくれ。」

「？どうして？」

「何かあったとき、お互いの様子が分かるだろ？考えたくはねーが、以前奴は俺をスタンガンで眠らせたこともあるからな。」

「はいはい、分かったわよ。」

そこへ…。

「お父さん、じゃ、なかった…中森警部！人員の配置、完了しました！」

警備隊がつけるヘルメットのせいではつきりとは分からないが、まだ若い、蘭と同じくらいの年頃の女性がやってきた。

「青子。お前はまだ学生だろ。警察官になるまでは『中森警部』ってのはやめろ。」

「中森警部、その子は…」
おっちゃんの問題かけに顔をニヤつかせながら警部は答えた。

「わしの娘だ。警察官を目指していて、就職できたあかつきにはわたしと一緒に怪盗キッドを捕まえるよう頑張りたいたいと言ってくれてな。社会勉強もかねて、今夜の警備に参加してもらってるんだ。」

「あら、いつも部外者があまり多いのはいい顔しないのに、彼女は別なのね。」

嫌味たつぷりの灰原の台詞も聞き流している警部。

確かに、娘が自分と同じ道を歩んでくれるのは嬉しいものかもしれない。

「毛利探偵に、コナン君ね。いつも父から話は聞いています。中森青子です。」

そういつて彼女はヘルメットをとった。

「今日はよろしくお願ひします。絶対に、絶対に私の手で、あの悪党を…かいと…怪盗キッドを捕まえてやるんだから！」

「あら…？お姉ちゃんにそっくりね…。」

「そうだな…。蘭…ねーちゃんに似てる…。」

「そうかあ？蘭の方がもうちょっときつそうな顔だろ。」

驚く俺と灰原。青子さんの顔立ちは蘭にそっくりだ。おっちゃんにはさすがに自分の娘とは違うように見えているようだ。

「ヴェスパニアの王女様の方が似てたよ。おなじくらい気が強そうな顔だった。」

「悪かったわね、気が強くて、きつい顔で。」

その時、後ろから蘭が現れた。

「どこ行ってたんだ？蘭。」

「私なりに怪盗キッドが現れそうなところをチェックしてたのよ。」
俺はふと、目の前の蘭が本物か気になった。怪盗キッドが蘭に変装したことはこの数年、何度かあったことだ。しかし、俺がその事を

言う前に…。

「あひゃ？いたたたた…。」

「あら、キッドじゃなかったわね。」

青子さんが思いつきり蘭のほほを引っ張った。

「ごめんなさい。でも、キッドだったら大変だから。ほほほ…。」

「あーびつくりした。」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔の蘭。あまり悪びれた様子の無い青子さん。まあキッドじゃないと証明できたからよしとするか。

「あの人、お姉ちゃんに何か個人的な恨みでもあるのかしら…？なんか引つ張り方が強かったけど…。」

「蘭が他人の恨みを買うようなことは無いと思うがなあ。」

…びつくりした。あれが中森警部の娘さんの、青子ちゃんね。

そして、快斗の元想い人。たしかに私に似てるかも。新一も哀ちゃんも驚いてたし。

私がおうのは初めてだけど、快斗は彼女に私のことを話したことがあるみたいだから…。

『わりい、青子に写真見られてさ。蘭のこと、付き合ってるって、話しちまった。心配するな、青子は俺の正体が怪盗キッドだってことは知ってるけど、怪盗キッドを捕まえたいのであって、俺を警察に突き出す気は無いから。白馬の奴と同じ考えみたいだ。それと、蘭は俺の正体を知らないってことにしてある。なんで…知ってるなんて言ったら、いざという時に共犯扱いされちゃうだろ？だから蘭も、俺がもし捕まるようなことがあれば、俺の正体は知らなかったことにするんだぞ。』

だからきつと、『怪盗キッドの共犯者に対する宣戦布告』ではなく『幼馴染の今の彼女に対する宣戦布告』だったのね。

怪盗キッドはけっして許せないけど、快斗を嫌いにもなれない。複

雑な感情が彼女の中で渦巻いているのね…。

とはいえ、私は今回は快斗の手助けをする気満々。どうせ狙いの宝石じゃなかったらお返しするんだしね。

とりあえず、警備体制と警備方法をこっそり快斗に知らせなくちゃ。私はみんなから見えない位置で、携帯を取り出した。

「げっ！青子も居るのかよ！」

蘭からのメールを見て驚く俺。いつもどおり白いスーツにマント、ハットを用意し、いつでも行けるようにスタンバイしていたのだが、予想外の展開に戸惑ってしまった。

「蘭のやつ、大丈夫かな…。青子は蘭が俺の正体を知らないと思じてくれたけど、だからといってマークしないではいられないだろうしな…。」

本当は蘭がなんと言おうと、俺は今日の作戦に彼女を引っ張り出す気は無かった。しかし、いつも手伝いをしてくれる寺井が急に風邪をひいて寝込んでしまったため、蘭の協力を断れなくなってしまったのだ。

「まったく…いい歳こいて、アイドルの野外ライブなんかに行ってるからだぜ…。」

ぶつぶつ言いながら、警備体制を確認した上で、俺は今日の作戦の最終準備に取り掛かった。

…。

怪盗キッドの予告時間を少し過ぎた頃。

結果だけを言えば、俺達はまんまとやつに出し抜かれた。

部屋の中に投げ込まれた煙玉、次郎吉氏はそれに反応してすぐに檻を閉めたが、煙は廊下まで流れ全てを包み込んだ。

煙が晴れると、窓からキッドのハンググライダーが見え、『それで

は宝石はいただきました』との台詞。あわてて檻を開け、みんなでシヨーケースを確認すると、中身は空っぽ。そこで中森警部達はキツドを追って出て行ってしまった。

俺も追いかけてはいたのだが…。

「どうしたの？工藤君。」

「いや…あの状況ではどう考えても盗むのは無理だ…。ってことは…しまった！」

俺は一つの可能性に気づき、展示室に戻って駆け出した。

少し戻ったところで、展示室のほうから蘭が走ってくるのが見えた。

「どうしたの、新一！」

「ハングライダーはフェイクだ。おそらく、人形か何かを飛ばし、スピーカーで声だけ出しているんだ。そして、キッドはみんなが宝石を確認しにシヨーケースに駆け寄ったときに、誰にも気づかれなないように素早く、中の宝石を盗んだんだ。」

「でも、あの時駆け寄ったのは私と園子と次郎吉さんとお父さん、みんな変装でないことはチェック済みだったけど…。」

「廊下まで流れた煙、あの一瞬で入れ替わったのさ。そして、みんなが出て行ったのを確認してから悠々と逃げようとしていた…。そうだろうか？」

俺は蘭を見上げた。いや…蘭ではなく、

「怪盗キッドさんよ…。」

「そうだろうか？怪盗キッドさんよ…。」

新一が私を見上げてそう言った。

作戦成功…！私は心の中でそう思った。

そう、私は真正銘毛利蘭だ。快斗は実はまだ展示室に隠れている。今回の作戦は寺井さんが参加できなくなったことにより急遽たてなおしたため、多少お粗末なものになってしまっていた。新一ならすぐに見抜く程度に。

そこで、私の出番。

ここで私が本物のキツドのふりをし、新一の目を私に向ける…！

「へ、へ…よくわかったな、名探偵。」

快斗の口調を真似し、私は言った。

「でも残念、お前一人じゃ俺は捕まえられねーぜ。」

声は私のままでけど、怪盗キツドは声色を変える名人。多分気にならないだろう。

「てめー、その声色やめろよな！」

あれ？嫌がってる…。

それに、私が怪盗キツドだと信じて疑ってない。

ちよつと面白くなった私は、この際だからふざけてみた。

「おや？名探偵、彼女の声じゃ、集中できねーのかな？」

キツドの口調を真似して、地声で尋ねてみる。本物のキツドなら私の声を真似して、自分の口調で話しているところ。あべこべね。

「彼女じゃねーよ！」

むきになる新一。

「おいおい、むきになることねーだろ。このねーちゃんは、お前の彼女じゃなかったか？」

『怪盗キツド』は工藤新一の正体は知っているが毛利蘭と（私と）別れた（っていうか付き合っすらいないけど）ことは知らない…
ことになっている。

私はそんな状態の快斗がいかにも言いそうなことを、いかにも言いそうな口調で言ってみた。

「バーロー！俺の彼女は…俺が今一番好きなのは灰原だ！」

真っ赤になりながら腰のベルトからサッカーボールを射出する新一。
わざわざ宣言までしなくてもいい事を宣言しちゃうなんて、ちよつと妬けるけど、可愛くてしかたがない。

「喰らえ！」

新一のシュート！しかし私は難なくかわす。新一は腕時計型麻醉銃をかまえていたが一瞬驚いたような表情を見せる。

それもそのはず。怪盗キッドなら…快斗なら、おそらく今のシュー
トを避けれたとしてもバランスを崩し、麻酔銃にあたっていただろ
う。新一もそれを狙っていたはず。

でも、相手が悪かったわね、新一。

私はこう見えても拳銃の弾丸くらいまでのものならバランスを崩さ
ず避けることができるのよ。

麻酔銃発射！しかし、バランスを崩していない私はそれもあっさり
と避ける。

「あばよ、新…名探偵！」

一瞬新一、と言いかけたが、なんとか訂正し、新一の横をすり抜け、
私は走り出した。

「こら！待て！怪盗キッド！」

新一も走り出す。しかし、小学生と大人とでは脚力に違いがあり、
徐々に私は差を広げていった。

頃合ね…！

「こら！待て！怪盗キッド！」

避けられるとは思っていなかった。シュートだけでなく麻酔銃まで
かわされたことに驚いた俺は、一瞬追いかける出足が遅れた。

今までのあいつとの対戦経験から、この連携なら確実にしとめられ
ると思っていたあてがはずれた。

「くそっ！あいつあんなに動きがよかつたか！？」

相手はやはり大人。一生懸命追っても徐々に差は広がっていく。

キッドが角を曲がり、俺も曲がる。先のほうには丁字路、どっちに
逃げた…！

とにかく右に曲がった俺は誰かにぶつかった！

ドスン！

「いたたた…。し、新一！」

それは蘭だった。…いや、本当に蘭か！？

「悪い、蘭！」

俺はすかさず蘭のほほを引っ張る。しかし、

「いひゃひゃひゃ！いひゃいよ新一！」

ほ、本物だ！ってことは…。

「それより新一！あっちの方に私が…私が走っていったんだけど…

！あれって、怪盗キッド！？」

くそっ！逆方向だったか！

俺はあわてて駆け出したが、すでに奴の姿は無かった…！

私の指差す方向にあわてて駆け出す新一。

作戦大成功！これで新一もキッドは外に逃げたと思うはず。

そうこうしているうちに、快斗はどこにでもいそうな一般客に変装して、宝石を持って逃げているはず。

それにしても、あの名探偵で、いっつもなんでもお見通しみたいな顔をしている大馬鹿推理之介を出し抜くのって、なんだか快感かも…。

快斗の気持ちがあつた気がする。

ガッシャーン！！！！

遠くでなにやら派手な音がする。びっくりして見に行くと、

「いててて…。」

「し、新一！大丈夫？何やってんの！？」

あんまりあわてて駆け出したためか、階段から転げ落ちた新一の姿が…。

その夜。

「おいおい、大丈夫だったのか？名探偵は。」

俺は自宅で蘭と話していた。宝石は結局目当てのものではなかったため、鈴木次郎吉氏にこっそり返しておいた。

「大丈夫よ。擦り傷と青痣つくつたくらいで。」
あきれたような顔の蘭。

「しかし…。もう蘭には危ない橋を渡らせたりしねーからな。」

「なによー。寺井さんにはいつつも手伝ってもらってるのに、私じや不安？」

「ばーか。蘭を危ない目に合わせたくねーんだよ。あー…あいつ風に言つとだな…俺が今一番好きなのはお前だから、さ。」

絶対顔紅くなってるよな、俺…。

「…嬉しい。ありがと、快斗。」

そういうと、蘭は俺にそつとキスをした。

その夜。

「まったく…。大丈夫なの？名探偵さん。」

俺は阿笠博士の家で灰原と話していた。階段から落ちてあちこち怪我をした俺の手当てをしてくれているのだ。

「大丈夫だよ。擦り傷や青痣つくつたくらいだろ？」

しかし、あきれたような顔の灰原。

「でもね、彼を追いかけている時、余計な雑念が入ったから、怪我したんじゃない？」

「な、なんだよ、俺とあいつの会話、聞こえてたのかよ。」

「探偵バツジのスイッチ、入れたままになってたでしょ？しっかりしてよね。でも、ちょっと嬉しかったのよ。…私が今一番好きなのも貴方よ。」

顔を真っ赤にする灰原。可愛い。

「…バーロー。」

そういつて、俺は灰原にそつとキスをした。

第17話 「泥棒はまだできないけど、きっと覚えます、なんて。当時、本当に

ここ数話で蘭ねーちゃんのキャラが完全にぶっ壊れていますが…。
気にしないでください。

というか、原作、特に映画のときの蘭ねーちゃんは私が描くもの
上にぶっ壊れている気がします。主に別の方向へ。

実際あんなの居たらどうみてもヤンデ…ごほんごほん。

第18話「主人公たるもの、好物ドラ焼き、苦手なものネズミ」というキャラ付

1月のある寒い日。

外は雪がしんしんと舞い降りて、行き交う人もまばらな昼間。

俺は例によつて灰原と二人で毛利探偵事務所でくつろいでいた。

「そういえば、お姉ちゃんはデートでしょ？迷探偵さんはどうしたの？」

「調査だつてよ。ま、浮気かなんかだろうけど…。」

「一人で大丈夫なの？」

「おっちゃんをあんまし馬鹿にすんなよ…。それより、今日博士は？」

「フサエさんとデート。夕方には帰るとか言つてたけど、無理やり夜までコースにしたのよ。私に気をつかわないでつて。」

リビングで推理小説を読む俺。灰原はキッチンでなにやらお菓子を作っている。

「いいにおいだな。何つくつてるんだ？」

「あとで食べさせてあげるから、おとなしく待つてなさい。」

「…俺はガキか。」

「あら、そのことに関しては異論はないわ。見た目も、中身もね。」
「…。」

その時。

プルルル、プルルル…。

電話が鳴った。

「はい、毛利です。」

「あら、毛利さんとの坊や？私よ、床前よ。久しぶりねー。元氣？小五郎さん居る？」

「おじさんは今日は仕事で出てます。なにか託でも？」

「あら、ならいいわ。久しぶりに声を聞きたかっただけだから。じやあねー。」

テンションの高い野太い女性声。俺はいつぞやボディガードをおつちやんに依頼してきたあの派手な女性を思い出さずにはいられなかった。

「随分太い声の女性だったわね。」

灰原が奥から話しかけてくる。この家の電話の会話の音量はかなり大きめに設定されており、離れていても声が聞こえるのだ。蘭曰く、「だって、こうでもしなきゃ、お父さんに女の人から電話があったりしたとき、ごまかされちゃうでしょ。」

「そういえば、もうすっかり『はい、毛利です』なのね。相手の方も『毛利さん』この坊や」だし。」

「あ？」

灰原の突然の意見に思わずアホっぽい声が出る俺。

「ねえ、あなた、いつまで探偵事務所に居るつもり？」

「いつまでって、今日は雪だから、外には出たくねーな。」

「じゃなくて、なんで今も毛利探偵事務所で生活してるの？ってこと。」

灰原の疑問も尤もだ。

第一、彼女が居るのに幼馴染の女と一緒に暮らしているのは、確かに変だ。

「工藤邸で一人暮らしでも良いでしょうし、なんならうち（阿笠邸）に来ても……。」

「いや、これには……訳があるんだよ。そういえば、お前にも、話したことはなかったな……。」

黒の組織を壊滅させた直後。

もともと探偵事務所に居ればやつらの情報をつかめるかもしれないと、転がり込んだのがきっかけだったため、この時点で俺は探偵事務所を出ても良かった。

しかし、この時、既に俺は工藤新一に戻れない運命が決定していた。流石に小学2年生が一人暮らしをはじめ、なんて言ったら蘭が反対するに決まっていた。母さんが変装した江戸川文代に迎えに来てもらい、海外へ行ってもよかったが、俺は日本を、蘭の傍を離れたくなかった。

「あら、お姉ちゃんの傍を？ 妬けるわね。」

キッチンから声だけ聞こえる。顔は見えないが、怒っているというよりからかっているようだ。

「うつせー、バーロー。」

きっかけはその1年後。蘭に俺の正体をばらした直後だ。

そう、この時点で俺が一人暮らしを始めることに対する障害はなくなったのだ。

無論海外へ行ってもよかったが、俺は日本を、灰原の傍を離れたくなかった。

「なーんか都合よく聞こえちゃっただけどー？」

キッチンからの声はさっきより面白がっているようだ。

「…バーロー。」

そこで俺は蘭と相談し、工藤有希子に迎えに来てもらい、工藤邸で暮らすことにしようとした。

俺は工藤新一の遠縁ということになっていたので、空き家になっている工藤邸を優作が貸してくれることになった、ということにして、おっちゃんを納得させようとしたのだ。

「じゃねーと、いくらおっちゃんでも変に思うだろうからな。」

「『いくら、でも』って…あなたも馬鹿にしてない？」

その数日後…。

「という訳だから、小五郎君。今までコナンちゃんの面倒を見てくれてありがとう。」

工藤有希子が探偵事務所を訪ねてきていた。

「なーに、いいつてことよ。しつかしコイツが一人暮らしか。」

「隣には阿笠博士もいるから平気よ。いつまでも小五郎君に迷惑かけられないでしょ？」

「まっただ。こーのマセガキには苦労させられてたからな。」

どっちがだよ…。

母さんがおっちゃんに、俺と蘭が考えた理由を自分達の考えのように伝えた。

おっちゃんとは高校の同級生。すぐに話はまとまった。

「で？いつごろここを出るんだ？」

母さんが帰った後、俺に聞いてくる。

「今週末には引越すよ。おじさん、今までありがとう。」

「バーロー。これでやっと、俺も肩の荷がおりるってモンよ。」

「出来たわよ。」

灰原がキッチンからレモンパイを持ってきた。

「おーうまそーじゃん。あれ？俺の好物知ってたっけか？」

「あら、私、貴方のことなら何でもお見通しよ。…なーんてね。お姉ちゃんに聞いたのよ。レシピも教えてもらったの。」

「どれどれ…」

俺は一口食べて驚いた。

「…美味しい。」

「あら、そう？さすがお姉ちゃんのレシピね。」

「いや…。なんつーか…。先輩が作ったやつより、蘭が作ったやつより美味しい。すげーな、灰原。」

本音だった。レモンパイは確かに好物だし、いろんな人が作ってくれたのを食べたが、本当に一番美味しいと思った。

「…本当？」

「ああ。俺は自分の舌に嘘はつかない！」

「それは…嬉しいわね。」

母さんが帰った後、夜。

蘭も大学の講義が終わった後真っ直ぐ帰って来て、おっちゃんといと3人で食卓を囲んでいた。

「そつか…しん…コナン君、本当に出て行っちゃうんだね。仕方がないけど、ちよつと寂しいかな。」

仕方がない。やはり、俺が工藤新一だと知った蘭の正直な感想だろう。

「ま、家は近いんだから、たまには顔を出せよ。たまにで良いからな。あんまししょつちゅう来るとうざい。」

「お父さん！そういう言い方はないでしょ…！」

「お、怒るなよ、あれだ、言葉のあやだ。」

なんだかんだ言いながらも夕飯が終わり、蘭は大学の研究室に提出するレポートをまとめると言って部屋に行った。

「さーて、俺ももう寝るか。今日はヨーコちゃんが出る番組もないし、明日は素行調査だからな。」

「早いね、おじさん。まだ10時だよ？」

「うっせー。たまにはいいだろ？お前も、夜更かしすんなよ。」
「はい。」

「…ちよつと、美味しいって言うてくれるのは良いけど、そんなに一気に食べると小嶋君みたいになっちゃうわよ。」

「いや、マジうめーって。」

「あなたがメタボったら、博士と一緒にメニューになるってこと、忘れないほうが良いわよ。」

「…自重します。」

夜中の1時をまわった頃。

俺はふと目が覚めた。何者かの話し声が聞こえたからだ。

蘭は一人で勉強中だし、おっちゃんは寝たはずだ。まさか泥棒！？
おそるおそる、俺は声のするほうへ忍び寄った。

「…ああ、…そうだ。」

ドアをほんの少し開け部屋の中を覗くと…。

「悪いな、こんな夜遅くに。」

おっちゃんだ。

おっちゃんが誰かと電話で会話しているようだ。こんな時間に何をこそこそ？

気になった俺は、悪いと思いつつも聞き耳を立てはじめ。

『いいのよ。でも、コナン君が一人暮らし…か。』

音が大きめに設定されているこの家の電話からは、相手の声が聞こえてくる。

妃弁護士だ。蘭の母親で、おっちゃんの別居中の妻。

「あいつの前では居なくなってる肩の荷がある、なんて言ったが…。」

「

『言ったが…?』

「なんだ、本当に出てっちまうかと思うと、無性に寂しくてな。」

『あらまあ。私が出て行くときは何も言わなかったじゃない。』

「バーロー。本人を目の前にして言えるか。お前が出て行く時だつて、本当は俺は…いや、なんだ、それは関係ねーだろ、今は。」

『ふふ、そうね。』

「…。俺はな、英理。アイツには随分助けられたと思ってる。」

『そうね、あの子が来てからだものね。あなたが眠りの小五郎として世間に騒がれはじめたのは。』

「そんなんじゃないやねえ。俺は…俺はアイツが来るまでは、蘭におんぶに抱っここの頼りない親父だった。蘭をどこかに連れて行ってやったことも、いや、蘭と一緒に出かけたことすら殆どなかった。」

『そういわれてみれば…。』

「コナンのおかげさ。アイツが来てから、俺は自分自身を見つめ直せたと思ってる。なんせ小学生のガキだ。曲がりなりにも一家の主の格好悪い姿は見せられないだろ?」

『そうね。父親代わり、ですものね。』

「釣りやドライブ、観光旅行、麻雀だって、探偵業だって一緒にやってきた。それにコナンのやつは、どうか俺にしているような気がするんだ。」

おっちゃんの声が少し大きくなってきた。

『そうね。そういえば…時々表情とか、喋り方とか、仕草まで似ていることがあるわね…。あなたの隠し子なんじゃないの?』

「バーロー…。でもな、英理。コナンは、俺にとってはもう本当の息子みたいなもんだ。」

『…あなた…。』

「もちろん、違つのはわかつてる。いつかはこの家を出て行っっちゃうことも、分かっていた。そのはず…なのに…。」

『あなた…泣いてるの?』

「…無性に、寂しいのさ。まるで本当の息子と別れるみてーだ。」

俺は、それを聞いて胸が熱くなるのを感じていた。

おっちゃん俺のことを厄介なガキだとしか思っただろうと、思っていた。

まさか、そんな風に思っていてくれたなんて、嬉しかった。

「新一も、泣いてるの？」

はっと気づくと、後ろに蘭が立っていて、小声で話しかけてきた。

「ば、バーロー。泣いてねーよ。」

「…。ねえ新一。やっぱり、さ。これからもこの家に居ない？」

「え…？」

「だって、あんなに寂しそうなお父さん、初めて見るもの。」

「おっちゃん…。」

「そう、それで…。」

灰原が納得したように頷いた。

「ああ。その後は、また母さんに協力してもらって、どうにかこうにか一人暮らしの話を白紙に戻したのさ。」

「毛利探偵、喜んだ？」

「バーロー。おっちゃんがそんな素直なタマかよ。…でも、蘭曰く、

『ああみえて、お父さんすごく嬉しいんだよ』だよ。」

「へ…。なんか、いいわね。」

「ああ…。工藤新一の親は工藤優作だけど、江戸川コナンの親は、毛利小五郎だよ。はつきり、そう言える。」

「ま、私も、今の私の肉親は博士だけ。…言い換えれば博士は肉親だって思ってるけどね。」

「…俺たち、恵まれてるよなあ。」

結局2人でまったりしながらレモンパイを全て食べてしまった。どうしよう、本当に元太みたいになったら…。

「そんなに美味しかったのなら、またいつでも作ってあげるわよ。」

「おっ！サンキュー！でもこれ、本当にレシピ通りなのか？本当に

なにかプラスを感じるぜ？」

「それはそうよ。私があなたに作ったんだから。愛情がこもってるのよ。」

最近はこのなこっぱずかしい台詞もいつも通りのクールな笑顔でさりげなく言える灰原。

俺のほうが顔を真っ赤にしまった。

「さて、じゃあ、せっかく一緒に居るんだから、別々で本読んでないで、ゲームでもする？」

「そ、そうだな。じゃあこの間のクエスト手伝ってくれよ。」

「あなた、まだそこから進んでないの？本当にこっぴつのは苦手なのね。」

「いいじゃねーかよ！…ところで、今日晩飯どうする？」

「…若いわね…あんなに食べた後晩御飯の話なんて。」

「おっちゃんがどっか連れてってくれるかもしれないぜ？」

「あら、あの迷探偵さんが、調査終わったあと飲みにも行かず帰ってくるかしら？」

「バーロー。俺の親父を信用しろよ。」

数時間後。

「あれ？小五郎ちゃん。今帰るか？」

「おう、事件の調査も無事終了だ。」

「じゃあ、どうだい？今から一杯。蘭ちゃんもさつき出たぜ？」

「いやー、今日は遠慮しとくぜ。」

「なんだよ、最近付き合いくねーぞ？」

「コナンが家で待ってるからよ。まあおそらく彼女も一緒だろうが。」

「へー、なんだい、コナン君、あの歳でもう彼女持ちかい。手が早いねー。血は争えねーな。」

「アイツは俺の子じゃ…。いや、…まあな。」

「でも、だったらなおさら良いんじゃないかねーの？」

「バーロ」。カップルとはいえ、子供2人を放つといて飲みに行けつかよ。せつかくだから2人連れて、なんか飯でも食いにいくこと思ってるんだよ。」

「はー、そういうモンかね。」

「そういうモンだ。俺あアイツの…コナンの父親だからな。」

第18話「主人公たるもの、好物ドラ焼き、苦手なものネズミ、というキャラ付

工藤新一の親は工藤優作だけど、江戸川コナンの親は、毛利小五郎。それが言いたかった。じっさい推理力だのなんだのは優作に似てるし、原作で灰原もそう言ってたけど、喋り方や仕種はむしろおっちゃん似だよ、コナン君。長年（！？）一緒に暮らして、しょっちゅう毛利小五郎を演じたりもしてたからそうなったのか…あるいは…？

第19話「今日はあの忌々しい…2月の中くらいの日だ！豆まきか…豆まきはい

今は2月。

ここは吹渡山荘。

私の名前は灰原哀。

「…はあ…。」

なぐんで私、こんなところに居るのかしら…。

そう、事の起こりは数日前…。

「で？哀ちゃんは、あのガキンチョに渡すチョコレート、どうするの？」

その日、茶髪の、あのかしましいお嬢様が、本屋で医学書を立ち読みしていた私に話しかけてきた。

「ええ。まあ。ちよつと良さそうなのを見つけたから、もう買っているわ。」

「駄目よ！そんなんじゃ！」

お嬢様は突然声を大きくした。

「は？」

「付き合い始めて初めてのバレンタインでしょ！？だったら、手作りよ！手作り！」

「はあ…。」

「ねえねえ！恋が成就するってチョコレートを作れるっていう、有名な山荘があるんだけど、一緒に行ってみない？」

「いや、私、もう成就してるし…。あなたもそうじゃ…。」

「よし！決まりね！じゃあ明後日！迎えに行くからね。」

…凄い勢いでどうでもいいことを勝手に決められた気がする…。

そして今日。

「なんじゃ、またあんたか。確か…鈴木園子さん、じゃったな。」

「お婆さんお久しぶりです。今年もお世話になります。」

「どうも…。」

「よろしく願います！」

「おお。今年は以前に一緒だった娘とは違う面子じゃな…。」

園子さんは以前にお姉ちゃん（蘭）とここに来たことがあるらしい。山荘のお婆さんと親しそうに会話をしている。

しかし、今回は…。

「ええ。こっちの小さいのは灰原哀ちゃん。それと、こっちの子は遠山和葉ちゃん。」

「よろしくの。じゃあ、立ち話もなんだし、中に入りんさい。」

「…はい。」

そう。和葉さんが一緒。

私はこっそり園子さんに耳打ちした。

「なるほど。恋を成就させたいのは彼女、って訳ね。」

「そゆこと。皆でわいわいしていた方が彼女も自然に居られると思つてね。」

なかなか友達思いのお嬢様だ。

「じゃあ、なんでお姉ちゃんは一緒じゃないの？どうせ黒羽さんにチヨコレート渡すんでしょ？」

「それが…今蘭と和葉ちゃん喧嘩中なのよ…。」

「え…？珍しいわね…。」

「蘭の彼氏、黒羽くん？彼つて新一君そっくりじゃない？」

「ええ、そうね。」

「それを知った和葉ちゃんが蘭に『やっぱり新一君に未練があるんじゃないか？』みたいなことを言ったわけよ。」

「あら。」

「そしたら蘭がむきになって『新一と快斗は全然違う！』って主張を始めて…。」

「お姉ちゃんも時々やたらと頑固なものね。」

「そーなのよ。それで二人はヒートアップ。私が仲裁するのも聞かず、その日は喧嘩別れ。」

「二人とも熱くなったら止まらない性格なのよね。」

「で、結局今回は蘭を誘わなかったのよ。」

「ま、賢明だったんじゃない？でも、どこかで仲直りさせてあげないかね…。」

「…。」

「どうしたの？園子さん？」

「…。あんたと話していると、まるで同じ年の女の子と会話してるみたい…。歳ごまかしてんじゃないでしょーね。」

「や、やだなあ園子ねーちゃん、私、子供だよー。」

「…ガキンチョの真似？」

「しかし、今年は客が多いのお。」

お婆さんが呟く。ロッジの中に入ると、なるほど、私達の他にも何グループか、女性たちがきやあきやあ盛り上がっていた。

…みんなヒマなのね。

ひととおり辺りを見渡す。ふと、ある女性に目がとまった。どこか見たことあるような…。

「あ！あなたは！確か由美さん！」

園子さんがその女性に気がつき、声を上げる。

「げ！そ、園子ちゃん！哀ちゃん！それに…。」

「知り合いなん？」

「警視庁交通課の宮本由美さんよ。高木刑事や佐藤…いえ、高木美和子刑事と仲が良いの。」

「へー、そーなんか！。うちは遠山和葉。よろしゅうな。」

「よ、よろしく…。」

「っていうか、どうして由美さんが？ま、まさか、遂に由美さんに

もチョコを渡すお相手が…！」

「人を万年恋愛日照りみたいに言うな！」

「だってだって、由美さんってどっちかって言うと人の恋路で面白がってるっていうイメージが…」

「そうね。園子さんと似たタイプだと思ってたわ。」

「そうそう。私と似たタイプ…って！どどういう意味よ！」

「なかなか言うやん…この子…」

「私にだってチョコを渡す相手くらい…居る…訳ないのよねえ…。」
ため息をつく由美さん。

「美和子もすっかり『高木の妻』になっちゃったしさ…。苗子ちゃんも今年は本命チョコでアタックするって…。私の周りのみーんがうまくいつてるのにさ…。」
そう言って私達を見る。

「哀ちゃんにはコナン君が居るし、園子ちゃんだって彼氏が居るのよね？…和葉ちゃんは？」

「あ、その…彼氏はおらへん…。気になってる奴は…まあ、その…。」

「そっか…。駄目よー気になってる人には一気に攻撃を仕掛けないと。お姉さんみたいな抜け殻になっちゃうわよー。」
抜け殻って。

「そーゆーわけで、私はあの子の付き添いで来ただけなのよ。」

由美さんがくいつと顎で示した先では、由美さんよりも若干若い、猫目でツインテールの女性が熱心にチョココレートのデコレートをしていた。

「三池苗子ちゃん。さっきも言ったけど、なーんか今年こそ好きな人に告白するって張り切ってるのよねー。」

みいけなえこ。…三毛猫？可愛い名前ね。私はそーっと近寄り、こっそり彼女のチョココレートを覗いてみた。

「哀ちゃん…。どんなかんじー？」

本当にダレダレで、やる気がなさそうな由美さん…。

「はつきりとは見えなかったけど、to Chibbaってデコレートしてたわ…。」

「え！うそ！千葉…って、千葉君!?!」

とたんに跳ね上がる由美さん。

「うわ、元気になった。」

「目、目が輝いとる…。」

…どうやら彼女に餌を与えてしまったようだ。由美さんは三池さんの方へすっ飛んでいってしまった。

呆然としていた園子さんが我にかえり眩く。

「…和葉ちゃん、哀ちゃん。私、あーゆる風にはなりたくない…。」

園子さんのその言葉に、私と和葉さんは思わず顔を見合わせた。

お互いに何も言わずとも、同じことを考えていることは目を見れば分かる。

「…そうは言ってもキャラだだ被り…。」

その後、私達はチョコレート作りに奮闘し、なんとかそれぞれ納得がいった物を作ることに成功した。

帰り際、園子さんが和葉さんにアドバイスをしている。

「いい？服部君もニブイんだから、チョコレートを渡すとき、はっきりと告白するのよ!?!」

「で、でも、恥ずかしいやん…。」

「だめよ！何も言わないで渡したら、幼馴染なんだし、義理だと思われるかもしれないわよ!」

heiji loveとデコレートされた普通の2倍くらい大きなチョコレート、義理だと思っとうほがどうかしてる…。

「でも、ここまでやれば、言わんでも普通気づくやろ?」

「甘いわね…チョコレートだけに!」

「…うまくないで?」

「服部君がそれで気づくような人だったら、もうとっくに和葉ちゃ

んの気持ちに気づいてるわよ!」

…なるほど。

「な、なるほど…」

「でしよでしょ?だから、きっちりかつちりしっかり告白するの! じゃないと、いつまでたっても幼馴染よ!」

「う、うん…」

和葉さんは考え込んでしまった。

「…どうしたの?」

「哀ちゃん…。いや、な…。蘭ちゃんの言葉を思い出してしても…。蘭ちゃんは工藤君のこと好きやったけど、それは恋してただけで、愛じゃなかったって…。私もいつか、そう思ってしまう日が来るのやろか…。」

…。

私は言葉に詰まってしまった。もちろん、全ての人がお姉ちゃんと工藤君のパターンに当てはまるわけではないけれど…。

すると、園子さんが険しい顔で和葉さんに言葉を投げかけた。

「何難しい事言ってるの! 和葉ちゃんは今、現在、服部君が好きなんでしょ!? なら、その気持ちをぶつけるの! それでいいの!」

和葉さんが園子さんのテンションにきよとんとして見返す。

「将来その気持ちがどうなるかなんて解らないわよ、誰にも。気持ちが冷めちゃうかもしないし、愛が深まるかもしれない。それは、その時考えるの! 私達今を生きてるんだから。今、このとき、後悔しない選択をするの!」

「さ、さすが園子ちゃんや…。説得力あるわ…。わかった! 私、平次に告白する! ありがとう、園子ちゃん!」

和葉さんはそう言いきった。

…やはり、このお嬢様は凄いと思う。お姉ちゃんとは別の強さを感じる。

…本当に、敵わないわね。

2月14日。

俺は学校の帰り道、歩美達と別れて灰原と2人で歩いている途中、彼女に小さな包みを渡された。

「まったく…。工藤君のお友達のおかげで、手作りチョコになっちゃったわよ。」

「手作り!? そ、そりゃ嬉しいな…。サンキュー、灰原。」

「来月、期待してるわよ。」

「お前なあ…。」

そういいながらも、俺は包みを開けてみた。中には一口大のハート型のチョコレートがいくつも入っていた。

「お、すげえ。綺麗にできてんじゃん。おめーやっぱ料理上手いな。」

そう言いつつ1つ口に運ぶ。

「ん！美味い！」

「そ、そう? よかった…。チョコレートは初めてだったから…。」
顔を赤らめる灰原。それが無性に可愛くて、俺はつい…。

「ん…。じゃあ、軽くお礼。」

そういつて、彼女の頬にキスをした。道行く大人が何人か好奇の目で見ていたけど、そんなの気にしない。いや、今更ながら、恥ずかしくはなつたけど。

「工藤君!…。もう…。そんなので、来月のホワイトデー、チャラにはしないわよ。」

「わーってるよ。」

それでも微笑んでいる灰原に、俺も口では面倒そうにしながらも、笑顔を向けた。

その日の夜、服部から電話があった。

「おう、どうした服部？」

「なあ工藤…。折り入って相談があるんやけど…。」

「なんだよ、あらたまって。」

「和葉のやつに今日チョコレートを買たんやけど…。」

「おう。」

「まあ今日はバレンタインデーや、いつもの義理チョコやる思ってたんやけどな？」

（いつもの、義理、って…あいかわらず鈍い奴…。）

「そんなときに和葉、俺に向かって『平次、いい加減、私の気持ちに気づいてや！』とか言いよって…。」

（おお！和葉ちゃん、遂に！）

「なあ工藤、どーゆー意味やと思う？いい加減義理をやるのも面倒いとか言いたかったんやろか？」

俺は盛大にこけた。

それはもう、蘭が心配して部屋を覗きに来るくらい派手な音を立てて、こけた。

…。

その後、服部に対し2時間以上にわたって俺と蘭から交互に説教が入ったのは言うまでもない。

「…あれ？以前にあの山荘でチョコレートを作った時、お姉ちゃんも一緒だったのよね？」

「そーよ？それがどうかした？」

「…その時のチョコレートは…お姉ちゃん、工藤く…工藤さんに渡したのよね？」

「ええ、そう…あつ！…！」

「そう。それって『恋が成就する』って伝説に反してない…？」

第19話「今日はあの忌々しい…2月の中くらいの日だ！豆まきか…豆まきはい

他愛も無いお話でした。まあカップルものではいつか通らなければ
ならないバレンタインものですね。

最後の「伝説に反して…」のくだりはこの小説だから反してしま
っているんですね。本編ではきつと伝説は成就…するのか…して
しまうのか…。

まあ、成就しないパターンって、『未完で終わる』以外ではちよっ
と考えにくいですがね…。

第20話「中学生生活なんてはるか遠い昔のこと、すっかり忘れちゃったよ(夕日

それは、春…。

「新一、今日入学式でしょ？そろそろ起きないと、間に合わないよ？」

「…おお…。って、もうこんな時間かよ！何でもっと早く起こしてくれねーんだよ！」

「私は新一の母親じゃないんですからね。」

「…。朝飯食わなきゃ間に合うか…。おっちゃんは？」

「さあ？昨日の夜から帰ってないもの。また徹夜で麻雀じゃないの？」

俺は今日から中学生になる。

蘭は今日から大学院生だ。

「おめーはいいのかよ、大学に行かなくて。」

「院生は適当な時間に研究室に行けば大丈夫よ。」

蘭は米花大学の犯罪心理学の研究室に所属している。刑事にでもなりたいのかと聞いたことがあるが、やんわり否定された。

「それより、ほら。」

「お、おう、行つてきまゝす。」

蘭に促され、登校の準備をし、俺は中学に…帝丹中学校に向かった。

「遅刻ぎりぎりなんて、珍しいんじゃない？」

校門に到着した俺に声をかけてくる灰原。

「うっせー。昨日発売の小説が面白くてな…。」

「あらそう。それより、クラス分け見た？」

「いや、まだだけど…。」

そう言つて俺は入り口に大きく貼り出されている新入生クラス割を
確認し始めた。

「えっと…俺はB組か…。灰原は…A組？」

「そう。別々のクラスになつちやっただわね。」

「くっそー、残念だなー。」

「あら、素直ね。」

「バーロー。…っと、あとは、歩美が俺と一緒に、光彦と元太はA
組か。」

A組からG組までである中学校にしては上手い具合に固まつたとも言
える。

「じゃあ後でね。帰りは一緒に帰れるんでしょ？ま、あの子たちも
一緒にしようけど。」

「ああ。」

俺達は教室の前で別れ、それぞれの教室へ入った。

「おい、あの子、ハーフ？」

「すげー可愛くねー？」

「お、俺、入学式終わったらアタックしてみようかな。」

「バーカ、はやりすぎだつてーの。」

クラスの男子たちがにわかには色めき立ち、今入ってきた赤みがかつ
た茶髪の美少女に注目が集まります。

彼女は小学校時代から一部男子の人気は高かったのですが、別の小
学校から一緒になつた方たちには一層際立って見えるのでしょう。

じっさい、コナン君と付き合うようになってから灰原さんは前以上
に綺麗になりましたし、物腰も幾分柔らかくなり、周りからの評価
もうなぎのぼりでしたから。

「うなぎ？食いてえな、うな重。」

「…元太君、人の心の中の言葉を読んでまで食欲を前面に押し出す
のはどうかと思いますよ…。」

僕の名前は円谷光彦。そして横に居る大柄な彼は幼馴染の小嶋元太君。

「それより光彦、部活決めたか？」

「いや…。塾もありますし、帰宅部でも良いかと思って…。」

「なんだ、つまんねー奴。俺はサッカー部にもう入部してきたぜ。」

「も、もうですか！？相変わらず行動力は人一倍ですね…。」

そう、彼は行動力も体格も人一倍で、走る以外のスポーツは全般得意なのです。

僕はどちらかといえば運動音痴な部類に入りますので、そんな彼を羨ましくも思います。

と、灰原さんがこちらに気づいて歩いてきます。

「円谷君、小嶋君、同じクラスね。よろしく。」

「おう！よろしくな、灰原！」

「よろしくお願いします、灰原さん。でも残念でしたね、コナン君と一緒にじゃなくて。」

「何言ってるの。」

軽く流しながらも頬が少し赤くなる灰原さん。いまだに僕や歩美ちゃんにからかわれるのは慣れないようです。

灰原さんが席に戻ると、何人かの男子が僕と元太君を取り囲み、口々に質問してきます。

「おい、お前、あの子と知り合いか？」

「同じ小学校かなんか？」

「彼女、名前なんていうの？」

「なあ、紹介してくれねえ？」

…正直うざいです。

僕自身、灰原さんには未練がありますが、それを押し殺して皆に忠告します。

「彼女は灰原哀さん。確かに僕らの小学校からの友人ですが、紹介とかはできません。もう彼氏がいるんです。」

「そうだぞ。俺らが言うのもなんだけど頼りがいのあるツケメンの

彼氏がな。」

「…元太君…。古いお笑い番組の見すぎじゃないですか…？それを言うならイケメンです。」

「彼氏！？マジで！？」

「おい、どんな奴だよ！このクラスか！？」

「なんて奴なんだよ！」

「隣のクラスです。名前は…。」

正直言ってしまうて良いのか迷いましたが、はっきりと言っておかなければ灰原さんに付き纏う男子が減りません。

僕自身が見たくないというのがありますが、なにより灰原さんはそういうのを極端に嫌います。

なので…勝手に名前を出してごめんなさいと心の中で謝ってから。

「名前は、江戸川コナン君。」

僕がそう言つと、一瞬へんな空気が流れ…そのあと爆笑が起こりました。

「こ、こ、こ、コナン…！？」

「はっはー、んな名前、冗談だろ…！？」

「おいおい、嘘つくんならもっとマシな名前考えろよ…。」

…。嘘ではないのに。

とはいえ、彼が転校してきた時、同じように自分もその名前を変な名前と笑ってしまっていたので、何も言い返すことが出来ません。

「人の名前を面白がってんじゃねーぞ。そんなのは、小学校低学年で卒業しとけ。」

元太君がまともなことを言って皆をたしなめています…！

そう、言われてみれば、僕たちはもう中学生。小学校1年生の頃の分別のない子供とは訳が違っんです。

こういうときの元太君は本当にしっかりしていて…自分が少々恥ずかしくなりますね。

入学式はつつがなく終わり、僕達は教室へ戻って出席番号順に自己紹介をしました。

灰原さんの番になると、先ほどの会話に参加していなかった男子はもちろん、僕の話聞いていた男子も一斉に注目します。

「帝丹小学校出身の灰原哀です。得意科目は理科と家庭科…。よろしく。」

なんでもない自己紹介。しかし、その大人っぽい口調と声に多くの男子はやられてしまったようです。

おかげで何人かの女子には睨まれてしまっています。

「おい、光彦。なんか灰原の奴女子に睨まれてねーか？」

そう、元太君が気づくほどに。

「ですね…。まあ灰原さんも昔と違って物腰が若干柔らかくなっていますから、じきに打ち解けられると思いますけど…。」

自己紹介が終わり、帰宅時間になると積極的な男子が灰原さんの周りに集まりました。

「俺、米花小少年野球チームのキャプテンだった星野。よろしくな！」

「…ええ、よろしく。」

「なあなあ、これからゲーセンかカラオケでも行かねー？あ、俺、相沢。米花北小出身。」

「さっきの自己紹介で聞いてたわ。」

「僕は杯戸小から来ました、新開です。理科が得意なんですって？僕もなんですよ、気が合いますね。」

「…あら、そう？私、最近の異常気象や自然災害に関してガイア理論の観点からいくつかの仮説を考えてみたのだけど、それに対して意見を述べてみてくれる？」

「え…？」

灰原さんが何やら難しい言葉を並べて周りの男子を徐々に威嚇し始めたので、僕は慌てて、

「あ、は、灰原さん！コナン君たちが待っているといけませんから、

そろそろ行きましょう!」

と、声をかけた。

「そうね。じゃあ皆、さよなら。」

一瞬ちよつとほつとしたような顔をして、灰原さんは立ち上がった。僕に対する男子の視線が少し痛かったけど、この際仕方がないでしょう。

「助かったわ、円谷君。正直、ああいうのは苦手なのよ。」
やっぱり。

僕と灰原さんと元太君は校門へ向かいました。

そこでは一緒に帰る約束をしていた歩美ちゃんが待っています。

「哀ちゃん、どうだった？新しいクラスは。」

「ちよつと居心地が悪いかな…。まあ、すぐ収まるでしょうけど。」

「おい歩美。それよりコナンはどうした？」

そう、待っていたのは歩美ちゃん1人。同じクラスのはずのコナン君の姿が見えません。

「それがさ！聞いてよ！」

なにやら歩美ちゃんが興奮しています。と、後ろからコナン君の声が聞こえてきました。

「わーっだから放せって！」

「いやですわ。ねえ、私と一緒に帰宅しましょうよ。」

「だから！俺は今日は約束があるし、っつーか彼女が居るんだって！」

歩美ちゃんの目が吊り上がり、怒りのオーラが発せられました。僕も振り返ってみると…。

な！なんと！綺麗な女の子がコナン君の腕に自分の腕を絡めて、一緒に歩いてくるのが見えます！

僕は思わず灰原さんを見ましたが、彼女は何事もないかのようなクールな表情でその光景を見つめています。

「ちよつと！石澤さん！コナン君が嫌がつてるじゃない！」

凄じ剣幕で歩美ちゃんがその女の子に食って掛かります。

「それに、コナン君にはもう決まった彼女が居るの！べたべたしないでくれる！？」

「あら、ごめんなさい。でも、貴女に言われる筋合いは無いわね。」

「と・に・か・く！今日のところはお引取り願います！」

「…仕方ないわね。じゃあ江戸川君？また明日！」

石澤さんという女性はそう言って、突然コナン君の頬にキスをしました！

ざわっ！

と勝手に僕は寒気を感じました。

怒りをむき出しにしている歩美ちゃんから炎のような気迫と、あくまで表情は変えない灰原さんから氷のような凍てつく波動を。

「だ、誰なんですか…。なんかどっかで見たことあるような顔でしたが…。」

彼女が去った後、恐る恐る口を開いた僕を歩美ちゃんがキツッと睨みつけ…そのあとすぐに困ったような顔になって語り始めました。

「実は私達のクラスでの自己紹介の時…。」

「コナン君！一緒のクラスで良かったね！」

「まあな〜。」

「あ、やっぱり哀ちゃんとは別のクラスになっちゃったのが悲しいんだ。」

「まあな〜。」

「あ、素直。でも自分が振った女の子相手にその台詞は無いんじゃない？」

「え、あ、いや、その、そういうつもりじゃ…。」

「ふふ、焦ってるコナン君可愛い！。冗談だよ。」

仲良く話す私とコナン君を見て、別の小学校出身の女の子たちがち

らちら羨ましそうに見てる。

「そうよね、コナン君カッコいいもんね。」

でも残念、コナン君には哀ちゃんがいるんだから。

「私は振られちゃったけど、二人は親友だし、どう考えてもお似合いだから、もう悔しいとかそういうのは無いの。」

「むしろ、絶対上手くいって欲しい。幸せになってもらいたい。」

「…。」

教室の、私達の席とは対角線上に、男子が大勢集まっている場所があった。

「なんだろう？私が気になって覗こうとすると…。」

「ああ、あれ？あれよ、有名な子役の。」

「石澤美香ちゃん。」

「杯戸小だったのよね。」

近くにいた女子が口々に教えてくれた。

「し、知ってます！一昨年のドラマでブレイクした…。」

「おう！俺も知ってるぞ！最近もよくCM出てるよな！コナンと歩美、一緒のクラスなのか！すげー！」

「うん、私もそう思ったんだけど…。」

男子に囲まれて楽しそうだった彼女だが、私はふとその視線を感じた。

「どうやら、コナン君を見ている。」

「分らないでもない。芸能人で結構人気もある自分に興味なさそうに他の女の子と話をしているカッコいい男子。」

「気にならない訳は無いだろう。」

「その程度に考えて、私も気づかないふりをしていた。」

「そうこうしている時、自己紹介をしましよと担任の先生の声。」

男子から順に、ということ、コナン君は結構早い段階で挨拶をした。

「帝丹小学校から来ました江戸川コナンです。得意なものはサッカーです。…名前に関する突っ込みは無しで、よろしく。」

「かっこいいー、とか、イケメン、とか、女子の黄色い声が飛ぶ。そして、石澤さんの番。」

「杯戸小学校出身の石澤美香です。みなさん、よろしくお願いいたします。」

ぺこりとお辞儀をする仕種はやはり可愛い。男子から歓声があがると、顔をあげた彼女は真っ直ぐコナン君を見つめ、言葉を続けた。

「えっと…江戸川君、でしたわね。私、貴方が気に入りました。お付き合いしません？」

え…？

教室中が一瞬静まり…。

「…ええー！！！！！！！！！！」

全員の驚きが響いた。

「そのあと大変だったんだから。何人かの男子はあからさまにコナン君を責めるし、他の男子は『夫婦誕生！』とか『お似合いカップル！』とか囃し立てるし。女子は女子で石澤さんに聞こえないように『なんにも自己紹介であんなこと…』とか陰口を言ったり、かとおえば『応援するね！』とか言う子もいるし…。」

歩美ちゃんが溜息をつきます。

「私もそんな騒ぎどうかと思って、彼女に『コナン君には彼女がいる』って教えてあげただけど…。」

「でも、あーという感じってことか。」

元太君ですら、呆れたような声を出します。

「哀ちゃん！大丈夫！私が絶対コナン君を守るから！」

「いや、守るって…。俺は大丈夫だよ…。」

そうは言いつつ疲れた顔のコナン君。

「芸能界で成功したお嬢様…ね。自分の人気や美貌に絶対の自信があつて、あの積極的な性格って訳ね。」

灰原さんはクールに分析しています。

「ま、私は貴方のこと信じてるけど、浮気なんてしたら抹殺よ?」

「バーロー。俺がんなことすつかよ。」

2人はいつも通り。彼らの関係がどうこうなることは無いだろうと思いつつも、僕は一抹の不安を感じてしまいました…。

ワシの名前は阿笠博士。灰原哀の父親のような男じゃ。

今日の入学式から帰ってから、哀君が久しぶりに地下にこもってしまつての…。

どうやらインターネット上の掲示板に何か書き込んでおつたようなのじゃ。

一心不乱にカキコする様子はちょっと怖かつた…。

しばらくしてからはいつも通り一緒にご飯を食べ、いつも通り談笑し、いつも通り就寝したのじゃが…。

気になつて、夜中、彼女の書き込みをなんとか調べだしてみたのじゃ。

どうやらスレ立てしてたようで…。そのタイトルが…。

『【NTR反対】彼に付き纏う女に鉄槌を下したい【泥棒猫抹殺】』
な、何があつたんじゃ、哀君…。

第20話「中学生生活なんてはるか遠い昔のこと、すっかり忘れちゃったよ」(夕日

やってしまいました：メインに絡むオリキャラ登場…。

あんまし好きくは無いんですが、そろそろ展開がマンネリしそуд
ったので、ぶっちゃけテコ入れです。

ようやく中学生にもなったし。

結構多くの方に読んで頂けているようで嬉しくて、ここまで続けて
くれました。

まだまだ続ける予定です。よろしければお付き合いください。

第21話「実は小五郎は一番女にモテる。女優、アイドル、教え子、弁護士…」。

石澤美香。

小学校1年生のときに子役としてデビュー。5年生になってドラマ「私の娘達。」にて女優雨城瑠璃の末娘役でブレイク。

その後子供向け玩具やファーストフード、子供服などのメーカーのCMに起用され、今最も注目度の高い子役として世間に認識されている。もつとも、そろそろ子役と呼べる年齢ではなくなってきたが、その演技力は多くの業界関係者から認められている。と、というのが調査結果に基づいた事実。

ここからは周囲の人間の彼女に対する主観的イメージ。

「すげー可愛いし、すげー頭もいい。スポーツも得意で、性格もいい。」(同級生男子A)

「可愛いと思うけど…。何か裏を秘めている感じがするんだよねー。」(同級生男子B)

「てめーあの子を振ったら許さねーぞ！」(同級生男子C)

「可愛い可愛い可愛い可愛い…彼女は可愛い…。」(彼女のファンクラブ会員番号1番の方)

「あの子うざい！絶対自分が誰よりも可愛いし、男子は自分のこと好きなのは当たり前って思ってる！」(同級生女子A)

「可愛いよねー。憧れちゃうなー。ああいう子になりたいー。」(同級生女子B)

「普通にいい子だと思うわよ？男子にあんなにモデルのは羨ましいけどね。」(同級生女子C)

「女優としての才能は申し分ないわ。ちょっと自信家だけどね。コナン君、彼女に言い寄られてるの？」(沖野ヨーク)

「…以上。賛否はあるが、総じて言えばちょっと自信家だけど実力

のある可愛い女の子ってとこだな。」

学校からの帰り道、俺は光彦に石澤さんってどんな人？と尋ねられ、
こう答えた。

今日は歩美と灰原が「女子の放課後シヨッピングデート」とやらに出
てしまっているの、俺は光彦と2人で歩いていたのだ。（元太
はサッカー部の練習。俺はまだ入部するかどうか決めかねている。）
「可愛いって…。それにそんなに調べてあるなんて、やっぱりコナ
ン君もまんざらでは無いんじゃないですか？」
ジト目で俺を見る光彦。

「バーロー。探偵たるもの、少しでも気になったらとりあえず調べ
る。基本だろ、基本。」

「どうですかねー。あんなに言い寄られて、少しは意識してるんじ
ゃないんですかー？」

「まあ、そりゃ、少しはな…。」

「あー！聞いてちゃいましたよコナン君！灰原さんに言ってるよー。」
「おいこら光彦！」

「冗談ですよ。逆にあれでも全く意識してないって答えた方が不自
然です。僕達は、まだ若いんですから。」

…俺はお前ほど若くねーよ。でもその発想はオヤジ臭いぜ、光彦。

「歩美ちゃんの話じゃ、休み時間はいつもべたべたしてくるし、昼
休みや放課後も…。」

そう言った光彦はふと後ろを振り返り、大きな溜息をついた。

「…あれですからね。」

「江戸川く〜ん。」

噂をすればなんとやら。石澤美香が俺達の方に駆けて来るのが見え
た。

「お、おう、石澤…。」

「いやですわ。美香、と呼んで下さい。」

屈託のない笑顔で俺を見つめる石澤。自信家で実力のあるお嬢様はその美貌のアピール方法をよくご存知のようだ。

「あら？今日は吉田さんと灰原さんは一緒ではないのですね？」

「あ、ああ。2人で出かけてるよ。」

「じゃあ、今日こそ一緒に帰りましょう？円谷君も、私が居ても構いませんよね？」

「え、あ、その…。」

口では色々言ってる光彦も、女子にはあまり強く出れないようで、しどろもどろになっている。

「じゃあお二人とも、行きましょう！」

二人とも、と言いながらしっかり俺の腕に腕をまわしてくる石澤。

「よせつて！俺には灰原が…。」

「あら、誰も見ていませんよ？」

「僕が見てますよ、石澤さん。」

「円谷君は口が堅い方…ですわよね？」

そう言っ上目遣いで光彦を見つめる石澤。そもそも惚れっぽい光彦は何も言えなくなってしまった。

「そうだわ！二人とも、今日は私の出演するドラマの撮影でも見学に来ませんか？」

「へ？」

「え？」

「では、行きましょう！」

半ば強引に決められてしまった…。どうも女の子に対して強く断りを言えないのは俺も光彦も一緒のようだ…。

私はその日、歩美ちゃんと2人でシヨッピングに出かけていた。

「哀ちゃん、この服なんか似合うんじゃない？」

「あら、歩美ちゃんの方が似合うわよ。私にそんな明るい色は…。」

「駄目だよー。いつつもシックな色のコーディネートしかしてないじゃない。たまにこういうのを着たら、コナン君びっくりして惚れ直しちゃうよ?」

「そ、そんな…。」
その時だった。

道の向こう側を、工藤君が石澤さんに連れられて歩いているのを見たのは。

「あ、あれ!」
歩美ちゃんも気づいたようだ。

「何やってんの、あの女!コナン君も…光彦君も!」

そう言う歩美ちゃんの言葉で、2人の後ろに円谷君も居るのに気づく私。

(工藤君しか目に入っていないってことかしら…。駄目ね、私も。)
「まったく!どうする?あとをつける?」

…。この子はなんだか知り合いのとあるお嬢様に似てきたような気がする。

「別にいいんじゃない?それよりショッピングを続けましょう?」

「いいの?ほっといて!」

「私は大丈夫。彼なら大丈夫だって知っているもの。」

「さすが哀ちゃん!おっとな。」

…内心はそんなにクールでは居られなかったけど、歩美ちゃんに心配させないようそう言った。

「ここがテレビ局よ。」

石澤に連れられてやって来たのは日売テレビだった。

中に案内され、受付を訪れる。

「あら、石澤さん。おはよう。そちらの子達は?」

「私の友達なの!今日は撮影の現場を見せてあげようと思って…。」

受付嬢と話す石澤。学校に居るときよりも幾分幼く見える。光彦もそう感じたようだ。

「なんだか何時もより子供っぽくないですか？」

「ああ…。彼女にとってここがホームなんだろうな…。」

「じゃあ学校はアウェイですか？人気もあつて友達も多い学校が？」

「そうね…。でも、彼女にとってここがホームっていうのは間違いないわ。理由があつてね。」

突然後ろから女性の声が！びっくりして振り返るとそこに居たのは…。

「雨城さん！」

「久しぶりね、コナン君。大きくなったわね…。小五郎ちゃん元気？」

「ハハ…相変わらずですよ。」

「まさかまだ英理ちゃんとヨリ戻してないの？じゃあ、まだ私にもチャンス有り、かしら？」

雨城瑠璃さん。おっちゃんの幼馴染で、今はベテラン女優として確固たる地位を築いている女性だ。

俺もある事件で顔を合わせたことがある。実際に会うには数年振りだが。

「こ、こ、こ、コナン君！知り合いなんですか！？」

「ああ、おっちゃんの幼馴染でな…。」

「おっちゃんて…小五郎さんの！？」

「ああ、お友達？ふふ、よろしくね。」

「つ、円谷光彦です…。」

雨城さんの微笑みに紅くなる光彦。と…

「お母さん！」

「ああ、美香ちゃん。」

そこへ石澤が走ってきた。お母さん…？

「あ、江戸川君、円谷君。雨城瑠璃さんよ。前にドラマで私のお母さんの役で共演したの。」

俺が雨城さんのことを知っていると知らず、ちょっと得意そうに紹介する石澤。やはりいつもより子供っぽい。

「し、知ってますよ。『私の娘達。』ですよね。」
光彦が応える。

「ええ。それ以来役のクセでお母さんって呼んでしまっぺロツと舌を出す仕種。ちょっと可愛いと思っぺしまっ。

「そ、それより、こちらです。あっちのスタジオで撮影を…。江戸川君、行きましよう？」

そう言っぺ、また俺の腕に絡み、ぐいぐい引っ張っぺいく石澤。

嫌がるのもさすがにおかしいと思っぺ、結局俺はっぺ行くことになっぺ。

「はあ…。大変ですね…コナン君。」

僕は軽く溜息をっぺしてしまっぺ。

「あら、美香ちゃんっぺたらコナン君のこと好きなのね？」

雨城さんが僕に話しかけてきます。

「はい…。でもコナン君には彼女が居るんです。綺麗で、頭がよくて、クールで、でも本当は優しい女の子です。」

「ふーん…。で、光彦君は、その女の子が好きなのね？」

す、鋭いです！僕はあたふたしてしまっぺ。

「…はい。でも、コナン君ととてもお似合いなんです。だから、僕は…。」

「諦めちゃ駄目よ。光彦君だっぺってもカッコいいじゃない。」

美しい、素晴らしい女優の雨城さんにそんなことを言っぺてもらえるなんて、僕はまた顔が紅くなっぺしてしまっぺ。

「でも、そっか…。美香ちゃんが…。」

「そっぺえば、石澤さんにとっぺテレビ局がホームなのは間違っぺいなっぺ言っぺましたよね。あれ、どうっぺ意味ですか？」

僕は疑問を口にします。すると雨城さんはちよつと悲しそうな顔をしました。

「…実は彼女は昔…。」

…。

…。

…。

「…と、言うわけなのよ。」

「そ、そうだったんですか…。」

僕は大変なことを知ってしまったのかもしれません。

スタジオの奥からはコナン君の迷惑そうな声と、それでも楽しそうな石澤さんの声が聞こえてきます。

「雨城さん…。どうなったら良いんでしょう？どうなったら、みんなが幸せになれるんでしょう？」

「それは分からないわ。誰にもね。」

ふうつと息を吐く雨城さん。

「まあそれはそうと、光彦君やそのコナン君の彼女には悪いけど、私は美香ちゃんを応援するわよ？」

「え…？どうしてですか？やっぱり、娘みたいに感じているから…ですか？」

「それとこれとは別。でもね、なーんか3人の関係が被るのよ。昔やんちゃボウズだった男の子と、天才的に頭がよく美しかったクールな女の子、その二人は周りが夫婦とからかう程の仲。そしてその男の子に恋をしていたぐるぐる眼鏡の女の子がいた…。そんな関係にね。」

「????？」

僕は意味がよく分かりませんでした。

ワシの名前は阿笠博士。近所でも有名な天才発明家じゃ。

今日も哀君の様子がおかしかった…。

帰ってくるなり部屋にこもってしまつてのう…。

まあそんなことはよくあるんじゃないが、今日はこもるなり中からどたどた音が聞こえてきての。

何事かと思つてこっそり覗いてみたんじゃない。(誰じゃ！人のことを

変態覗き魔とか言う奴は！)

すると…。

ベッドにうつぶせになり、枕を抱えて、なぜか足をバタバタさせながら不貞腐れている哀君の姿が…。

な、何があつたんじゃない、哀君…。

第21話「実は小五郎は一番女にモテる。女優、アイドル、教え子、弁護士…。

さあ、無駄に引つ張る要素を作ってしまった。

光彦は大変なこととか言っちゃってますが…ぶっちゃけ大したこと
は考えていません。この話はあくまでコ哀ですから。

そう、お分かりの通り、博士が語る最後のシーン、これがやりたか
っただけです！

第22話「俺は小嶋元太！無限化け物胃袋を持つサッカー少年だ！好物はうなぎ

「よ、おはよう。」

「…おはよう。」

朝一番の挨拶に、ジト目で俺を見る灰原。

「ど、どうした…？なんかあったか？」

「別に…。」

どう考えても何かあった…。

教室に入ると、歩美はすでに登校していた。

「歩美、おはよう。」

「コナン君の…ばか！」

「!!!??？」

歩美まで!??

「昨日の放課後…。私、見ちゃったんだからね！あの女と一緒に帰ってたでしょ！しかも腕なんか絡めちゃって。」

そうか、見られてたのか…。ってことは…。

「哀ちゃんも一緒に見てたのよ。あとでフォローしておいた方がいいんじゃない？」

歩美のその言葉を聞き終わる前に、俺は隣のクラスへ駆け出した。

「灰原、いるか？」

大き目のトーンで突然入ってきた彼に、クラスの皆（特に女子）が注目する。

工藤君はそんなこと気にせず真っ直ぐ私のほうに歩いてきた。

「…なによ。」

「いや、昨日のこと…。歩美に聞いたんだけど…。」

「ああ、そのこと。別に気にしてないわよ。」

会話をする私達。まわりのクラスメイトの囁きが少し耳に入る。

「あれが灰原さんの彼氏？イケメン。」

「か、カツコよくない？」

「なんなんだよアイツ…。隣のクラスに勝手に入ってきやがって…。」

「美男美女カップルね！灰原さん羨ましいな。」

…。ま、思ったとおりの反応ね。でも工藤君がイケメンだなんて…。

…。私は否定しないけど。

「気にしてねーわけねーだろ。今朝のあの態度…目つき…。」

「あら、目つきが悪いのは生まれつきよ。ごめんなさいね。」

「何年一緒にいると思ってるんだよ。普段のそれと、機嫌悪いときの区別くらいつくっての。」

「じゃあ、普段から私の目つきが悪いのは否定しないわけね。」

「ぐっ…。」

口げんかで彼が私に勝ったことなど殆どない。

まあ、それでも…。

「ま、話を聞いてすぐに言い訳してきたことは、褒めてあげるわ。」
表情を和らげそう言うと、彼も少し優しい顔になった。

「バーロー。褒めるってなんだよ。」

「で？」

「あ、ああ。昨日は石澤に連れられて日売テレビに、撮影を見学に
だな…。」

「貴方から行ったわけじゃない事ははじめから判ってるわよ。」

「そ、そうか…。」

「こつちこそ、何年一緒にいると思ってるの？様子を見ればすぐに
判るわよ。」

…頭で理解していても嫉妬したのは内緒。

「すまねえ…。」

「なにも謝ることはないんじゃない？同級生の友達と遊びに行くのに、いちいち私に了解をとってって言うほど私、束縛しないわよ。ただ…。」

私はちよつと表情をきつくして、彼に顔を近づけて言った。

「石澤さんとどっか行く時だけは、私に一言くれないかしら？」

「お、おう。分かった。」

キーンコーンカーンコーン…。

タイミングよくチャイムが鳴る。

「ほら、予鈴が鳴ったわよ。はやく自分の教室に戻りなさい。」

「ああ。今日は放課後、一緒に帰れるだろ？」

「そうね。じゃあ校門のところで。」

「おう！」

そう言うのと彼は駆け出していった。

と、同時にクラスの沢山の人が私に群がる。

「今の人、誰？すつごいかっこいい！」

「灰原さんの彼氏？」

「なあ灰原さん、アイツのどこがいいんだよ！」

「何話してたんですか！？」

口々に工藤君、そして彼との関係に関する質問が。どうしよう、はつきり言ってしまうおうかしら。

私の彼氏の江戸川君よ。それが何か？

…って。

でも、その時。

「おい、席に着け！授業始めるぞ！」

ガラガラッと教室に入ってきた教師が一喝し、みんなはばらばらと自分の席へ戻っていつてしまった。

「まったく…。あの女、何考えてるの！？」

放課後。今日はコナン君と灰原さんに気を利かせて、僕と歩美ちゃんは彼らとは別に2人で帰っていました。

「光彦君！聞いているの！？」

「き、聞いてますよ…。でもそんなに悪く言うことないんじゃないですか…？」

僕は昨日、雨城瑠璃さんから彼女の事情を聞いていたので、あまり否定できないと感じていたのですが…。

「何よ…。光彦君はあの女の肩を持つ訳？哀ちゃんが悲しんでもいいの？」

「いや、そう言う訳ではないのですが…。」

はつきりしない僕に、いらいらし始めた歩美ちゃん。

でも、石澤さんの事情を軽々しく僕が喋っていいとは思えず、結局こんな態度のままのらりくらりしている僕。

しばらく押し問答が続いて、とうとう歩美ちゃんの怒りが頂点にきたようです。

「わかった！光彦君、哀ちゃんが好きだから、コナン君があの女とくっつけば、自分にチャンスがあると思ってるんでしょ…！」

僕はその言葉に少々ムツとききました。

それでも冷静に分析すれば、歩美ちゃんの本心ではないことは分かっただけでしょう。

しかし、その言葉は若干痛いところをついているだけに、僕も冷静さを失ってしまいました。

「どうして歩美ちゃんはそういう発想になるんですか！なんでも恋愛ごとに結びつけるのは良くないと思います！」

僕の珍しい反抗に、歩美ちゃんは逆にますます怒りが募ったようで、「何よ！光彦君ったらちよっと可愛い女の子にはすぐ甘くなっちゃ

うんだから！」

「どうしてそうなるんですか！僕は石澤さんのことも少し理解してあげたほうが良いって言ってるだけで！」

「光彦君、石澤さんのことが好きなんじゃないの…！」

「だから、なんでいつつもそういう発想になるんですか！好きとか嫌いとかだけで僕らはまわってるんじゃないんですよ！」

「もう知らない！私一人でもコナン君と哀ちゃんを守ってみせるんだから！」

そう言つて歩美ちゃんは一人で駆け出して行つてしまいました。

「はあ…。僕は何をやっているんでしよう…。」

少し冷静さを取り戻した僕は、深い溜息をついてしまいました。

「江戸川く〜ん。」

「い、石澤…。」

俺は灰原と2人で帰宅していた。途中本屋により、俺は推理小説を、灰原は医学書を立ち読みし、2人で本屋を出たときだった。

「あら、石澤さん？だったかしら？」

石澤美香が俺（と灰原）を見つけ、駆け寄ってきたのだ。

「えーっと…灰原さんでしたわね。江戸川君の、他称、彼女の。」

他称。そう、灰原が自分でそう言ったことはなく、石澤も歩美からそう聞いているだけにすぎないのだ。

「他称つて…。灰原は、俺の彼女なの！」

はつきり俺が言つと、灰原は顔を少し紅くし、石澤は少しむくれた顔をした。

「そうなのですか？灰原さん。」

わざと灰原に質問する石澤。

「えっと…。ええ、まあ。」

照れているのかはつきりしない灰原。

「はつきりなさいませんのね。まあいいです。それより江戸川君、今日もスタジオに来ませんか？」

「え、あ、いや、今日は灰原と…。」

「あら、別に灰原さんが一緒でも構いませんわよ？」

その言葉にきよとんとする灰原。

「え？何で？」

ごく自然な疑問。『なんで江戸川君が好きで誘うのに、彼女の私が一緒にでもいいの？』ってことだろう。

灰原のそんな表情が新鮮だ。

「さあ、決まりですわ！行きましょう！」

俺達が呆然としている間に、石澤はスタジオ見学を決定してしまった。

「あら？今日は女の子のお友達？」

「そう！灰原さん。江戸川君の、今の、彼女。」

「ええ？」

今の、を強調し、受付のお姉さんを困惑させている石澤。今日も誰か知り合いに会うかな…と思っていたら…。

「あれ？コナン君？」

そう話しかけてきたのは…。

「大神さん！？」

プロレスラーで、以前事件で知り合ったことのある大神敬晴さんだった。

大神さんはウルフェイスという正体不明の覆面レスラーとして売り出していたが、4年前に敗北を喫し、その際覆面を取られた。

しかし、素顔がイケメンだったため逆に人気に火がつき、今は素顔で出ているレスラーだ。

「久しぶりだねー。大きくなって…。でも、その眼鏡と特徴的な前髪ですぐに分かったよ。」

「大神さんも相変わらず…。今日はどうして？」

「ああ、バラエティ番組に呼ばれていてね。『格闘会の美男美女、大集合』って…。自分で言うには恥ずかしいタイトルだけだね。」

「あら、大神さん！」

戻ってきた石澤が大神さんに気づく。と、きよるきよるし始める。

「今日は、お姉ちゃんは？」

「お姉ちゃん？」

「ああ、高田さんかい？来てるよ、彼女も一緒に出演するからね。後でスタジオに顔出すように言っとくかい？」

「わあ、ありがとう！嬉しいな。久しぶりにお姉ちゃんに会える！本当に嬉しそうな石澤。俺は大神さんにこっそり尋ねる。

「ねえ、高田さんって？」

「ああ、今売り出し中の若手女性レスラーで、見た目の美しさと決め技の派手さで人気のキラビー高田。知ってるかい？」

俺は首を縦に振り、灰原は横に振った。

「彼女がお姉さんに似てるとかで、石澤さんはお姉ちゃんって呼んで慕ってるんだ。高田の方もまんざらではなさそうだしね。」

「フーン…。」

俺は石澤の根底の何かが少し見え始めた気がした。

と、そこへ沖野ヨーコさんが歩いてくるのが見えた。

ヨーコさんももうアイドルとしての一線からは退いているが、アイドル女優からは抜け出して演技派女優として大きく成長している。

「あ、コナン君。おはよう。」

「沖野ヨーコさん。お久しぶりです。」

「あら？この間も来てたでしょ？石澤美香さんのことを聞きたいって…。」

「え？江戸川君、私のこと調べてたの？」

石澤が嬉しそうに話す。

「気をつけた方がいいわよ、石澤さん。彼は人の粗を探るのが得意な、探偵さんなんだから。」

灰原がやや皮肉った言い方をする。

「えー？でもカツコよくない？探偵って。」

…やはり、局に着いたとたん子供っぽさがでる石澤。灰原も少し怪訝な表情をする。

「そうなの。探偵って…カツコいいわよね。」

ヨーコさんも石澤に同調する。

「…コナン君、毛利さん、元気？」

ハハ…おっちゃん意外にモテルよな…。

「それより江戸川君、こっちこっち。」

石澤がスタジオに連れて行こうと俺の腕を引っ張る。と、ヨーコさんもそれに着いて…。

「あら？貴女も石澤さんが出演するっていうドラマに？」
灰原が質問する。

「いいえ、違うの。でもそのドラマに今回特別にある伝説的な女優が出演するって聞いて…。なんでもプロデューサーさんが彼女の大ファンで、海外にあるその女優さんのお家まで押しかけて、三日三晩頼み込んだそうよ。」

おいおい、なんか誰だかわかつちやった気がする。

「そうそう、私も聞いた。今回のドラマのその役は、昔その人が演じたことがあって…。」

石澤も口を挟む。腕は俺の腕に絡んでいるが。灰原の視線が痛い。

「石澤さんの今回出演してるドラマって…。」

「ああ…。時代物、それも『坂本龍馬伝説』…。」

「…はあ…。私も誰だかわかつちやった気がするわ…。」

スタジオの扉を開き中に入ると、…まあ予想通り、中に居たのは…。

ワシの名前は阿笠博士。少年探偵団の顧問？のような存在じゃ。

今日は歩美君が一人でわしの家にきたのじゃが、様子がおかしくて…。

哀君はまだ帰っていないといったんじゃがそのまま上がりこんで……。途中で買ってきたというケーキを突然ド力食いし始めたのじゃ。博士も一緒に、というから嬉しくて（哀君にはこんなカロリーの高いもの、止められるからの）一緒に食べていたのだが……。その食べっぷりはまさに元太君も真っ青なほど。しかも何故か表情は怒ったままなのじゃ……。どうかしたのかと聞いても、プリプリ怒っているばかりで訳を言うともせん……。な、何があったんじゃ、歩美君……。

第22話「俺は小嶋元太！無限化け物胃袋を持つサッカー少年だ！好物はうなぎ

はい、誰だか引つ張る第2弾です。

前回同様丸分かりですが…。

最近才チ要因のうな重が登場していませんが、彼は中学サッカー界で伝説的な監督に出会い、「サッカーやろっぜ！」「もうやってるっつーの。」とか言いながらストライカーとしての才能を見出され、くるくる回りながら宙に舞い、なぜか右足に炎を宿し、なぜか「フアイアトルネオド！」とか叫びながら繰り出すシュートを練習しています。

嘘です。

第23話「前回のコナン君がキッド主役だったことについて。克夫が雄二気取っ

私の名前は沖野ヨーコ。28歳、女優。尊敬する人は毛利小五郎！
そんな私は、今日日売テレビの第7スタジオに足を運んでいた。

目的は、『坂本龍馬伝説』というドラマの撮影の見学。といっても、
ドラマそのものではなく、ゲストとして海外から特別出演が決まっ
た伝説の女優を一目見たくてやってきたのだ。

途中で毛利さんのところのコナン君やその友達の灰原さん、子役時
代から知っている石澤美香さんに会って、一緒にスタジオへ向かう。
扉を開くと、そこにはあの名女優が…。

「あら？久しぶり〜。偶然ね。どうしてここに？」
私たちが入ったことに気がついたその人は、突然そんな言葉を発し
た。

誰かの知り合い？私はもちろん憧れてはいるけど会うのは初めて。
石澤さん？と思って彼女を見ると、彼女も呆然。

その奥の灰原さんは…いつもと表情が変わらない。
その奥の…。

「久しぶり、じゃねーよ。母さん！」
か、母さん！？」

「あら？久しぶり〜。偶然ね。どうしてここに？」
俺の母親、工藤有希子は俺を見るなり馴れ馴れしく言葉をかけてき
た。

まあ、母親なんだから、馴れ馴れしいのは当たり前だが。

「久しぶり、じゃねーよ。母さん！」

俺がそう返事を返すと、俄かにスタジオ内がざわめいた。が、母さ
んは気にも留めない。

「で？引退したはずの女優が、なんでまた？」

「坂本乙女の役を演じてくれないか？つてオファーでね。引退して
るから断ってただけだ、あんまり熱心に頼まれたし私自身すつこ
い好きな役どころだったから、ついつい出演しちゃった。」

「まったく…。もう坂本龍馬の姉が似合う歳じゃねーだろ。」
「何か言ったかしら？」

歳のことを言ったとたん表情が険しくなる。

たじろいだ俺を尻目に、今度は灰原が1歩前に出た。

「お久しぶりです、有希子さん。」

「あら～哀ちゃん！元気だった？しばらく会わない内に綺麗にな
っちゃって。」

「いえ…そんな…。」

「うんうん。新ちゃん…じゃなくて、コナンちゃんのお嫁さんには勿
体無いくらいね。」

さらりと爆弾発言をする母さん。

「お、お嫁さん!？」

石澤がびっくりして声をあげる。それに気づく母さん。

「あ、貴女が石澤美香さんね。今日はよろしくお願いします。」

「あ、あの、お嫁さんって…。」

「あら？貴女、コナンちゃんのお友達なの？」

「同級生です。今日は江戸川君と灰原さんを撮影現場に招待してい
て…。」

「そうなの…。」

そういうと、にまっとして俺に向かって

「可愛いお嫁さん候補が増えたんじゃない？コナンちゃん。」

と、面白そうにのたまう。その言葉に明るくなる石澤。

「私もお嫁さん候補で良いんですか？」

「え、あれ？」

母さんはちょっと驚いた顔になり、

「何よ、本当にモテモテじゃない、新ちゃんってば。」

俺にしか聞こえない声で耳打ちする。

どうやら、ただの同級生だと思い、俺をからかうための冗談のつもりだったようだ。

しかし、石澤は俺の母親らしき女優にお嫁さん候補と呼ばれて嬉しそうだ。

「まったく…。話をややこしくしねーでくれよ。俺が、その、なんだ、好きなのは…。」

「私。」

！？

突然の灰原の言葉にびっくりする俺。しかし、灰原は俺の言葉に反応していたわけでなく、石澤に対して声をかけたただけであった。

「なあに？灰原さん。」

「私、それだけは誰にも譲る気はないから。覚えといて。」

はつきりと。きっぱりと。いつも通りの表情で。灰原は言い切った。

私はついに堂々と宣言してしまった。

でも、有希子さんも悪いのよ？何も知らないで石澤さんまでお嫁さん候補なんて言っちゃうんだから。

おかげで石澤さんは終始私のことを睨んでいたけど、流石に女優演技をしているときは役にしっかりなりきっている。

「すげーな、アイツ。」

工藤君も感嘆している。ま、私も同意見だから、ここは怒らないでいてあげる。

しばらくして石澤さんの出演するパートの撮影が終わり、彼女はこちへ歩いてきた。

そして、わざと私と工藤君の間に座り込む。

「おい、石澤。」

「いいでしょ。私がどこに座っても。」

そう言つて私を睨む。私はそ知らぬ顔で無視してやつた。

と、そこへ先ほどの大神さんが入ってきた。横に筋肉質だけど綺麗な女性を連れている。

「お姉ちゃん！」

「美香ちゃん、久しぶり！」

石澤さんがさつと席をたちその女性に駆け寄る。なるほど、この人が高田さんね。

「あら？新ちゃん、彼女に振られちゃったの〜？」

有希子さんが再びからかいに現れた！

「バーロー、ちげーだろ。」

「あら、でも。好きな男の子…新ちゃんの横に居ることよりも、彼女に駆け寄ることを優先したのよ？あの子。」

そう言われれば…。

「有希子さん…。彼女、本当に工藤君のことが好きなのかしら…？」

「そうね。好きなのは、好きだと思つわ。でも、なんて言うのかな、ちよつと違う感じもするの。」

そう言つと、有希子さんは私の耳元で、私だけに聞こえるように、

「哀ちゃんの方が、きつとずっと新ちゃんのことを好きだと思つわよ。」

と囁いた。私の顔はかーっと紅くなる。

可愛いわね〜。

蘭ちゃんも素直で良い子だったけど、哀ちゃんみたいに素直じゃない子もそれはそれで可愛い。

新ちゃんっいたらいつつもいい彼女ができて、母親としては嬉しい限りね。

さて、問題は石澤さん。

彼女は新ちゃんのことを好きなのか？哀ちゃんの疑問は確かに的を

得ていると思う。

いったい何が彼女の背景にあるのか…。

「ところで、母さん。」

新ちゃんの声に我にかえる私。

「なあに？」

「今日は…っつーか、これからどこに滞在するんだ？家か？」

「ううん。あの家はしばらく誰も住んでいないでしょ？今回は撮影の間だけの滞在だから、本格的に掃除や手入れをしないと住めないようなところはパスね。」

「じゃあ…。」

「うーん…。蘭ちゃんに事情を言って、毛利探偵事務所にでもお邪魔しようかしら？」

「ばっ…バーロー！蘭が許してもおっちゃんもいるんだぞ！」

「いいじゃない。小五郎ちゃんも久しぶりだし。…哀ちゃんも一緒に行く？」

何の考えもなしに哀ちゃんも誘う私。…どうしよう、小五郎ちゃんに断られたら。

「…行きます。」

「おい、灰原…。」

「ねー、石澤ちゃんもどーお？」

「は!？」

「え!？」

驚く新ちゃんと哀ちゃん。でも、私にはある確信があった。そう、石澤さんはきつと…。

「ごめんなさい。せっかくのお誘いですけど、今日はお姉…高田さんと一緒に…。」

「あら、そーお？分かったわ。」

そう、きつと断ってくると。そして、そのことから、私はある一つの推論に自信が持てた。

「…アイツ、断るとは思わなかったな…。」

新ちゃんは不思議がつているけど。

「それより、蘭ちゃんに聞いてみてくれる？」

「って、俺が聞くのかよ！」

…。

蘭ちゃんに電話する新ちゃん。

会話の様子から、どうやら大丈夫そう。と…。

「あ、あの…。私も一緒にしては…。」

？

そう話しかけてきたのは、海外暮らしの長い私でも知っている日本の元アイドルで名女優、沖野ヨーコだった…！

「いらつしゃい…。あら？哀ちゃんも一緒なんじゃなかった？」

「ああ、アイツはいったん家に帰って着替え取ってくるってよ。」

「そっか。今日はどうする？哀ちゃんと一緒に部屋で寝る？」

「ば、バーロー！」

帰って早々蘭にかかわれる俺をみて、大笑いする母さん。

「コナンちゃん可愛い〜。」

「あ、新一のお母さん、お久しぶりです。」

「久しぶり、蘭ちゃん。そうそう、今日はもう一人…。」

そう言う母さんの陰から沖野ヨーコさんも顔を出す。

「お久しぶりです、蘭さん。」

「お、沖野ヨーコさん!？」

「なに!？」

奥からおっちゃんの声が聞こえた…かと思うと、がさがさ、どたどた、じたばた、ドンガラガツシャン、音がして…。

「やあ、ヨーコさん。お久しぶりです。」

ピシッと白スーツで決めたおっちゃんが現れた。右手には薔薇を一輪持っている。

「どつから持ってきたのよ、その薔薇…。」
呆れる蘭。そ、そういえば、探偵事務所に薔薇なんか無かったはずでは…。

「わあ、毛利さん、相変わらずカッコいいです！」

…。こんなおっちゃんのどこがカッコいいんだろう…。 沖野ヨーコさんがわからない。

と、そこへ…。

「お邪魔します。」

私はなんだか騒がしい探偵事務所を訪れた。

「あ、哀ちゃん。どうぞ、入って。」

お姉ちゃんが迎え入れてくれる。

「ありがとう…お姉ちゃん。」

「お姉ちゃん？」

と、彼が…工藤君が怪訝そうな顔をした。

「あら？どうかした？」

「いや、お姉ちゃん…お姉ちゃんか。」

「新一、どうかしたの？哀ちゃんが私をお姉ちゃんって呼んでくれるようになってから、もうずいぶんたつよ？」

「いや…。」

そうか。彼の悩みが私にもわかった。と、同時に導き出される答えも。

「石澤さん、ね。」

「ああ。もしかしたら、アイツ…。」

「ああ？新ちゃんも哀ちゃんも何かわかったの？」

奥にいるヨーコさんや毛利迷探偵には聞こえないので、お姉ちゃんも有希子さんも彼を工藤新一として呼ぶ。

「母さんは、もしかしたら先に気づいていたんじゃないのか？」

「ええ。こつ見えても母親ですからね。それに、昔から蘭ちゃんも見てたから。」

「え？私が…何か？」

「ん〜ん？英理ちゃんが出てった頃の蘭ちゃんは、寂しそうだったわねって話よ。」

「????？」

…。

私は工藤君を譲る気なんて毛頭無い。でも、彼女は『憎むべき敵』というタイプじゃない。

「…もつともつと嫌な娘だったら、まだ良かったのかしら？」

…。

その時、奥のほうからヨーコさんと小五郎さんの会話が耳に入った。

「そついえば、コナン君は毛利さんが預かっている子だと聞いていましたが、母親はあの有名な藤峰有希子さんだったなんて、びっくりしました！」

「え？コナンが？有希ちゃんの？」

!!!!

そついえば、工藤君、有希子さんのことをずっと母さんって呼んでたわね…。

私たち4人は慌てて言い訳をしに中に入ったのだった…。

ワシの名前は阿笠博士。ご近所ではちょっと有名なロリコン爺さん…。つて馬鹿！

最近そんな噂があったりで悩んでおる普通の爺さんじゃ。

さつき歩美君が結局プリプリしたまま帰ってしまったからのことじゃ。

哀君が帰って来ての。毛利探偵事務所にお泊りすると言っんじや。

別にその事自体は何もおかしくないんじゃないが…。

着替えの準備をしながらなにやら時々にやにやしての…。

「お嫁さん…お嫁さんか…。」とか呟いておるんじゃない！

さらに聞いておると（だからワシはけっして覗き趣味があるわけではない！）「お義母さん…か。」とも呟く始末！

な、何があつたんじゃない、哀君…。

第23話「前回のコナン君がキッド主役だったことについて。克夫が雄二気取っ

おっちゃんならきつと出来るはず！仕込み無しでも「今はこれが精一杯。」が！

第24話「え？私がハイトーンボイスで『タメになったね』とか言う芸人を知

「石澤さんのご好意で今度のクラス別社会化見学で、このクラスは日売テレビの局内の見学をすることになりました。」
オオ。

先生の言葉にざわめきだすクラスメイト。

私は一人、ちよつと不満だった。石澤美香の好意、という点が。

「どうした？歩美。」

「別に。ただ、あの女何考えてんだろって思って。」

コナン君が私の表情を見て何かを察したかのように聞いてきたけど、軽く流してしまった。

あの女がコナン君のことを好きだと宣言してからもう1ヶ月半は経つ。

哀ちゃんは普段どおりだけど、時々なんか怖い顔してることがあるし、コナン君は石澤さんを完全に突っぱねることは出来ていない。そんなこと出来るコナン君だったら、やっぱりそれはコナン君じゃないのかもしれない。昔から女の子には甘かったしな。

それより、私が今つらいのは光彦君と仲直りできていないことだった。

私も言いすぎたとは思っている。でも、あの女に対する光彦君の態度を見ていると、どうしても納得できない。許せない。

「私って…嫌な女だな。」

自分でも呆れちゃうくらい。皆みたいに人間ができていれば良いのについて最近よく思う。

「灰原さん、聞きましたか？今度の社会科見学。うちのクラスは警視庁ですよ。」

「ええ…。なんか、今更って気もするわね。」

「おお、そんでよー、隣のクラスは日売テレビだってよ。あの石澤って芸能人のコメで。」

「やだなー元太君。コメじゃなくて、コネですよ。」

「相変わらず、食欲優先ね、小嶋君。」

「いいじゃねーかよ…。それよりよ、俺たちもこっそりそっちについていかねーか？」

「え？」

「僕達、日売テレビも何度かお邪魔していますが、石澤さんのコネってところがちよつと気になります…。」

「な？灰原、いいだろ？」

「そうね…。おもしろそうね。」

「よし、決まり！」

社会科見学当日。

「こつちが第2スタジオ、こちらが局員の食堂です。」

あの女が皆を案内する。私とコナン君はその集団の少し後ろを歩いていた。

男の子達はあの女のすぐそばから離れず、すげーな、とか、さすが詳しいね、とか、テレビ局そのものではなくあの女を褒め称えるのに夢中。

女の子は有名人に会えないかと、みんなきよろきよろしている。

「そう簡単には会えないよね。」

「だろーな…。っと、歩美、そーでもねーぞ。」

コナン君が向いているほうを見ると、そこに居たのは…。

「あら、貴方達、どこかで見た顔ね。」

「名取深汐さん!？」

「そうだわ、思い出した。温泉でのあの事件のときにちよろちよろ

してたお嬢ちゃんたちね。」

名取深汐さん。昔出会ったのはとある温泉地。映画の撮影でそこを訪れていた彼女と出会ったのだ。

最初は私達に冷たいし、嫌な人だと思っていたけど、それは役になりきっていたのと助平な監督さんに言い寄られていらいらしていたのが原因で、本当は優しい人だった。

事件以来しばらく表舞台には出ていなかったけど、最近ちよこちよこドラマで見るようになっていた。

「お久しぶりです！」

私が笑顔で言うと、彼女も笑顔を見せてくれた。

「可愛くなつたわね、貴女。…そっか、ってことはさっきあつちで見かけたのは…。」

名取さんが言い終わる前に、前の方にいた女の子たちが彼女に気づいた。

「ねえねえ、吉田さん。こちら、あの女優の名取深汐さん？」

「知り合いなの!？」

「すごい!！」

ちよつと騒がれる私。ふと目をやると、あの女が面白くなさそうな顔をしていた。

少し優越感。でも、すぐそんなことを思う自分が恥ずかしくなつて頭を振った。

「名取さん、あつちで見かけたって…?」

「ああ、えーつと…あ、あそこよ。」

コナン君が質問し、名取さんがある方向を指差す、その先には…。

「灰原!光彦!元太!」

コナン君の驚いた声が響き、それであつさり、隠れていた少年探偵団は先生に見つかってしまった。

…。
大分怒られた後、来てしまったものはしょうがないとして、私達も一緒に見学できることになった。

「ったく…。灰原、おめーまで何やってんだよ。」

「あら、愛する彼氏が可愛い芸能人の女の子に私が見てないところで言い寄られるのが癪だったから、って言ったらどうする?」

「おめー本気でいつてんのか…。」

あら、呆れ顔。流石に齒が浮きすぎだったかしらね。誇張はしているけど概ねそういうことなただけだ。

「江戸川君!こっちこっち!」

と、私と話しているのが気に入らなかったのか、石澤さんが工藤君の腕を引き、強引に連れて行ってしまふ。

「いいの?哀ちゃん…。」

歩美ちゃんが心配そうに声をかけてくれる。

「いいのよ。大丈夫。」

「コナン君も、頑として断れば良いのにね!」

「まあまあ歩美ちゃん…。」

プリプリする歩美ちゃんを円谷君がなだめに来る。

しかし、歩美ちゃんは彼を少し睨みつけ、その後少し困った顔をして、何か言いたそうにして、でも結局怒ったような表情のままずっと前の方に行ってしまった。

「…なにかあったの?」

「ええ、まあ…。」

言葉を濁す円谷君。ま、彼らももう中学生(私もだけど…)。色々あるのだろう。深くは聞かないことにした。

「あれ?少年探偵団の皆。今日はどうしたの?」

「あら、光彦君。また会ったわね。美香ちゃんやコナン君、元気?そこへやって来たのは沖野ヨーコさんと雨城瑠璃さん。(…偶然って凄いわね)。私はヨーコさんとは面識があるけど雨城さんは初めて。」

「ヨーコさん、雨城さん。お久しぶりです。今日は社会化見学です…。」

「どうやら両方と面識がある円谷君が代表してしゃべりだす。

その様子にミィハーな女の子たちはきゃーきゃー騒ぎ出す。

「お母さん！」

！？

石澤さんが雨城さんをそう呼んで駆け戻ってきた。まあ高田さんをお姉ちゃんと呼ぶくらいだ、お母さんという呼び方には私は驚かなかった。

けれども、周りの友達は少し戸惑ったような声を上げ、それに気づいた彼女は慌てて弁明し始める。

その様子を雨城さんは面白そうに見ていた。

「そうそう、美香ちゃん。お姉ちゃん…高田さんなら、さっき大神さんや木場さんと上の階の控え室に居たわよ？」

「え？お姉ちゃんも！？」

弁明途中で今度はお姉ちゃんという単語を出してしまい、再びややこしくなってしまう…。

と、その時だった！

「きゃー！！！！！！！！！！」

その上の階から女性の悲鳴が！

「なんだ！？」

「ねえ、何の悲鳴！？」

周りの子たちがオロオロするのを尻目に、私は、いや、私達少年探偵団は、既に駆け出していた工藤君の後を追った。

12階のとある応接室。

悲鳴があつたその部屋の前には人だかりが出来ている。

そこに血を流して横たわっていたのはプロデューサーの三浦悟史さ

ん。

私、沖野ヨーコは何度か面識があった。敏腕で、仕事ができるけど、すぐ女性に手を出すエッチなプロデューサー。

あまり良い印象がある人ではないけれど、こんな状況になっていると心配で…。

私はその部屋に入ろうとすると…。

「入っちゃ駄目だ！」

コナン君の大きな声。ビクツとして私は後退する。

「入っちゃ駄目だし、警察が来るまでここを離れても駄目だ。元太、右奥の階段から人が来ないようにしてくれ。」

「おう、もうやってるぞ。警備員さんに頼んでな。左奥のエレベーターの前も、封鎖済みだ。」

「そうか。しっかし、随分集まっちゃったな。」

そう、さっきの悲鳴で局内の多くの人がこの階に集まってしまっているのだ。

「おいおい、さっさと救急車を呼ばんか！」

遠くでちよっとお歳の俳優さんの声。しかし、それに対して応えたのはコナン君。

「いや、一応呼んだけど、もう手遅れだ…。亡くなってるよ。」

そんな！私は素直に驚いた。しかし、周りからざわざわと声がする。

「あんな子供に分かるのか？中学生だろ？」

「なんだ、アイツ、でしゃばりやがって…。」

「目立ちたがり屋の典型だろ？もてたいんじゃないかねーの？石澤には興味なさそうにしてるくせに…。」

封鎖前からこの部屋の前に集まってしまっていた局の関係者や見学に来ていた中学生だ。

そっか。

私は、コナン君は毛利探偵の助手（？）だし、すごく頭が良いのを知っているから全く驚かないけど、何も知らない人が見たら、そうよね。

でも同級生まであんな反応しなくても…。

ちよつと憤慨した私は何か言っただろうかと口を開きかけた。でもその時…。

「すみません！うちの生徒がすみません！」

腰の低い、私と同じ歳くらいの女性が人波を掻き分けてやってきた。どうやらコナン君の先生のようだ。

「あなた何やつてるの！救急隊の方や警察の方が来るのよ！邪魔をしたら困るのよ！」

慌てているのか本音が見える怒り方だ。『警察の方が困る』と言っているのではなく、『私が困る』と言いたいのが私でも分かる。

「ちよつと、先生、それは…。」

今度こそ一言言いかけた私を、次に遮ったのは…。

「コナン君！」

目暮警部がやってきました。警視庁の刑事の中でも、特に僕や少年探偵団がお世話になっているベテランの警部さんです。

「早いですね、目暮警部。」

僕がそう問いかけると、

「おお、光彦君も居たのか。いやなに、ちよつと近くに居たものだから。…じゃあ、帝丹中学の生徒らしき人が大勢居るのは、社会科学見学か何かでかな？」

「ええ、そうです。それで、被害者なんですが…。」

「日売テレビのプロデューサーの三浦悟史さんです。首の刺し傷が致命傷ですね。凶器は見つかっていませんが、この傷の大きさ、形状では刃渡り10センチ程のナイフでしょうね。」

コナン君が警部の前に出てそう言いました。

人ごみの中から『またアイツ…』とか『でしゃばり！』とかぼそぼそ聞こえ…。

「すみませんすみません！」

またあの女教師がぺこぺこやってきました。

「警察の方ですね！すみません、うちの生徒がでしゃばったことを……。さ、江戸川君、邪魔になるからこっちへ……。」

そういつてコナン君に手を差し伸べます。

その目が『あなたがこんな出しゃばった行動をとると、私が困るんです』と言っています。

こんな人が先生だなんて。小学校の時の小林先生は生徒のことを第一に考えてくれるとても良い先生だったのに。

しかし、今度はその手を警部が遮りました。

「死亡推定時刻や、容疑者は分かるかい？」

コナン君に発せられたその言葉で、何も知らない多くの同級生や局の関係者、そして先生はきょとんとしてしまいました。

それはそうかもしれませんが。

どう見てもベテランの警部が、どう見ても只の出しゃばり中学生に、真面目な顔で捜査のことを質問するのですから。

「今灰原と歩美が警備室で監視カメラのチェックをしています。」

そう言つて、コナン君は右奥の階段を映しているカメラと、左奥のエレベーターを映しているカメラを指差しました。

「この応接室に入るには、必ずどちらかのカメラには映るはずですから。この部屋の出入り口は映っていませんが、このプロデューサーがこの階にやってきた時刻が分かれば……。」

「この階にやって来たのは13時10分。だから、死亡推定時刻は悲鳴が聞こえた13時45分までの間ね。」

灰原さんと歩美ちゃんが戻ってきました。

「それに、朝からの映像ゼーンぶチェックして、人の出入りを確認したから、容疑者も割り出せたよ。」

「ええ。死亡推定時刻にこの12階に居たのは、被害者を除けば7人。12時30分にエレベーター前のカメラに映り、その後出て行っていないプロレスラーの大神さん、木場さん、高田さん。11時

15分に階段の方のカメラに映って13時30分にそこを降りた雨城さん。その雨城さんとすれ違いにこの階に上がってきたそちらの眼鏡のディレクターさん。」

灰原さんは一人の男性を指差しました。

「そして、13時45分にエレベーター側からやってきたそちらの男性と、アナウンサーの女性。」

「あ、第一発見者の菅原祐大さん…被害者の三浦さんと一緒にバラエティ番組を作っていた方です…と、その番組の司会のアシスタントをしている岩崎さくらさんです。今日は14時からこの応接室で打ち合わせだったそうで、前の仕事が終わったので早めにここに来たら、亡くなっている三浦さんを発見したそうです。」

今度は僕もメモ帳を取り出して警部に話します。

「よし、分かった。さすが君達だな。初動捜査は高木に任すよりよっぽど安心だ。」

目暮警部はそう言うのと、局の人たちのほうに向かって

「では、今名前を挙げられた方たちは、話を聞きたいのでここかの部屋に待機しててください。」

と言い、今度はコナン君のクラスの担任の先生に向かって

「申し訳ないが、この子達は事件解決に非常に役立つってくれるので、お借りしてよろしいかな?」

と言いました。

先生は何も言えずぽかんとしていましたが、目暮警部はそのまま僕たちを連れて歩き出しました。

先生だけではなく、他の皆も啞然としています。

…ちょっとおもしろいですね…。

石澤さんは、呆然としていました。

「お姉ちゃんに…お母さんも…容疑者…?」

…心配そうに彼女を見つめる僕は、ふと殺気を感じ振り返ると、歩美ちゃんが僕を睨んでいました。

「あ、歩美ちゃん…。」

何かを言いかけた僕でしたが、何を言えばいいのか分からず、言葉に詰まると、歩美ちゃんはふいつとそっぽを向き、歩き出してしまいました。

一体、どうしたものでしょう…。

第24話「え？私がハイトーンボイスで『タメになったね』とか言う芸人を知

さあ、事件編です！

と言っても、私の陳腐な脳みそでは大した事件を描けるわけもなく

…。

更新が少し開いた間に感想が沢山増えていて嬉しい限りです！

このなんとなく続く物語は、とりあえずまだ終わらない予定です
ので、今後もよろしくお願いします。m()m()m

第25話「俺って、少年探偵団のリーダーだったよな…。ま、いつか！俺には甘

「では、順番に、三浦さんの死亡推定時刻にどこで何をしていたのか、聞かせてもらえますか？」

目暮警部が容疑者7人を前にこう言った。

私と歩美ちゃんは警部の右側に、工藤君と円谷君、小嶋君は左側に座っている。

部屋の外からはざわざわとまだ声が聞こえている。局の関係者も私達の同級生達もそこを去らずに居るようだ。

「ちよつと待つてくれ、なんでその子供達も居るんだ？」

眼鏡をかけたディレクター、片山友也さんが慥然とした態度で警部に質問した。

容疑者7人は私達の向かい側に座っている。

左から、片山、菅原、岩崎、大神、木場、高田、雨城（敬称略）の順だ。

片山さんに答えたのは、警部ではなく雨城さん。

「あら、ヨーコちゃんに聞いたことあるけど、この子達、少年探偵団って言って、警察業界では有名ならしいわよ。」

「そう。特にこのコナン君はね。」

大神さんも同意した。

片山：「ったく…。わかつたわかつた。俺は13時30分までは後輩と飯食ってて、この階には番組の打ち合わせで来たんだよ。なあ、木場さん？」

木場：「ええ。彼は私が待機している控え室に尋ねてきました。た

だ：悲鳴が聞こえる少し前にトイレに行くといって部屋を出ました
が。」

片山：「ま、まあそうだが…。いいだろ？俺はトイレ近いんだよ。」

目暮：「木場さん、貴方と大神さん、それに高田さんは別々の控え
室だったんですか？」

木場：「いや、大神と俺は同じだが、高田は別だ。女性だからね。」

大神：「僕は片山さんとすれ違いで控え室を出たんです。高田と今
日の打ち合わせをしにね。」

高田：「ええ。確かに13時30分頃に、大神さんは私の控え室に
来ました。そしたら悲鳴が聞こえて…。」

岩崎：「わ、私です…。私は今日は菅原さんとずっと一緒に打ち合
わせをしていて…。」

菅原：「間違いありませんよ。私と岩崎は13時45分にこの階を
訪れるまではずっと他の誰かとも一緒に居たんです。」

岩崎：「確認してみてください…。」

雨城：「私は13時30分に下の階に行くまでは奥の控え室で仮眠
を取っていたわ。…あら、アリバイは無しってことになっちゃうわ
ね。」

目暮：「ふーむ…。つまり、死亡推定時刻である13時10分から
13時30分までの間は、雨城さんと高田さんにはアリバイがなく、
それから岩崎さんが悲鳴をあげた13時45分までは、木場さんと
片山さんに空白の時間が有るということですか？」

木場：「そうなりますな。」

片山：「はっ！その程度のことと疑われちゃたまんねーぜ！その子
供たちが監視カメラのチェックをしたって言うが、ちゃんと出来て
たのかも怪しいしな。」

歩美：「失礼ね！見落としなんかないもん！」

雨城：「ところで、凶器がまだ見つかってないんですって？」

目暮：「そうなんです。だが、事件が起きてすぐに彼らが入りを
封鎖していますので、貴方達の中に犯人が居れば、まだ所持してい

るか、せいぜいこの階のどこかに隠したかです。それさえ見つければ……。」

高木：「警部！遅くなりました！この階はいたるところまで調べましたが、凶器は発見できませんでした！」

大神：「では、犯人がまだ持っている……。」

目暮：「ふむ……。皆さん、すみませんが身体検査を受けていただけませんか？」

木場：「もちろんだ。出来ることはすべて協力する。」

片山：「ま、これで俺の体からそのナイフだかが見つかったら、観念してやるよ。」

数分後……。

高木：「残念ながら……凶器は発見できませんでした……。」

片山：「そら見る。その子供たちが間違ってたんだよ。それとも何か？実は凶器はナイフではありませんってか？」

高田：「でも、致命傷になったという首の方の傷は刺し傷だったのでしょう？」

雨城：「ナイフとは限らないわね。凍らせた氷とか、どう？」

コナン：「それは無いです。ならば現場に溶けた氷の跡が残っているはずですから。」

菅原：「そういえば、そんなものは無かったな……。」

岩崎：「でも、血が随分流れていましたから、水分は吸収されちゃったんじゃないですか？」

菅原：「三浦さんはうつ伏せで倒れてたし、首からの血はあまり多くなかったろ？むしろお腹からの血の方が……。」

雨城：「お腹も刺されていたの？よっぽど恨まれてたのね。」

菅原：「あれ？雨城さん見えなかったんですか？」

雨城：「コナン君が部屋に誰も入れなかったからね。さすが、小五郎ちゃんの息子ね。」

コナン：「息子じゃないんですけど…。」
木場：「しかし…なるほど、それなら首を刺したのが氷なら、どこかに水滴が残っていないとおかしいな。」
片山：「だから、ナイフとか、じゃなきゃカッターとかだろ？カッターならどこにでもあんだろうし。」
雨城：「あら、それが無かったんじゃないの？」
片山：「だから、すでに犯人が別の階に隠したとか。」
灰原：「だとしたら、怪しいのは雨城さんね。13時10分、被害者がこの階に来てから、小嶋君が江戸川君に言われてこの階を封鎖するまで、この階を出たのは雨城さんだけだもの。」
雨城：「あら、私は犯人じゃないわ？犯人にしたければ、証拠を見せてね？じゃないと、弁護士呼ぶわよ？」
菅原：「そうそう。雨城さんの知り合いには物凄い弁護士さんが居るんだからね。」
コナン：「英理おばさんか…。」
目暮：「うーむ…。それでは、話を变えて、被害者の三浦さんの人となりを教えて頂けませんか？」
大神：「とにかく下ネタが大好きな方でしたね…。今日も朝会ったときは笑えない冗談を平気で言っていましたから。」
菅原：「まあまあ大神ちゃん。それがあの人の良いところでもあったんだからさ…。」
岩崎：「いいえ、あれはセクハラです！」
雨城：「確かに。私も散々やられたわね…お尻触られたりなんかしよっちゅうよ。」

人となりの話が始まった頃、俺たちは目暮警部にことわって、一度部屋の外に出た。
と、局の人たちが真っ先に駆けつけ、色々聞いてくる。

「どうだい？何か分かったのかい？」

「君達、そういえば昔、よく怪盗キッドと対決していなかった？」

「江戸川君って、もしかや毛利名探偵の…。」

「事件のこと、詳しく教えてください！」

その騒ぎを何とか押しつけ、警部にまだ話しては駄目といわれているとごまかして、俺たちは少し離れたところで相談を始めた。

「ねえ、江戸川君…。どう思う？」

灰原が俺の顔を覗き込む。

「証拠は無いが…、おそらく犯人はおかしなことを言ったあのんだ。」

「

俺は答える。

「そうですね。となると、凶器の隠し場所が問題となってきましたが

…。」

光彦も悩みこむ。すると歩美が（光彦の方は向かずに）、

「こうなったら、あの人の控え室、私達で探ってみる？」

と言った。（あれ？この2人、喧嘩でもしてんのか？）

「駄目よ。そこまでの権限は無いわ。それに警察の人があんなに探しているんだから、きつと控え室には無いのよ。」

「そうですね。となると、自分でどこかに持っている…。」

光彦と灰原も悩みこむ。と、そこで口を開いた元太。

「お、おい、お前ら、犯人分かったのかよ！？教えてくれよ、俺にも。」

その言葉に、俺たち4人はつい呆れ顔、ジト目になってしまった。

「…さっきの容疑者の言葉でわかんなかった（のかよ）（の

（んですか）（のかしら）！？」「」「」

局の人が俺たちの傍から離れた後、今度は同級生たちが集まってきた。

「おい、江戸川、なんなんだよ、お前。」

「そんなにでしゃばんなって。警察に任せろよ。」

何人かの男子がそう言って突っかかってきた。

面倒くさいなあ…と思った矢先。

「お前らいい加減にしるよ?」

「コナンはマジで名探偵なんだって。黙って見てる?すぐに事件解決だって。」

小学校も一緒だった奴らが味方になってくれた。…しかし味方か? ハードルを上げられたような気が…。

「ねえ、あれ見て?」

灰原が指差す向こうでは、先生がうろろしながら、ずっと溜息を吐いている。

「あの先生、メンタル弱すぎじゃない?」

…確かに。

その時、控え室からぞろぞろと皆が出てきた。

「事情聴取は終わったんですか!?!」

「犯人の目星は!?!」

局の人たちがこぞって、一番最初に出てきた木場さんを取り囲む。

「違う違う!トイレ休憩だ!まだ終わってない、5分後にここで再開する。見る、俺達にはぴったり刑事さんが張り付いてるだろ?」

確かに。木場さんには大柄な刑事が、続く他の方にも刑事がついている。証拠を隠したりしない様だ。

木場さんは言うが早いかダッシュでトイレに向かっていた。

「トイレにしては、慌てすぎじゃない?」

灰原が咳く。

次に大神さんが出てきた。…と、右手に持っていたペットボトルを落としてしまう。

「なんだ?手が震えてんのか?」

元太が咳く。

それに続いて高田さん…おっと、入り口の敷居に躓いたのか、ちょ

つとよるける。

「バラエティ番組だからか厚底ブーツでしたからねえ…。」
光彦が呟く。

その後、菅原さん、岩崎さん、雨城さんと続き…片山さんが出てこない。

部屋を覗いてみると、さつきと同じ格好のまま、座ったままだ。

「トイレ、行かなくて良いのかなあ？」

歩美が呟く。

…と、俺はあることに気づき、にやりと笑った。

「あれ？蘭さん？」

「千葉刑事、コナン君が上に居るって聞いたんですけど…。」

「ああ、でも駄目だよ？犯人が証拠を隠すかもしれないから、出入り口は今まだ封鎖中。」

「そっか…。」

「それより、なんでここに？」

「沖野ヨーコさんが、事件だからお父さんに解決して欲しいって連絡してくれたんですけど、生憎お父さん、別の事件で白鳥警部と出かけちゃって…。コナン君も居るから心配で見に来たんです…。」

「そうですか…あ、ちょっと待ってください、目暮警部から電話だ

…。

…。

…。

「え！本当ですか！？」

「ど、どうしました、千葉刑事！？」

「コナン君が、犯人が分かったって言って、推理ショーを始めるみたいなんだ！」

「ええっ！？は、早っ！？」
「さ、さすがコナン君…。」

第25話「俺って、少年探偵団のリーダーだったよな…。ま、いつか！俺には其
次回は解決編です！

石澤美香編も次か、その次位で終わりそうな気がします。
それが終わったらまた短編の馬鹿馬鹿しいのを入れようかな。

「犯人：分かりましたか？」

石澤美香が私達の前に現れた。歩美ちゃんがキツと彼女を睨みつける。円谷君はそれを見て軽く溜息をつく。

「…ええ。」

誰も答えないので、私が答える。

「だ、誰ですか…お母さんじゃ…。」

心配そうな彼女。そこへ、工藤君がやってきた。

「残念だが、石澤…。犯人はお前のお姉ちゃん…高田さんだ。」

「そんな！」

驚愕する彼女。

「でも、でも、証拠はあるんですか!？」

…痛いところを。私はそう思った。歩美ちゃんも円谷君も地面を見つめる。しかし、工藤君は違った。

「…ああ。証拠も見つけた。言い逃れは出来ないと思っぜ？」

「え!？」

「ほんと!？」

石澤さんだけでなく、私達も驚く。

「ほんとさ。さっきのおかしな行動で、凶器の隠し場所が分かった。そこから実際ナイフが見つかったら、決まりだ。」

淡々と喋る工藤君に、石澤さんが泣きながらすがりついた。

「でも、でも！江戸川君、黙っていてください！お姉ちゃんが殺人なんて、絶対何か訳があるんです！そうしなくてはならなかった訳が！お願いですから…!」

「駄目だ、石澤。」

工藤君は彼女を真っ直ぐ見つめ、

「どんな理由があろうと、殺人なんてぜってーしてはいけないんだ。それを犯した人は、罰を受けなきゃならねー。だから、俺は真実を

明らかにするのさ。…探偵だからな。」

そうだった。その言葉に、愕然としたのが、石澤さんは駆け出してしまった。

「あ、石澤さん！」

円谷君が止めようとする。

「ほっときなさいよ、あんな女！」

歩美ちゃんが叫ぶ。

しかし、私は心を決めた。

「私、彼女を追うわ。…いいわよね？江戸川君？」

「…ああ。任せた。」

「待てよ、灰原。俺も行くぜ！」

「ぼ、僕もです！」

小嶋君と円谷君。どうしたって、彼女が今までしたことなんか関係なく、心配は心配なようだ。でも。

「いいえ、私一人だけの方が良いわ。彼女の哀しみを解ってあげられるのは私だけ。…ううん。私にしか、きっと本当には、理解してあげられないわ。」

そう言いきった。

「…灰原さん、まさか、彼女の事情を知って…？」

円谷君が尋ねた。その言葉に、歩美ちゃんも反応する。

「何よ、事情って！光彦君、何か私達に隠してるの!？」

「あ、いや、その、前に雨城さんから、その…。」

「光彦。」

もごもごする円谷君を、工藤君が一喝する。

「俺と灰原は推理しただけさ。…歩美ちゃんに話してやれよ。その真実を。…お前の口からな。」

「…分かりました。」

「元太、歩美。石澤のことをどう思うかは、光彦の話聞いてからにしてやってくれ。灰原、…任せたぜ？」

「ええ。相棒を信じなさい。…それで？貴方は？」

「俺は、この事件の真実を、明らかにしてやるぜ。」

…。私達は、それぞれのすべきことを、開始した。

「犯人が分かったって！？本当かいコナン君！」

俺の言葉に驚く警部。さらに、ざわざわする周りの人たち。

「ええ。今から説明します。ですから、部屋の中に入りましょう。」

今は廊下。容疑者7人を残し、警部に出てきてもらっていたのだ。

「よ、よし、分かった。待ってくれ、今千葉や高木にも連絡する…。」

…。

そして、俺と目暮警部、そして高木刑事は部屋の中に入り、他の人が入れないようにドアを閉める。

「犯人が分かったの!？」

雨城さんが自信満々の俺を見て驚いたようにそう言った。

「何！本当かボウズ！」

「一体誰なんだ!？」

木場さんと大神さんも口々に質問する。

「では…。犯人は…!！」

俺が指をさそうとした瞬間…!

バタンっ!

勢いよくドアが開き、中に局の関係者が流れ込んできた。

「江戸川コナン君が犯人を突き止めたと聞きました…。」

見ると、そこには八川さんの姿が。彼は以前おっちゃんと一緒にテレビ出演したときにADを務めていた人だ。

「コナン君って、あの怪盗キッドキラーとしても時々ニュースになるだろ？その彼が、テレビ局内で起こった殺人事件を解決するなんて話題性十分！ぜひとも取材しろと上のお達しでして…。」

「困りますなあ、これは本当の殺人事件なんですよ？」
警部がたしなめるも八川さんは一歩も引かない。
「いいじゃないですか。ここは局内なんですし。なんなら、この部屋使わないでくださいって言っちゃったりして？」
「それは困る…。所持しているかもしれない証拠品を捨てられてしまいかもしれない。…分かりました。」
半分脅されて警部も折れる。
「では、あらためまして、俺の推理を話そう。」
「犯人は、プロレスラーのキラビー高田さん。貴女です！」

「離して！離してください！」

私は逃げる石澤さんにやつと追いつき、その腕を掴んでいた。

「灰原さん！離してください！私は…私はもう…。」

「現実から逃げちゃ駄目よ！石澤さん！」

彼女を逃がさないよう必死になりながらもそう叫んだ。

「お姉ちゃんが犯人だなんて…またお姉ちゃんが居なくなっちゃう…そんなの、そんなの…！」

「やつぱり…。貴女は過去に、家族を失っているのね。」
ハツとして彼女は足を止める。

「…やつぱり…？誰かに聞いたの？」

「いいえ。私…いや、私や江戸川君の推理よ。」

「どういうこと…？」

「あなたの行動よ。いくら共演したり、似ているからってお母さんやお姉ちゃんという呼び名は普通しないわよ？そうね…高田さんの下の名前は知らないけど、例えば『花子お姉ちゃん』なら、違和感ないけど。」

「…優よ。お姉ちゃんの名前は…。」

「そして、江戸川君のお母さんに『泊まりに来ない？』って誘われ

たとき。貴女のような性格なら、好きな男の子の家に泊まりに行けるのならそつちを優先しそうなのに、貴女は『お姉ちゃん』と一緒に居ることを選んだ。学校ではあんなに積極的に彼に迫ってくる貴女が、よ？」

「…。」

「導き出されたのはさっきの結論。家族を失い、ゆえに家族に極端に飢えている。江戸川君のことも、異性として大好き、というよりはお兄さんに似てて好き、って所じゃないかしら？じゃなきゃ、遊びに誘うのに私が一緒なのをあんなにあっさり認められないと思うわ？」

「…凄いわね。」

その言葉は、彼女が私の推理を認めたものと、はつきり分かった。

「でも、貴女に何がわかるの？分からないでしょ？あの悲しみ、つらさ。もう二度と、あんな思いしたくないの。したくないのに…！」

「いいえ、分かるわ。」

私は大きく深呼吸した。

「…私も、家族が居ないもの。お姉ちゃんなんか…。」

言おうか言つまいか迷う。けど、言った。

「…殺されてしまったのだから。」

「彼女のお母さんと、お父さん、お姉ちゃんと、お兄ちゃんは、昔彼女が幼い頃、自動車事故で亡くなってしまったそうです。幼い彼女はつぶれた車の隙間にはさまって、命は取り留めたのですが…。」

光彦君はそう教えてくれた。雨城さんから聞いて、でも物凄く彼女の心の奥に迫ることなので他の人には話せなかったと前おいた上で。

「…それ以来、彼女は極端に『誰かとながつていたい』と思うようになってしまったようです。分からないではありません。一度、

全てのつながりを一編に絶たれているのですから。」

「マジかよ…。」

元太君もびっくりしている。

「彼女がコナン君にアプローチしているのも、彼がお兄さんに似た雰囲気があるからでしょう。雨城さんは見た目が少し似ていると言っていましたし、なにより同級生にしては大人びていますから、彼は。」

「そんな…。私、ひどいこと言っちゃってるな…。」

光彦君の話を聞いて、私は心から後悔した。

いくら友達の彼氏にアプローチしているからって、あんなに憎憎しい態度をとって良かったのだろうか？

あの女呼ばわりして、しかも彼女を心配する人たちを否定して。

「あ、歩美ちゃん、泣かないでください…。」

光彦君の慌てた声。

そっか、私今、泣いてるんだ。

自分が情けなくて。悔しくて。

「…光彦君、ごめんね。何も知らないのに、私、光彦君にもさんざん酷いこと…。」

「いえ、いいんです。どんな事情があっても、友達の恋を守ろうとするのは決して悪いことはありません。僕がちゃんと納得できるような説得ができなかったのがいけないんです。」

…光彦君は優しいな。

いつでも周りの人のことを考えてあげられる。

どうしたら、私もそんな所に行けるのだろうか？

「私、どうしたらいいのかな…。」

「それは…。」

「どうもしなくていいんじゃないの？」

元太君があっさり言った。

「悪かったなと思ったら、素直に謝って、今度は友達になれば良いんだよ。」

…元太君は凄いな。

こんなに当たり前のことを、当たり前のように考えれるって、実は凄いいことなんだよ？

「私、友達に恵まれてるね…。」

そう言つと、光彦君も元太君も、少し照れたような顔をした。

「…決めた！私、石澤さんと友達になる…！」

「なんだって！？」

「犯人は…高田君！？」

驚く面々。ワシも驚く。だが、コナン君の言うことだ。なにか根拠があるのだろうか。だからワシは尋ねた。

「コナン君、何故、彼女が犯人だと推理したのかね。」

「目暮警部。それは、彼女の証言の中に、犯人しか知り得ないことがあつたからです。」

「犯人しか知り得ないこと？それは、なんだい？」

高木が割つて入ってきた。

「順を追つて説明します。まず、第一発見者の岩崎さんと菅原さんが部屋に入った後、一番最初にこの部屋に到着したのは僕です。そして部屋の扉のところには沖野ヨーコさん。彼女が入ろうとしたのを僕は止めました。なので被害者を間近で見たのは僕と発見者の2人、そしてヨーコさんだけです。」

ふむ。ワシは頷いた。

「そして警部が来ました。その時僕は『首の刺し傷が致命傷』『凶器はおそらくナイフ』と言いました。これは皆さん聞こえていたと思います。」

「おお、確かに聞こえたぞ。そのガキが偉そうにそんなことくつちやべつてたのをな。」

片山氏が口を挟んだ。ワシは若干眉間にしわを寄せて彼を睨み、す

ぐにコナン君に向き直った。

「それで？」

「その後の雨城さんの証言の中で『お腹も刺されていたの？』というものがありました。つまり、刺し傷が複数あった事は先ほど言った間近で遺体を見た者しか分からない事実なのです。僕もあえてそのことは言いませんでした。」

「そうか…つまり…」

「ええ。にも拘らず、高田さんは『致命傷になったという首の方の傷は刺し傷だった』と証言しています。首の方？おかしいじゃないですか。その言葉は、傷が首以外にもあったと知らなければ出てきません。」

「な、なるほど…」

さすがコナン君だ。

ワシはかつて幾度となく事件解決に貢献してくれた高校生探偵の姿を思い出していた。

そういえば、容姿だけでなく推理のときの口調まで彼に似てきたな。コナン君。

普段毛利君と一緒に居るときはもっと子供らしい、中学生らしい口調だが、こうしてみるとまるで…。

工藤君そのものだ。

灰原さんは、私にづらい過去を話してくれた。

父と母を失ったこと、姉が殺人事件に巻き込まれて死亡したということ。

一人ぼっちになった後、父親代わりの博士に助けられ、江戸川君や吉田さんと知り合い、助けられたこと。

毛利さんという心を許せる人が出来たこと。

「…だから、私は貴女の気持ち分かる。でしょ？石澤さん。」

なんて優しい人なんだろう。

いつもはクールで何を考えているのかよく分からない女性だった。でも、逃げ出した私を、自分の痛みを曝してまで助けようとしてくれている。

私の頬を涙が伝った。

…。

私は全てを打ち明けた。

家族が事故で死んだこと。

それ以来、誰かを母や姉と呼び、心の安息を得ていた事。

江戸川君を慕っていたのは兄と重なって見えたからだということ…。

「だって、彼、あのクラスで唯一芸能人である私に興味なさげにしていたし、どうみても大人っぽかったんですもの。」

「そうね…。中学生よりは大人ね…。」

「え？」

「いえ、なんでも。あなたの心情は解ったわ。でも、江戸川君の言うこともわかってあげて？見逃すことよりも、罪を償って前を見るようにしてあげるのが本当の優しさだって。」

「…ええ。つらいけど、それが正しいのは解る。」

「ま、彼の正義は真っ直ぐすぎて、一般人にはちよつと熱すぎるけどね。そこが彼の欠点でもあるし、愛おしいところでもあるの。」
「愛おしいなんて、はつきり言う彼女を見て、灰原さんは本当に江戸川君のことが好きなんだとわかる。だって、そんなこと口に出すよ
うな女性じゃないもの。」

「…私、失恋は初めてです。」

「え？」

「いえ、何でもありません。」

「そう？なら、戻りましょう。残酷かもしれないけど、貴女は真実を見つめるべきよ。」

「解りました。大丈夫です。」

私は灰原さんの瞳を真っ直ぐに見つめ、言った。彼女は少し驚いた

ような表情を見せたけど、すぐに優しく微笑んだ。まるで天使のよう
うに。

「さ、行きましょう。」

「ええ。…そうだわ、今度私にも灰原さんのお姉さん…毛利さんを
紹介してくださいね？」

「え…、だ、駄目よ！お姉ちゃんは、私のお姉ちゃんだから！」

「…江戸川君に迫った時より、拒絶するのが早くないかしら？」

「冗談よ。」

そう言つと、彼女はまた微笑んだ。まるで小悪魔のように。

「千葉刑事、私、心配で…我慢できません！」

「ら、蘭さん！ちよつと…！」

「ごめんなさい！」

「あ…、あ…あ…。どうしよう…。」

P r r r r P r r r r

『どうした、千葉。今コナン君の推理が佳境に入ったんだ。大した
用じゃないなら、後に…。』

「すみません、高木さん。蘭さんに封鎖を突破されました。」

『…は？』

第26話「そのころ、おっちゃんは何の事件。今ちよつと白鳥警部にスポット

さあ、解決編です！

といっても、事件に関しては陳腐なもの。こんなの、高木刑事でも普通に解けるよな…。

石澤美香、本当はもっと嫌な奴にするつもりだったのに。

なんか可愛そうなお嬢様になっちゃった。

…ま、いつか。

次回で石澤編は終了です。今後も登場はするかもしれませんが、本編にはもう絡んでこないんじゃないかな？

第27話「貴方の正義を問う人に問われたら、引金を引いてしまったひかるさん

「そ、そんな…ちょっとした言い間違いじゃない！そんなことで犯人にされたら堪らないわ！」

高田さんの反論。まあそう来るだろう。俺にも予想の範囲内。

だが、ここから先は本格的に只の推理。

当たっていれば言い逃れは出来ないが、はずれば…いい恥さらしだ。昔のおっちゃんのようになる。

100%の自信なんてない。でもだからこそ、推理が的中した時、俺は探偵の実感を得る。

…事件をそんな風に考えちゃいけないな。

…貴女は凶器をまだ身につけている。」

「コナン君、それはないよ…さつき、身体検査をしたんだよ？」

高木刑事が口を挟む。

俺は高木刑事に向き直って、説明しようとしたが…。

P r r r P r r r

彼の携帯が鳴った。

「千葉か？どうした…。」

そう言って部屋を出て行く高木刑事。仕方なく、俺は目暮警部に向き直った。

「彼女の履いているブーツの底を調べてください。左足のブーツです。」

さっと青ざめる高田さん。どうやら、俺の推理は当たっていたようだ。

「ブーツの底…？ちょっと、見せてもらえませんか？」

目暮警部が彼女に向いて言った。

「…その必要はないわ。」

彼女はしゃがみこみ、左足のブーツの底を弄った。と、底がはずれ、中からナイフが…。

「これが出てきたら、言い逃れできないものね。」
「おおー!!!」

周りに居たほかの容疑者や八川さん達局の人、はては部屋の入り口にたむろしていた俺の同級生からも感嘆の声があがる。

「あら、貴方の推理、当たっていたみたいね。」

「お、お姉ちゃん……。」

そこへ、灰原と石澤が戻ってきた。

「……もう大丈夫なのか、石澤。」

「ええ。ごめんなさい、江戸川君。」

「あら、相棒には一言ないのかしら?」

「バーロー……。助かった。サンキューな。」

そして俺は高田さんに向き直った。

「認めますね?三浦さんを殺したのは自分だと。」

「ええ……。でも、どうしてわかったの?警察にはばれないように底がはずれるとはわからないよう細工もしたのに。」

「最初に引っかかったのはトイレ休憩の時です。貴女は出入り口の敷居に躓いて体勢を崩した。若い、プロレスラーの貴女が、いくら厚底ブーツを履いてるからってちょっとおかしいな、そう思ったんです。」

「あら?でも、そういうことって無いとは言い切れないんじゃない?」

「もちろんです。しかし、僕の目には少し気になる行動として映った。そこでよく観察していると……。貴女は姿勢や立ち方でごまかしていたましたが、左右のブーツの底の厚さが違うことに気づいたんです。」

「なるほど、さすがね、名探偵さん。」

「さ、凶器をこちらに……。」

目暮警部が前に出たその時……!

「動かないで！」

…一瞬のことだった。高田さんは警部を跳ね除け、真っ直ぐ私の方に走ってきて、左腕で私を抱え上げ、その首元にナイフを突きつけたのだ。

「灰原あ！」

工藤君の咆哮が響き渡る。横で石澤さんが呆然と見ている。

「お、お姉ちゃん…。」

「ごめんね、美香ちゃん。」

一言だけそう言つと、彼女は身構える警官達に向き直り、じりじりと部屋を出て、階段のほうへゆっくり歩を進める。

「馬鹿なことは止めなさい！」

目暮警部の一喝にもひるまず、高田さんは私を離さない。

「もうこうするしかないの…。三浦さんはプロレスを馬鹿にしていた。番組では何時も私に露出の高い服を着せ、色気をアピールするように求めていたわ。」

「それは…バラエティ番組なんだ、そういうことも必要だろう！」
片山さんが反論する。

「ええ。それは私も仕方ないと思っていたわ。でもね、許せなかったのは、この間の打ち合わせの後よ！」

「この間の…？バラエティではなく、格闘番組でお前と柔道家が対戦するっていうあれか？」

木場さんが尋ねる。

「そうよ。ガチの試合だから、本気で行くように皆は言ってたわ。でもね、その後三浦さんはこっそり私によって来て言ったのよ！」
「衣装に切れ目を入れておいて、いつでもポロリ出来るようにしておけ。ただの格闘番組じゃその方面のファンしか観ないだろうが、お前のポロリありなら視聴率は15%超えも期待できる。』ってね！」
「でも、それはお得意の冗談じゃ…。」

「最初はそう思ったわよ！だから軽く流していたの！でもその後届

いた衣装には、最初から切れ目が入ってたのよ！」

「な…。」

愕然とする菅原さんや片山さん。

「格闘技をなんだと思ってるの！？私が憧れた格闘の世界は…戦いの世界はそんなんじゃないわ！もつと…もつと神聖で、実力だけがものを言う世界なのよ！」

「バーロー！その格闘家がナイフなんて凶器を使って、人殺しという禁忌を犯してんじゃねーよ！」
工藤君が叫んだ。

「格闘技は一步間違えれば相手を殺しまう凶器だ。だからこそ格闘家は肉体だけじゃなく心を鍛え、禁忌を犯さないようにするもんだ！それが出来なかつたあんたに、格闘を語る資格なんてねーよ！」
「う、う…五月蠅い！」

その言葉に多少動揺したのが、首元のナイフが少し離れた…と、その時！

「ハアツ！」

後ろから、つまり階段のほうから怒気と共になにか鋭いものが彼女の右手を掠め、ナイフを吹っ飛ばした。

それは足刀だった。

「くっ！」

「あなた、何してるの！？哀ちゃんを離しなさい！」

「お、お姉ちゃん！」

「蘭君！？」

「ら、蘭！？」

私と目暮警部と工藤君がほぼ同時に驚く。と、高木刑事がやっと戻ってきた。いままで電話をしていたのか、状況を全く把握していないように、

「いや、警部、千葉の奴が、蘭さんに封鎖を突破されたって…。」

「な、なな、なんなんですかこの状況は！？」

と叫んだ。

「…もういい。お前、喋るな…。」
目暮警部の呆れ声。なんだろう、私、今ちよつと笑っちゃった。そんな状況じゃないのに。

「どきなさい！」

ナイフが無くてもプロレスラー。お姉ちゃんをふつとばして逃げようと、猛然とアタックする。しかし…。

「ああああああ…！はああっ！」

お姉ちゃんの必殺、踵落としが炸裂！

私を抱えたままの高田さんに防ぐ術は無く…。

ドサア！

倒れ、気絶してしまった。

「あゝびっくりした…。大丈夫？哀ちゃん。」

「え、ええ…。ありがとう、お姉ちゃん…。」

ここまでやっておいてびっくりしたで済ますとは…。さすがお姉ちゃん…。

そこからは激動だった。

俺は灰原の傍に駆け寄り、間もなくテレビ局の人に囲まれてしまった。

「凄いな！さすが毛利名探偵の息子だ！」（違うって…。）

「キッドキラー、推理力も抜群！おい、いけるな！このネタ！」

「なんか顔が似てねーか？あの…行方不明の元高校生探偵、工藤新一に…！」

「じゃあ、『2代目工藤新一』ってキャッチコピーはどうだ!？」

「いや、『毛利名探偵の息子』の方が…。」

「『東の中学生探偵』でもいいけねーか!？」

盛り上がる業界人。それを羨望のまなざしで見つめる同級生達。先生はというと、なんか意味も無く

「すみません。」

を繰り返している。本当に大丈夫なのか？

「ああ、蘭さん。蘭さんはどのキヤッチが良いと思う？」

八川さんがやってきた蘭に近寄り、質問する。

「へ？あ、そ、そうですね…。そうだ！昔自分でも名乗ってた、」

ホームズの弟子』ってのはどうですか？」

「『ホームズの弟子』か…。なかなかいいね！弟子って言うのが中学生っぽいし！」

…蘭まで楽しんでやがる…。

石澤は涙を流し、灰原がそれをなだめている。

いや、灰原だけではない。いつの間にか戻ってきた歩美ちゃんも居る。

…どうやら仲直りできたみてーだな。

こうして事件は解決した。

「ねえ。罪を犯した人は償わなきゃいけない…。なら、私はどうなるの？」

帰り道、2人きりになると、灰原が俺にそう聞いてきた。

「私の作った薬で多くの人が死んだ…。」

「バーロー。お前は…気にすることねーよ。」

「どうしてよ！」

「あのなあ…。じゃあ、包丁作ってるやつは、皆犯罪者か？睡眠薬作ってるやつは？ピストル造ってるやつは？」

「え…。」

「おめーが誰かを殺そうと思ってあの薬を作ってたんなら俺は許さなかったさ。けどな、お前の目的は違った。だろ？だったら犯罪者はジンやウォッカや…あの薬を実際に使ったやつさ。」

「…貴方にしては、甘いわね。」
「うっせー。」

そう言うと、俺は灰原を抱き寄せた。一瞬驚いた顔をしたが、灰原も素直に従った。

「誰がなんと言おうと、お前は犯罪者なんかじゃねー。俺が保障する。」

「あら？あなたの保障なんて、あてになるのかしら？」

「『ホームズの弟子』舐めんなよ？」

「…まさかそれ、結構気に入ってるんじゃないでしょうね…。」

はぁ、と溜息をついた灰原。しかし、すぐに俺の眼を見て囁いた。

「…やつぱり、石澤さんにも、誰にも、貴方は渡せないわね。こんなに優しくて、気障で、カッコいい、…私が愛する名探偵さんは。」

後日。

探偵事務所に八川さんがやってきた。

「頼むよ、コナン君。実現したらビッグ対談なんだ。」

「相手の人はビッグなのかもしれないけど、僕は只の中学生だよ。」

蘭ねーちゃんも何か言っつてよ。」

只の中学生をアピールするためか、つつい「僕」とか言っっちゃってる新一。

あらためて私はあの日の新聞を開く。

どれもこれも『ホームズの弟子、テレビ局内で起こった殺人事件の真相を暴く』と一面にでかか出ている。

お父さんは悔しそうな、嬉しそうな複雑な顔をしていた。

新一の時は自分からカメラ目線で映っていたのに、今回は相当控え

めだ。

なんとかという組織と戦っているうちに、目立ちたがりは多少引つ込んだのかもしれない。

「で？誰なんですか？中学生探偵と対談、なんていつてるビッグな人って？」

私は八川さんに尋ねた。

「ああ、君達も知っているとと思うよ？海外の超有名人さ。歳もコナン君に近い。」

「？？？」

私と新一は頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「その人は突如テニス界に現れ、あらゆるジュニア大会で優勝を掻っ攫い、プロと対戦してしかも勝利したということ今大注目のテニスプレイヤーさ！」

「！！！」

私と新一は頭にエクス蔵メーションマークが浮かぶ。

「アポロ・グラス。芝の女王、ミネルバ・グラスの弟さ。その彼が、君のニュースを見て、直々に会いたいと言って来たんだよ！どうだい？コナン君！？」

「へー…そつか。しばらくぶりに、アイツに会うのも面白いかもな…。」

アイツ、と言ったのは八川さん聞いてなかったようで、面白いかな、の部分を出演快諾と受け止めたようだ。

「よし！決まり！いけるぞー！江戸川コナン君とアポロ・グラス君、夢の対談…いや、ここは二人ともキャッチコピーで呼んだほうが良いな…。」

「キャッチコピー？彼にも何かあるんですか？」

「ああ。姉であるミネルバ・グラスは「芝の女王」。その事と、まるでテニスの申し子のような彼のプレイスタイルから、ついたキャッチコピーがあるのさ。」

私の質問に生き生きと答える八川さん。

「いけるぞー！」「ホームズの弟子」VS「テニスの王子様」……！」

第27話「貴方の正義を問う人に問われたら、引金を引いてしまったひかるさん

まだまだだね。

第28話「コ」俺が額に傷ある魔法使いなら、おめーは人間出身のツンツン魔法

「よう、名探偵。昨日の特番見たぜ。あのアポロ・グラスと知り合いないで、すげーな！」

「あ、江戸川君、おはよう。今日もかつこいいね！」

「おう、『ホームズの弟子』。俺ネットで調べただけど、数年前にミネルバ・グラスを救ったって言う伝説の探偵って、もしかしてお前か？」

…。

あれから数ヶ月。あの日以来、工藤君は学内で知らない人が居ないほどの有名人になってしまっていた。

もう組織は崩壊したのだから、彼がどんなに目立とうと構わないのだけれど…。

学校に着き、彼が下駄箱を開けると中からはかなりの枚数のラブレターが溢れ出た。

「…一体どうやって入れたのかしらね…これ。」

「そ、そうだよな。」

なーんて言いながらも、まんざらじゃなさそうな彼。

ま、私も「喜ぶな」とまでは言わないけど。

「じゃ、また帰りにね。」

「おう。今日は2人で帰れるんだろ？」

「ええ。円谷君は学級委員長の仕事。歩美ちゃんは他のお友達と遊びに行くらしいから。」

「元太はサッカー部だしな。」

そう言っつて、教室の前で別れる私達。

彼が隣のクラスに入った瞬間、少し黄色い声が響いた気がした…。

「…ふう。」

席に着き、自然と溜息が出る私。

「…灰原さん、ちゃんと言ったほうが良いんじゃないんですか？コ

ナン君の彼女は私だって。」

円谷君が心配そうに私を覗き込む。

「いいのよ。そういうキャラじゃないし。」

「はあ、そう言うモンですかねえ…。」

小嶋君は朝礼ぎりぎりまでサッカーをしているので、私達は教室では2人で居ることが多い。

そうしていると。

「お、またお前ら二人で秘密の会話か？相変わらずお熱いねえ。」

「無口無愛想女にインテリ敬語坊や。いやーお似合いお似合い。」
からかってくる男子。どこにでもこういうのは居るものだ。

男女が仲良くしているとすぐにカップル扱いしてくるなんて。そこが中学生らしいと言えばそうだけど。

私たちが無視していると、調子に乗った男子たちはますます囃し立ててくる。

いい加減うざくて、ひとこと怒鳴ろうかと立ち上がった瞬間…！
ガラッと教師が入ってきて、朝礼を始めてしまった…。

私の怒り、どうすればいいのよ…！

「で、そんなにイライラしてんのか。」

その日の放課後。今日は久しぶりに灰原と2人きりでの帰宅。

光彦や歩美には悪いけど、やっぱりこの方が自然体で居られるし、
楽しいのは事実。

「まったく！男の子ってなんでみんなあなのよ…！」

「皆つてことは無いと思うが…。まあ中学生男子なんてそんなもんだろ。」

「…私、中学生生活って経験ないから。」

「新鮮で良いんじゃないの？」

「私が円谷君と噂されてて、貴方はイライラしない訳？」
「事実無根だと信じているからな。」

「それはそれは。模範解答ありがとございます。」

「おめーな…。」

いつも通りのやり取り。これが俺達の自然体。

「ところでよー。もうすぐ夏休みだろ？」

「え、ええ。」

話を变えた俺にやや怪訝な顔をする灰原。でも、ここからが俺にとつて本題。

「も、もしよかったらよ…旅行とか行かねーか？」

「旅行？いつものキャンプ？」

「じゃなくて…。二人でさ。」

俺たちは小学生の頃からいつも一緒だったが、デートらしいデートは数えるくらいしかしていない。

見た目も中学生になったことだし、2人で出かけてもおおかしくないだろうという俺の判断だった。

「な、どうだ？まあお前はインドア派だから無理にとはいわねーけど…。」

「うつん、行くわ。…いえ、行きたい…かも。」

面倒くさがりの灰原には珍しく即答。誘ったかいがある。

「で？どちらに旅行？」

「おう、ここは思い切って北海道とかどう？」

「北海道？いいけど…、そんなお金、あるの？私無いわよ。博士には流石におねだりできないし。」

「おねだりって…なんかお前が言うって怪しい響きが…。」

「ほっときなさいよ。」

「…。あ、それなんだけど、こないだテレビ出演した時のギャラがあるから。」

「あら、貴方なんかギャランティが発生してるのね。」

「一応ゲストだからな。おっちゃんはお金が自分で稼いだ(？)お

金なんぞ、受け取れねーよっーからよ。」

「しつかりしたお父さんね。」

「お父さ…ま、まあな。」

その後俺たちは、旅行について話をつめ始めた。

「へー。哀ちゃんと旅行ねー。いいな。私も快斗と旅行したいな。」

「行けば良いじゃねーか。大学院も夏休みあるんだろ？」

蘭に一応報告する俺。同居している以上スケジュールを明かすのは当然だと思っている。

「そうね。新一についてって北海道とか？」

「お、おい、それはやめてくれ…。せつかくの二人旅なのに…。」

「冗談よ。快斗となら…海外旅行でもいいな。私アメリカやイギリ

スは行ったけど、韓国とか無いし。」

「へいへい。どこでも行ってくれ。」

「新一が冷たい。」

ブーツと頬を膨らませる蘭。

「おめーな…。」

「冗談よ。ほんっと、新一からかうのは面白いわ。」

「…。」

『ほんと！？わあ、いいなー。二人旅かあ…。』

歩美ちゃんにだけは電話で報告する私。別にそうしなきゃいけないわけじゃないけど、親友には一応報告するものだと思って。

「そうなの。それで…旅行に着ていく服を、一緒に選んでもらえな

いかしら？私そう言うのは疎くて…。」

『哀ちゃんの趣味はちょーっと独特だモンねー。でも、コナン君はその方が喜ぶと思うよ。だって哀ちゃんのそう言うところも含めて全部好きなんだもん。』

「あら、彼のこと解ってるのね。」

『そりゃあ、片思いの相手だもん。なんて、うそそうそ。幼馴染だもん。見てれば解るよ。』

「ふふ。幼馴染、か。」

『でも、いいなー。私も彼氏と旅行なんてしてみたいなー。』

「歩美ちゃん、モデルでしょ？女の私から見ても可愛いもの。」

『うーん…。でもさ。元太君はサッカーに夢中だし、光彦君は何にも言ってくれないし。クラスの男の子には何回か告白されたけど、コナン君や光彦君よりカツコいい子は居ないんだもん。あ、テニス部の先輩はちよつとカツコよかつたかなー。』

…。歩美ちゃんがそんな状況にあったのは初めて知った。そう言えば、恋バナなんてしたことなかったし…。

『そつだ、哀ちゃん！』

「な、何？」

『付き合つて結構経つんだし、二人つきりで旅行なんていい機会だから、哀ちゃんから夜、迫ってあげなきゃ駄目だよ！？コナン君はそーゆーのは絶対奥手だから。こっちから行つとけば今後主導権握れるよ！』

…！

歩美…恐ろしい子！

そして夏休みが始まり、旅行当日…。

「みてみて、工藤君！ホッキョクグマよ！」
目を輝かせる灰原。

「わぁ！アザラシ！近くで見ても可愛いわね！」
まるで子供のようだ（見た目はほんとに子供だけど）。

「工藤君工藤君、フクロウよ！」
遊園地に行った時とはまるで違う。

「…あ、ねえ、工藤君。貴方の額に傷を描いて、フクロウと並んで
写真撮ったら、某魔法使いみたいにならないかしら…。」
もともと動物好きだから、というのもあるんだろうけど、いつもい
る空間から解放されて、気の置けない俺と二人だけってというのが良
かったのかもしれない。俺の自惚れでは無いと思いたい。

ここは旭山動物園。北海道の有名な観光名所の1つだ。

流石に夏休みだから混み合っではいるが、それでも十分楽しめる。

「工藤君、こっちこっち。」

動物とじかに触れ合える区画で、ウサギを抱いて俺を呼ぶ灰原。

「おう。」

微笑ましい灰原に、俺も自然と笑みがこぼれる。

…いつもこんなに可愛かったら…。

…いや。それじゃ灰原じゃねーな。

「可愛いわね…。博士に頼んでうちでも一匹飼おうかしら。」

「ウサギか…。そっぴや小学校の頃の飼育小屋にも居たよな。」

「ええ…。でも、ウサギは寂しいと死んじゃうのよね。私も博士も
居ない時って結構あるから…。」

「コミュニケーション不足になるとそれが原因で活力が無くなり、
食欲も減衰しちゃうんだ。…おめーなら一人でも十分生きてけるだ
ろーけどな。」

「あら、昔の私ならそうだったかもしれないけど。」
そっぴいながらしゃがみこみ、抱いているウサギをおろして俺を見

上げる灰原。

「今の私は、貴方がいなくなったら寂しくて死んじゃうかもしれないわよ？」

「ば、バーロー…。」

俺は照れながらそう言い、そっと手をさしのべた。

手を握って一緒に歩ければ…と思ったのだが、予想外にも灰原は腕を絡め、身を寄せてきた。

「…学校じゃ、有名人の貴方にこんなこと出来ないものね。」

「別に俺は構わないぜ？」

「私が気にするのよ。…でも、だから、今日はいいでしょ？」

「お、おう…。」

夜。俺たちは札幌のホテルに泊まっていた。もちろん部屋は別々だが。

「明日は朝早くに小樽へ行って観光、そのまま洞爺湖のホテルでもう一泊。んで、次の日札幌に戻って帰る…と。」

「結構ハードスケジュールよね。じゃあ今日は早く寝た方がいいわね。」

「…だな。」

明日泊まるホテルは温泉つきの立派なホテルだが、今日はチープなビジネスホテルだった。スケジュールの関係上本当に寝るだけのつもりだったので、それで良いと思っていたのだが。

いざ泊まってみると、別々の部屋で寝るなんてなんだか味気ない。かといって、夜遅くまで起きて一緒にいると明日の朝きつい。

「な、なあ、灰原。もし、よかつたら、一緒に…。」

俺は勇気を出して言いかけたが。

「お休み、工藤君。」

灰原はあっさり自分の部屋に戻ってしまった。

「…。」

俺たちも付き合いだして結構経つし、実年齢は立派な大人。

うーん…。

ま、いいか。焦るモンでもねーし。

そう考え、俺も眠ることにした。

「はあ…。」

自分の部屋に戻り、軽く溜息をつく私。

工藤君の言葉を遮って戻ってきてしまったことに多少なりとも後悔の念を覚える。

「私には…無理かも。」

歩美ちゃんの顔を思い浮かべて、彼女に話しかけるような感じでそう呟いた。

「…いえ、まだ明日もあるし…。」

そう言いつつ、私は本当に眠ることにして、ベッドに入った。

第28話「コ」俺が額に傷ある魔法使いなら、おめーは人間出身のツンツン魔法

ここ最近石澤絡みでコ哀成分が不足していた反動で、かなり甘々なうえに、一気に行くところまで行っちゃいそうな2人…。
いいのか、いいよな、R15になってるし…。
今回はまだしも、次回は…。

ところで私は旭山動物園には行った事ありません。
なので、中身は完全に妄想です。

小樽。

運河と坂の町のイメージがある北海道の観光名所だ。

「と言っても、運河って結構水が汚れているのね。」

「まあな。もともとは荷物運搬用水路だし、只でさえ汚れてるのに観光客が無責任にゴミとか放置してっからな。」

「観光に来てがっかりする人も居るでしょうね。私は歴史的なものとして見る分には興味深いけど。」

「夜に来たほうが良かったかもなあ。ガス灯とか点いてもっと良かったかもな。」

「あら、でも小樽って、宿泊施設が少ないんでしょう？なら仕方ないんじゃない？」

「だな。」

中学生二人が落ち着いた会話で歩いているのを不思議そうに見ている人達もいたが、俺達は気にせず観光を続けた。

洞爺湖。

北海道の温泉地として有名なところで、日本でも3番目に大きいカルデラ湖だ。

「真ん中に島があるのね。」

「ああ。昔は人が住んでたらしいな。エゾシカとかもいるらしいぜ？」

「へへ。それは見てみたいかも。」

「おめー本当に動物好きなんだな。」

「そうね。動物は嘘をつかないもの。人間と違ってね。」

「…俺は、おめーに嘘なんかつかねーから。」

「あらそう？じゃあ探偵事務所の貴方の部屋の、机の奥に仕舞い込んであるラブレターの山、なんなの？」

「な、なに！？」

「私には、全部捨ててるって言ってなかったっけ？」

「いや、その、あの、な？」

「解ってるわよ。真剣な思いが込められた手紙、捨ててしまうのは申し訳ない。でも、大切に仕舞ってるなんて私には言いにくい。でしょ？」

「…おっしゃるとおり。」

「その上、もらった事実その物は嬉しいとも思っている。」

「…ますますおっしゃるとおり。」

「ま、別に良いわよ。アレを簡単に捨ててしまう人なら、私だって好きになんかならなかつただろうしね、工藤君？」

「ところでおめー、なんで知ってたんだよ。隠し場所。」

「お姉ちゃんがニヤニヤしながら教えてくれた。」

「…蘭のヤロー…。」

そして、その日の夜。

温泉のある立派なホテルに泊まる俺たち。無論、今日も部屋は別々。

「とにかく、温泉に入りましようか。」

「だな。せっかくだし。」

部屋で少し休んだ後、俺達は並んで温泉に向かう。そこには…。

「男湯、女湯だけじゃなく、混浴もあるのね…。」

「だな…。」

俺は顔を赤くしながらも、思い切って言ってみる。

「混浴、入ってみつか？」

「馬鹿ね。何言ってるの。…じゃね。」

しかし、灰原はすんなり女湯に入ってしまった。
…。
一人寂しく男湯に入る俺。まあ良いお湯だけどさ。

ホテルのレストランで一緒に食事をしたあと、俺達はそれぞれの部屋に戻る。

「じゃあ、おやすみ。工藤君。」

「ああ。明日な。灰原。」

明日は朝10時、滞在可能時間ギリギリにチェックアウトし、そのまま空港に向かう。

今日の朝早かったからゆつくり寝るためのスケジュールだ。

俺はまず椅子に座り、軽くテレビのニュースをチェックする。

「今日は大きな事件は無し、か…。ん？石澤美香、蓮ドラ主演決定？…ハハ、良かったなアイツ。」

一人呟くと、俺はレストランで食事をするために着ていたそれなりにちゃんとした服を脱いだ。

旅館なら寝巻きとして浴衣かなんかあるところだろうが、どちらかというと洋風のホテル。そこにあっただのは白いバスローブだった。

「…ま、いっかこれで。寝るだけだしな…。」

そう言っただけ俺はそれに着替え、そろそろ眠ろうと電気を消し始めた。その時。

コンコン。

部屋のドアをノックする音。

「…はい？」

「工藤君、まだ起きてる？私…。」

灰原の声。俺はすぐにドアを開けた。

そこには、俺と同様にバスローブに着替えた灰原が。

「…どうした？」

「工藤君？ちよっとお邪魔するわよ。」

「あ、ああ。」

そう言うと、灰原はツカツカと部屋に入ってきた。

俺はドアを閉める。灯りを落とし始めていたため部屋は薄暗い。

俺はあらためて部屋の明かりを全灯にしようとスイッチに手を伸ばす。すると。

「…待って。そのままでもいいわ。」

灰原の声があるので手を止めそちらを見やる。

てっきり部屋のふかふかした椅子に座っていると思っていたが、灰原はベッドに座っていた。

「さあ、工藤君？ 貴方の大切なウサギさんが、貴方が一緒に寝てくれないと、寂しくて死んじゃうって言うてるわよ？ どうするの？」
そう言っつて、まずは座れとばかりにベッドの、自分の座っている横をぽんぽんと叩く灰原。

「…バーロー。」

俺は静かに呟き、灰原の横に座った…。

ホテルのレストランで一緒に食事をしたあと、私達はそれぞれの部屋に戻る。

「じゃあ、おやすみ。工藤君。」

「ああ。明日な。灰原。」

部屋で一人になり、そつと溜息をつく私。ここからが勇気の見せ所。私はまず椅子に座り、歩美ちゃんの言葉を思い出していた。

「…そうね。良い機会だし、朝から…いえ、昨日の夜から、あるいは一緒に旅行に行く決めてから、考えてたことだものね…。」

一人呟くと、私はバスローブに着替え、深呼吸をした。

『哀ちゃんから夜、迫ってあげなきゃ駄目だよ！？』

「ほんつと、今時の中学生は…。」

そう言っつて私は決心し、自分の部屋を出た。

コンコン。

工藤君の部屋のドアをノックする。

「…はい？」

「工藤君、まだ起きてる？私…。」

そう言つと、少し慌てたような音がし、ドアが開いた。

そこには、私と同様にバスローブに着替えた工藤君が。

「…どうした？」

「工藤君？ちよつとお邪魔するわよ。」

「あ、ああ。」

そう言つと、私はツカツカと部屋に入った。

工藤君は薄暗い部屋の明かりを全灯にしようとスイッチに手を伸ばす。私はベッドに座り、

「…待つて。そのままでもいいわ。」

と声をかけた。

椅子にでも座っていると思つていたのか、こちらを向いた工藤君は驚いたような顔をする。

私は勇気を振り絞り、…でも余裕ぶつて、クールぶつて、芝居がかった台詞を口にする。

「さあ、工藤君？貴方の大切なウサギさんが、貴方が一緒に寝てくれないと、寂しくて死んじゃうつて言ってるわよ？どうするの？」
そう言つて、まずは座れとばかりにベッドの、自分の座っている横をぽんぽんと叩く。

「…バーロー。」

彼は静かに呟き、私の横に座つた…。

「…旅行、楽しかったわよ。ありがとう工藤君。」

「そ、そっか。良かった。」

私は彼に身を寄せ、完全に密着する。

「ねえ、工藤君？」

「な、なんだよ。」

「…ドキドキしてる？」

顔を真っ赤にしてこっちを見る彼。必死でポーカーフェイスを崩すまいとしているが、彼の胸にピッタリくっついていてるせい、心臓の鼓動が速くなっていくのが手に取るようにわかる。もちろん、私の心音もそうなっているでしょうけど。

「私は…ドキドキしてる。」

そう言うと、私はそれに答えようと開きかけた彼の唇を唇でふさいだ。

…。

5分くらい、ずっとそうしていただろうか。

何かを言おうと離れようとする彼の唇に、私の唇は未練がましく付いていく。

それでも少し離れると、彼は言った。

「ったく…またかよ。告白の時もおめーに先を越されたつてのに…。

俺って情けねーな。」

その言葉に笑みがこぼれる私。そんなことではつが悪そうにしている彼が可愛い。

「気にすること無いんじゃない？」

「気にするさ。…男としては。」

「あら、そう？じゃあ…。」

そうやって私は彼から少し離れ、座っている彼の目の前に立った。

「バスローブの帯。ほどこいてくれるかしら？…貴方から。」

彼女の透き通るような白い肌。上気し、赤みがかった頬。すぎるよ
うな潤んだ瞳。全てが愛おしい。

「灰原っ…！灰原っ…！」

完全に余裕が無い俺。

「工藤君…っ！私…っ！」

背中に回されている彼女の腕に力が入る。

同時に、既に色っぽかった彼女の表情がますます艶を増す。

「灰原！愛してる！」

「工藤君…！」

俺達はそのまま唇を合わせ…。

「工藤君…。」

私達はベッドで一緒に横になっていた。

彼の腕枕で私はすぐ癒されている。

「…なんだ？」

「貴方、もつと淡泊かと思っていたけれど、意外と激しいわね…。」

「ば、バーロー。なんだそれ!？」

「ふふ。顔、赤いわよ。」

照れる彼。微笑む私。

「…灰原。」

「ねえ、こういう時だけでも、名前で呼んでくれない？」

「名前…そう言われれば…俺の中で『灰原』が普通になっちまってるから…。」

彼はそう言つと、照れ隠しか鼻の頭をかいて、こっちを向いた。

「…志保？」

私は首を横に振った。

「…哀？」

「なあに？」

「…哀。」

「…ふふ。」

「いいのか？『哀』で。」

彼は少し真面目な顔になった。

「いいのよ。今の私は『灰原哀』だもの。…もちろん、宮野志保も私。だけど、宮野志保にはもう戻れない。私は灰原哀として生きているの。」

「けど、俺の前では本当の自分に戻って良いんだぜ？」

「本当の私って、何かしら…。宮野志保が本当の私で、灰原哀は偽者？」

私は首を横に振った。

「違うわ。私は私。どっちも本当の私。でも…。」

私は彼の目を真っ直ぐ見つめた。

「貴方と出会ったのは灰原哀なの。貴方は灰原哀と宮野志保が同一人物だと『知ってる』けど、宮野志保には『出会っていない』のよ。」

「

彼はまだ複雑そうな顔をしている。

「だから、貴方にとって私は灰原哀以外の何者でもないわ。それに、この名前は私の大切な第二の父親がつけてくれたんだもの。そして、貴方は灰原哀を愛してくれたんだもの。私は灰原哀が入ってるの。」

そっか。彼は呟いた。

「わかったよ…哀。」

「あ、でも。」

私は思い出したように言った。

「私は貴方のこと、新一って呼ぶわよ。」

「え？違うだろ？」

「どうして？私は江戸川コナンに会う前に工藤新一を知り、工藤新一に助けを求めたのよ？つまり、私が出会ったのは江戸川コナンで

もあるけど、工藤新一でもあるの。」

「いや、その理屈はおかしい。」

「別におかしくないわ。元々貴方は私のこと灰原って呼んでたけど、私は誰も居ないときは工藤君って呼んでたし。」

「まあな…。そう言われれば。俺も『新一』でまるで違和感ねーし…。」

「それに、なにより、『コナン』なんて変な名前、呼んだらそれだけで吹きだしちゃいそうなもの。」

「悪かったな…。どうせ俺が考えた名前ですよ。」

「そう言いながらも、彼は二カツと笑った。つられて私も微笑む。」

「…哀。」

「…新一。」

「…なんか、いいな。」

「…そうね。新一…。」

「…哀…。」

「…そうして、私達は再び唇を重ねあった。」

「…哀…。」

「ん…新一…。」

「しばらくして唇が離れる。」

「新一…?」

「なんだ?哀…。」

「ふふ…また元気になってるんじゃない?」

…。

結局、私達は朝まで眠らなかった。

朝6時。

「はあ…こりゃ帰りのバスや飛行機では熟睡だな…。」

「ええ…。もう体力も限界よ…。」

「…そういや、温泉は朝も入れるんだつたよな…。」
「えっと…確か4時半から開いてるはずよ…。」
「ひとつ風呂浴びてくるか…。哀、どうする?」
「そうね…。新一、一緒に入る?混浴に。」

夏休みが終わり、始業式の日。

「おう光彦。お前白いまままだなー。」

元太君が登校途中後ろから現れました。

「おい元太、今日は朝練ねーのか?」

一緒に歩いていたコナン君が疑問を投げかけました。

「おう。休みだぜ。昨日まで合宿だったからな。今日は部活も休みだ。」

「そうですか。」

サッカー部の合宿はきついと聞いていましたが、始業式の前日までとは。流石に大変ですね。

そのかいあってか元太君は真っ黒に焼けています。

「黒くなつたる?もしかして服部のにーちゃんくらい黒くねー?」

「いや、それはまだ…。」

「まだ服部さんの方が黒いですね…。」

僕とコナン君は同意見でした。

少し後ろを灰原さんと歩美ちゃんが楽しそうに会話しています。と。

「えーっ!?本当!」

歩美ちゃんが何かに驚いた声がします。

「でも、それはおめでとうだね、哀ちゃん!」

「なにがめでたいんだ？」

元太君が振り返って質問します。

「えー？ナイシヨナイシヨ。ね、コナン君？」

そう言われたコナン君は、顔を真っ赤にして俯いてしまいました。

「なんだ、ノロケ話かよ。」

元太君は内容までは解りませんがそれは解ったという風に呟いて、興味無さげに歩き出しました。

始業式が終わり、先生が教室に来るまでの空き時間。

元太君はサッカー部のクラスメイトと話し込んでいるため、今日も僕と灰原さんは二人で会話しています。

と、そこへやって来たのは…。

「お、またお前ら二人で秘密の会話か？相変わらずお熱いねえ。」

「無口無愛想目つき悪女にインテリ敬語運痴坊や。いやーお似合いお似合い。」

…。

彼らのからかい言葉のレパトリーは増えないんでしょうか。

まったくもってこの前と同じ台詞です。

いや、あだ名がちよっと違いますかね？

ところが、今日はこの後の展開が違いました。

いつもはイライラしながらも無視を決め込んでいる灰原さんが、からかってくる男子に向かって

「男女二人が会話してたらカップル、なんて。可愛いお子様の発想ね。」

と言い返しました。いつもと違う展開に啞然とする僕と彼ら。灰原さんはさらに続けました。

「悪いけど、私、貴方達お子様が考えるような幼稚な男女関係でない、もつと深い関係の彼氏がいるから。わかったら、もつくだらな

いからかいは止めにしてね？」

その口調はいつもの無愛想なものでも、イライラしたものでもなく、まるで大人の女性が小さな子供を諭すような、年上の女性が年下の男の子を悩ませるような、優しく、でもどこことなく艶のある口調で、僕も、彼らも顔を真っ赤にしてしまいました。いえ、クラス中が啞然としていました…。

でも、中には顔を赤くし、ポーっとしている男子もいます。これは…。

次の日。

どざあ！

新一が自分の下駄箱を開くと、いつもの展開。

「あら、工藤君？また大量のラブレターね。」

そう言っつて、私は自分の下駄箱を開けた。

…彼を新一と呼ぶのは二人きりの時だけ。彼も普段は今までどおり灰原と呼ぶ。

その方が『特別』みたいでいいでしょ？とは言ったけど、半分はみんなの前で名前と呼ばれるのはまだ恥ずかしいから。

「灰原…お前のところにも入ってるぞ？」

「え？」

見ると、新一ほどではないが、何通かのラブレターが…。

「…工藤君、ごめんなさい。」

「は？なんでおめーが謝るんだよ？別に…。」

「私も、なんだかんだ言っつて、こついうの嬉しいから、捨てないわよ？」

「…嬉しいは嬉しいのか…。」

はあ、と溜息をつく彼。フフ、と微笑む私。

変わらない日常。
でもこれはこれで、私達の関係。

第29話「最近某対有機生命体コンタクト用（以下略）のキャラソンが灰原のニ

やっちゃいましたエロ展開。

嫌悪感を感じる方、ごめんなさい。でも二人の仲をさらに進展させたかったんです。

もつと…もつとラブラブに…もつと甘々に…！（馬鹿です）

ところで、二人のお互いの呼び名ですが、私は「工藤君」「灰原」が本当は一番だと思っています。しかし、付き合ってしばらく経つのにずっとそれじゃあ…と考えました。

でも、どうしても私はコナンが「志保」と呼ぶのが納得できなくて…。だって原作じゃ一度も「宮野」とすら言わないし…。

かといって、灰原が「コナン」って呼ぶのは違和感があつて…。いや、単に真面目な顔して灰原さんが「コナン」って言ったら吹いちやうだろうなつて…。

で、一番私なりに違和感が無かつたのが「新一」「哀」なんです。賛否両論（ってか否のみ？）あると思いますが、あの説明で納得してやってください。

第30話「カエルのような宇宙人にでてるシャアがモデルですか？コナンがそ

それは、帝丹中学校がまだ夏休みの間の出来事だった…。

「京極君。この間の世界異種格闘技大会、優勝おめでとう。園子も凄く興奮していたよ。」

「は、はい。ありがとうございます。」

「これで格闘界の頂点を極めたわけだが…。どうだね。経済界の頂点も、極めてみないかい？」

「え？京極さんが引退？」

私は園子の言葉に驚いた。園子の彼氏の京極真さんは格闘界の頂点を決めるという大会で優勝したばかり。このタイミングで引退は早すぎると思ったからだ。

「そうなのよ蘭！パパったら、真さんを後継者に育てるつもりみないなの！」

「え、それって、園子と結婚するってこと！？」

「そうそう！」

浮かれている園子。お姉さんは鈴木財閥に関わる仕事をするつもりが無いらしく、将来的には園子の旦那が鈴木財閥の跡取りになるだろうとは言われていたけど…。

「でも京極さんがよくOKしたね。」

「なによー。それって、京極さんが私を選んでくれなかったかもしれないって言いたいの？」

「いやいや、そうじゃないけど、彼、まだ引退するには早いつて思
つてないかなつて。」

「私もそこが心配だったんだけど、パパの『経済界の頂点』つて言
葉に意欲が沸いたらしいわよ?」

「へー!じゃあ、結婚式とかも?」

「あ、いや、それがさあ…。」

「待て史郎!」

「次郎吉さん!どうしました?」

「そやつが鈴木財閥の跡継ぎに、いや、園子の結婚相手に相応しい
か、ワシがテストする!」

「テストつて…。彼の人間性は素晴らしいし、園子も彼を好いてい
るし…。」

「駄目じゃ!ワシはそやつのを何も知らんからな!」

「…解りました。園子さんと結婚するためなら、どんな試練も受け
ましょう。」

「わー。京極さんかっこいい!」

「でしょ!私こっそり聞いてたんだけど、もう嬉しくつて…。」

「それで?どんな課題を出されたの?」

「…それがさあ。」

園子は表情が暗くなった。よほど難しい条件を出されたのだろうか?

「またまたうちの美術館に怪盗キッド様が『妖精の微笑み』つてい
うサファイアを盗みにくるつていう予告状が届いててね?」

もちろん私は快斗から聞いていたので知っていたが、知らないフリ

をした。

「え！？そうなの？」

「ええ…。それで、真さんに出された試練は、その『妖精の微笑み』を守り抜く事、なのよ…。」

え！？

うっそー！？

「どうしよう、蘭…。真さんは格闘は強いけど、そういうのは苦手な気がするの。いやだよ、私。真さんと結婚できないなんてことになったら…。」

「こ、困ったね…。」

…困った。

私は快斗に失敗なんてして欲しくない。でも、快斗が失敗しないと園子が結婚できない…。

ど、どうしよう…。

悩んでいる私に、園子が懇願する。

「ねえ！コナン君呼んでよ！あの子がいれば、キッド様を捕まえられるかも…！」

「だ、駄目よ！コナン君は哀ちゃんと旅行に行ってて、明日は夜になんないと帰ってこないもの！」

「そ、そんなあゝ。」

泣きそうな顔の園子。

ごめんね。

親友が困っているのに、彼氏が心配であんまり親身にとり合えないと、園子がふと考え込み、言った。

「あれ？蘭…。私、キッド様の予告の日が明日だって言ったっけ？」

！！！！

快斗から聞いてたからつい…。

慌ててごまかす私だった…。

そして予告当日。

私は快斗に一応鈴木家の状況は伝えた。

「いくら蘭の頼みでも、わざと宝石を諦めたり、つかまったりする気は無いぜ？」

「もちろんよ！園子のことは心配だけど、私は快斗のことも心配してるんだから！」

「お、おう…。サンキューな。」

結局私は『なりゆきまかせ大作戦』をとる事にした。

これは格闘技の試合で知り合った胸の大きい、風切る羽のような動きの格闘少女に紹介してもらった、とある格闘道場の長老さんに教えてもらった由緒正しい(?) 達人の作戦なのだ…？

もつとも、私の理想は快斗はつかまらず、京極さんが宝石を守り抜くことなのだが…。

新一…いや、『キッドキラ』『ホームズの弟子』江戸川コナンは不在だけど、私とお父さんは警備に呼ばれていた。

「今日はあのガキ無しか…。不安だな。」

お父さんを見て中森警部が呟く。

「それに…今回も鈴木相談役のわがまま…もとい、意向で素人が参加してるしな…。」

警部のジト目の先には京極さんが…。

「蘭さん。お久しぶりですね。この前の世界異種格闘技大会日本予選以来ですか。」

京極さんが私に気付いた。

そう。京極さんが優勝した世界大会には私も国内予選に出場していたのだ。

彼と園子、それにお父さんに勧められて出場した予選では、実は準決勝まではすすんでいた。

先ほど話を出した格闘少女に後一步のところまで敗退してしまったの

だが…。

ちなみに京極さんは準決勝ではその娘の彼氏を破り、決勝でその娘に辛勝。世界にすすんだのだ。

「いやあ。世界も猛者揃いでしたよ。」

「でも、優勝したんですよ。おめでとうございます。」

「ありがとうございます。ですが、今日は世界大会の時よりも緊張してますよ。大事なものがかかってますからね。」

「あらら〜？さすが京極さん。お熱いですね。」

私がちよつとからかすと、それだけでかなり顔を赤らめる彼。新いや快斗よりも純情で真っ直ぐ。園子がちよつと羨ましい。

P r r r P r r r

と、私の携帯が鳴った。

「はい、蘭です。」

「悪かったなー。純情じゃなくて。」

！！！

快斗！？

私は皆から少し離れる。

「…心が読まれた。」

「あー！やつぱそんな風に思ってたのか！なーんかいつもと違う表情してたから…！」

「ごめんごめん。快斗は純情ってのとはちよつと違うから。大丈夫、快斗の純粹なところ、愛してるよ。」

私がそう言った時、耳に当てたインカムに話している目暮警部が咳き込んだ。

つて…。

「か、快斗…。もしかして…。」

「あ、ばれた？」

「…一課の目暮警部が居るのはおかしいな〜と思ってたけど…。」
「おっと…切るぞ。」

目暮警部に中森警部が近づくと、携帯は一方的に切られた。

まあ快斗がどこに居るか分かってた方が私もいざという時動きやすいけど…。

「ま、真さん…。」

私は不安だった。

真さんが格闘最強なのは疑いようが無いけど、相手は怪盗キッド様トリックを使いこなす彼には真さんが敵うかどうか…。

「園子さん。心配しないでください。私は必ず守り抜きます。」

「そ、そうね。『妖精の微笑み』。しつかり…。」

「いえ。私が守るのは貴女と、貴女との結婚です。」

「え…。」

顔が急激に火照る。

「園子さん。私に貴女を生涯守り抜く許可を頂けますか？」

私は涙があふれた。

嬉しい。

真さんは照れ屋だし、結婚どうこの流れに自然と向かっていたら、言葉にしてプロポーズしてもらえるなんて思っていなかった。

蘭は離れたところで微笑んでるし、パパもニコニコ頷いている。次郎吉おじさまは『まだ早い』『まだどうなるか』とぶつぶつ言っていたが。

「もちろんよ。私は一生貴方に守ってもらいたい！」

おおー！

何故か歓声が上がる。

「でも、でもだからこそ…。頑張つて！キッド様から宝石を守つてね！」

「ええ。死力を尽くします。それに…。」

彼は私の耳元で囁いた。

「キッドが変装して潜入しているのを、既に発見済みです。」

「え!？」

…そのころ。羽田空港。

「なに!怪盗キッドの予告が今日!？」

「あら?しかももうあと30分くらいしか無いじゃない？」

「今回は俺には声もかかってねーぞ…。」

「お姉ちゃんあたりが気を利かせてくれたんじゃない?私達の旅行の事、話してたんでしょ?」

「まーな。しかし、警察に協力したかったぜ。」

「今回は諦めなさい。どうせ今からじゃ間に合わないわ。」

「しゃーねーか…。」

なに?なんなの?この子達。

私はとある、どこにでも居る、空港で働くおねーさん。

ここでは色んな変わったお客さんを見かけるけど、この子達も相当変わってる。

大人みたいな口調と会話。でもどっからどう見ても中学生。

中学生が二人で空港にいるのも驚きなのに、その二人はピッタリ密着している。

女の子が彼の肩に頭を掛け、男の子は彼女の腰に腕をまわしている。それでいて会話内容は自然な会話。

なに?なんなの?この子達。

キッドの予告時間が近づく。

まったく…。今回はあの眼鏡ボーズはいねーし、京極真とかいう素

人はいるし、なぜか一課の連中も居るし。

いつもと違う状況は奴にとっては障害にはならない。むしろ利用できる点が増えることになる。

くそっ！あと1分…。どこからきやがるキッド！

「中森警部…でしたね。今から私が不意をついて攻撃しますから、捕縛の用意を。」

！？

京極真が俺にこっそり耳打ちをする。

不意打ち？捕縛？何を言っただこいつ。

しかし、彼はすでに俺の傍にはいない。そのままツカツカと目暮の傍まで歩き…。

あと10秒…！

私が快斗…目暮警部のほうを見ると、京極さんが彼に歩み寄るのが見えた。

瞬間、私に悪寒が走る。

あと5秒…。

快斗がポケットのなかのリモコンに手をかけているのが解る。そのとき！

ビュッ！

京極さんの鋭い蹴りが快斗に対して放たれる。

ギリギリのところだよけた快斗。

なんで！？なんで解ったの！？

みんなも啞然とする中、再び京極さんの攻撃！

しかし快斗はまたもギリギリ避け、宝石の入ったガラスケースの上に降り立った。

変装はすっかりとけてしまい、いつもの白スーツにシルクハット姿。

「…よく解りましたね。私の変装が。」

このままではまずいかも…！

私は快斗を助けるため、みんなからこつそり離れ、快斗に無理を言
つて教えてもらった変装術でとりあえず婦人警官に変装した。

新一の蝶ネクタイ型変機を快斗が改造した、『チョーカー型変声機』
を装着すれば、私とは誰も気付かない。

そうして、すつと人の群れに加わった。

「ですが…予告どおり、『妖精の微笑み』は頂きますよ…。」
動揺を隠し、ガラスケースを開けて宝石を奪う快斗。

そして隠し持っていた閃光弾を床に叩きつけ…ようとした。しかし！
パシッ！

快斗が投げた閃光弾が破裂する前に、京極さんが物凄い反射神経で
それをつかみ、あさつての方向へ投げ捨てた！

「凄い！真さん！」

園子の歓声。啞然とする快斗。京極さんの蹴り…蹴り！？
ドガッ！

快斗は吹っ飛ばされ、宝石を落とす。

「い、今だ！確保〜！」

中森警部の叫び…！このままでは快斗は捕まってしまう…！
「はあっ！」

もう黙っていられない。私はそこに居る全ての人に素早く次々と手
刀をお見舞いし、気絶させていった！

最後に残ったのはもちろん京極さん…。

「キッド！早く逃げて！」

声は変わっていたが、私だと気付いた快斗はすぐに屋上に向かって
逃げ出した。

ハンググライダーで飛ぶつもりだろう。

さて、私も京極さんをやり過ぎし、目を盗んで変装をとけば…。

「…蘭さん。どいてください。」

…！！！！

…そのころ。とあるタクシーの中。

「結局、鈴木近代美術館ね…。」

「予告時間には間に合わねーけど、なんとか奴を見つけられれば…。」

「ねえ…新一。私と事件とどっちが大事なの…?」

「え…?」

「なーんてね。ちょっと試ってみただけ。カップルみたいでしょ?」

「バーロー。カップルみたいじゃなくて、カップルだろーが。」

「ふふ、そうね。」

「…よし!着いた!哀、ここで待ってる!」

「わかったわ。…新一、ちょっと待って?」

なに?なんなの?この子達。

私はとある、どこにでも居る、タクシー運転手のおねーさん。

私も色んな変わったお客さんに乗せるけど、この子達は相当変わってる。

大人みたいな口調と会話。でもどっからどう見ても中学生。

タクシーに乗る中学生カップルってだけでも珍しいけど、この2人のラブラブっぷりと来たら…。

用事を済ましに一旦降りる男の子に、女の子は優しく口付けを…。

彼が降りた後はクールな瞳で私には眼もくれず雑誌を読み始める。

なに?なんなの?この子達。

「ど、どうして…。」

どうして京極さんは私が毛利蘭だとわかったの？言葉にはならなかったが、彼は私が言いたい事を把握したようだ。

「…筋肉のつき方と骨格です。」

「筋肉のつき方と骨格で他人を判別してるのこの人！？」

「じゃ、じゃあ目暮警部がキッドだとわかったのは…。」

「ええ。隠してはいましたが、体格に対する筋肉、骨格、重心などの動きが一致していませんでしたので、変装だとわかりました。」

「そう…。」

思わず溜息をつく私。呆れて物も言えない。

人間離れしすぎているわ、この人…。

「蘭さん。どいてください。私はキッドを捕まえ、園子さんと結婚するんです。」

「園子の幸せは私も願っているけど…。」

そう言いつつ、私は本気の構えをとった。

「私にも、譲れないものがあるんです…！」

彼は世界で最も強い男、京極真。

本気で戦っても勝てる見込みは限りなく薄い。

それでも…！

「解りました。譲れないのは私も同じ。申し訳ありませんが、全力で行きますよ、蘭さん！」

そして戦いは始まった…！

京極さんの鋭い蹴りを何とかかわし、軸足を蹴り飛ばそうと出した右足。

しかし、京極さんは真上に飛び上がり、蹴り出していた右足を返して私を攻撃する。

左腕で何とかガードをし、飛ばされそうになるのを左足で踏ん張り、そのまま右手で突きを繰り出す。

しかし、それは京極さんの右手で受け止められてしまう。

そのカウンターで左手の突きを放つ京極さん。スウエーバックでなんとか避けるが、お腹に少しダメージを受ける。

やはり京極さんが1枚上手…。

しかしその時…！

ガシャーーン！！

上の階でガラスが割れる音。

私もびつくりしたが、京極さんも驚き動きが止まる。

…今だ！

瞬間、先に動けたのは私のほうだった。

「ああああああ！！！！！！」

私は京極さんの首を掴み、膝で連続攻撃を叩き込む。首を掴んだまま飛び上がり、それを軸に回転し首を攻撃！

その勢いのまま宙に舞い、回転したまま左足で踏みつけるように京極さんの上に降り立つ！

「うわああ！！！！」

いかに鍛えてある京極さんでも、これを喰らえばまともには動けないはず…！

「そ、その、技は…。」

「ええ。日本予選で出会ったあの娘に教えてもらった技です。確か

『ふーりん』…えつと…なんとか『ほーよく』とかつて…。」

「み、見事です…。まだ私も未熟…実践でこれでは…。」

言い終わらず、彼は気絶した。

今この会場で立っているのは私だけ。

あとは、変装をとき、皆に混じって起きたふりをし、京極さんが何を言っても知らないふりをするだけ…。証拠は無いんだもの、大丈夫なはず…よね？

ところで、さっきの音、なんだったのかしら。

気にはなるけど、見に行っている間に皆が目を覚ましたら大変。

私は気絶したふりを開始した。

数刻前。

「待てキッド！」

「め、名探偵！今日は居ないんじゃないかなかったか！？」

俺は美術館の屋上から飛び立つキッドを見つけた。

声は張り上げて見た物の、空と陸では勝負にならない…！

「くそ！喰らえ！」

それでも俺は一縷の望みをかけ、どこでもボール射出ベルトからサツカーボールを出し、蹴り上げた！

ガシャーン！！！！

しかし、キッドには届かず、美術館の上層のガラスを割ってしまった…。

「あ、しまった！」

「おい名探偵。ガラスの弁償はちゃんとしとけよ！じゃあまたな！はっはっは！」

そう言つてキッドは飛び去ってしまった。

とぼとぼタクシーに戻る俺。

「…駄目だったみたいね。」

「ああ…。くつそー！次こそは…！」

悔しがる俺の憎まれ口は、哀の唇によつてふさがれた。

「…哀。」

「ふふ。慰めてあげただけよ。」

運転席では、珍しい女性のタクシードライバーが、顔を赤くして俯いていたが、俺は気にせずキスを仕返した。

「ちょ…新…。」

「…サンキューな。哀。」

で、後日。

「でも、結局宝石は守りきったんでしょ？」

私と園子は喫茶店で会話をしていた。

京極さんは私については何も言わなかった。

まあ、骨格と筋肉の見た目、じゃ証拠にはならないし…。

「そうなのよ…。でもね…。」

結局園子と京極さんの結婚話は延期になっていた。

「次郎吉さんが認めてくれなかったの？」

「いえ。むしろおじ様は『変装したキッドを見破るとは素晴らしい洞察力だわい！』とかって乗り気だったんだけど。」

「じゃあ、どうして…。」

「真さんがね。油断してキッド様の仲間倒されてしまった自分が許せないから、また修行の旅に出るって…。」

「あ、そうなの…。」

京極さんなら言いそう。私は呆れ顔になる。

でもそれって、私のせいってこと…？

「いいの！真さんもあの時あんなこと言ってくれたし、私こうなったらいつまでも待つわ！」

「その意気よ！…って、新一を待ちきれなかった私が言う事じゃないか。」

「と、いうわけで、蘭。傷心の私は、絢に誘われた合コンに行くんだけど、蘭もどう？」

…。

さすが園子だ。私は深く考えるのはやめた。

第30話「カエルのような宇宙人にでてくるシャアがモデルですか？コナンがそ

「風林寺光鵬翼」ですね。サンデーつながりってことで…。

実際京極が兼一や美羽より強いのか、その京極を蘭が倒せるのかは解りません。

一応犯人との戦闘が多いので実践慣れしている蘭が、イレギュラーの事態の際は少ないと判断しての勝利です。

いろんな方からの感想、本当に感謝しています！

今後『事件編』の予定もありますが、しばらくは一話から二話完結のサイドストーリーを描いていく予定は未定です。

第31話 『私は過去を忘れる事で生きて行けるのかしら。いいえ。罪は忘れて

そこは防音に優れた会議室。

なぜか明かりが消されたその部屋で、正面と左右斜め前を会議用の長机で囲まれ、私こと遠山和葉は椅子に座らされていた。

なんや…なにがはじまるんや…。

パツと正面に真上からスポットライトが当たる。

そこには鈴木財閥のご令嬢…園子ちゃんが座っていた。

両肘を机に突き、両手を口元で組みながら神秘的な面持ちをしている。なんやの…。そう思ったとき、彼女は口を開いた。

「問題ない。そのための鈴木財閥です。」

???

い、意味が解らん…。

「遠山和葉さん…。あなたの幼馴染に対する告白行為は、これまで全てスルーされて来ました…。」

園子ちゃんがそこまで言うのと、今度は右斜め前に上からスポットライトが当たった。

そこには蘭ちゃんが、同じポーズで座っていた。

「服部君は貴女の事が嫌いなわけではないというのが我々の見解です。ではなぜ、いつまでも付き合うことが出来ないのか…。」

と、今度は左斜め前。

歩美ちゃんが座っていた。もちろん、同じポーズで。

「おそらく平次お兄さんが恋心というものにあまりに無頓着なのが原因でしょう。」

…。

つてか、なんなん？この部屋。

スポットライト自在とか。

「と、いう訳で、今回の作戦を発表します…！」

園子ちゃんがそう言うのと、パツと部屋の明かりが点いた。

彼女の後ろにはホワイトボードが…。

と、立ち上がり、彼女はパンツとホワイトボードを叩いた。そこには殴り書きみたいな文字がある。

「…ダブルデート作戦…？なんやそれ…。」

「そう！ダブルデートよ！」

園子ちゃんが大きな声を出す。続くは蘭ちゃん。

「つまり、和葉ちゃんと服部君、それにとあるカップルが一緒に出かけるの。」

「そうそう。そんで、そのカップルのラブラブっぷりを見せ付けんのよ！」

「そうすれば、平次お兄さんが『わーええなー。』とか、『和葉とこんな風になりたいわー。』とか思ってる…。」

「そこで、恋心に気づくかも…って作戦なのよ。」

「ちよつと蘭、気づくかも、じゃないわよ！気づくの！この園子様の完璧な作戦に抜かりは無いわ！」

…。

ええ友達だとは思う。私のことを思ってくれてんのはわかる。せやけど…。

「で…。なんなん？さっきの演出は…。」

「ああ、あれは、ただやってみただけ。」

悪びれもせずあっけらかんと言う園子ちゃん。なんかどつと疲れが…。

「ってか、歩美ちゃんまでおるし…。」

「だって！平次お兄さんがはつきりしないの、私が見てもやきもきするんだもの！このままじゃ、和葉お姉さんがお婆ちゃんになってもずつと片思いかもよ！」

こ、怖い事をいう…。

「それで、同行するカップルなんだけど…。」

「それや。知らん人とは流石に出かけたくないで？」

「でしょ？でも私と京極さんじゃちよつとイメージする『ラブラブバカップル』とは違うし…。」

「あれ？カップルじゃなく、バカップル？」

「私と快斗じゃ、和葉ちゃん嫌でしょ？」

うーん…。そうなんや。どーも、どーしても、工藤君そっくりの快斗君と一緒にいる蘭ちゃんが、心の奥で納得できん…。

「歩美は特定の彼氏はいないから…。」

…。特定のつてことは…。

「と、いうわけで！今回はこちらの二人を用意しました！」

園子ちゃんが右奥の扉を指すと、それが自動で開く。向こうの部屋に居たのは…。

「なんだなんだ…。もう出て良いのか…？」

「あら？和葉さんに、お姉ちゃん…？」

コナン君と哀ちゃんやった…。

「歩美ちゃんにお願いして連れてきてもらったの！作戦内容はまだ伝えてないけど、ま、大丈夫でしょ。」

…。ご、強引な…。

「おい園子！…ねーちゃん。作戦って…？」

「私達、歩美ちゃんに内緒の話があるからついて来てって言われて待たされてただけなんだけど…。」

園子ちゃんは答えず、歩美ちゃんと蘭ちゃんが二人に近づいてここに…いや、にやにやしなから言った。

「二人には、和葉ちゃん（お姉さん）と服部君（平次お兄さん）と一緒に、デートに行ってもらいます！」

「…は？」

「え、なにそれ、決定？」

ハハ…。とまどってるやん…。

この二人が園子ちゃんのイメージする『ラブラブバカップル』なん

か…？

私にはちよつと想像できひんけど…。

しかし、その後、済崩的に私達3人は作戦の決行を許諾させられた…。

「で？新一、どうするの？」

2人きりになったので、私は彼に質問した。

「さあ？ま、歩美が『別に普段通りの2人でいいよ』って言ってたから、あんま肩肘はんねーで、普通にしてよーぜ。」

「それでいいのかしら…。」

ま、歩美ちゃんがそう言うんだから、いいわよね…。

「大阪見物なら、前にしたやろ？ま、ええけどな！俺は大阪のええところ何べんでも紹介できるで！」

表向きは、コナン君と哀ちゃんの2人を大阪案内するということにして、上手い事平次を連れ出した。もちろん後ろには園子ちゃん、蘭ちゃん、歩美ちゃんがこっそりついて来ている。

平次は前回行かなかったところをピックアップして二人に紹介している。

ま、こうなるやろ。予想通り。

別になにごともなく、昼頃、新世界で昼食をとることに…。

「な、ここの串カツ、めっちゃ旨いやろ？」

「だな。」

「でも、新世界っていえば結構観光名所なのに、前は案内してくれなかったわよね。」

「そりゃ、ここは独特やる？子供達あんなぞろぞろ引き連れては正直面倒やっただけや。自分らなら、全然大丈夫やる。」

「ま、そーだけだよ…。」

そういうコナン君の口元にソース。

「ほら、ソースついてるわよ。だらしないわね…。」

そう言っけて口元を拭いてあげる哀ちゃん。

「ん、サンキュー。」

お、結構ラブラブっぽいんじゃない？私は平次を見る。

「お。なんや…。」

お、平次も何か感じた！？

「オカンと子供見たいやな！」

そ、そうきたか…。

後ろのほうでちょっと大きな音がしたが、園子ちゃんたちがこけた音だろうから、あえて無視した。

道頓堀を案内する平次。

手をつないで仲良く歩いている哀ちゃんとコナン君。

手か…。

作戦は作戦やけど、平次もその2人を見ている事だし、私は勇気を持って言ってみた。

「な、平次。私らも手え繋がへん？」

でも平次の返しは。

「なんや。お前は大丈夫やる。ここは地元やぞ？手なんか繋がんでもはぐれたりせえへんって。」

そう言っけてガハハと笑う。

…はあ。

しばらくぶらぶらしていると、哀ちゃんが少し離れてしまう。

「お、おい、灰原…。」

どうやらペットショップの子猫に眼を奪われたようだ。

「へー。なーんや。クールで可愛くないねーちゃんやおもったけど、可愛いとこもあんなな。」

「哀ちゃんは昔から可愛いよ。平次、今更気づいたん？」

「コナン君が戻ろうとした時…。」

「なんや、君。可愛いな。」

「なーなー。これから俺らとお茶せーへん？」

哀ちゃんが地元の男子学生に囲まれてしまった。

「なんや。ガラ悪いなあ。どれ、助けたるか。」

平次が向かおうとしたとき、コナン君がそれを止めた。

「…俺が行く。」

「あ、あの、私…。」

「おー！声も可愛いな！」

「おねーちゃん東京もん？大阪男のええとこ教えたるでー。」

「なーなー。行こうやー。」

押しの強い男子3人に囲まれて、さしもの哀ちゃんも困っている。そこへようやくコナン君が到達する。

「灰原。行くぞ。」

男の子に眼もくれず、コナン君は言った。

「ええ。」

それに何事も無かったかのように従おうとする哀ちゃん。

「ちょ、ちょう待ちいや。」

「なんや、お前。」

コナン君の肩に手を掛けるなんか強面の男の子。

「悪いな。こいつは俺の女なんでね。」

…。きやー！コナン君かつこええわー！

「あら。いつから私は貴方の所有物になったのかしら？」

「ば、バーロー。言葉のあやだろ。」

なんやこいつら。

俺の名前は高橋祐大。生粋の大阪人や。強面で地元でも有名なんや。ちよっと可愛い女の子を見かけたんで、仲間3人とナンパしたら、いけ好かない東京もんがしゃしゃりできてきおった。

俺の女？

けっ。

そんなんでもカッコつけたつもりかい。

「なあ、このままじゃ面白くないし、ちよっとからかってやらんか？」

一緒におった池田がこっそり俺に囁く。

そらええな。

俺はずいっと前に出て、持ち前の強面を生かして凄んでやる。

「なんや、お前の彼女なんか？」

「…ああ。」

「そーかー。なら、ここでキスでもして貰おうか？」

「…は？なんだって？」

「そりゃそうやろー！俺らの純粋な下心舐め腐った真似してくれた

んや。相応の対価つちゆうもんを払ってもらわな。なあ？」
どうや。びびるやろ。小便ちびりそうやろ。

東京もんは関西弁で、強面で迫られるとすぐびびりよる。
泣きべそかいておるおろし始めたら許したる思ってたが…。
そいつは予想外の事を言い出しおった。

「…しゃーねーな。灰原、いいか？」

おいおい、工藤。何がしゃーないんや。

地元の悪ガキどもに囲まれた工藤とちっこいねーちゃん。

いい加減助けたるかと近づこうとした瞬間、俺には予想も出来ひん
かった展開になった。

横で和葉も驚いとる。

そりゃそやる。人通りも多い真昼間やで？

ところがや。

「別に、構わないわよ？」

ちっこいねーちゃんまで何を言うてんねん。

その瞬間、二人の唇と唇が…あかん。恥ずかしゅうてこれ以上実況
できんわ。

べ、別に構わないで、哀ちゃん！

横で平次も驚いてる。

いくらなんでも、こんな往来の激しいところで、こんな昼日中に…。
うわ、キスしおった！

して…して…？

???

あれ？いつ終わんの？

キスって、唇と唇合わせて、『これでいい？』みたいに悪ガキどもに言っつて、それで終わりなんとちやうの？

ちよ、その…。長すぎるわ！

そのとき、私の携帯が鳴る。園子ちゃんや。

少し離れて電話に出る。幸い平次は呆然としてて、私の動きに気づかない。

「もしもし？園子ちゃん？」

「ちよつと、どうゆう状況なの！？離れてたら会話とか聞こえないから…！」

「あ、実はな…。」

私が説明し、終えてあらためて見ると…。

ま、まだしとんのかい！

…。

悪ガキどもも最初は囁し立てていたけど、徐々にもじもじし始めた。人のキス見て照れて興奮するなんて…って、私も平次も人の事言えんけど…。

と、二人はようやく離れた。

「…もう終わり？」

もうっつて！哀ちゃん！

「なんだよ…。人前だし…。」

いやいやいやいや。十分でしたよコナン君！

「…私、スイッチ入っちゃいそうなんだけど？」

スイッチっつて！…なんの？

「バーロー、自重しろよ…。」

といいつつもう一度軽くキスするコナン君。

…。

もうええ。好きにしてください…。

「あれ？あいつら、どこに行った？」

「他人にキスして見せるとか言っておいて、居なくなるなんて、失礼な人達ね。」

…あ、2人が戻ってくる。

私はなんとか平静を装った。

「なんなん？今の…。ラブラブやね！」

「？別に？あんなの、大した事ないよ。」

「そうね。人前だし、昼間だから、いつもより短かったしね。」

…。

園子ちゃんの言う通りや…。この2人、完全なる『ラブラブバカッブル』やわ。

その日の夜。

コナン君と哀ちゃんは帰宅。多分こっそりついてきてた3人組と合流してるだろう。

私は平次に呼び出されていた。

「なあ、和葉…。」

「なんなん？平次。」

「あの2人…。凄かったな…。俺も付き合い長いけど、あんなくどいコナン君初めて見たわ。」

「そうやね。なんか…。」

「なんか、羨ましい思ってた…。」

「へ、平次？」

「なんや？」

「いや、平次がそないなこと言うなんて、意外やなーと思って…。」
「なんや。俺かて、恋愛感情くらい、解るっちゅーねん。もっええ歳やぞ？」

「そ、そんなら…。」

私は期待した。

自分から次の言葉を言わんでも、平次から言ってくれる事を。

せやけど、平次の言葉は…。

「…あかん。駄目や…。」
「…？？」

なにが？なにが駄目なん？平次が今何を考えてるのかわからへん。

「和葉、…すまん。」

平次はそう言ったきり、何も言わなくなってしまった。

その様子を見て、私も何も言えなくなってしまった…。

「そっか…。よくわかんないけど、詰まるところ作戦は失敗だつて。」

帰りの電車の中。園子が和葉ちゃんからの電話をきって報告する。

あ、駄目よ？電車の中で携帯使っちゃ。

「でも、服部君のなかに何か芽生えたのは間違いないわね。話の内容から。」

「駄目つて…。なにが駄目なのかしら…。」

「平次お兄さんつて、ちよつと天然だから、何考えてるかなんてわかんないよね。」

歩美ちゃんつて意外と毒舌よね…。

「そーれーよーりー！コナン君と哀ちゃんよ！あんだ達、想像以上に凄いわね！」

「そ、そんなことないよ、園子ねーちゃん。」

「そうね。別に、普通のことだわ。」

「そっだよね。なんで皆あんなに驚いてたのかな？」

…！歩美ちゃん！？

第31話「私は過去を忘れる事で生きて行けるのかしら。いいえ。罪は忘れて

原作がどうなっているか、どうなっていくかは解りませんが、この物語の平次、和葉は進展せず…です。平次の言葉の意味は…？しばらく脇にどけておきますが。

ところで、コナンと哀のラブラブっぷりも気になりますが、それ以上歩美のキャラ崩壊の激しさが…！

とはいえ、この物語で一番やりたかった事は、お分かりの通り、最初の3人のポーズです！

第32話「ええ。旅行以来、北海道に住んでみたいな」とか思う事はあるわよ。

「お…よう。」

「あら。」

俺は名探偵毛利小五郎。今日は朝から競馬に出かけ、夕方帰ってきたのだ。

しかし、今日は娘の蘭は大学の研究室で飲み会、息子同然のコナンは同級生達と一緒にスキーに出かけている。

そんなわけで、雪舞う寒空の下、ラーメンでも食べに行こうか一人ぶらぶらしていたのだ。

すると、前から、これまた一人で歩いているコナンの彼女、灰原哀を発見したのだ。

「なんだ、一人で。お前もコナンと一緒に、スキーに行ったんじゃないかったのか？」

「遠慮したのよ。男の子ばかりの集団だったから、変に私がいると彼が浮いちゃうでしょ？」

「ん…。まあ中学生の集団じゃあそうなるな。」

「で、今日は博士もフサエさんとデートだから、たまに外食でも…と思ったんだけど…。」

「そうか。そうだ、俺はこれからラーメンを食いに行くんだが、一緒に行くか？」

「え…？」

雪が降る寒い中、一人歩いていたら出会ったのは彼氏の、まあ、お父さんみたいな存在な訳で。

ラーメン一緒にどうだ？とかって誘われた訳で。

「…そうね。」

せつかくだから、連れて行ってもらうことにしようと思った訳で…。

「ここでいいだろ。このラーメンはなかなか美味いぞ。」

「閉店まで30分くらいしかないみたいだけど、大丈夫かしら？」

「なーに。モノはラーメンだ。大丈夫だろ。」

ガラスと引き戸を開ける迷探偵。

「へい、らっしやい！」

「あー…俺は醤油ラーメンで…。お前、どうする？」

「にんにくラーメンチャーシュー抜き。」

注文を終え、私たちは席につく。周りを見渡すと食べ終えてそろそろ店を出ようという男性が一人居る以外は誰も居ない。

並んで席について…親子にでも見えているかしら。

ま、普通、いい年した髭のおじさんと、中学生になる居候の少年の彼女が二人でラーメン、なんて考えもしないわよね。

「で、最近どうなんだ？コナンとは。上手く行ってるのか？」

「まあね。相変わらず気障な推理オタクだけど、優しいし。」

「…中学くらいの頃の蘭に、新一について聞いたときと似たような返事だな…。」

呆れ顔の迷探偵。

「おやあ？あなた確か、名探偵の毛利小五郎さんじゃあ？」

会計を済ませた男性客が彼に気づいた。

「いやあ、ニュースで活躍ぶりは拝見してますぞ？今日は娘さんと食事ですか？」

…やっぱり。親子と思われるてみたいね。

「いやー。娘じゃないんつすよ。この子は、まあ…平たく言えば、息子の彼女でして。」

「ほう！なんと！羨ましいですなー。私にも息子が居ますが、彼女

を紹介してもらったことすらありませんよ。」

そついいながら、その客は店を出て行ってしまった。

「息子の彼女…ねえ？」

「バーロー。居候どうこうって馬鹿正直に話してたら面倒臭いだろ。」

そうこうしているうちに目の前にラーメンが置かれる。

私はすぐに手を伸ばした。

「…あら？ほんとに美味しい…。」

「だろ？お前も案外素直な感想を言えるんだな。」

「…どういう意味よ。」

「なーんつーか、お前は昔っからコナン以上にこまっしゃくれているっつーの？そういう風に見えてたからな。」

「素直な感想くらい普通に言うわよ。…それより、お前ってやめてくれない？本当に親子みたいじゃない。」

「あ？まあそうだな…。じゃあ、哀…か？」

「それは…特別だから…。貴方には呼ばれたくないの…。」

「ほほ…ん…さてはコナンと二人っきりの時は、そう呼ばれているな？」

少し赤くなる私。やはり他人にはつきり言われると照れる。

「じゃあ、哀ちゃん…でいつか。それより貴方ってのもやめねーか？中学生にそう呼ばれるのはなんか…。」

「あら、そう？じゃあ…江戸川君風におじさん？それとも…園子さん風におじさま、がいいかしら？」

「おじさま…か…。」

そついう会話をしつつも、ラーメンがすすむ。

嫁と舅の会話ってこんな感じなのかしら…。別に彼の本当の父親ではないけれど。

そんな馬鹿なことを考えていると、ガラガラッと音を立て、目暮警部が入ってきた。

「な！毛利君！」

「警部殿、事件ですか？」

「ああ…すみませんが、この男をご存じないですか？」

警部は店主に写真を見せる。

「ああ、うちの常連さんだ…。今日も1時間前くらいに来たよ。でも、名前までは知らないな。」

「そうですか…。」

「その男がどうかしたの？」

私が迷探偵…いや、おじさまの影から顔を出すと、警部は驚いた顔をした。

「おや！哀君と毛利君とは、珍しい組み合わせだな。コナン君はどうしたんだい？」

「今日は男友達とスキーに行ってるわ。」

「そうか…。いや、実はな、この男がここから200メートルほど離れた路地裏で殺害されていたんだ。」

「殺人事件…。」

そう言っただけで私は警部が持っていた写真を見せてもらう。

「身元がわかるものは持って無かったんすか？」

「ああ。財布は中身が全て抜かれていてな。そこで、ここいらの店をしらみつぶしに当たっていたんだ。」

「じゃあ物取りの犯行ですかね…。」

「いえ…物取りにしてはおかしいわ。正面から何箇所か刺されている割には防御創が無いもの。」

「そうか。つまり、まさか刺されるとは思っていない相手に刺され、呆然としているうちに殺されてしまった…ってことか。」

「ええ…おそらく。」

「警部殿。私も現場を見てもよろしいですか？」

「ああ、いいだろう。」

そんな会話をしていると、店主があきらかに不機嫌そうな顔をしているのが見えた。

時計を見ると閉店時間をもう15分もまわっている。

私は慌てて残っているラーメンを食べてしまおうと手を伸ばした…しかし。

タツチの差で店主が井を取ってしまった。

「お客さん。食べないんなら、もう閉店ですので…。」
言いかけた店主におじさまが一言。

「子供がまだ食ってる途中だろーが！」

「い、いや…いいから行きましよう？」

その後のおじさまの推理は冴えていた。

被害者の身元を高木刑事が割り出してきていたため、すぐに容疑者が3人ほど浮かんだ。

おじさまはその人達の話の聞いてすぐ、中の一人が矛盾した事を言っているのを見抜き、証拠を見つけ、犯人と断定したのだ。
迷探偵なんて思ってた悪かったわ。

「…ああ、そうさ。俺がやったのさ…。」
その犯人が凶器のナイフを捨てたという場所にやって来た時、それは突然起こった。

彼がナイフを拾い、一直線に私に向かってきたのだ！

もう！何度狙われたら気がすむの私！？

「あ、哀君！」

「危ない！」

目暮警部と高木刑事の叫び声。私は思わず目を瞑った。
グサツ！

鈍い音がしたが、体に痛みを感じない。

恐る恐る目を開けると…。

「ぶ、無事か？」

「おじさま！何で！」

私をかばい、右腕を刺された毛利小五郎が…！

「バーロ！。息子の彼女をどうこうされてたまるかよ！」

…あら。

不覚にも、ちよつとカツコいいとか思つちやつたわ。

「か、確保〜！」

上ずつた目暮警部の掛け声と共に高木刑事たちが犯人に飛び掛り、事件は幕を閉じた…。

「…で？どーしてこーなつてんだよ。」

次の日。

探偵事務所でソファに座つて推理小説を読みながら、ジト目で私を見る新一。

「いいじゃない。私をかばつたおかげで、しばらく右手が動かないんだから。」

右手をつつたままのおじさま。

「はい、昼ごはんできたわよ。口を開けて。」

黙つて言われた通りにするおじさま。箸を持って口に運ぶ私。

「どう？」

「うん。美味い。蘭より料理うめーんじゃねーか？」

微笑むおじさま。

「灰原〜…。俺も〜…。」

「もう！子供じゃないんだから、自分で食べなさい。」

「おっちゃんばっかりずるいよ。」

かなり甘えた声で駄々をこねる新一。

「…しょうがないわね。じゃあ、ちょっと待ってなさい。この名探偵さんの介護が終わったら、貴方のお世話もしてあげるから。」

「介護ってなあ…。」

呆れる新一。

「いやー。こんな可愛い子に介護してもらえるんなら、俺は全然構わんぞ。それにな、コナン…。」

ニヤニヤしながら彼に話しかけるおじさま。

「俺の事は気にせず、『哀』って呼んだらどうだ？」

「…!!!灰原…。おめー…。」

ちよつと照れてふくれる彼。ま、そこが可愛いんだけど。

おじさまが食事を食べ終えてもまだ不貞腐れてソファでごろごろしている彼に、私は近づいた。

「ほら、あ〜ん。」

嬉しそうに飛び起き、口を開ける彼。

「おうおう。嬉しそうだな。」

おじさまの声。

「うっさいな…。」

口の中で食べ物をもごもごしながら睨みつける新一。

だが、おじさまはものともせず、にっこり笑ってこう言った。

「いや、おめーも確かに嬉しそうだが、哀ちゃんもだよ。」

第32話「ええ。旅行以来、北海道に住んでみたいな」とか思う事はあるわよ。

蘭は朝まで研究室で飲んでいてぶっ倒れているため、まだ帰ってません。研究室のソファに寝転がりながら、居もしない園子に向かって「園子ちゅわ〜ん…おみじゅ、ちよ〜らい…。」と魔されています。

…まったく…誰に似たんだか…。

二人が行ったラーメン屋さんは「死ぬほどヤバイ…」ではありませ

ん。
嘘かホントかしらねえが、私はコミックス派でして、この話を書いている途中で新刊（73巻）を購入して、少しびっくりしたものです。

第33話「元太」それでよー先輩の必殺『皇帝ペ○ギン2号』がでただけどよ

「あら？ガキンチョ。」

「ああ、園子…ねーちゃん。」

私はある晴れた初夏の日、偶然道端で眼鏡のガキンチョこと江戸川コナンに出会った。

どうやら一人のようだ。

「今日は哀ちゃんと一緒じゃないのね。」

「い、いくらなんでもいつも一緒な訳じゃないよ…。今日は歩美ちゃんと出かけてるよ。」

そうか。歩美ちゃんと哀ちゃんは昔から仲良しだったわね。

性格は全然違うけど…。

「で？中学2年生になって、どんな感じ？」

「別にどーってことないよ。勉強は簡単だしね。」

あら、生意気。

「園子ねーちゃんこそ、大学院にも行かず、就職もしないで、何やってんのさ？」

「あ、相変わらずけずけ聞いわね…。私はいいのよ。『家事手伝い』で。真さんが帰ってきたら、今度こそ結婚するんだから。」

今日は日差しが強く、まだ夏と言つには早いけど、少し汗ばむくらい暑い。

「ねえガキンチョ。奢るからさ、そこの喫茶店行かない？」

「いいよ…一人で行ってきなよ。」

「いいじゃない。いい歳した女の子が一人で喫茶店に入るの寂しいもんなのよ。」

「女の子って歳じゃねーだろ。」

「なんか言った？」
そして、私たちは一緒に喫茶店に入った。

今日は土曜日だというのに、哀が歩美とシヨツピングに出かけ、蘭は研究室で論文、おっちゃんは浮気調査、光彦は塾の講習、元太は部活で、俺は一人、する事も無くぶらぶらしていた。すると偶然園子に会い、なんか知らないが喫茶店に一緒に行く事になってしまった…。

ガキの頃からの友達といえは友達だが、蘭を間に挟まずに二人で行動なんか殆どしたことがない。
珍しいよな〜とか思いつつ、俺はアイスコーヒーを頼んだ。

「でさ。最近蘭の様子はどう？」
「園子ねーちゃん、あんまり会ってないの？」
「そうなのよね。大学院って研究があるからか休みが不定期みたいで、昔みたいに約束しづらくなっちゃってさ。」
「ま、そうだね。それに、休みっていうと大体黒羽さんに会いに行ってるし。」
「そうそう！もー、女の友情なんて、儂いものね〜。」
「でも酔っ払うと園子ねーちゃんが居ないのに、『園子ちゅわ〜ん』とか言ってるよ?。」

「…あの子、アンタの前でも酔うの?。」
「うん。おっちゃんと一緒に?むとね…。」

「ほんつと！親子よね…。まさか蘭があんな風になるとは思わなかったわ…。いい、ガキンチヨ。あんな風な酔いかた、絶対真似しちゃ駄目よ。」

「したくてもできないよ…。」
何気ない会話をしていると、奥の方から子供の泣き声が響いてきた。ふとそちらを見ると…。

「あら？高木刑事と佐藤刑事じゃない？」

「園子ねーちゃん、もう佐藤じゃないよ。」

「わかつてるわよ。でも、じゃあ、なんて呼べばいいのかしら…。」
おそらく2人の子供だろう。

何が気に入らないのかワンワン泣いている。

高木刑事がなだめて、佐藤刑事が抱っこすると徐々に大人しくなっていた。

「高木刑事。」

園子が近寄っていく。

俺も席で待っているのは不自然なので、その後が続く。

「やあ、園子ちゃん、コナン君。」

「へえ。珍しい組み合わせね。」
結婚してしばらく経ち、子供も3歳になったので、佐藤刑事も職場に復帰している。

目暮警部に聞いたところでは、職場ではややこしいので『佐藤美和子』のまま。

「久しぶりですね。大きくなったわね。陣君、いまいくつ？」

「さんさい！」

さっきまで泣いていたとは思えないほど元気に答える高木陣。
2人の子供だ。

佐藤刑事の思い出の人、松田陣平からその名を付けたとのこと。高木刑事も反対しなかったらしい。

俺としては、「じん」という響きに嫌な思い出があるので反対しなかったが…。

「2人して非番なの？」
「そうなんだ。白鳥警部が気をつかってくれて、結構多いんだよ。一緒の休み。」
「私としては、仕事の日は陣をお母さんに預けなきゃならないから、二人別々の方が迷惑かかなくていいと思うんだけどね。」
「ひ、ひどいな美和子さん…。せっかく一緒の休みなのに…。」
「もしそうなくても、貴方とは職場で一緒でしょ？」
なかなか上手くいっているようだ。
と、その時だった。

「キヤー！」

レジの方から悲鳴。

慌てて俺たちがそちらを見ると、覆面をした男がレジの女性にナイフを突きつけていた。

「金を出せ！」

「は、はい…。」

恐怖のあまり素直にレジを開ける女性。

金をむんと掴み、逃走する犯人。

「待て！」

「待ちなさい！」

目の前の犯罪に、刑事二人が反応した。

俺も追いかけてようと思いき踏み出すが…。

「ごめん、コナン君、園子ちゃん。陣をちょっとだけ預かって！」

佐藤刑事が俺に子供を押し付けた。

そのまま犯人を追いかけて2人。

あとに残される俺と園子、そして陣…。

「い、行っちゃった…。どうする？ガキンチョ。」

「どつするって…。」

両親に置いてけぼりを食らってきよとんとしている陣。

「…仕方ない。しばらく預かるう…。」

「そうね…。」

喫茶店で十数分。

なんとか陣が泣かないようにあやしていた俺たちに、佐藤（旧姓）
刑事から電話が入る。

「園子ちゃん？ごめんね。犯人は捕まえたんだけど、2人そろって調書作りに呼ばれちゃって…。私か渉が空いたらすぐに陣迎えに行くから、2丁目の公園で待っててくれない？」

「…だそうよ？」

呆れ顔の園子。

「じゃ、頑張つてね！園子ねーちゃん！」

「アಂತも来るの！」

「やっぱし…。」

公園には何人かの子供たちが居た。

友達なのだろう。陣もその子供達の輪の中に入っていく。

俺と園子はベンチに座って一息ついた。

「こーしていると、若夫婦とその子供って見えるかしらね？」

「バーロー…。俺は中学生にしか見えないし…。」

普通に『新一』が出ていた俺は慌てて口調を変える。

「…園子ねーちゃんと夫婦には見えないでしょ？」

「何よ。私が老けてるって言いたいわけ!？」

ちよつとムツとする園子。

…。

陣は走り回っている。

「子供は元気ね〜。」

「だね。」

「アンタも子供なんだから、あの子たちと一緒ににはしゃいできたら?」

「あのね…。」

陣がつまづく。

転ぶ!?!と思つた俺たちは反射的に立ち上がりかけたが、陣は体勢を立て直してまた走り出した。

ふうつと溜息をついて腰を下ろす。

「子供を見るって、結構気が抜けないわね…。」

「そーだね。」

「将来私ちゃんと子育てできるかしら…。」

「大丈夫だよ。園子ねーちゃんとはかく、京極さんはそういうの得意そうだから。」

「ちよつとガキンチョ!アンタね、さっきから私のこと馬鹿にしすぎなんじゃないの?」

園子がぎゃーぎゃー言い出す。

面倒臭そうに対応する俺。

それを見てさらにヒートアップする園子。

と、そこへ陣がやってきた。

「けんか、めっ!」

どうやら俺達が喧嘩していると思つて心配したようだ。

「大丈夫だよ。別に喧嘩じゃないから。」

「そうそう。このガキンチョは…いや、このお兄ちゃんは口が悪い

から注意してたのよ。」

誰が口が悪いって…。

「なかなおり？」

「そ、そうそう。」

別に仲直りするような喧嘩では無いのだが、適当に相槌を打つ園子。

「ちゅっちゅは？」

「へ？」

「パパとママ、なかなおりのときはちゅっちゅするの。」

どうやら高木家では仲直りするときはキスが決まりらしい。

「いいのいいの。そんな事しなくても。」

「まだけんかしてるの？」

「いや、そう言う訳じゃねー…。」

「じゃあちゅっちゅするの！」

押し問答になってきた。

どうやら俺達がキスするまで引かない気のようにだ。

陣に聞こえないように小声で相談する俺たち。

(どうすんのよ！)

(どうするったって…。)

(このままじゃ陣君納得しないわよ！)

(かといつても…灰原に悪いし。)

(私だって真さんに何て言えばいいか解んないけどさ！)

じっと見ている陣。

(…見てるわね。)

(…見てるね。)

(…解ったわ。アメリカじゃキスなんて挨拶代わりだし、この際仕

方ないでしょ。)

(え！マジですんの？)

(だって終わらないわよ？)

本当に心配そうな陣。

(…わかったよ…。)

(そうそう、哀ちゃんとしてるようなディープなのは遠慮するからね！)

(ったりめーだ！バーロー！)

『新一』が再び出てしまう俺。

「じゃあ、仲直りするから、見ててよ？」

園子がそう言つと、ぱあつと顔を明るくする陣。

「じゃあちゅっちゅするの！」

「分かった分かった…。」

仕方なく、俺は園子に近づく。

昔からの友達とこんなことしてるなんて、少しは変な気分になるが。

そして…。

ちゅっ。

唇を少しだけ重ねて、すぐに離れる俺たち。

何故か顔が赤くなる。

「どう！？ちゃんと見てた？陣君！」

園子が無駄に得意げに陣の方を見ると…。

当の陣は仲の良い友達が来たのか俺たちのことは全く気にせず、背

を向けて走り出していた…。

…。

「はあ…。子供、嫌い…。」

俺は園子が溜息混じりに呟いた言葉を、否定する気にならなかった

…。

そして、その様子を見ていた一つの影に、俺たちはまったく気づいて

ていなかったのだ。

「ごめんね」。園子ちゃん、コナン君。」

1時間くらいで高木刑事が公園にやってきた。

陣はそれを見つけると大喜びでパパにじゃれ付いた。

「いえ…。」

「気にしないでください…。」

「?どうしたの?随分疲れてるけど…。陣が何かやった!?’

「うーん…何と言うか…。」

「いや…なんでもないよ…。」

不思議そうな顔の高木刑事を尻目に、俺たちは早々に別れを告げ、俺は探偵事務所へ、園子は家へ帰ろうと歩き出したのだった…。

後日。

「…新一?これは何?’

哀が携帯の写メを見せてくる。

そこには…。

「な!なに!なんでこれが!’

「お姉ちゃんから送られてきたのよ…。」

園子と俺のキスシーン。随分バツチリ写っている。

「いや、これは、その、あの…。」

別にやましい事は一切無いのだが、何故かしどろもどろになる俺。

「さあ、浮気性の名探偵さんをどうしてやるうかしら…。」

ニヤリと笑う哀の眼に、俺は恐怖を隠せなかった…。

「園子。これ、なーんだ？」

「蘭：？げっ！なんでそんな写メをあんたが持つてんのよ！」

「たまたま公園通りがかかったら、陣君に色々言われて困ってる園子としんい：コナン君を見かけて。面白そうだからこっさり待機してバッチリ撮っちゃった（はあと）」

「アンタねえ：。最近なんか性格変わった？」

「え？いいじゃない、面白かったんだから。」

「そりゃ、見てるアンタはね：。」

「面白そうだから、哀ちゃんにもメールしちゃった（はあと）」

「ちよ、ちよっと！それはマズインじゃ：。」

「大丈夫よ。ちゃんと経緯も詳細にメールしたから。」

「：ほんとに大丈夫かしら：。」

お姉ちゃんからのメールを受け取って、私は新一をからかってやる
うと決めた。

ま、当然よね？

園子さんとキス、な～んて。

経緯だけを聞けば、まあ仕方ないとは思うけど、この事を私に内緒
にしたのは新一なんだから。
そして今。

「さあ！早いとこ洗濯終わらせて！」
パシィッ！

「は、はい！」

何故か、何故か博士の部屋にあった鞭を持ち出し、振るう私。

「終わったたら、家中の床を掃除して！」

パシィッ！

「は、はい！」

素直に従う新一。

「いい！それが終わったら、私の肩をもんでもらうわよ！」

パシィッ！

「は、はい！」

うーん…。面白い…。

これはこれで、何かクセになりそうな気がするわね…。

第33話「元太」それでよー先輩の必殺『皇帝ペ○ギン2号』がでただけどよ

博士の趣味ではありません。

フサエさんの…ゴホンゴホン。

コナンって知り合いに対する先入観が大きいと思うんですよ。

小五郎とか、園子とか。

もしも知り合いが犯罪を犯したら公平な推理が出来ないようなレベルで。

レイ・カーティス（知り合いではないが、ファン）の時ですらあった訳だし…。

ところで、ネタにある超次元サッカーが多いのは…。ネタ切れ？

第34話「昔は自分から見ても蘭は「蘭ねーちゃん」だった。今ではサザエさん

「わー！凄く大きいプール！歩美、こんなの初めて！」

「よっし！光彦、どっちが端から端まで先に泳ぎきるか競争だ！」

「ま、待つてくださいよ。元太君に敵うわけないじゃないですか…。」

その日、私、毛利蘭は親友の鈴木園子の誘いで、知り合い大勢で明日オープンのプールに来ていた。

鈴木財閥が新たに手を出したレジャー施設分野の一環で作られたプールで、子供が楽しく遊べる仕掛けや大人がゆっくり出来る温泉プールなど、大きささまざまなプールがある施設。

園子のコネというか、会長である園子の父の史郎さんのご厚意で、オープン前日にお邪魔させてもらったのだ。

「園子、よかったの？こんなに大勢。しかも、オープン明日なのに…。」

「いいのいいの。パパも、ほら、あそこ。」

園子の指差す先には、史郎氏とお父さん、目暮警部、それに阿笠博士が温泉でゆっくりしながら談笑しているのが見えた。

「ね？ここんどこ疲れてたみたいだからさ、パパも。いい気晴らしよ。オープン前で人も居ないから、のんびり出来るしね。」

「そっか。それならいいけどさ。」
「ザッパーン！」

元太君と歩美ちゃんが飛び込み台から飛び込んだ音。光彦君は上で少し躊躇している。

中学生になっても、変わらないわね。皆。

…あれ？新一と、哀ちゃんは？

私がキョロキョロ探すと、ちょうど二人並んで更衣室から出てくるところだった。

…二人して腰をかばって…。

「っ痛てて…。」

「…大丈夫？新一…。」

「オメーは腰平気なのか、哀…？」

「…。…昨夜はちよつと頑張りすぎたわね、お互いに…。」

…。
なんてアダルティな会話…。

いいの？あんな中学生、いいの？

確かに、昨日新一は博士の家に泊まるというて帰ってこなかった。
後から聞いた話じゃ、博士はフサエさんの家にお邪魔していて昨日は家に居なかった。

つてことは、二人はつまり、二人きりだったって事で…。

「随分すすんだ中学生だよなー。」

私の後ろから快斗が声をかけてくる。

「なに？どうということ？」

2人の様子に気づいていなかった園子がきょとんとしながら質問する。

「べつつにー。よし、蘭！泳ごうぜー！」

てきとーにごまかして走り出す快斗。

「ま、待ってよ…。もうー！」

ついていく私。

「ちよつと、蘭！私をおいてくつもり！？ねえ！」

園子のむくれる声。

でも、せつかく快斗がノリノリだし…。

あとで埋め合わせはしよう。

「コナン！お前も競争しようぜ！負けたやつがジュース奢るんだ！」

「ちょ、元太君！僕そんな話聞いてませんよ！」

驚く光彦。

「今日は俺、腰が痛くて…。」

「あ、コナン君、卑猥〜。」

ニヤニヤしながら俺の頬をつつく歩美。

隣に居た哀も無言で赤くなる。

「???どこがだよ、歩美。」

「元太君には分かんないんじゃないかな？」

面白そうに笑う歩美。

光彦は分かったのか、顔を真っ赤にして俯いてしまったけれど。

「よ！ボウズ達、久しぶりやな。」

と、後ろからやってきたのは服部と和葉。

「相変わらずアダルトやね、コナン君…。」

「そ、そんなことないよ。」

「冗談や。いくらなんでも、な？怪我でもしとるん？」

…はは、なんだ。

どうやら、マジでそっちが正解だとは思ってもよらなかったらしいな。

「よっしゃ！じゃあ、元太！俺と競争するか？まだまだ中学生には

負けへんぞ〜。」

「おお！服部のにーちゃんなら、相手にとって不足はねーぜ！」

そう言つて、二人は奥にある25mプールへ向かっていった。

…子供だな、服部。

俺は名探偵毛利小五郎。

子供たちが（いや、蘭たちはもう子供という歳ではないのだが…）
はしゃいでいるのを横に見ながら、俺たちは温泉プールでのんびり

していた。

「いやあ、すみませんなあ。ワシや高木君達まで招待していただいた…。」

目暮警部殿が鈴木史郎氏と談笑している。

「なに、いいんですよ。皆さんには私も園子もたいへんお世話になっていきますからね。」

恰幅のいい、よく出来た人だ。

仕事柄、何人もの『社長』やら『先生』やらを見てきたが、よく出来た人、なんてのはほんの一握りだった。

「ところで、毛利君。昨日はコナン君はどうしたんだね？」

目暮警部が突然俺に話を振ってきた。

「へ？コナンのやつがどうかしましたか？警部殿。」

「いや、昨日の夜、結構遅い時間に哀君と二人でコンビニにいるのを見かけてな。」

「ああ、それなら、昨日は阿笠博士の家に泊まりに行っていたからですよ。何か買いに行ったんじゃないっすか？」

「…ワシ、聞いとらんぞ…。」

博士がぼそつと呟いた。

「え？では、博士はどちらに？」

「さつき蘭君にも聞かれたが、昨日はフサエさんの家に遊びに行っておつてのう。てつきり哀君は一人で留守番してるもんじゃとおもつとつたが…。」

「な、なに！アイツ…。中学生の分際で女の子一人の家に泊まりに行くなど、けしからん！」

「まあまあ、毛利君…。」

博士が俺をなだめる。

博士は心配ではないのだろうか。

娘のように可愛がっている中学生の哀ちゃんが、昔からの知り合いとはいえ、コナンと二人きりなんて…。

蘭とマジシャン坊主くらいがいい大人なら、親が口出しするような

事では無いだろうが、二人はまだ中学生なのに…。

確かに大人びてはいるが…。

「博士はいいんですか？ だいたい、何かあったらどうするんすか！
まだ中学生ですよ！」

「確かにそうだな…。哀君は阿笠博士の娘のようなものでしょう？」

「私も綾子や園子が中学生だったら、男の子と夜二人きりなんて、
ちよつと心配ですな…。」

目暮警部も史郎氏も頷く。

博士は苦笑いだが…。

と。

「おじさん達、古い…。」

声のする方を向くと、たまたま通りかかった吉田歩美がぼそつと呟
いたようだ…。

古いつてか…。

蘭と園子が女の子達をまとめてウォーターライダーに行ってしまう
った。

男組は流れるプールでゆつくり、とある会話を始めている。

「な？ 俺の言った通りやる？ やっぱし佐藤刑事が一番プロポーション
ええ。な、高木刑事？」

「はは…。自分の奥さんをほめられる分には嬉しいけど…。」

高木刑事と佐藤刑事、それに二人の子の陣も今日は招待されていた。
陣は佐藤刑事に連れられて女の子達と一緒にウォーターライダー
だ。

「それより、服部君。そんなこと言ったら、和葉ちゃんに怒られ

「ちやうんじじゃないかい？」

「そんなんええって。見てみい、あいつ。しょーもない体つきしてるわ。」

「そつかあ？俺はスレンダーで良いと思うけどな。」

元太が反論する。

男が集まると結局こういう会話になる。

「やれやれだぜ…。」

「コナン君？溜息なんかついて、どうしました？」

「別に…。」

光彦に心配される俺。

「光彦、お前はどうなんだ？誰が一番良い？」

「そうですねー…って！何言わせるんですか！」

「いいじゃーん。中学生なら、女の子に興味津々な年頃だろ？」

黒羽快斗も話に加わる。

「そ、そんなこと…。」

「ま、いつけどさ。俺はやっぱり蘭かな？胸もでかいしさ。」

「なんや、巨乳好きなんて、ガキやの黒羽。」

「いいじゃんかよ。服部だって、嫌いじゃないだろ？」

「ま、まあな。」

…初対面だつてのに、もう打解けたのかこの二人…。

「俺はやっぱり歩美だな！光彦、お前も言えよ。」

「そ、そうですね。歩美ちゃんも灰原さんもプロポーションは抜群だと思えます。でも、黒羽さんの言うとおり、蘭さんの胸も男心をくすぐると思いますよ？」

「なんや、自分結構スケベやの。」

「ち！違いますよ！…コナン君は？」

「灰原が一番だ。」

「でも巨乳って言ったらさー佐藤刑事もなかなかだよな。」

「君ね、人の奥さんのことそういう言い方は…。」

「なんだよ高木刑事、嬉しくねーのか？」

「い、いやねえ…。」

「でも、歩美ちゃんも結構…ですよね？」

「光彦スケベだな！」

「五月蠅いですよ元太君！」

「せやったら、鈴木のねーちゃんはどつや？」

「そうですね…。僕達、園子さんの性格を知ってしまっていますから…。」

「はは、なんだよそれ。まあ確かに俺も蘭から色々聞いてるから、イマイチ先入観は抜けないけど、結構可愛いし魅力的じゃないかなあ？」

「灰原が一番だ。」

「黒羽の言うとおり、鈴木のねーちゃんは決してスペックは低くないで？」

「げー。俺は苦手だな。同じ気が強いでも、和葉ねーちゃんの方が全然優しいしよ。」

「そうですね。和葉さんは理想の女性だと思いますよ？なんで服部さんは彼女と付き合わないんですか？」

「大きなお世話や！」

「はは、中学生に言われてやんの。」

「うっさい黒羽！」

「灰原が一番だ。」

「高木刑事は？どう思いますか？」

「え？僕はもちろん、美和子さん一筋だからね。」

「そないなことゆーて、ホンマはなんか言っつて、後で知られてしまっうんが恐いだけなんちゃうか？」

「そ、そんなことないよ！」

「ほんなら、そーやなー…毛利のねーちゃんのこと、どつ思っつ？」

「灰原が一番だ。」

「蘭さんか…。確かに彼女は高校生の頃から魅力的な女性ではあつたよね。」

「うわゝ、高木刑事、高校生をそんな目でみてたの？」

「く、黒羽君！その言い方は…。」

「じゃあ、歩美ちゃんや灰原さんはどうですか？」

「そうだね、二人とも小学生の頃から可愛かったよ？」

「うわゝ、高木刑事、ロリコン？」

「黒羽君…。」

「灰原が一番だ。」

「そうだね、灰原さんは特に、小学生とは思えない大人びたところがあつたし、男の子を惹きつける何かがあるよね。」

「そ、そうなんですよ！灰原さんはどこかミステリアスで、あのクールな目が、そしてたまに見せる優しい目が、凄く美しいんです！」

「お、なんや、光彦、えらいあのちっこいねーちゃんを推すな（…もうちっこくは無いか）。」

「いや、あれで灰原も結構抜けてるところもあるぜ？それにクールな目って言うけど、ただ目つきが悪いだけだよ、あれは。蘭ねーちゃんの方がスタイルは絶対良いし。胸だつて歩美ちゃんの方がどうみても大きいし…。」

「…おいけど…コナン君？さっきまでひたすら『灰原が一番だ』って言い続けてたやないか…。」

「はは、中学生探偵『ホームズの弟子』も案外天邪鬼だな。」

「そうですねよ、人間素直が一番ですよ？」

「バーロー、俺は別に…。」

「じゃあよ、コナン。あの中で、誰が一番可愛いと思う？」

「…灰原が一番だ。」
どっ。

俺の一言に皆大笑いだ。

…別に良いけどよ。

「そう言えば、毛利君。今日は英理さんは一緒じゃないのかね？」

「英理？今日はどうしても仕事がはずせないらしいですよ。」

「おお、一応声は掛けたんじゃないな。」

「ち、違う！俺じゃなくて、蘭のやつが勝手にですな……。」

「……素直じゃないのう……。」

「でも、毛利探偵。いい加減別居はやめても良いんじゃないですか？もしも蘭さんがお嫁にいったら、寂しくなりますよ？」

「そうだぞ毛利君。君も意地をはるのはやめてだな……。」

「なに言ってるんですか。あんなヤツ、高圧的で、料理も下手で……。アイツから戻りたいと言わない限り、俺あ自分からは何も言いませんよ！」

「じゃあ、逆にいい加減離婚でもしたらどうじゃ？新しい嫁さん候補なら、毛利君ならいくらでもおるじゃろう？」

「……いや、英理以外に俺みたいなのと結婚してくれる女性なんか居ないっすよ。」

「……。」

「……。」

「……。」

私たちは全員が思った。

毛利探偵素直じゃない、と。

帰り道。

俺と哀は皆の少し後ろを二人で並んで歩いてた。

「ふくん。私達が戻った後、男の子たちが妙に焦っていると思ったら、そんな会話をしてたわけね。」

「まあな。」

「で？貴方は、誰が一番魅力的だと思っていたのかしら？」

「ば、バーロー！そんなの…。」

「そんなの？」

「…オメーが一番決めてんじゃねーか…。」

「あら、私、蘭さんほどスタイルも良くないし、胸だって歩美ちゃんの方がずっと大きいのよね？」

「！？」

「つて、貴方が言ってたのを、さっき大阪の探偵さんが親切にも教えてくれたわよ？」

「…服部のヤロー…。」

「さて、ここでクイズです。」

「は？」

「それを聞いて、私はどう思ったでしょう？」

「い、いや、あのな、あれは言葉の綾で…。」

「1番。そんなことを言う名探偵さんなんか、もう知らない！」

「お、おい、灰原…。」

「2番…。」

「…どうした？」

「…2番。私が一番だって思い知らせてあげるから、今夜は工藤邸に二人で…どうかしら？」

「え…？」

「どっちが正解だと思う…いえ、どっちが正解が良い？」

「…2番。」

「正解よ、名探偵さん。」

第34話「昔は自分から見ても蘭は「蘭ねーちゃん」だった。今ではサザエさん

脈絡も無く、ぐだぐだで…いつもの事ですが、
でもってちよつとアダルト臭。

今更ですが、原作で今後どうなっていくかは分かりませんが、この物語の中では組織のボスは阿笠でも鈴木史郎でもないし、世良さんも登場しないし、赤井やFBIがどうなったのかも書かないし、毛利探偵はいまだに別居中です。

だいたい新一がロスで蘭に告白したあたり…から派生したパラレルワールドってことでひとつ、よろしく願いします。

…ほんとに今更だな…。

男同士のああいふ会話ってなかなか原作では出せないよな〜と書いて書きました。

ま、原作ではまだ少年探偵団は小学1年生ですからね。

…まだ1年生か…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5626o/>

コナンと哀、その後。

2011年10月12日09時53分発行